

黒幕

くろまく

池波正太郎

新潮文庫

新潮文庫

黒幕

池波正太郎著



新潮社

新潮文庫

黒幕

池波正太郎著



新潮社版

4674

目次

雲州英雄記……七
猛婦……六一
勘兵衛奉公記……九三
霧の女……一三三
夫婦の城……一八七
紅炎……二一三
黒幕……二三五
槍の大蔵……二六九
命の城……二九九

獅子の眠り……三一
開化散髪どころ……三七三
解説　八尋舜右

黒

幕

雲州英雄記

一

いうまでもないことだが、戦国時代には戦争が流行した。

ゆえに、流行の寵児は力量すぐれた武将であり戦士であった。

山中鹿之介幸盛も、その中のひとりだということは、何よりもまず、若きころの鹿之介自身が、ひそかにほこるところのものであったと言ってよい。

「尼子家に鹿之介あるかぎり、たとえ何万の軍勢が押しよせようとも、案ずるには及ばぬ」

或夜、新婚の妻のぬめやかに匂う裸身を愛撫しつつ、鹿之介はおごそかに、そう洩らしたことがある。

この二十歳の素朴な自負は、六尺にちかい鹿之介の巨体をみたし、その厚い胸肉にうもれていた新妻の千明は、

「ま、たのもしいお言葉……」

などと、嘆声を発した。

主家の尼子家は、かつて山陰地方一帯を制圧していたが、このごろでは、中国の大名・毛利元就に押しまくられ、昔日のおもかげはない。

「こうなれば、天険をたのむ富田のお城と、あなたさまはじめ、尼子勇士の方々のはたらきが殿さまにとっても、唯一のたのみでござりましょう」

「いかさま」

彼の堂々たる体軀は、秀麗なる顔貌を加えて、さらにその存在をかがやかしいものとした。

三日月の前立に鹿角の脇立をかざった兜をかぶり、黒の鎧をつけ、長柄十文字の槍をかいこみ、馬上ゆたかに颯爽と出陣する山中鹿之介を見るたびに、千明の慕情はつのるばかりとなったというわけだ。

鹿之介は家中随一の美男である。

家中随一の豪傑である。

しかも学問に通じ心情も豊潤だという、至れりつくせりの勇士であったから、戦国武士の家に生まれた若い女性がこれに魅了されるのは当然で、

「おれには何も言うところがない。千明どのが鹿之介に心ひかれるのは無理もないところだわ」

千明とは何となく許嫁のような間柄にあった清松弥十郎は、矮軀の肩をすくめて、そうつぶやいた。

許嫁といっても、父親同士が内々にした口約束のようなものだったし、弥十郎の父政章は六年も前に没してしまっている。

戦場でろくな働きも出来ない弥十郎へ娘をあたえることにうんざりしていた千明の父・亀井秀綱は、やがて、

「鹿之介が、そちの娘を妻に迎えたいと、余に口添えをたのんできたが、どうじゃ？」

と、主君の尼子義久から声がかかったとき、
「有難き仕合せにござります」
弥十郎の父との口約束などは、にぎりつぶしてしまった。
すでにそのとき、千明は鹿之介の子をみごもっていた。のちに流産をした赤児がそれである。男子であったという。
千明の美貌も城下では評判のものだったし、いわば美男美女のむつみ合うのに、さほど手間暇はいらなかったのであろう。
「鹿め。思いのほかに手早いやつじゃ」
鹿之介の叔父・立原久綱も苦笑したものだ。
婚儀は盛大に行われた。
尼子義久みずから媒妁の役を買って出たというから、いかに鹿之介が殿様の愛寵と信頼をうけていたかが知れよう。義久は鹿之介と同年配だし、若い主従は気も合い仲も良かった。
その婚礼があった夜更けに、清松弥十郎は老母ひとりをつれて富田城下を出奔してしまった。
理由を知る者も知らぬ者も、そのことには、あまり関心をよせなかった。
鹿之介にしても、弥十郎と千明のいきさつを知ったのは、ずっと後になってからであった。
「それは、すまぬことをした」と言うと、千明が、
「子供のころの口約束などにしばられ、あなたさまの妻になれないのなら、千明は死んでし

まいます」

「ふ、ふふ。それほどまでに、おれを……」

もう夫婦になってしまったのだし、弥十郎は他国へ去ったのである。

すぐに、鹿之介は忘れた。

何しろ、武勇を尊ぶ世に、戦旅の中で筆をなめつつ山野の風景なぞを写生しているような清松弥十郎がうけていたものは、家中の人びとの軽侮のみであった。

しかし、絵も書もうまい弥十郎は、地図や文書の作成にはその才能を見せ、尼子義久にだけは、ほめられていたようである。

それはともかく、山中鹿之介の満々たる抱負は、結婚後間もなく、むざんに打ちくだかれることになった。

毛利元就が、いよいよ本格的な出雲攻略に乗り出して来たのである。

毛利軍の執拗な進撃に、尼子の出城は一つ一つ奪いとられていった。

尼子家にとって、もっとも重要な出城であった白鹿城をとられたのも、つい先年のことだ。

どちらにせよ、毛利には押されつづけてきた尼子家なのである。

こういうわけで、十三歳の初陣に敵の首三つをとった山中鹿之介の武勇は、相次ぐ敗戦のうちに発揮されてきた。

負け戦さであればこそ、彼の武勇はことさらに光ったとも言えよう。

十六歳のころ、伯耆・尾高城をめぐる戦いで、敵軍の菊地音八を討ったことは、鹿之介が

時代の寵児としての階段を、はっきりと一段のぼってみせたことになる。
菊地音八といえば、因伯二国にかくれもない勇士として著名な人物であったからだ。
千明を迎えて二年後に、毛利の大軍が出雲を埋めつくし、富田城ひとつに尼子勢が押しこまれた攻防戦で、鹿之介は、毛利軍の豪勇・品川大膳と一騎打を行い、これを倒すという武勲をたてた。
この武勲も、鹿之介の名を光彩陸離たるものにしたようである。
だが、それもむなしかった。
鹿之介の槍一本が、いかに凄じい活躍を見せたところで、名将毛利元就が指揮する巧妙で悠揚せまらぬ物量作戦には、手も足も出なくなってしまった。
永禄九年十一月二十一日。
今でいうと、島根県能義郡広瀬町にあった富田城は、毛利軍によって開城された。
殿様の尼子義久は、弟の倫久・秀久と共に捕われ、毛利の本拠である芸州へ送られることになった。
「ついに……ついに、駄目であった!!」
鹿之介は天を仰いで、わめいた。
「戦さというものは、むずかしいものだ」
しみじみと、妻に嘆きもした。
「これで尼子家も、ほろびましたなあ」

「いや、このままではおかぬ。おれが、きっと盛り返して見せるわ」
「盛り返せましょうか」
「鹿之介あるかぎり、きっと……」
自負は消えぬばかりか、むしろ反動的に強くて激しいものと変った。
「はじめから、このおれが……」
このおれが作戦の一切を指揮していたら、こんなことにはならなかったのにと、言いたいところなのだ。
鹿之介が重く用いられるようになったのは、ごく最近のことで、それまでは、いわゆる重代の老臣という連中が幅をきかせ、若手の建言は一方的にしりぞけられていた。なまぬるい老臣達の作戦が失敗を重ね、そのたびに鹿之介らの果敢な武者ぶりが光りを放った。
そして、ようやく鹿之介が尼子義久の近習となり、若手の家臣たちの指導者として言いたいことを言えるようになったとき、すでに、尼子軍は富田城ひとつに押し詰められてしまった、ということになる。
鹿之介にしてみれば、あきらめきれぬところであったのだ。
ところで、芸州の配所へ去る殿様の供を願い出た鹿之介は、きびしく毛利元就にはねつけられた。
道中において主君兄弟を奪い返そうというもくろみなどは、元就が見破るに容易なことで

あった。しかも尚、
「尼子のもので、毛利に仕えたしと思うものは申し出でよ。抱えつかわす」
元就は、あくまでも寛大な態度であった。
「へい」とばかり、ころげこんだやつもいるが、鹿之介はじめ二百余名の家臣達は、
「おことわり申す!!」
つとめて堂々と胸を張り、富田城下を発し、はじめての浪人生活へ足を踏み出した。
（かならずや、上様をお迎えし、鹿之介は尼子再興をなしとげてごらんにいれまする）
主従というよりも、友情のような温かさでむすばれていた殿様なのである。
故国・出雲の一木一草は、退去して行く鹿之介の多感な胸を離愁の哀しみではち切れそうにしたし、その愛すべき故国をうばった毛利への憎しみは、
「今に見よ、今に見よ、今に見よ!!」
鹿之介が生涯をかけての復讐の念願となって、彼の肉体の細胞と化した。
ところがである。
かんじんの殿様、尼子義久は弟たちと共に、すっかり毛利家の厚遇に馴れ親しみ、やがて、もう戦争はたくさんだという心境になってしまった。
鹿之介が、このことを知ったのは、富田開城あってから二年後の夏のことであった。

二

そのころ山中鹿之介は、京の妙心寺内の塔頭・退蔵院に起居していた。妙心寺は、康永元年に花園上皇が関山慧玄を請じて開創した禅刹であり、洛西・双ヶ岡からほど近い景勝の地にある。

応仁の乱以来、うちつづく戦乱に荒廃した京の町の復興が、まだ充分なかたちをととのえていないころであったから、妙心寺も現在のような大伽藍をほこっていたわけではない。

妙心寺のみならず、当時の禅寺からは僧侶を諸方の戦国大名に派遣し、学芸を伝えひろめ、その報酬としてかなりの金銀を獲得し、寺院の拡張と整備にこれを当てていた。

中央からはるかに遠い裏日本の山陰地方へも、これらの僧たちは進出してきて、尼子家も妙心寺の僧・通玄を抱え、殿様も家臣も中央の学芸の香りに接したのである。

浪人した鹿之介たちが、一時の起居を求める場合、まずそうした関係にある寺院などは恰好の場所であった。

同じような関係で、鹿之介は、妻の千明を近江の禅寺にあずけておき、たまさかにこれを訪れることにしていた。

鹿之介が京にいるのは、京が首都であり、政治の中心であり、従って諸国の情報をいち早くとらえることが出来るからであった。

「鹿之介様。上様もな、弟御のお二人様もな、ちかごろはまことにのびやかな御日常にて、もはや合戦の苦しみはこりごりじゃ、このまま毛利の世話をうけ、長生きして世をたのしみたいと、かようにおおせられましてな」

尼子義久の近況を、妙心寺の鹿之介にもたらしたものは、重蔵坊という老山伏である。

「ま、まことか、それは――」

「まこともまこと大まこと。そばで見ておりましても歯がゆうて歯がゆうて」

うすい眉をひそめ、団子のような鼻を小指で掻きつつ、重蔵坊は大いに嘆いた。

重蔵坊は、山伏ながら永年にわたり、尼子家の密偵として働いてきたものである。

鹿之介は、これを殿様の侍臣として、名も高尾重兵衛と変えさせ、安芸の配所へつけてやった。今後の連絡を絶やさぬためにである。

山伏に似ず、歌もよみ遊芸にも長じている重蔵坊には一種の愛嬌もあり、毛利家でも、これなら害はあるまいと見たらしく、尼子義久に随行することをゆるした。

その重蔵坊の報告なのだから、

「あまりと言えば、あまりの上様じゃ」

鹿之介は足を踏みならし、慟哭した。

「御無理ござらぬ、御無理なし」と、重蔵坊も哀しげに首をふる。

これは事実であった。

後年、毛利家では尼子義久へ千二百余石をあたえ、義久は慶長十五年に六十五歳の寿を保ち、大往生をしている。このように毛利家が尼子へ対する処置は非常に温かいものであった。

当時二十を出たばかりの義久が、おだやかな優しい性格をもっているのに好感をもったためもある。

だが、もう一つの理由があった。それは、尼子義久に戦意を失わせることによって、尼子の再興運動を押えようとしたことだ。

現に、この重蔵坊がそれである。

もっともらしく殿様の堕落も嘆いてはいるが、実は重蔵坊自身、すでに毛利にろうらくされ、毛利から「お前たちの殿様の心境の変化を鹿之介たちに伝えて来い」と命ぜられ、京へのこのこ出て来たのである。

けれども鹿之介は、重蔵坊の寝返りなど、まったく考えても見なかった。

「それがし、この事実を山中様にお伝えせんがため、身をもって円明寺の配所を脱出してまいったのでござる」

尚も、もっともらしく老山伏は力説した。

「苦労であった……」

鹿之介の声は沈んだが、すぐに猛然たる決意をこめ、

「よし!!　こうなれば、ひそかに芸州へ忍び行き、毛利兄弟を刺し殺してくれるまでだわ。さもなくば、鹿之介の武名がすたる」

「では、どうしてもおやりなさるので？」

「むろんのことだ!!」

「それがしは、もはや老齢。これにて、故郷の大和へ帰り、そこに骨を埋めたき所存でござる」

「そうか。それもよし。これはな、わずかながら、うけてくれい」
「おそれいりまするな」
鹿之介が出した餞別の金包みを淡々とうけとった重蔵坊は、淡々と去った。
何処へ去ったかというと安芸へ去ったのだ。鹿之介との面談のすべてを毛利家へ報告し、そのまま重蔵坊は、義久と共に、のんきな隠遁暮しを死ぬまでたのしんでいたようである。
この山伏、尼子の密偵をつとめていたときも、あまり骨は折らなかったに違いない。
去るときに、重蔵坊が鹿之介へ言った。
「それがしのかわりに、お役にたつべきものを差し向けまする」

三

その日――鹿之介は、万里小路二条にある傾城町にいた。
重蔵坊が去った夜から此処へ来て、ただもうひたすらに、遊女の肌の香におぼれひたっていたのである。
人生の苦難に直面した男が求めるものは、酒と女にきまっている。この二つは、それほど男にとって貴重なものなのだ。妻の千明にも、ここしばらくは会っていない鹿之介であった。
はじめは玉垣という遊女が相手に出、次は桂という女で、その次は……。
何しろ、鹿之介がたくましい巨軀を狂人のように女のからだに巻きつけ「おのれ、よくも……この、わしの苦しみも知らず、上様は……」とか「このままで、わしが引下るとでも思

うておるのか!!」とか「毛利め!!　今に見よ」とか、飽くこともなく女を責めさいなむので、遊女たちも閉口してしまい、三日の間に四人も交替した。

「このような、おそろしいお方は始めてわいの。もうもう、体中の骨が粉々になってしもうた」

三日目に、もう一度相手に出た玉垣が、こうつぶやきながら、ようやく眠りに入った鹿之介の傍から身を起し、裸身の汗をぬぐいつつ、

「なれど、まあ、何とよい男わいの」

昼下りの夏の陽に部屋の中は蒸れ上っていた。

鹿之介の端正な鼻すじに蠅が一匹とまっているのを、玉垣が追い払ってやったときである。

廊下に人影がさした。

「たれ?」

「このお方の家来でござる」

「まあ……いま、おやすみになったばかりわいの。お急ぎの用かや?」

「いいや。よろしゅうござる。待たせていただきまする」

玉垣と入れ替り部屋へ入った男は、鹿之介の枕頭にすわり、扇をひらき鹿之介の寝姿へ風を送りはじめた。

「では、たのみましたぞえ」

玉垣が去ったとたんに、男の手の扇は短剣に替った。

骨組みのしっかりした四十がらみの男である。それまでは異様にふくれ上った両の瞼の下に消えていた眼が針のようなきらめきをのぞかせた。

男の短剣がふりかぶられた。

鹿之介が寝返りをうったかと思うと、壁ぎわの大刀をつかみとっていた。

「誰か？」

男の手から短剣が消え、またも扇がゆらめいていた。

「お待ち下され。怪しきものではござり申さぬ」

何やら妙な気配を感じ、眼をさました鹿之介は、毛利の刺客かと思い、すばやく身構えたのである。

「それがしは小五郎と申し、鉢屋の末のものにござる」

「何、鉢屋の子孫だと申すか」

「それがしは、重蔵坊殿によって……」

「おお。役に立つものをさしむけると言うておったが……お前のことであったのか」

鹿之介は、重蔵坊の紹介ということと、鉢屋の子孫だと聞いて、この男にすっかり心をゆるしてしまった。

ここで〔鉢屋〕なるものにつき、のべておこう。

尼子氏は、もと京極氏という守護大名の代理として、富田城に入り、出雲を統治した。

ところが尼子清定の代になって、本家の京極氏が軍をさし向け、尼子一族を出雲から追い

払ってしまったのである。

尼子清定は、あまりよい殿様ではなかったらしいが、この清定の子に経久という骨太い息子があって、一族離散の後、ひそかに山間にひそみ、機をうかがっていた。

戦国の風雲に乗じ、富田城を奪い返しての尼子家再興をねらっていたのである。

文明十八年正月元旦のことだ。

富田城下には、毎年元旦の吉例として、出雲地方で〔鉢屋〕とよばれる一種の傀儡師（遊芸やまじないなどを業とする流浪の民）を城内へ迎え入れ、千秋万歳楽を舞い奏させるという行事がある。

土地の風習だから、ときの城主・塩谷掃部介も、毎年これを行っていた。

尼子経久は、この〔鉢屋〕を、ひそかに抱きこんだ。

そして、八十余名の尼子一党が〔鉢屋〕に変装し、まんまと城内へ入り込み、突如、城主の塩谷を襲い、殺害してしまったのだ。

かくて尼子経久は近隣の豪族を切り従え、しかも民政にも意をもちいたので、その威望は、山陰のみか、山陽にまで及ぶことになった。

もう本家の京極も手が出ない。

はじめに、毛利氏が尼子へ屈服したのもこのときである。

経久は、天文十年に永眠した。八十三歳である。まさに尼子氏一代の英雄だと言える。

ところが経久の子・晴久が駄目な殿様であった。

毛利や大内とうまく手をむすんで行けばよいものを、やたらに威張りちらすので、毛利も愛想をつかして大内氏へつき、共に攻撃をしかけてくるようになった。

この暴君主・晴久が病死したとき、山中鹿之介は十六歳になっている。

晴久の後をついで、勢力がおとろえかけた尼子家の当主となった義久が十五歳。鹿之介は抜擢をうけて、義久の近習となる。

以後の出来事は、すでにのべた。

こうした主家尼子の波瀾にとんだ歴史は、鹿之介の血をわかすに充分であった。

しかも「鉢屋」を使っての計略を考え、尼子経久に進言したのは、鹿之介と同じ山中一族の、山中勘兵衛というものなのである。

「そうであったか。わが山中家の者も、むかし、あのときの勇ましい戦さに、鉢屋のものと一役買うて手柄をたてたと聞き及んでおる」

鹿之介の憂悶も、いくらかはれてきた。

「酒はどうじゃ？」

「たしなみませぬで」

「では……」と、鹿之介は小五郎を従えて妙心寺へ帰って来た。

夕暮れである。

蝉の声も絶え、うす闇が寺院をかこむ森にたちこめていた。

退蔵院の自室へ入ろうとして廊下をわたっていた鹿之介は、庭に面した広間で一人の男が

黙念と床の間を見つめているのに気づいた。
その後姿に見おぼえが、たしかにあった。
「弥十郎……」
男が、うっそりとふりむいた。
「おお、鹿之介殿……」
「おぬし、おれを訪ねて来たのか？」
「うんにゃ。鹿殿がこの寺におられようとは思うても見なんだ」
「では、何で？」
弥十郎は、ゆっくりと床の間にかけられた画軸を指した。
この絵が、応永年間、日本水墨画に新鮮な境地をひらいた画僧・如拙えがくところの〔瓢鮎図〕であることは、鹿之介も知っている。
「弥十郎は、その絵を見に来たのか？」
「うむ。もう朝から、ここに坐ったままじゃ」
「もう見えまい」
「かすかながら、まだ見える」
「おぬし、いまは何をしておる？」
「絵師じゃ」
若い僧が灯をもって来た。廊下をへだてた鹿之介の部屋が明るくなった。

茶を僧にたのみ、鹿之介は、弥十郎を自室にまねいた。
ずんぐりとした体つきは変らないが、ここ四年の間に弥十郎の顔には、鹿之介がハッと息を呑むような精神の緊張がただよっていた。
「弥十郎。おぬしの絵も、本物になりかけたようだな」
さすがに鹿之介であった。
「まだよ。これからよ」
「母御は？」
「去年、亡うなったわ」
「それは、気の毒……」と言いかけ、鹿之介は、弥十郎が〔鉢屋〕の小五郎を、するどく見やっているのに気づいた。
「おう、このものはな、鉢屋の末のものだそうじゃ。さきほど町で出会うての」
「ふむ……」
部屋の隅にうつ向いていた小五郎が、ていねいに頭を下げた。
その瞬間であった。
清松弥十郎が壁にたてかけてあった鹿之介の大刀をつかみ、小五郎の頭上に躍りかかった。
「何をする!!」と叫んだ鹿之介の声と、小五郎があげた悲鳴とが同時であった。血がしぶいた。
「鹿殿。こやつは毛利の間者じゃ!!」

「何……」
「寺内での殺生はいかぬと知っていて、つい……」と弥十郎は唇を噛みしめ、大刀をぬぐいつつ、
「お家再興のために苦労しているおぬしの身を案じるあまり、つい、殺ってしもうた。早い方がよい」
「こやつが、毛利の……」
「六年ほど前に、――ほれ、白鹿の戦いがあったとき、わしは、乱軍の中で、こやつが味方の首をあげる姿をたしかに見た」
「馬鹿な……」
「絵師の眼は常人と違うのだ。一度見たものは決して忘れはせぬ」
声をかける間もなかった。清松弥十郎は廊下から広間へ――広間から庭の闇へ走り消えた。

四

翌早朝、京の町を流して歩く物売女が一通の手紙を鹿之介にとどけてきた。
手紙は、清松弥十郎からのものであった。
およそ、左のような意味のことがしたためられてあった。

昨夜は失礼をした。

鹿どのは豪胆武勇のお人ゆえ気にもかけまいが、わしから見ると、まことに危うく思われたので、もう夢中で手にかけてしまった。あと一呼吸遅れなば、あの男は逃げてしまったろうと思われる。この一呼吸の差を、鹿どのは、これからも、ようお考え下されたい。今の世は、まこと凄じいものになってきている。わしも、雪ふかく山ふかい出雲にいたころのことを考えると、あのころは、日本の大勢、その動きについて、まったくの田舎ものであったことに気づいている。

わしも、もと尼子家に仕えたものの一人として、鹿どのが御家再興の実をむすばれることを心から祈ってはいる。なれど……その方法にも、いくつもの道があるように思われる。わしは、鹿どのの武勇をほめたたえると同時に、鹿どのの、激しいひたむきな気性を恐れている。あせらず、ゆっくりと手間をかけて事をなしとげてもらいたい。また、わしは鹿どのの、まろやかな心情をも恐れている。いまの世に、人を信ずることは武士たるものの一生をかけた重大な別れ路となることを、よっく考えていただきたい。

なれど、わしは人を信ずることが出来る。わしは絵師だからだ。絵師には、何度、人に裏切られたとて、最後のものが残っている。最後のものは決してわしを裏切らない。それは、わしの絵だからだ。わしが尼子を出奔したのも、今の世に、そうした境涯を得ようと決心をしたからなのだ。とうてい鹿どのにはわかってもらえまいが……。

わしは、いかにも武将らしい鹿どのの風格が、むかしから好きであった。鹿どのの画像を、きっと、そのうちに描きたいと思うている。

だが、わしは、わしの好まぬような武将に、鹿どのがなってくれることをも、ひそかにのぞんでいる……。

千明については一言もふれてはいない手紙であった。

鹿之介は、弥十郎に打ちのめされたような気がした。〔鉢屋〕の小五郎が、もしも、弥十郎の言う通り毛利がさしむけた刺客だとしたら、鹿之介は大馬鹿者になってしまう。だが昨夜の弥十郎の、恐るべき真実がこめられた意外な早業を想い起すたびに、鹿之介は、弥十郎の言明にうたがいをさしはさむ余地が無くなってくるような気がしてきた。

（となると……おれのみか、重蔵坊も騙されたのだ……）

ここに至っても、まだあのいかさま山伏を信じてやまぬ山中鹿之介なのである。もっとも、それはそれでよかった。殿様の心変りだけは真実のものであったのだから……。

この年の九月――。

織田信長が京へのぼって来た。

この美濃・尾張一帯を支配していた戦国大名は、いまや、その勢力範囲を諸方に延長し、威名は天下にとどろいている。

性は勇猛果断、すぐれた家臣にめぐまれ、天皇の信頼も信長一人に向けられているようだ。

足利将軍は義昭の代になっていたが、その力はほとんどおとろえてしまっている。

皇室も将軍も、信ずるに足る戦国大名によって、その面目をたもつという時代であった。

だから将軍義昭は、織田信長にも通じ、毛利元就にも通じ、一時も早く将軍の権力を取り戻すべく焦りぬいている。

ところが、戦国大名たちは、すでに将軍など眼中になかった。ただ、その名目を利用して天下の覇権をつかみとろうとしているだけのことであった。

信長は天皇のまねきに応じ、京へ乗り込み、この王城の都を再建すべくはたらきはじめた。

「今こそ、又となき機会であろう。織田家にすがり、尼子再興の助力を仰げ、鹿之介よ」

北国の隠れ家から京へ馳せつけた叔父の立原久綱が、鹿之介をけしかけた。

尼子がほろびたとき、毛利元就とよしみを通じていた織田信長も、天下をつかみかけている現在では、中国一帯に君臨する毛利が邪魔な存在となってきたし、将軍義昭は、こっちへ色目を使うかと見れば、こそこそと裏へまわって毛利を引きつけようとしている。油断はならない。

「なれど……」と鹿之介は嘆息して、殿様の心変りを叔父に告げた。

立原久綱も、これにはおどろいたらしい。

「それがまことなれば、……」と舌打ちをくり返し、「上様にも困ったものじゃ」

苦い顔をした。

折も折であった。

清松弥十郎から、第二の手紙がとどけられたのである。いうまでもなく、弥十郎は旧殿様の心変りについては何も知らない。

手紙には、こう書いてある。

もう手紙もさしあげぬつもりであったが、思いがけぬ御方に出会うたので、一筆したためる気になった。

というのは……先日、所用あって、東福寺へ出向いたところ、ひとりの若い僧と親しくなりいろいろ物語をした。すると、その僧が、まこと意外な御方であることがわかった。

弥十郎が出会った青年僧は、尼子一族のひとり勝久であったのである。戦いは厭じゃと言い出した殿様の義久の祖父と勝久の祖父が兄弟だというつながりになっているのだ。

これには、いろいろなわけもあり事件もあったのだが、はぶくことにする。

勝久様も、鹿どのが主家再興のために働いていることを嬉しく思うとおっしゃった。ひまを見て、一度、おたずねあったら如何？

わしは、数日中に関東から信濃への旅に立つ。おそらく、もうお目にかかることもあるまい。

清松弥十郎の手紙は、それで終っていた。

「叔父上!!」

「鹿之介!!」

二人は、昂奮に光る眼を見合せ、手をにぎり合った。

「勝久さまを奉じて尼子家を!!」

二人は、まっしぐらに東福寺へ駈けつけた。

若き学僧・尼子勝久は、鹿之介の熱誠あふれる説得を聞き終えると、しずかに言った。

「ようわかった。坊主よりも生甲斐がありそうじゃ。すべては、そなたにまかせよう」

ときに勝久は十七歳。仲々おもしろい少年であったようだ。

この知らせをうけた潜伏中の尼子の残党が、続々と京へ集まって来た。

勇み立った山中鹿之介は、単身、織田信長を本願寺の宿舎に訪問した。

信長は、すぐに会ってくれた。

「おことが山中鹿之介か。なるほど、聞きしにまさる美丈夫じゃ。のう筑前……」

筑前とは、のちの豊臣秀吉である。秀吉は一目見て、鹿之介の醇乎たる風格に好感をもったようであった。

信長の傍にひかえていた秀吉は、愛嬌のある微笑を鹿之介に投げてよこした。

天下の信長の耳にも、自分の武名がとどいていることをたしかめ、鹿之介は嬉しかった。

出来るだけの力は添えようと信長は言って、鹿之介が、よろこび勇んで帰って行くのを眼で追いながら、

「筑前。あの男、いまどき珍かなるやつじゃ」

「いかさま……」
「うまくあやつれば、くそ力を出して働くやつじゃ。よいか、あやつっておけ。われらの役に立とう」
秀吉はちょっと厭な顔をしたが、すぐに平伏した。
鹿之介は妙心寺へ戻ってからも、まだ昂奮がさめなかった。
「まるで違う!!　まるで……」
尼子義久などとはくらべものにならないスケールの大きさを織田信長はもっていた。鷹のような鋭い両眼と、豪華で瀟洒な衣服に包まれた信長の風姿は、まさに威風堂々たるもので、完全に鹿之介は圧倒された。
（いよいよ、あの大将の助けを借りて、御家再興が叶うのだ!!）
翌、永禄十二年になると、毛利は、九州の大友軍に背面をおびやかされ、止むを得ず九州へ出兵することになった。
出雲を襲うに絶好の機会である。
鹿之介は、織田信長の居城、岐阜へ飛んだ。
立原久綱は、尼子残党を狩り集めた。
信長は、こころよく軍費と武器弾薬を鹿之介にあたえ、
「今こそ、毛利を手痛くいためてやれい」と、はげました。
勇躍した鹿之介は、東福寺から勝久を迎え、これを推戴して、二百六十余名の尼子残党を

ひきい、先ず但馬国へ向った。

但馬の豪族・垣屋播磨守は尼子家恩顧のもので、再興運動には何かと力を貸してくれていた。

密使の知らせをうけ、秋上伊織介・横道兵庫介・真木宗右衛門・吉田八郎左衛門など、鹿之介が力とたのむ尼子の勇士たちも、そろって但馬へ駈けつけて来た。

尼子勢は、奈佐日本之助という裏日本の海から中国・朝鮮を舞台にあばれまわっていた海賊の頭領の舟に乗り、隠岐の島へわたった。

「それがしは、日本一の海賊でござる。ゆえにこそ日本之助と名のり申す」

垣屋播磨守の引き合わせで、はじめて鹿之介に会った奈佐日本之助は、こう名のりをあげ、「伝え聞く山中様はじめ尼子の方々の主家を思う忠節、それがし、まことにもって感服いたした。義によって一命をなげうち、お味方いたすは男子の本懐でござる」と胸をたたいてみせた。まるで芝居にでも出て来るような愉快な豪傑だが、前にのべた品川大膳という毛利軍の武士、これも日本之助の豪傑ぶりにおとらない。

尼子に名高き鹿之介の首を掻き切って見せようというので、大膳は、わざわざ楠木狼之助と改名したという。鹿よりも狼の方が強いというわけなのだろうが、この狼は力闘の果てに鹿に負けた。

鹿之介にしても、そういうところがなきにしもあらずであった。

鹿之介の幼名を甚次郎という。

兄が病弱のため家をついだとき、未亡人の母が、三日月と鹿角のかざりがついた家重代の兜を甚次郎にさずけた。

甚次郎は激しく感動し、これからは、この兜にちなみ鹿之介と改名し、三日月を守り神にするつもりだと言い出し、母をよろこばせたものである。

つまり山中鹿之介には、剛勇と浪曼的な素質が同時に内蔵されていたのだ。

いまから見ると、そのロマンチシズムは古めかしい美しさをたたえていると共に、いささか芝居じみたものを感じさせるが、当時に於ては、

「やあやあ、遠からんものは音にも聞け。我こそは……」と、名のりをあげて一騎打を行う講談の勇士たちのごとき人間感覚が、別に可笑しくはなかったのだ。

しかし、可笑しくないままに鹿之介は成長した。

中央では、多くの戦国大名たちが、戦争自体によって生み出される新兵器と経済機構を駆使し、スケールの大きな戦争と謀略とを複雑に、凄惨にくりひろげていた。

ところが、尼子家では山陰の山国ひとつにかじりつき、敵と言えば毛利だけに目角をたてて、やたらに勇み立っていただけなのである。

そのような、自分というものを形成した視野のせまい風土と環境に気づいたわけではないが、

「わしも以前の鹿之介とは違うぞ。この四年の浪人暮しの間に、わしは巡礼となり、甲斐にも関東にも足をのばし、武田・北条・織田などの治政と軍備を、つぶさにこの眼のうちにと

らえて来ている。おぬしたちも、わしを信じ、安心して、すべてをゆだねてくれい」

鹿之介は、一同に向い悠然と言いわたした。

鹿角の兜と黒の鎧、白地に金箔で三日月をあらわした陣羽織など、鹿之介の巨体をかざる武装は、いやでも鹿之介の英姿を引きたたせたし、その生来の美貌には四年の年輪もさすが加わり、風格もゆたかに、いっそうのたくましさをも兼ねそなえてきている。

「大丈夫!!　この大将になら命をあずけて悔むところはないわい」

奈佐日本之助も、すっかり鹿之介に見とれてしまったようだ。

尼子一党は、あらためて山中鹿之介を再認識し、御家再興の気勢は高まるばかりである。

このありさまを見て、不快をおぼえたものが一人ある。

秋上伊織介だ。

伊織介の剛勇は、鹿之介のそれと共に尼子がほこる大看板であった。かつては対等の地位にあり力を合せて尼子家のホープとして戦って来たのに、いま、尼子一党は完全に鹿之介を頭領と仰ぎ、鹿之介もまた平然とこれをみとめているらしい。

第一、新しい殿様の尼子勝久は、もう鹿之介でなければ夜も日もあけないという信頼ぶりではないか。

伊織介、ちょいと面白くない。

（鹿之介も、少々、増長しすぎておる）

隠岐へ向う船中で、秋上伊織介は胸中につぶやいた。

五

隠岐の島の島主は隠岐為清といって、尼子一族の血をひく豪族である。協力するのは当然であった。

尼子勢は、ここで軍備をととのえ、隠岐勢を合せて、ふたたび出雲国・島根郡仲山に上陸。近辺の砦を守る毛利の部隊を次々に追い払い、六月下旬には新山城を落し、入城した。

このことを聞き、諸方にかくれていた尼子のものが続々と集まって来た。

かくて尼子勢は、いよいよ目ざす富田城へ迫ろうとした。

「山中鹿之介というやつ。やはり油断はならぬやつであった!!」

毛利元就は、この報を受けると、すぐさま九州へ出陣している吉川元春・小早川隆景を呼びもどした。

元春も隆景も、共に元就の子で、早くから吉川・小早川という豪族の養子となり父元就の中国制覇を助けてきている。

吉川元春は、本家毛利の後つぎとなっている甥の輝元と共に一万三千の大軍をひきいて出雲に向った。

「いよいよ、これからが本当の戦さじゃ」

鹿之介も二十六歳の春を迎えた。

毛利の九州出陣の隙をねらって侵入し、まずは華々しい戦果をあげたが、これからが大変

であった。

せっかく奪いとった砦も、次々に奪い返された。

鹿之介は、戦闘のたびに陣頭に立った。

彼の十文字槍は、かつての武勇談など問題にならぬほど、敵の血を跳ね飛ばし、吸った。けれども、劣勢はおおうべくもない。

（これほどの大軍が来ようとは、思わなんだ）

鹿之介は、むしろ意外に思った。

九州の大友が、もう少し毛利を押えておいてくれると考えていたのだが、毛利軍は、すでに目ざましい戦果をあげて大友軍を圧倒しており、尼子が兵をあげたと聞くや、電光石火、戦備体制をととのえて山陰へ取って返して来たのである。

毛利の水軍は天下に知られた強力なもので、二百余の軍船が日本海へ乗り出して来て、兵力・糧秣を補給してくるのだ。たまったものではない。

しかも毛利のスパイ戦術は巧妙であった。

中国地方の盟主として、日の出の勢いの織田信長とも張り合おうという毛利元就である。重蔵坊や〔鉢屋〕の小五郎のようなものに一杯喰わされてしまう鹿之介の素朴さでは、とても太刀打は出来ない。

「わしも、この四年の間に……」苦労をつみ、新時代の武将になれたつもりの山中鹿之介だったが、人間の素質が四年間で変るものではない。

毛利では、まず秋上伊織介にスパイを送り、見事これに寝返りをうたせた。ということは、秋上が鹿之介に抱いていた不満をすでに知っていたといえよう。

隠岐為清もまた尼子を裏切り、隠岐の島へ帰ってしまった。

「おのれ、為清!!」と叫んでも、隠岐の島まで追撃する船も無いというわけであった。

このような情況を見て、

「これは駄目だ。尼子再興はむずかしいわい」というので、どこかへ逃げてしまうものもあり、毛利軍へ投降するものも出て来た。

「われに、七難八苦をあたえ給え!!」

空に浮ぶ三日月を仰ぎ、鹿之介が叫んだのは、このころのことである。

不幸を追い払って信念をよぶためのいのりであった。

(命をかけての苦労が実をむすばぬ筈はない。主家再興の正義のために闘うおれの心が天に通ぜぬ筈はない!!)

浪曼的な信念である。

だが、山中鹿之介の体軀は強靭であった。

強靭な肉体は強靭な精神を生む。その理非いかんにかかわらず、その状態の多種多様なるにかかわらずである。

苦戦がつづくうちに、翌元亀二年六月十四日、毛利元就が病没した。

「天、いまだ我を見捨てたまわず!!」

鹿之介は躍り上ってよろこんだ。

これは、ルーズベルトが死んだのでアメリカの攻撃がにぶるだろうと思い込み「万歳」と叫んだという日本軍将官の――それも中国の奥地あたりに押しこまれていた一部の将官の心境に少し似ているようだ。しかし、

「父の死によって、われらは尚も心を引きしめねばならぬ」

毛利の三兄弟は誓い合った。

元就の次男・吉川元春は父の死にも帰国せず、倍増の猛烈さときびしさをもって攻撃を続行して来たのである。

このとき、鹿之介は伯耆の末石城にたてこもっていた。

末石城は、いまの米子市から六里ほどのところにあり、伯耆大山の山麓に構えられ、日本海をのぞむ要害の地にあった。

鹿之介は大山の僧兵を動かし、僧兵たちもまたこれに応じた。

「よろし!!　なれば先ず大山の坊主どもを攻めてくれよう!!」

吉川元春は、こう宣言した。

この宣言が鹿之介の耳へもとどくようにスパイを働かせたので、鹿之介もそのつもりになり、

「毛利軍が大山を攻めるその背後から奇襲し、敵を粉砕してくれよう」と、吉田八郎左衛門に城内の兵力の大半をあたえ、ひそかに出発せしめた。

ところが、吉川元春は大山の僧兵など見向きもせず、まっしぐらに末石城へ攻めかかってきた。

「失敗った!!」

鹿之介は口惜しがったが、もう遅い。いつも一足遅い。

兵力を外へ出してしまったのだから、城が落ちるのは当然であった。

山中鹿之介は、ついに吉川元春の手に捕えられた。

鹿之介ほどのものが自決しなかったのは、殿様の尼子勝久が新山城にこもって力戦中であったからだ。

（おれはあきらめぬ。上様!!　必ずや鹿之介は……）

必ず逃げるつもりであった。

元春は、縄つきのまま引き出された鹿之介を一眼見て、

（むむ、見事な面がまえよな）

先に「鉢屋」に化けさせた刺客を放ったこともある吉川元春だが、感服した。いかに鹿之介の風貌が美と力にめぐまれていたかが知れよう。

元春の侍臣・宍戸安芸守や口羽刑部大輔なども、

「鹿之介をお召し抱えあれば、将来、必ずや御家のためとなりましょう」と進言をした。

元春はこころみに、

「毛利家に仕えぬか。周防・伯耆にて二千貫をあたえよう」

そう切り出してみると「かくなる上は……」と鹿之介もうなずき、
「もはや力をつくし切りましてござる。この上は何事もおまかせいたす」
意外にいさぎよい態度が、反って元春に助命の意をさそったようである。このあたりは鹿之介もなかなか俗にいう大人？　になってきていた。
しかし尚、元春は鹿之介の様子をしばらくは見ることにして、その身柄を杉原重盛という部将にあずけ、杉原が守っている伯耆・尾高城の締り所へ鹿之介を監禁した。
山中鹿之介が、尾高城から脱走したのは、六月二十日の夜更けであった。
尾高城へ押しこめられたとき、鹿之介は下痢をおこした。二日、三日とたつうちにも病状は悪化するばかりだ。嘘でもいつわりでもない。
だから警固のものも鹿之介のひんぱんに行う厠通いを許さざるを得ない。
おそらく赤痢か何かだったのであろうが、鹿之介のように勇猛な男が相手では赤痢菌の方で逃げ出してしまうらしい。
（しめた!!）
熱もやや下り、これなら大丈夫と思うようになってからも、尚、鹿之介は病苦をうったえ、一日に数十回も厠へ通った。
その夜――鹿之介は厠の便壺の中へもぐり込み、くみとりの切口を破って崖を飛び降り、二の丸の北側の石垣下へぬけ出すことが出来た。
赤い月が出ていた。

真夏の、いやに蒸しあつい夜であった。
石垣に沿って草むらの中を這うように進んで行くと、すぐ近くで、
「や……？　何やら臭いのう」という声がした。
どきりとなって眼をあげると、三間ほど向うに、上半身は肌着だけになった五十がらみの部将が筵の上に寝そべって冷酒をのんでいる。
そばで足軽が三人、給仕をしたり大団扇で風を送ったりしているのだ。
この部将は、吉川元春麾下のもので大沢七郎兵衛成淳といった。
鹿之介にとっては、その部将の名前などはどうでもよかった。
魔神のように草むらから襲いかかると、
「む!!」
大沢七郎兵衛を力一杯に撲りつけた。
声もなく大沢は倒れた。あとで見ると、首の骨がぐしゃぐしゃに打ちくだかれていたという。
「くせ者!!」
「ああッ!!」
足軽三人も、たちまち鹿之介に撲殺された。
大沢の太刀を引摑むと、鹿之介は、一散に二の丸番所へ駈け寄る。
此処でも悲鳴と絶叫と血けむりが散乱した。

急を告げる太鼓が城内に鳴りはじめたとき、鹿之介は、すでに濠の水の中にあった。
（天、いまだ我を見捨て給わず）である。
このことは、山中鹿之介の自信を尚も強烈なものとした。

六

「おことは、三日月を仰ぎ、我に七難八苦をあたえよと祈られると聞いたが、まことか？」
織田信長が、山中鹿之介に言った。
「わが力のあらんかぎりをためして見ようと考えまして……」と、鹿之介は答えた。
信長の本拠、岐阜城内の一室に於いてである。
鹿之介が尾高城を脱出してから三年目の天正二年春のことであった。
鹿之介は三十歳になっている。
尼子一党は毛利軍によって出雲から追い払われた。
いま、尼子勝久も鹿之介も、それぞれ家族と共に岐阜城下に屋敷をもらい、信長の庇護をうけて暮していた。
千明に女の子が生れた。八重と名づけた。
千明も二十七歳。女ざかりである。
かつては、鹿之介の巨体が押しつぶしてしまいそうに思われた手弱かな千明の肢体にも、ねっとりとしたあぶらが浮き、肉づきもめっきりとゆたかになった。

「そなた、抱きごたえがあるようになったの」
鹿之介に言われ、
「ま、そのような……永い間、わたくしを放っておおきになり、その間に、諸方の女子(おなご)とたわむれておられたのでございましょう」
千明は、よくこんなことを言う。
「何を申す!!　わしにはそなた一人が女子じゃ」
ともあれ、この、二、三年間が、鹿之介にとっても千明にとっても、もっともおだやかで楽しい日々を送ることが出来たのではないか……。
鹿之介は尼子勝久と共に織田軍の部将として諸方に出陣した。もちろん織田の客分としてであった。
その間にも女性には割とこまめで、摂津(せっつ)の片田舎の豪農の娘に子を生ませたりしている。この子が山中新六となって大阪、いや日本の大財閥の鴻池(こうのいけ)家の先祖となるわけだが、そのいきさつはここに語るまでもあるまい。
さて、その頃(ころ)の鹿之介は三日月に何をいのっていたか……。
例によって尼子家再興を叶(かな)えたまえといっていたのである。
「ふむ。奇特なことよの」
信長は感心して見せたが、後になって秀吉(ひでよし)にこうもらした。
「空に浮ぶ三日月どのは、いくら祈ったとて鉄砲も金銀も、出してはくれまいにのう。あや

つ、不思議な男じゃ」

「御家にほしき人物でございまするな」

「ふむ。なれどあやつは、ただもう、おのれの力をもって出雲を攻めとり尼子の忠臣として名をあげようという……」

「なれど、それはあまりに……」

「ふむ。鹿之介は、ただひたすらにおのれを捨て、主家のためにつくそうという心、それのみじゃと申すのか。あまりにも美しい忠義の志の底には、本人がそれと気づかぬ虚栄の心が間々ひそんでおるものじゃ。筑前にわからぬ筈はないがの」

信長は笑った。

今や織田信長の天下統一完成は衆目のみとめるところである。

強敵、甲斐の武田信玄も先年没してしまったし、足利将軍も今は信長を頼るほかはなく、信長はまた度び度び上洛して皇居の造営や市中の復興に力をそそぎ、天皇の信任はいよいよ重く厚い。

（あとは毛利を残すのみじゃ。毛利との戦いは目前に迫っておる。そのときこそ、……）

そのときこそ鹿之介は、毛利の大軍に向って死物狂いの闘いをいどむに違いなかった。

だからこそ、尼子勝久と鹿之介を大切に扱ってきたのである。

「なれど、余が天下びととなったとき、尼子や鹿之介が生き残っておったなら、出雲一国はくれてやってもよい。またそれだけの働きはしてくれようからの」

秀吉は、主君をおそろしいと思った。

毛利と戦うとき、信長は、まず尼子一党を消耗作戦に投入し、敵の力を殺いでおいてからおもむろに自らの手を下そうというつもりらしい。

何しろ、天下を自分の手で治め、うちつづく戦乱の世をしずめようという大理想のためには、愛する妹をやった聟まで殺すほどの信長であった。

それほどの信長でいて、しかも、八年後の天正十年には、四十九歳の若さで明智光秀の謀叛に害せられてしまったのだ。

宿命というものであろう。

天正二年初秋——。

鹿之介は因幡に攻め入って、毛利方の城を落しいれること十五という戦果をあげた。

まさに力戦奮闘である。

信長も、そのころは伊勢長島や石山本願寺の一向一揆を鎮圧するため諸方に転戦して多忙であったが、尼子への武器・兵糧の補給などに援助を惜しまなかった。

こうして翌年一杯は何とか持ちこたえたが、ついに天正四年五月。吉川元春・小早川隆景が合せて四万余の大軍をひきい、山陰に進出して来たので、一万に足らぬ尼子勢（織田からも兵力が加わっていた）ではどうにもならなくなり、ふたたび山陰の地を退去し、勝久と鹿

之介は京へのがれた。

岐阜へ戻ると、織田信長は、

「あせるな、鹿之介。あれほどの兵力で二年もちこたえたは立派じゃ」とほめてくれた。

鹿之介は、ちらとうらめしげな視線を信長に投げた。どうせ助けてくれるなら、何故もうひとつ力を貸してはくれないのかと言いたかったのであろう。

「いま少しの兵力がござりましたら、むざむざと……」

「は、は、は——この二年の間、おことが働いてまいったことは決して無駄ではない。それよりも、来年はな……来年は、おそらく……」

ここまで言ってから、信長は微笑を消し、するどく空間を見入ったまま、口を閉じてしまった。

足利将軍・義昭の動きが、ちかごろはまた微妙なものを見せてきはじめたのを思い起したからである。

足利義昭は、信長に不満をもちはじめてきている。

いくら将軍の権威をとりもどそうとしても、事実上の権能は今や信長のものになりつつあったからだ。

表向きは将軍をたてていても、信長はもう義昭の言う通りにはならない。

義昭が泣きつくところは、毛利家のみしかない。

この年の二月。

足利義昭は備後の鞆（広島県・福山市）へやって来て、毛利輝元に幕府の再興を命じ、さんざんに信長の悪口を言い出した。

毛利輝元は、叔父の吉川元春・小早川隆景をよび協議を行った。

毛利家では、故元就の遺訓によって天下制覇の野望はなかった。

けれども、足利将軍に頼られ、そのために事態が好むと好まざるとにかかわらず、信長と敵対するように変って行くのである。

それでも、吉川元春はすぐに信長へ使者を派し年頭の祝賀をのべ、信長もまた、

「この後、尼子氏や山中鹿之介を保護することはしない」と答礼をしている。

互いに嘘を承知の外交戦であった。

二月二十三日、信長は建築中の近江国・安土の城の一部へ移った。

五月になって、ようやく毛利家では旭日昇天の勢いを持つ織田信長と決戦する肚をかためた。

ぐずぐずしていて、まわりの大名たちが織田方へついてしまえば、自分の家ひとつ取り残され、厭でも信長に屈服しなくてはならないからだ。

しかも足利将軍はこちらの手にあり、戦いの名目は立派にたつのだ。

七月十六日、信長は羽柴秀吉に中国遠征軍総司令官を命じた。

「どうじゃ？　先鋒をつとめて見るか、鹿之介――」

「心得て候」

鹿之介は血わき肉おどる思いがした。

今度は織田の大軍と共に闘うのだ。負けよう筈はない。

尼子の勇士・山中鹿之介は、一体いつになったら主家の再興をなしとげることが出来るのか？　という世上の噂に、今こそ答えを出すことが出来ようというものだ。

（これで、わしの面目もたとうというものだ!!）

尼子勝久も、このとき二十五歳になっている。激しい歴戦は勝久に凛然たる風格をあたえた。

心変りをした先代の義久とは、闘志の点でくらべものにならない殿様になってきている。

「殿が御先祖の経久公。それがしは、山中勘兵衛となって、これが二度目の尼子再興でござりますな」と鹿之介は、かつての尼子の歴史をふりかえり、感無量の面持ちになった。

「殿!!　夢がまことになり申した」

「富田城へ入ったならば、経久公のごときよき君主となり、わしは二度と尼子に不幸を招来せぬつもりじゃ」

「御立派に成人なされ、幸盛、感泣つかまつりました」

十七のときから手塩にかけ、命をかけて守って来た勝久なのである。鹿之介の感動も並々ならぬものであったろう。

主従二人、早くも富田入城の夢を現実のものとしてしまっていた。

「今度こそ、そなたを富田城へ迎えようぞ」

鹿之介は愛妻・千明に言い残し、岐阜を発した。

七

それから二年たった。

天正六年七月三日の夜更けであった。

二十七歳の尼子勝久は、今まさに、切腹をしようとするところである。

「殿のおん後を追わず敵に降る鹿之介の心中、おわかり下さいますか？」

「わかる」

尼子勝久、少しも悪びれたところはなかった。

播磨国・上月城内の一室である。

上月城は播磨と備前・美作の国境に近い山城で、前方に能見川をひかえ、周辺には無数の沼地が点在している。

能見川に沿ったわずかな田地をのぞいては、山また山にかこまれた要害の地で、山陰と山陽の両地方にまたがる拠点でもある。

毛利との開戦に当り、

「上月の城を尼子に攻めさせよ!!」と、信長の命が下ったことは言うまでもない。

二年後の冬に、勝久と鹿之介が、八百そこそこの尼子一党をもって攻めかかったところ、その勢いに恐れをなした上月城を守る真壁某は、一戦も交えずに城を捨てて逃げ出してしま

ったのである。

真壁は弟の次郎四郎と合同し、兵力を増強し、押し寄せてきたが、

「敵は三千、味方は八百。ここは夜襲にしくはない」

俊敏に打って出て、風雪が捲き吹く夜戦に、鹿之介の大刀・荒見国行は敵将・真壁兄弟の首を宙に跳ね飛ばした。

以来、尼子勝久と山中鹿之介が尼子勢と共に上月城を守備することになる。

足利将軍を奉じている毛利軍には、多くの西国大名ばかりか、越後の上杉、甲斐の武田、関東の北条などの強力な大名たちが味方したし、織田信長も、はじめはかなり苦しい戦いに奔命することになった。

こういうわけで中国征討司令官である羽柴秀吉もなかなか忙しい。

がやがやと一年がたってしまった。

ところが今年の春に、秀吉が安土の信長のもとへ呼びつけられ作戦会議に列席したその隙をねらい、毛利軍が上月城へ攻め寄せてきた。

毛利としては、内外への名目にかけても、尼子勢を打ちのめして信長の鼻をあかしたいところだ。

七百の軍船を明石浦へまわし、毛利兄弟は総勢五万の大軍をもって上月城を包囲した。

八百と五万だ。もう籠城するより他はない。

「なれど、一同もよう聞けい。このたびは、織田殿と共に戦うわれらじゃ。すぐさま、筑前

殿（秀吉）が駈けつけてくれよう」

鹿之介は、平然たるものであった。

なるほど、筑前殿は三万余をひきいて安土から駈けつけて来てくれ、上月城の東・高倉山へ陣をとったが、

「こりゃ、いかぬわい」

秀吉も手をこまぬいた。

毛利の大軍の配置は水も洩らさない。

戦って戦えぬことはないのだが、丁度そのとき、同じ播磨の三木城主・別所長治が火の手をあげたのだ。

さすが毛利である。秀吉が引返して来るころを見はからって、同盟軍の別所をうまく動かしている。いま、尼子勢を助けんがために毛利と戦えば相当の出血を覚悟しなくてはならない。

「困ったわい、これは……」

秀吉もあぐねて、安土へ急使を派した。

信長から返書がとどいた。

「上月は捨てよ。三木城を先ず落せ」

厳命である。

「鹿之介どのは惜しい男よな。可哀相じゃが仕方あるまいわい」

秀吉は手を引いてしまった。

目高村の谷から引いていた用水も、その方面から輸送されていた糧食も毛利軍によって絶たれた。

五月晦日の吉川元春の書翰にこんなのがある。

城内には勝久・源太（立原久綱）・鹿、以下の由候。水、食糧一円これ無きよし、落人たしかに申候。

ひそかに城をぬけ、毛利方へ降参する者も出て来たと見える。

約二カ月の間、ねばりにねばって辛抱をしたが、ついに七月三日、鹿之介は吉川元春に降伏した。

「尼子勝久切腹すれば、将卒の命は助けよう」という元春の条件をのむより仕方がなかった。

「わしは、学問のすじもあまりよくなく、一生を名もなき僧侶として終るところであったのに、一軍の指揮をとれるまでになったことは、いまさら悔むところでない。まして一同の命に代るは本懐である」

尼子勝久はそう言った。

「殿。いずれは、それがしもおん後を……」

「無理はせずともよい。なろうことなら生きのびておれ。なれど、わしが言うたとて、耳を

かすそちではなかったの。まあ、よい。好きにいたせ」

勝久が切腹した翌早朝に、山中鹿之介は手勢七十騎を従え、山麓につめかけている毛利軍へ降った。

吉川元春が、陣屋に鹿之介を引見した。

（いかん!!　これでは……とても……）

鹿之介は唇を噛んだ。

元春は十余間の彼方にあり、そのまわりは数十名の旗本が槍の穂を林立させ、これを護衛している。

引見の機をねらって敵将・元春を刺殺しようという鹿之介の肚のうちは、すでに見通しであった。

「どうじゃ。織田信長は、おぬしが考えていたほど信ずるに足る大名ではなかったようじゃな」

鹿之介は口惜しげに眼を伏せた。

……今の世に、人を信ずることは武士たるものの一生をかけた重大な別れ道となることを、よっく考えていただきたい……。

あのときの清松弥十郎の手紙を、この一カ月というもの、鹿之介は何度思い浮べたことだろう。

……わしは人を信ずることが出来る。わしには何度人に裏切られたとて、最後のものが残

っている。最後のものは、わしを裏切らない。それは、わしの絵だからだ……。
（おれにも最後のもの、おれ独りの力が、まだ残っているぞ!!）
おめおめと恥をしのんで投降したのも、吉川元春の息の根をとめてくれようという決意があったからだ。
（尼子家に鹿之介ありと世上に噂されたこのおれだ!!）
それほどのことをして見せなくては、時代の寵児たるもの世上に顔向けが出来ないといったところだ。
「ひとまず、鹿之介を備中・松山の城へ送れ」
吉川元春は、そう命じた。
降伏条件の通り、尼子勝久が切腹したので尼子一党の命はすべて助けようが、
（鹿めのみは、ならぬ!!）
元春の決意であった。
命あるかぎり、恐るべき鹿之介の執念は何を仕出かすか知れたものではない。
しかし、すぐに殺しては降伏の約束を破ることになる。
備中・松山へ送る道中に機を見て殺害せよと、元春は、鹿之介護送の指揮に当る河村新左衛門のみに密命を下した。
元春が特に河村をえらんだのは、しかるべき理由があった。
「鹿之介。おことを備中へ護送する」

吉川元春がそう言ったとき、

（しめた!!　まだ機会はある）と、鹿之介は思った。

下痢の二番煎じは利くまいが、何とか逃げ出し、死神と化しても元春か、輝元を暗殺してやろうというのだ。

（ひょっとすると、おれを召し抱えたいのかも知れぬな……）

無理もないと思った。

自分ほどの剛勇はざらにないものだ。

（いまは何処にいるか知らぬが、清松弥十郎よ。おれはまだ、おぬしには負けぬ。おれの最後の力のほどを見せてくりょうぞ）

炎天の山峡を、鹿之介護送の一行は、松山城に向けて出発した。

毛利の本国安芸からの急使が、上月の吉川元春のもとへ飛来したのは翌未明のことであった。

一時、本国へ引上げていた甥輝元からの使者である。その手紙を見て、元春は、

「む、む……」

複雑なうめきをもらした。

毛利輝元は、こう言ってきている。

元春、そなたは鹿之介を殺すつもりであろう。わしも、そのつもりでいた。

なれど、当家に隠居中の尼子義久殿が、熱誠をこめた嘆願をしてきて、鹿之介を助けてやってくれというのだ。むかし、仲のよい主従の間柄であったそうな。ゆえに、尼子のため命運をかけて、しかも、尚失敗の苦渋のみを重ねてきた鹿之介のあわれを見るに忍びないのであろう。

すでに尼子家は、勝久をもってほろびた。ここは、ひろい心を見せ、鹿之介を放してやってはどうか……。

毛利家伝統の温情主義を継いだ嫡子の輝元らしい手紙であった。

元春も尼子義久の温和な人柄は気に入っている。

（それもそうか。鹿一匹を恐れるも大人げなかったやも知れぬ）

護送隊長・河村新左衛門宛の手紙をしたため、元春は、

「まだ充分に間に合おう。急げ！」と騎馬の使者を発せしめた。

手紙は——そちには忍びがたきところであろうが、世上へのきこえもあって、このたびは鹿之介の命を助けることに変更をしたから、そのつもりで、無事に松山へとどけよ……という文面であった。

河村新左衛門は、翌々日に、この手紙を受けとった。

「わかった。帰れ」

上月へ引返して行く使者を見送った新左衛門は、主人・元春の手紙を火中に投じた。

十日後の七月十七日の午後に、護送の一行は備中・甲部川の阿井の渡しへかかった。
松山城は、対岸を少しさかのぼった東面にそびえる臥牛山に構えられている。
三十一名の護送の士卒を休ませておき、河村新左衛門は、腹心の天野某、福間某を呼び寄せ、ひそかに命じた。
「鹿之介を刺殺せよとの上意じゃ」
すべては元春と新左衛門のみに交された命令であり、命令取消しなのである。
天野も福間も「では、やはり」と、うなずいた。
東西の山肌にかこまれ、南面にひらけた峡谷には、午後の太陽が、ぎらぎらと照りつけていた。
川の音も聞えぬほど、峡谷いっぱいに蟬が鳴きこめている。
鹿之介は越後帷子をまとい、脇差ひとつを許されたのみの軽装であった。
「まず、山中殿の手の者を渡せ」
河村新左衛門が命じた。
鹿之介を慕って随行して来た八名の従者が、天野某の指揮によって小舟に分け乗り、対岸へわたることになった。
鹿之介は馬から下り、夏草の上に腰をおろした。
護送の士卒の大半、鹿之介の従者を警衛し、川へ乗り出している。
「河村殿。水を所望」

汗をぬぐいつつ、鹿之介が声をかけた。
河村新左衛門は、まわりにいる四名ほどの歩卒に命じ、竹の水筒をもって川の水を汲ませ、これを自らとって、鹿之介の前へ近寄って来た。
「水でござる」
「これは、おそれいる」
うけとった鹿之介が竹筒に唇をつけた、その瞬間であった。
「ええい！」
河村新左衛門が、鹿之介のななめ後ろに飛びまわって、抜打ちに斬りつけてきた。
血がしぶいた。
「謀ったな!!」
頭から肩を割りつけられた鹿之介は新左衛門に組みついた。
どどっと、夏草の中をころげて、二人は、そのまま、水しぶきをあげて、川に呑まれた。
対岸についたばかりの舟の中から従者たちが悲鳴をあげる。
河村につづいて福間某が水中に飛びこんだ。
蟬の合唱は止まなかった。
水中で福間の短刀を腹にうけたとき、山中鹿之介の脳裡を、千明や勝久や、義久や、娘の八重や、摂津の女に生ませた男の子の顔などが……三十四年の生涯が矢のようにかすめ去った。

（千明よ。そなたは弥十郎と夫婦になるべきであったな……）

思いもかけぬ想念が、ぱッとひらめいたが、あとはもう、鹿之介の意識は奔流の中にとけこんでしまっていた。

山中鹿之介の首を水中に掻き切って岸へ上った河村新左衛門は、

「義父上！　これにて成仏されよ」と叫んだ。

新左衛門は、主命にそむいた申しわけに切腹をするつもりでいた。

七年前、便壺から脱走した鹿之介に撲殺された大沢七郎兵衛の娘が河村新左衛門の妻だということなど、むろん鹿之介は知るよしもなかった。

（「オール讀物」昭和三十七年七月号）

猛

婦

一

戦国時代の女は、すべて男たちの野望と権勢と暴力の前に屈し、犠牲を強いられ、哀憐悲痛な一生を送らざるを得なかった……というのが、今では通説となっている。

そうした女たちもいたことはたしかであるが、だからと言って、何から何までも一つの鋳型にはめこんでしまうわけにも行くまい。

千差万別な幸と不幸の両面が、反復しつつ人生をいろどっていることは、むかしも今も変りのないことだ。

ことに、男たちは血を流して闘い合いつつ、無意識のうちにやどる天下統一への願望へ向い、火のような情熱をぶつけていた時代であった。

女たちにしても、同じことだ。

身内に充満する熱した精神を悲劇の中へたたきこみ、そこに生きるあかしを、懸命に探りとろうとしたのである。

けれども、お津那の場合は、別に政略結婚を強いられたわけでもなく、また、それほどの身分ある家に生まれたのでもなかった。

お津那の女としての出発は、まず幸福なものであったと言える。

十八歳の彼女が、秋山兵蔵の妻となったのは、天正二年の春のことだ。

父の大場三郎右衛門の取りきめによるものであり、
「父が見込んだ男じゃ。安らかに嫁けい」
いきなり、父からこう言われたときも、
「はい」
お津那は、むしろ生き生きと双眸をかがやかせた。
（これで、わたしも、ひとり前の女じゃ）
むろん、相手の顔は一度も見たことはない。
だが、夫をえらんだ父の眼を、お津那は信頼しきっていた。
母は、数年前に病歿していたのである。
秋山兵蔵のことは、お津那も、うわさにだけはよく聞いていた。
兵蔵は、お津那の父と同じ武田の家来・秋山又兵衛の長男である。
三年前の三方ヶ原の戦いで、兵蔵は徒歩立ちのまま六尺余の鉄棒をふるい、徳川軍の先鋒部隊へ突進し、敵方の騎馬武者の乗馬の足を、鉄棒でたたき折り、転落する武者を撲り打ち、首をあげること七級におよぶという目ざましい働きをした。
主君の武田信玄は、みずから兵蔵に小星兜をあたえ、その勲功を賞美した。
このことを耳にしたとき、お津那は、
「ま――」
ひそかに嘆声を発し（何という気根のすぐれたお方であろうか）と感じ入ったものである。

兵蔵の武勇を（気根のすぐれた……）と評したお津那の観察は、いかにもお津那らしいと言える。

お津那は十四歳のころから、中条流の刀術をまなんで、相応の手練を身につけていた。刀術は、父が伝授してくれたものだ。

父の三郎右衛門は、十五年ほど前に、武田家の客分として重臣・馬場信春の屋敷に滞在をしていた小田順如という兵法者から、この刀術をつたえられた。

「他人にはもらすなよ。わしは、お前が自分の心身を、いざというとき、あやまりなく御することが出来ることを願うて兵法を教えたのじゃ。よいか、わかるな」

「はい」

「わかれば、よし」

ひまがあれば甲府の城下をかこむ山林へわけ入って、たゆむことなく、父は娘を鍛えあげた。

どちらかといえば小柄で、むっちりと肉がみちて見えるお津那の肉体のひきしまった弾力は、さすがにそれだけのことがあり、

「津那は、ずいぶんと精を出したらしいな」

新婚の夜ごとに、夫の兵蔵は津那を愛撫しつつ、感嘆をした。

「どなたにも、おっしゃらずに――」

「心得た。なれど……なれど、おれは、おぬしのような女を妻に迎えたこと、嬉しく思う」

秋山兵蔵も大柄な方ではないが、体毛が密生した体は、すばらしい筋肉によって組成されていた。

秋山の家は、つつじヶ崎の武田居館の外濠の西側に建ちならぶ〔御組屋敷〕の一つで、義父の又兵衛のほかに、義弟の門介がい、下僕二名、下女一名という、お津那の実家と同じような家柄である。

実家とも、あまり遠くはなかった。

お津那も兵蔵も幸福であった。

二人が夫婦となって間もなく、にわかに甲府城下の空気が切迫したものとなった。

この年の二月から、主君の武田勝頼は大軍をひきいて美濃攻略を行ったが、夏になると、またも甲府を発し、遠州の高天神城を落した。兵蔵も従軍した。

高天神城は徳川家康のもので、家康の居城がある浜松に近い。兵蔵は勝頼に従って甲府へ帰って来ると、

「いよいよ、上様も徳川との雌雄を決するおつもりらしい」

寝物語に、お津那へ言った。

「秋ごろには、また陣ぶれがあるだろうな」

「ま――あわただしいこと」

「亡き法性院様のおわしたころは、このように、急いた戦さの仕様をなさらなかったものだが……」

こう言って、兵蔵は、ふっと口をつぐんだ。
お津那には、夫の胸の底にあるものが、わかるような気がした。
法性院というのは、去年に歿した武田信玄の法号である。
甲斐の国の太守として、君臨していた信玄はすぐれた武将であり政治家であった。
武田信玄が、永年にわたる慎重な準備の後に、全力を投入した軍団を編成し、東海の地へうって出たのは、三年前の元亀三年秋である。
このころの武田軍は、日本一とよばれた騎馬隊を主力とし、五万に近い兵力を動員することが出来た。すべて、信玄の威風によるものだ。
諸国に戦乱を反復しつづけてきた武将たちも、ようやく、より大きな勢力にふくみこまれ、まず、天下をつかみとろうという勢力は、武田信玄と織田信長の二人にしぼられていたと言ってよい。
当時の信玄は、甲斐のみか、信濃、駿河の二国や、遠江・三河・飛騨・越中などの一部を包含し、百数十万石の大名であり、
「今こそ、起つべきじゃ!!」
京へのぼり天下の覇権をつかみとるべく、三万余の軍団をもって甲府を出陣したのである。
武田に侵蝕されつつある遠江・三河の領主だった徳川家康が、これを三方ヶ原に迎え撃ったのは十二月二十二日であった。
家康は織田信長と同盟していて、武田軍の上洛を強固に阻止しつづけてきた。

今までにくり返してきた小さな戦闘ではなく、信玄も今度は徹底的に徳川軍を破砕してしまう決意であり、その武田の大軍の前に、若き武将・徳川家康は敗北した。

この冬、信玄は甲府へ帰らず三方ヶ原北方の刑部に年を越して、翌天正元年を迎えた。

一気に京へのぼるつもりであったらしい。

まず、徳川の支城である野田の城を落したが、ここで急変が起った。

武田信玄が発病したのである。

止むなく、下伊那の駒場へひきあげ、ここで信玄が病死したのは四月十二日で、ときに五十三歳であった。前々から、かなり肺患の病勢はすすんでいたものと見える。

三年の間、信玄の死は秘密にされることになってはいたが、今では家中の者の誰一人、これを知らぬものはない。

諸方にも、このうわさはひろまってしまい、今までは武田に屈従していた諸方の大名や豪族たちも、織田や徳川へなびいて行く気配濃厚となった。

父信玄の後をおそって武田の当主となった勝頼だが、いかに勇猛な武田勝頼をもってしても、信玄の偉大さには及ばない。

そこに焦りが、どうしても出るのだ。

次々に叛きはじめる諸方の城へ、勝頼は狂ったような威圧をかけ、攻撃を開始した。

こうして、知らず知らず、内外ともに、武田の戦力は消耗しはじめてきたのである。

「いよいよ、出陣だぞ」

結婚の翌年の三月二十五日に、秋山兵蔵は、父や弟と共に馬場信春の屋敷から戻ると、お津那へ告げた。

「わかっておりました」

ここ数日来、武田の館にも出仕の諸将が引きもきらなかったし、戦さの準備が着々と進行していることは、城下のものの誰もが知っていた。

信濃からも上野からも、この二月ごろから部隊が集まり、城下は騒然たる気配につつまれている。

「御武運をおいのりいたします」

「うむ」

「わたくしも、あなたさまと一緒にまいりたい」

「何を言う。女の身で……」

「ふ、ふ、ふ。あなたさまに負けぬ働きは、わたくしにも出来ましょう」

「申したな。は、は、は――」

兵蔵は笑ったが、実際に、お津那は夫と共に出陣してみたかった。彼女から見ても、おとろえのわかる主家のために、男の身ともなって戦場を駆けまわり、太刀をふるって働きたいという念願が、お津那の血をわかせていたのである。

出陣は、四月五日のあかつきと決ったようであったが、その二日前の夜に、馬場信春から秋山兵蔵へ呼び出しがかかった。

秋山家のものは馬場部隊に属している。ことに兵蔵は馬場信春の気に入られていた。

（何事であろうか……？）

兵蔵が馬場邸へ出向いて行くと、すぐに奥庭へ通され、人ばらいの上で、信春自身が庭へ出て来た。

眼前一尺の近くに、馬場信春が近づいて来たので、兵蔵は身をかたくした。

「兵蔵。たのみがある」

この武田家の支柱とよばれた老臣は庭の闇に視線を投げたまま、何気なく、つぶやくように、

「谷七九郎を存じおろうな？」

「はい」

「斬れ」

「……？」

「あやつ、徳川の間者じゃ。浜松にひそませておいた細作（忍者）から知らせがあった」

「……さようでございましたか……」

「このたびの戦さには一点の遺漏も許されぬ。知らぬ気に放っておき、うまく使いこなしてもよいが、危ない。斬り捨てよ。そちになら討てよう」

「は――」

「気取らるるな」

「心得まいた」

二

谷七九郎は、武田の牢人隊に組みこまれている武士であった。上州・沼田の牢人だという。どこの大名でも、諸方から集まる牢人をえらび、兵力の一部としているが、警戒はきびしい。谷七九郎は、二年ほど前に甲府へやって来た男なのだが、諸方の戦いにもよく働いたのをみとめられていたし、信玄在世のころ、重臣たちの間で、

「召し抱えても、よいのではないか――」

という声も、かなり起っていたようである。

こういうわけで、今の谷七九郎は牢人隊の一部の束ねをするような位置にあり、かなり重んじられていたのだ。

牢人隊の宿所は、兵蔵たちの〔御組屋敷〕がならぶ一画と道ひとつをへだてた八幡宮古地の一角にある。かなり大きな建物であり、もと長坂源五郎の屋敷を改造したものだ。

兵蔵は、馬場信春の指示に従い、屈強の士三名のほかに、弟門介を加え、足軽十余名をひきいて、牢人隊宿所をかこんだ。

しかし、遅かった。

谷七九郎は、一足違いに騎乗で脱出していた。

まことに鋭敏な、けだもののような危機本能をそなえた男である。

「追え!!」

たちまち、甲府から諸方へ通ずる路という路に追手がくり出された。
秋山兵蔵は、弟門介ほか五名の士と共に馬を飛ばして城下を走り出た。
兵蔵たちが目ざしたのは「右左口路」とよばれ、甲府から南下し右左口峠を越え富士山麓へ出る道であった。
翌日――肩と足に重傷を負った秋山門介が、もう一人の士と共に、兄・兵蔵ほか三名の死体を甲府へ運び帰った。
「無念でござる!!　無念……」
泥と血にまみれ、傷の手当をしようとする人びとの手を振りはらい、門介は喉がちぎれそうな声をあげた。
右耳のあたりから頸へかけてするどく切り裂かれた傷が兵蔵の場合は致命的なもので、
「兵蔵ほどのものを、かくも見事に……」
人びとは啞然となった。
兵蔵たちは、右左口の部落から峠へかかる山道で、谷七九郎に追いついたという。
すでに朝の光がゆきわたっていたし、谷七九郎は追手の人数をたしかめると逃げようともせずに、これを迎えた。
山道へかかってからは、双方とも馬は捨てている。
「なるほど。秋山兵蔵殿か――なれど、それだけの人数では無理じゃ」
揶揄の口調ではなく、むしろ教えさとすように落ちつきはらった谷七九郎の声なのである。

だが、この言葉は、追手のものにとって揶揄以外の何ものでもなかった。

「狗め!!」

殺到する追手の刃の中へ、七九郎は無言のまま突風のように躍り込んできた。

血がはね飛んだ。

追手の悲鳴があがった。

魔神のような谷七九郎の刃風は、たちまちに四人を地に這わせた。

最後に、秋山兵蔵が七九郎に立ち向った。

「あっと言う間でござった。それがしに門介殿が傷を負って倒れつつも、すぐに身を起し、七九郎めへ立ち向おうとしたときには、あの……あの強い兵蔵殿が草の上へ身を投げるように倒れ伏し……」

これも傷ついた追手の一人が、馬場信春に言った。

「逃がしたか……それにしても、兵蔵を失うたは、惜しいの」

馬場信春は、谷七九郎の早業への驚嘆と目をかけていた秋山兵蔵への愛惜とが一緒になり、居ても立ってもいられぬようであった。

死体の夫を迎えたお津那は、一言も洩らさず、涙もうかべなかった。

けれども、彼女の双眸は、異常な激情に光っていた。

その夜のうちに、お津那は、甲府城下から姿を消した。実父・大場三郎右衛門から秋山家へ嫁ぐ前夜にわたされた信国の脇差と共にである。

書きのこした手紙もなかったが、大場三郎右衛門は、兵蔵の父・又兵衛に言った。
「わがむすめは、兵蔵殿のうらみをはらすつもりに違いござらぬ」

三

長篠の戦いは、武田軍に決定的な敗北をもたらした。
東海地方への関門である長篠城を約一カ月にわたり包囲したが、ついに落しきれず、武田軍は、五月二十一日の早朝に設楽高原へ展開し、押しよせる織田・徳川の連合軍と戦った。連合軍は鉄砲三千挺、四万に近い軍勢であり、武田軍は鉄砲五百挺、一万五千の兵力であった。
「この戦さは、われらにとって何の役にもたちませぬ。おとどまりあれ!!」
馬場信春や山県昌景などの老臣が必死に制止したが、武田勝頼はきかなかった。
「そちたちは、またも、亡き父上ならば、このような戦さをせぬと申したいのであろう。言うな!! 勝頼は武田のあるじじゃ。勝頼には勝頼の仕様がある!!」
若い勝頼は、父・信玄の偉大な足跡を、自分だけの力で、もみ消したかったのだ。
英雄の後をついだものの悲劇である。傍観すれば喜劇だったとも言えよう。
武田軍も猛然たる突撃を行ったが、結果は一万以上の死傷者を出し、馬場信春はじめ、原、山県、内藤、高坂など武田家がたのみとする老臣・宿将のほとんどが戦死という惨敗に終った。

連合軍の死傷は七千弱であった。

この戦さで、お津那の父・大場三郎右衛門と兄の市松も戦死した。義父の秋山又兵衛は生き残った。義弟の門介は、あのときの重傷のため甲府にとどまっていたので、お津那の婚家先の男たちは、みな無事だったわけである。

二年たった。

だが、甲府の城下へ、お津那は戻って来なかった。

天正五年夏の或る日のことであった。

三河国・岡崎の城下はずれにある極楽寺の境内にある欅の老樹の下で、お津那は、来るべきときが来るのを待っていた。

（今日こそは、夫兵蔵どのの霊魂をなぐさめることが出来よう）

お津那は、洗いざらしだが垢ひとつとどめぬ麻の筒袖の着ものを身につけ、白の脚絆・手甲・わらじばきの凛とした身仕度であった。

お津那は、二十一歳になっていた。

この三年間に、彼女が夫の敵谷七九郎の所在を探り出すため、どのような苦心をかさねたかは、くどくどとのべるにもおよぶまい。

七九郎は、その後も徳川方の密偵の任務をつづけていたと見え、東海地方一帯を探しまわるお津那の目にも耳にもとまらなかった。

七九郎が、波田右近という本名にもどり、徳川家康の息、三郎信康の居城がある岡崎城下

に住んでいることを知ったのは、つい先頃である。

お津那は干魚売りの女になって、岡崎城下を探るうちに、波田右近屋敷と親しくなり、

「何でもなあ、わしとこの旦なさまは、つい去年まで、あっちこっちと歩きまわり、敵方の様子を探りとる御役目をしていたそうじゃ」

下僕が何気なくもらしたこの言葉を聞いたとき、お津那は胸がおどった。間者をつとめた武士が平常の勤務にもどることは、ざらにある。波田右近が谷七九郎かどうかは、お津那もたしかめる仕方を考えてあった。

お津那は甲府にいたころ、谷七九郎の顔を見てはいなかったが、武田家中のものの言う人相体格と、波田邸の下僕から聞き出したそれとは、どうやら似ているようであったのだ。

二日おきに波田邸をおとずれ、干魚を安く売りつけたり、下僕に鼻ぐすりをきかせたりしているうちに、今日の昼すぎ、

「旦なさまは、今朝出たきり、まだ帰らないのだよ。極楽寺の和尚さまと、また飽きもせずに、碁石をならべてござらっしゃるのだろう」

こんなことを聞いた。すぐに、お津那は菅生川畔の小屋に引返し、身仕度をととのえて、極楽寺へ向った。

欅の木蔭に、どれほどうずくまっていたろうか……。

境内の木立に鳴きこめていた油蟬にかわって、蜩の声が、うすい夕闇を縫って流れてきた。

境内には人気もない。

極楽寺は、城の東方十七町のところにあり、甲山のふもとから三十余段の石段をのぼったところが境内になっていた。寺は甲山のうっそうたる樹林にかこまれている。

眼下には投栗の村がひろがり、田畑や森の彼方に菅生川が屈折しつつ流れていた。

その川の流れも夕闇にとけこみ、西方の矢作川を赤くそめていた夕陽も山蔭に没した。

（来た!!）

お津那は、背後の庫裡から、こちらへ近づく男の足音を聞いた。

傍のむしろに包んであった信国一尺八寸の脇差を、そっと引き出し、お津那は樹の蔭から進み出た。

「谷七九郎どのか!!」

その武士は足をとめ、お津那を凝視した。

「そなたは？」

ふとい声であった。どちらかと言えば痩せた体だが、その全身に鋼のような筋肉がみちているのを、お津那は感じた。

小袖も袴も立派なものをつけ、鼻下に髭をたくわえている。

「谷七九郎どのじゃな」

お津那は、もう一度、念を押した。

「そなたは？」

「武田の家来、秋山兵蔵の妻じゃ」

「おう……」
武士は、あきれたようにお津那をながめ、やがて微笑をうかべた。温かい、こだわりのない微笑なのである。
「七九郎。おぼえがあろう」
「いかにも、ある」
「覚悟!!」
お津那は脇差を抜き放った。
「浄院の中で血を流すおつもりか」
七九郎が、厳然と言った。
「あ……」
お津那は、急激な怯みにおそわれると共に、かっと頭へ血がのぼった。
心あるものならなすべきことではない。七九郎がたしなめたのは、もっともなことである。
「いかにも、私のあやまり。では、この寺の向うにある投栗の原へ……」
「どうあっても斬り合うおつもりか？」
「言うまでもないこと」
「この戦乱の世に死んだものの敵を、いちいち討っていては、世も人も、いっそうに血なまぐさいものとなるばかりではないかな」
「戦場で討ちとられたのならば、私も、このようなまねはせぬ。狗の手にかかった夫のうら

みは、どうあっても、はらさいではおかれぬ」
「戦場に闘うも、間者となって働くのも、同じ武士の道であろう。わしに負けたからといって恥ずるには及ばぬ」
「だまれ!!　おのれのごときに討たれる夫ではなかった……」
「そうかも知れぬ」と、谷七九郎はうなずき、
「命のやりとりするは一つの運じゃ。勝ちも負けも、そのときの命運ひとつにかかっておる。勝ったとて強いわけでもなく、負けたとて弱いわけではないのだ」
「ええ聞きとうない。早く、立合え」
「それほどまでに、兵蔵殿をいとおしむか」
「いかにも——なっとくの行くまで闘い合うて倒れたのならよい。私の夫は剛勇の士じゃ。それが、あのような張り合いもない死ざまをしたのでは、夫も、さぞ口惜しいと思われる。よって、妻の私が亡き夫にかわって立合いたいと申している」
七九郎の節度正しい態度に、ひきこまれ、お津那も正直に言った。
「わかった」
「立合うてくれるか」
「よろしい」
極楽寺の鐘が鳴りはじめると同時に、二人は石段を下り、山門前の道を横切って、松林にかこまれた小さな草原に踏みこんで行った。

草原の薄闇の中に向かい合い、二人は刀を抜いた。
（む……）
お津那は目がくらむ思いがした。
刀をかまえた谷七九郎が、巌のように見えた。
（死ぬのだ!!　一太刀でもあびせれば、それでよい）
とっさに決意し、その決意に思考がやどらぬうちに、
「えい!!」
お津那は草を蹴って躍り込んでいた。
刃先に手ごたえがあった。
その瞬間に彼女は乳房の下へ強い衝撃をうけ、
（これでよい……）
すーっと地の底へ引きこまれて行った。
しばらくして、お津那は意識をとりもどした。
暗い。草の匂いが闇の中にただよっている。
お津那は、微傷だに負っていなかった。
（七九郎は……たしかに、一太刀むくいたと思うたが……）
草原には、谷七九郎の姿はなかった。
（軽い傷だったのか……残念な……しかも——しかも、私は、七九郎に……）

当身をくらって倒れた自分が、何とも情けなかった。七九郎は抜いた刃を全く遣おうともしなかったらしい。

（口惜しい……）

お津那は、ぼろぼろと涙をながし（このままではおかぬ）と力んでみたが、気力もなえてしまい、自分が倒れているあたりに落ちていた信国の脇差を拾いとった。脇差は、草の上に青く光っていた。

（あ……？）

脇差を拾いとったとき、お津那は、もうひとつのものが、脇差の柄に添えられてあるのに気づいた。

それは、谷七九郎の左腕であった。

手首の少し上のところから斬り落されたものである。

（刀をつかわず、あの男は、私の刀を左腕で受けたものか……）

名伏しがたい動揺が、お津那に起った。

七九郎の腕を布につつみ、お津那は、よろよろと立ち上った。

二日後の朝になって、お津那が七九郎の屋敷へ行き、案内を乞うと、取次に出た家来が一度引込み、ややあって玄関へあらわれ、お津那を主人の寝間に通した。家来は、お津那が主人の腕を斬り落したものだと思ってもみないらしかった。

谷七九郎は、床についていた。

七九郎は家来を退らせてから「気がはれたかな」と、気力のこもった声で言った。

「これを返しにまいりました」

お津那は、この二日の間、酒に漬けておいた七九郎の腕の包みをおき、

「私の負けじゃ」と、つぶやいた。

「勝ちも負けもない。おぬしの気がはれれば、わしの気もはれる。おぬしの心に、まだしこりが残っていたならば、わしは、この残った右腕を差し上げてもよい。両足だけあれば、わしもまだ働けよう」

「……」

「互いに、死ぬは愚じゃ。死ぬならばものの役に立って死にたい。わが主の徳川家康公は、まこと戦国の世に生まれたものの仕え甲斐のある御方ゆえ、わしも今少し、御役に立ってからでなくては、死ぬ気にはなれぬ。わかってくれるかな」

「……」

「失うたものをかえり見ることは愚じゃ。われらに残されたものを生かして行きたい。どうかな」

見たところ四十がらみに見える谷七九郎は、このとき三十八歳であった。

この二日の間に、お津那は懸命に自分へ言いきかせ、今一度の立合いをのぞむつもりでいたのだが、駄目であった。七九郎の声を聞いているうちに、復讐への関心をまったく失ってしまっている自分に気づくばかりなのである。

「では……」
一礼して、お津那が立ったとき、七九郎が、
「これから、何処へ行かれる？」
「わかりませぬ」
「甲府へ戻られるのか？」
「戻りませぬ。戻られませぬ」
「では、ここにおられい」
ずっしりと、七九郎の声がつづいて、
「先ず、坐られい。そして、わしの頭を冷やしてある布を替えてもらいたい」
無言で、かすかにうなずき、お津那は七九郎の言う通りに動いた。

四

天正十年三月――。
武田勝頼は、織田・徳川の連合軍を甲斐に迎え撃ったが手も足も出ず、天目山に追いつめられ、自殺をした。
ここに、武田家は、ほろびつくしたのである。信玄時代の威望を思えば、誰がこの終熄を予測し得たろう。
秋山又兵衛と門介の父子は、奇跡的に生き残った。これは、勝頼の命をうけて、信濃の大

名・真田昌幸のもとへ使者に立っていたからである。

これより先、真田昌幸は甲斐を引き上げ、上州・岩櫃城にこもって、武田勝頼を迎える準備に忙殺されていた。

この連絡のための使者であったのだが、勝頼は、ついに最後の一戦をあきらめきれず、上州へ脱出する機会をうしなってしまった。

秋山父子は、武田家の滅亡を岩櫃城内にあって聞いた。こうなっては仕方がなく、秋山又兵衛は真田昌幸につかえることとなった。

この年の六月に、織田信長は明智光秀の謀叛にあって、京都本能寺に死んだ。

豊臣秀吉は、山崎の合戦に明智を破り、主・信長の仇をうつや、たちまちに擡頭して、天下をつかみかけていた信長にかわる位置をしめた。

真田昌幸も、秀吉の威風には屈しなければならず、それに秀吉は真田家に対して、前々から好意をもっていてくれている。

「家康と仲直りをしたらどうか――」

こう言ってくれる秀吉の意向を、真田家でも無視することは出来ず、

「三河の小狸と手をにぎるのは気味がわるいが、今のところ、まず仕方もあるまいわえ」

真田昌幸も苦笑しつつ、主家（武田）の仇とも言える徳川家康と和解をした。むろん表向きのことで、内心は昌幸も、

「そのうちに、小狸相手にひと戦さするときがきっと来よう」と、家来たちにも放言しては

ばからなかった。

しかし、徳川家康は、散り散りとなった武田の家臣たちを一手に引きうけ、厚遇をもってまねき寄せると共に、甲州一帯の鎮撫に成功をおさめたのである。

家康は、しきりに使者を真田家へよこし、贈りものを届けて来たりして、昌幸との友好をはかりはじめた。

信濃の虎とよばれた昌幸の猛勇を、家康は、たしかにおそれていたのだ。

「狸め、やりおるわえ」

真田昌幸は苦りきって言った。

ところで、何度目かの家康の書簡をたずさえ、岩櫃城へやって来た使者に、永沢才兵衛という男があった。

永沢は、もと武田家にいたもので今福昌常の同心衆であった男である。

「御当家に、秋山又兵衛殿がおらるる筈。お目にかかりたい」

使者の役目がすむと、永沢は、昌幸の近習に、こうたのんだ。

秋山又兵衛は、厭な顔をして、旧知の永沢に会った。（こともあろうに、家康に仕えるとは……）という軽侮があったからだ。

それにはかまわず、永沢が言った。

「お津那どのの行方を御存じか？」

「何と――」

八年の間、気にかかることは、これひとつであったと言ってよい。同席の秋山門介も息をのんで永沢を見守った。

「お津那どのは、ある男と夫婦になり、子をもうけて、暮しておられるぞ」

「そうか――それも、仕方あるまい……」

「その男は、徳川の士じゃ」

「ふうむ……」

「その男は、谷七九郎じゃ」

「何!!」

さすがに、秋山又兵衛の顔色が変った。

「きゃつらは、何処におるのじゃ？」

「七九郎は、二年前の高天神攻めに傷を負って致仕し、浜松の近くに、お津那どのと住んでおる。言わいでもと思うたが、わしも、亡き兵蔵殿とは昵懇の間柄であったゆえ……」

「わかった」

秋山又兵衛父子が、真田昌幸に暇を願い出た。その理由を聞き、

「怪しからぬ女め。よし、行けい。いまは、わしも家康と和解しておるゆえ、暇をつかわすが、折を見て帰参をさせよう。ともあれ、その姦夫姦婦の首をはねよ!!」

昌幸はこう言って、大枚の餞別をあたえ、腕利きの士を三名もつけてくれた。

「義姉が、そのような女とは思いもよらなんだことでござる。亡き兄が、あわれじゃ」

秋山門介の怒りは頂点に達していた。

忘れようとつとめていたことが、倍増の激情をともなって押しよせてきた感じである。

「うむ。わしも、兵蔵のことは忘れ果てんつもりであったが、こうなれば、目をつぶっておくわけには行かぬ。津那も津那じゃが、七九郎という奴、憎んでも足らぬ奴」

又兵衛にしても、お津那のことが、徳川家へ集まった武田の士の間に、ここまでひろまっているとなれば、捨てておくことは出来ない。

「秋山の家の名をけがした女め!!」

上州の地を発した一行は、馬を急がせて、一気に三河国へ向った。

梅雨がふりつづく天正十一年のことであった。

五

家康の居城がある浜松から西へ約三里のところにある舞阪の松原は、浜名湖を西に、遠州灘の海原を南にひかえた景勝の地である。

松林の中を北へのびている低い丘があり、丘の下に古びた観音堂があった。

堂からやや離れて、柴垣にかこまれた農家風の小さな家に、谷七九郎夫婦は住んでいた。

夫婦には五歳になる男の子がいる。

名を兵蔵という。

高天神攻めに、鉄砲傷を太股にうけた谷七九郎は、

「もはやこれまで、右腕一本のところへ足も利かなくなりましては、ろくな働きも出来ませぬ」と言い張り、家康に願って暇をもらったが、家康は、以後も捨扶持をあたえ「せがれが成長したあかつきには、余のもとへよこせ」と言ってくれている。

その日も、朝から、じとじとと降りこめていた雨が、夕暮れになると海鳴りの音を消すほどの強さになった。

夕餉の仕度をしていたお津那が、はっと顔をあげたのと、奥の一間で書見をしていた谷七九郎が、はたりと書物を閉じるのと同時であった。

子の兵蔵は、炉端で遊んでいた。

その傍へ、七九郎とお津那が、それぞれに入って来て、互いに眼を見合い、

「来たようじゃな」

「そのようにございますな」

「兵蔵はどうする」

「あなたが、おまもり下さいませ」

「ひとりにて大丈夫か？」

「何とか――」

お津那は、戸棚の中から、すぐさま信国の脇差をとって土間へ降りた。

七九郎は、きょとんとしている兵蔵を膝に抱きあげて坐り、

「坊よ。泣くのではないぞ」

しずかに言った。
土間の戸が外から叩かれたのは、このときであった。
「谷七九郎殿はおいでか？」
「いかにも――」
七九郎が落ちつきはらって答える。
だ、だあん……。
戸が叩き破られ、雨に濡れた五人の武士が飛び込んで来た。秋山又兵衛一行である。
「津那か――」
「又兵衛さまか――」
「ようも、われは、恥をぬったな」
「恥とは思いませぬ」
「何!!」
お津那は、毅然と胸を張り、
「女は、男との愛に生くる資格がございます!!」
秋山門介が抜刀して叫んだ。
「おのれ!!　のめのめと、よくも言うた」
お津那は、ちらりと門介を見、すぐに又兵衛へ視線を射つけて、
「戦乱の世であればこそ、なおさら女は男をいとおしみ、子を生まねばなりませぬ。あれな

る子は、われら夫婦のもうけたるものにて、兵蔵と申しまする」
「何。兵蔵……」
又兵衛の体が、くらりとゆれたようであった。
「おのれ、ぬけぬけと亡き兄の名を……」
門介が躍り出ようとするのを、又兵衛が押え、一歩二歩と進んで、約四間の向うにいる七九郎父子を、じっと見た。
谷七九郎の微笑が、又兵衛の激しい視線を、やわらかくうけとめ、
「それがしの本名、波田右近にござる」
声も、おだやかなものである。
又兵衛の視線は、お津那へ、そしてまた七九郎父子へ、あわただしく動いた。
「又兵衛さま。あの子が大きゅうなる頃には、日の本の国の戦乱も、うち絶えましょう。血なまぐさい世も人も消えはてましょう。そのように思えばこそ、津那は、このように生きておりまする」
真田からの付人三名が、いっせいに刃を抜きはらい、ひろい土間に展開した。
「えい!!」
おめいて、門介がお津那へ斬りつけた。
お津那は、その斬込みを左腕で払った。
血がしぶき、お津那の左腕は肘の下あたりから斬り落されて土間に飛んだ。

「む!!」
お津那は身を反らし、脇差の峯を返して門介を打った。
門介は、もんどりうち、そのまま失心したようである。
「又兵衛さま。これで、お気がはれませぬか」
じりじりと迫る付人たちを、今度は刃先を返して押えつつ、お津那が呼びかけた。
「待て!!」
うめくように、又兵衛が言った。
「おのおの、刀をひかれい」
「ならぬ」
付人の一人が怒りをこめ、
「真田の殿に何と言うて申しわけをするつもりじゃ」
別の一人が「外へ出ておいでなされ。老いぼれどのの手は借りぬわ」と、わめいた。
「む……」
又兵衛はうなずき「わしは去る」と、つぶやき、それからお津那と七九郎父子を見て、
「さらばじゃ」
身を返して、戸外へ駆け去った。
沛然たる雨音を引裂き、気合いと絶叫とが、乱れ飛んだ。
お津那は血のしたたる左腕をそのままに、燕のように立ちまわり、またたく間に、右手ひ

とつで三人の付人を斬り伏せてしまった。

「見事!!」

七九郎は叫んだ。兵蔵は眼をみはって母のはたらきを見つめてい、泣きも叫びもしない。

七九郎夫婦と兵蔵が、この家から姿を消したのは、それから間もなくのことである。

三人の付人は、いずれも重傷であったが死には至らなかった。

付人たちの唸り声がこもる土間の片隅で、息を吹き返した秋山門介は、呆然として、なすところを知らなかったという。

このことを伝え聞いた真田昌幸も、さすがに、

「希代の猛婦よな」と、あきれはてた。

秋山又兵衛は、その後、まったくその消息を絶った。

（「小説新潮」昭和三十七年九月号）

勘兵衛奉公記

一

戦国のころに「わたり奉公人」とよばれた武士たちがいる。

身分も家柄もなく、ただもう、おのれの槍先一つにすべてをかけ、時勢の流れ、戦局の推移にしたがい、なるべく家来にとって分のよい主人を見つけ、何とか立身の途を切りひらこうとした連中が、それだ。

渡辺伝七郎盛もその一人で、若いころから諸方をわたり歩き、血なまぐさい戦場を駆けめぐって総身の疵あとは十七カ所、左手の指三本を切りとられまでしたが、三十九歳で急死をした。

そのとき、伝七郎盛は、近江国・山本の城主、阿閉淡路守貞征の奉公人であったが、

「う、うう……腸がねじくれる、腸があばれる……」

もがき苦しみつつも、枕頭にあつめた男一人、女二人の子供を見やり、

「勘兵衛よ。妹どもを去らせい」

と、いった。

長男の勘兵衛了は十六歳であったが、十三と十になる妹二人を小さな家の外へ出し、ふたたび父のそばへ戻ると、いきなり脇差を引きぬいた。

「勘よ、何をするか――」

「父上の腹の皮を切りひろげ、腸のねじれをなおす」
「そ、その後はどうする？」
「針で腹の皮をぬう」
父親も、思わず笑って、
「もうよいわ。わしは死ぬるのじゃ」
「どうせ死ぬるなら、切って見たらよい。もしやすると、なおるやも知れぬ。のう父上――」
「まあ、よい。それよりも、きけい」
「は――」
「おぬし、若きうちに女房をもつな。この父がよい手本じゃ。わしは二十をこえたばかりで、おぬしたちの母の美しさにひかれ、家をもち、三人の子をもうけた。わたり奉公人の身にとって、家をもつはさまたげとなる。それが証拠に、わしは阿閉淡路守ごとき莫迦大名の下で、もはや六年もはたらいた。厭でも仕方がなかったのだ。去年死んだ母と、それにおぬしら三人の子を抱えては、思うさまの身うごきも出来なんだわ」
喘ぎつつ、息子の差し出した水を一口のみ、
「なれど……阿閉につかえおるうちは、骨惜しみするな。それが、のちのち、おぬしのためになることゆえ……よいか」
「はい」
「いざともなれば、妹たちは捨ておけい。女は何とでもなる。よいか、よいか――」

「承知――」
「女なぞ、どこにもおる。だが、女房を早くもつなよ。よいか、よいか――」
「心得た、父上――」
「さらばだ、勘兵衛」
「さらば、父上――」
というわけで、伝七郎盛は死んだのだが、この翌年――天正十年の春になると、阿閉淡路守は、織田信長の麾下として甲州へ出陣した。
この戦役は、織田・徳川の連合軍が、偉大なる戦国の英雄、武田信玄の遺子・勝頼をほろぼし、名だたる甲斐の軍団を徹底的に討伐したものである。
これによって、織田信長は、先ず「天下人」としての第一歩を踏み出したといってよい。
渡辺勘兵衛了は、十七歳で、この甲州攻めに加わり、敵の首十個をはねたという。
年齢が年齢だけに、
「わっぱ。ようはたらいた」
織田信長が本陣へ勘兵衛をまねき、短刀一ふりをあたえたので、ここに、渡辺勘兵衛の名は大いにひろまった。
「はたらきに骨惜しみするな」
遺言した父の言葉を「なるほど。このことだな――」と、勘兵衛はさとった。
十七歳の勘兵衛の眼に、絢爛たる武装に身をかためた織田信長の鷲のようなするどい双眸

の輝きと、雄大な高い鼻とが威圧的に飛びこんで来た。
すばらしい、と、勘兵衛は思った。
（おりゃ、何としてもこの御方に仕えたい）
火のような野望であった。
ところが、織田信長は、この年の夏に、西国の毛利軍の抵抗を一挙にもみつぶそうとして出陣し、途中、京都・本能寺の宿舎において謀殺された。
いうまでもなく、あの明智光秀の謀叛によってである。
これから、豊臣秀吉が出陣中の西国から引返し、山崎の合戦に明智光秀を殲滅することになるのだが、
「さて…どちらへついたらよいものか――」
勘兵衛の主人・阿閉貞征は、きょろきょろとあたりを見まわした上で、いわゆる〔三日天下〕の明智光秀へ賭けてしまった。この辺が勘兵衛の亡父のいう〔莫迦大名〕の所以であったのだろう。
光秀が敗北して死ぬや、明智方に与した阿閉一族は、秀吉の命により処刑された。
これより先、近江・山本の城につめていた渡辺勘兵衛は、夜ふけに城下の自宅へ忍んで来て、るいともんの妹二人に、
「城中では、殿様はじめ重臣方が首をあつめて今後の方策を考えているようだが、とてもたよりにはならぬ。おれはどこぞへ逃げ、もう一度やり直しをするつもりだ」

と、いいわたし、
「はなればなれになるが運命だ。わかっていような」
さっさと、どこかへ姿をくらましてしまった。
このとき、十四歳になる上の妹のるいが、しっかりともんの手をつかみ、三歳上の兄に向かい敢然といった。
「兄さま、わたしらのことは忘れてよい」

二

渡辺勘兵衛が、主家滅亡に先だち、これを見かぎったのはよいが、だからといって逃亡することもなかったのである。
主家は滅亡しても、こうした場合、家来たちは勝者の新しい戦力として迎え入れられるからだ。
いくら人手があっても足りぬ戦国の世であるから、まして〔わたり奉公人〕などの場合、新たな主人につかえて少しも恥ではない筈であった。
それを、あわてて逃げ出したのは、やはり十七歳という勘兵衛の年齢が、そうさせたものであろう。
「戦場へ出ても、槍のしごきようひとつ知らぬ莫迦殿のそばにくっついているのは、もうたまらぬ」

はたらき場所は、いくらでもある。おれの槍一すじで、というのが勘兵衛の血気でもあったのだろう。

それは、その通りなのだが、

「それからは、おれもひどい苦労をしたものでな、一時は、野伏もやった」

と、後年になって勘兵衛がのべている。

野伏は、土豪の下ではたらく武装の農民などが、戦争のどさくさまぎれに放火もすれば盗みもするという、まるで山賊のようなものだ。

そしてまた、勘兵衛は関東の北条氏にも、信州の真田氏にも「わたり奉公人」としてつかえたようである。

この間に、亡き織田信長の宿将であった羽柴秀吉が、賤ケ岳の戦役や、小牧長久手の戦闘を経て、ついに関白・豊臣秀吉となり天下人としての地歩をかためつつあったのだが、勘兵衛は中央でおこなわれた著名な戦役に槍をふるう機会をもたなかった。

そして、天正十七年の春に、久しぶりで京都へあらわれた勘兵衛を見出し、これを中村一氏へ推挙したのは、かつて没落前の阿閉家に仕えた奉公人で、いまは中村家の家臣としてかなり幅もきかせている九庄五郎という中年の武士であった。

「おぼえておる。甲州攻めの折には亡き信長公手ずから褒美をたまわった、あの渡辺勘兵衛か――」

と、中村一氏も大いによろこび、

「せっかく、はげみくれい」
近江・水口の居城において勘兵衛をみずから引見し、言葉をかけてくれた。
ときに、渡辺勘兵衛は二十四歳であったが、五、六歳に見える男の子をつれていた。
「そのわっぱは、何じゃ？」
ときく九庄五郎に、勘兵衛が苦笑し、
「それがしが子にござる」
「何……では、女房どのが……」
「女は、こやつを置いて逃げまいた。つまり押しつけられまいた。いやもう不覚のいたりでござった」
「ほほう。そりゃ、どこの女子じゃ？」
「何、名も知れぬ汗くさき女で……」
「ふうむ……それで？」
「それだけのこと。この上、おきき下されるな」
「さようか……」
「わが子とは……」
勘兵衛は我子の頭を小突き、
「親の足をとりまするな」
と、いった。

勘兵衛も鼻すじのきりりとしまった好男子なのだが、子の長兵衛も垢を洗い、しかるべき衣服をつけさせると、

「まあ、可愛ゆらしい」

先ず庄五郎の妻女が手をうち、

「勘兵衛どのさえよろしければ、我手に育てとうございます」

と、いい出した。

「願うてもないこと――」

勘兵衛もおどり上り、

「これ。もはや父はなきものと思え」

さばさばと、長兵衛にいいわたしたものだ。

以後は、九家の子四人と共に、長兵衛は育って行くことになる。

（これで、さっぱりした。もはや二度と、女には気をゆるさぬぞ）

後もふり返らず九家を出て行く勘兵衛の後姿を、五歳の長兵衛が啞のように押し黙ったまま、にらみ送っていた。

翌天正十八年の春から夏にかけて、小田原攻めがあった。

西国・九州も征服し、徳川家康を臣従させ東海地方もおさめつくした豊臣秀吉にとって、関東の北条氏だけが目ざわりで、

「上洛せよ」

いくら命じても、小田原城にある北条氏政・氏直の父子はいうことをきかない。きかぬばかりか、武蔵・相模・伊豆なぞの領民に軍役を課し、武器・弾薬の整備を急ぎ、秀吉の天下に抵抗する気配濃厚となった。

「では、やるかの」

秀吉は悠々と陣ぶれをおこなった。

秀吉に従う諸大名の軍勢は合せて四十万にもおよぶというのに、北条軍は八万そこそこで、これを迎えた。

この戦役は、三月から七月にわたる長期戦になり、秀吉は少しもあわてず、籠城の北条軍がうんざりするまで包囲を解かず、ついに陥落させてしまった。

北条軍は、小田原の本城の外まわり、すなわち箱根外輪山の出城をかため、東海道から攻めこんで来る豊臣の大軍を迎え撃ったものだが、中村一氏は、箱根山の西面にあって箱根路を扼す山中城攻略に、先ず武勲をたてた。

山中城は、東西三町、南北二町にわたる出城で、その南に岱崎の出丸があり、北条方は、松田康長・北条氏勝の四千余人をもって、これを守らしめた。

先鋒部隊の中村一氏・堀尾吉晴・山内一豊などの兵が攻めかけ、たちまち激戦となった。

二十五歳の渡辺勘兵衛は、手兵五十をあずけられていた。

「おれにつづけ!!」

中村一氏の馬印を部下に担がせ、

「それ、突きまくれ」
城壁にとりつくや、
「つづけ、つづけ」
勘兵衛の身につけている黒の鎧が、いつも先頭をきり、強引な突撃を飽くことなく繰り返して三の丸へ飛びこむや、
「えい、おう!!」
七尺余の鍵槍をふるって、勘兵衛は荒れまわった。
名のりもかけず、いちいち武勲の証拠のための首もとらず、ただ槍にまかせて突きまくり、本丸へ本丸へと突き進んだのも、勘兵衛はおのれのはたらきを見ていてくれよう主人の眼に期待をかけたからである。
三の丸から二の丸、そして本丸へと、勘兵衛の槍先が突破口をひらいた。
そして、ついに、中村一氏の馬印が真先に本丸の矢倉へ打ちたてられた。
「式部少輔が一番乗りじゃ」
豊臣秀吉が馬上に笑って、
「一氏め、あれでなかなか槍先のはたらきも隅におけぬわえ」
大満足であった。
箱根を突破し、湯本へ本陣をかまえた秀吉は、中村一氏をまねき、
「式部。ようやってくれた」

着ていた唐織の陣羽織をぬぎ、手ずから、これを一氏に着せかけた。
気に入りの中村一氏がすばらしいはたらきをしてくれたので、秀吉は、
「駿河十七万五千石をあたえよう」
破格の恩賞をあたえたものだ。
むろん、一氏はよろこんだ。
よろこんだのはいいが、山中城攻略の武勲を一人じめにしてしまった。
この武勲の大半は、渡辺勘兵衛が誇ってよいものだ。
だが、それは主人の功ということであってもよい。よいのだが、心ある主人ならば、
「これも、わが家来、渡辺勘兵衛のはたらき見事にて……」
の一言は、あってもよい。
それが、むしろ戦国大名の常識といってもよい。
ところが、中村一氏は、武勲のすべてを、おのれの采配一つによるものとして、
「ありがたき仕合せにござる」
いささかも、家来たちのはたらきにふれることがなかった。
中村一氏も、阿閉貞征ほど劣等ではないのだが、表彰は一人じめにする方が快適なのは、いつの世にも変りはない。
意気揚々と、中村一氏は陣所へ引きあげて来た。
ところが、このことはたちまちにひろがり、

「渡辺勘兵衛も、つまらぬ主をもったものじゃ」
諸将が、うわさをしはじめた。
こうなると、中村一氏もさすがに気がとがめたと見え、或夜ひそかに渡辺勘兵衛をよびよせ、人ばらいをした上で、
「山中でのはたらき、見事であった」
機嫌をとるような笑いをにたにたとうかべ、
「とらせる」
秀吉のまねをして、おのが陣羽織をぬぎ、立ちあがって来て、これを勘兵衛の肩へ着せかけようとした。
勘兵衛が、ふわりと身をかわし、一氏を見上げて痛烈な憫笑を投げた。
一氏も、どきりとしたようだが、
「とれ、とらぬか」
尚も陣羽織をあたえようとした。
「いただくこともござりませぬ」
「なぜじゃ？」
「なぜか……それは殿が御承知の筈――」
「な、何――」
「ごめん」

「あ……待て」
「何でございます？」
「では、その……この陣羽織の片袖なりと、うけてくれい」
あわてて、一氏が陣羽織を引きさいた。
渡辺勘兵衛は、鼻で笑った。
露骨きわまる侮蔑であった。
「む……」
中村一氏も青ざめたまま、陣羽織の片袖をつかみ、ややふるえる声で、
「では……わしの乗馬を、あたえよう」
といった。
これにはこたえず、
「ごめん」
一礼を残し、勘兵衛は幔幕の外へ去った。
このとき、勘兵衛は早くも中村一氏を見限ってしまったようである。
以後の長期にわたる滞陣にも、勘兵衛は、なまけ放題になまけ、北条軍が降伏するや、
「厄介なれども、長兵衛をおたのみいたす」
九庄五郎にいいのこし、平服に着かえて馬にまたがり、
「殿によろしゅう。おさらば、とな――」

どこへともなく駆け去ってしまった。

三

このことが、豊臣秀吉の耳へ入ると、

「へそまがりめ。おもしろいやつ――」

秀吉は、くすくすと笑いながら、

「二十にもならぬ小僧のうち、親兄妹にも死別れ生別れて、家もなく友もなく、野放しに駆けめぐっていたものときいたが……道理、道理。力のつよい男であればあるほど、おのれ一人の力をたのむが道理じゃ……わしも、勘兵衛よりはいくらかましであったろうが、それにしても生いたちは同じ野鼠。なれど、この秀吉はな、さいわいに腕力が弱く、そのかわり、ここの……」

ここの、と、わが頭を指して、

「ここの力をたのむことにしたのじゃ。それが、わしと勘兵衛の違いじゃわえ。よし、よし。今度、きゃつめを見つけなば、連れてまいれ。何とでもしてつかわそう」

と、侍臣たちにいった。

これをまた耳にはさんだ中村一氏が、わざと諸将のあつまった場所で、

「勘兵衛戻り来らば、わしは、こころよく迎えてくれよう」

寛容の微笑を無理にうかべ、家来たちに語ったという。

小田原戦役がすんだ翌天正十九年の夏の或日に、秀吉の寵臣・石田三成の家来で、堀忠右衛門というものが、京の町で、渡辺勘兵衛を見つけた。

勘兵衛は、四条河原の見世物小屋で、南蛮人がつかう犬の曲芸を見物していたのだ。

「まあ、ともかくおじゃれ」

不満顔の勘兵衛の腕をつかみ、石田屋敷へ連れこみ、三成に言上すると、

「ほう。左様か……よし、殿下に申しあげてみよう」

三成は、すぐに聚楽第へ伺候をし、秀吉へ告げた。

「よし。連れてまいれ」

すぐに秀吉は命じた。

小田原役以来、秀吉は関東から奥州の平定にいそがしく、それが終って京都へ落ちつく間もなく、フィリッピンや明国・朝鮮の使節との外交交渉がこじれ、いよいよ来年は朝鮮へ出兵をしようというので、その準備にかかったところであった。

「早う勘兵衛をよべ。それから……ふむ、そうじゃ。あれがよい。右衛門尉も共によべい」

かさねて、秀吉がいった。

増田右衛門尉長盛は、秀吉の幕下にあって、石田三成などと共に諸方の奉行を歴任し、中村一氏が駿河へ去った後、近江・水口の城主になっていた。

渡辺勘兵衛は、三成の家来の案内で、聚楽第へ入った。

秀吉が京都にいとなんだ聚楽第は宏壮華麗をきわめた大邸宅で、三年前に秀吉は後陽成天

皇の行幸を仰ぎ、諸大名をあつめ、朝廷尊崇の誓いをなさしめたものだ。
邸内の豪華絢爛に、さすがの勘兵衛も度胆をぬかれたが、
「おう、おう。きさま、見おぼえてあるぞ」
黒書院の縁へ気がるにあらわれた豊臣秀吉は、庭にひれ伏した勘兵衛へ、
「どうじゃ。わしが、そちの主を見つけてくれようから、その主へ奉公をはげめ」
「は……」
「厭か」
「めっそうもございませぬ」
うれしかった。
天下さまの秀吉の声がかりで主取りが出来るのである。
こんな名誉なことはない。
「勘兵衛。おもてをあげよ」
「はっ――」
おそるおそる顔をあげて見ると、秀吉のいる縁下の敷石に、壮年の立派な武将がひかえているのに、勘兵衛は、はじめて気がついた。
「勘兵衛。今日よりは、これがそちの主じゃ」
秀吉は、へらへら笑いながら、
「そのかわり、今後はわしがえらんでつかわした主ゆえ、勝手わがままはゆるさぬぞよ」

ずぶりと釘をさした。

秀吉が、どこかへ行ってしまうと、

「わしは増田右衛門尉だ。見知っておらなんだか？」

壮年の武将に声をかけられ、

「ははっ。小田原御陣の折、遠目には一度……」

勘兵衛は、かざり気のない増田長盛の態度に、先ず好感をもった。

そして、この勘兵衛の予感は適中したようである。

翌文禄元年の朝鮮出兵に、勘兵衛は、増田長盛にしたがって出陣をした。

秀吉の朝鮮出兵は、五年にわたり二度おこなわれたが、それはさておき、この五年間に、増田長盛は〔太閤検地〕にも事務的才腕をふるったし、伏見の築城にも活躍をし、秀吉の信頼を倍加させた。

すでに秀吉は、関白を甥の秀次にゆずり、太閤（太政大臣の敬称）の位についていたが、

「長盛は、ようもはたらいてくれた」

と、増田長盛の努力を賞し、大和・郡山二十万石をあたえ、労にむくいた。

「よう辛抱をしたな」

長盛は、勘兵衛に千石をあたえ、旗本にとりたててくれた。

この五年間に、勘兵衛は武功こそあらわさなかったけれども、失敗もなく悪口もいわれず、忠実に奉公をしつづけていたのである。

「そちには、子がおるそうな」
郡山の城へ移ってから、長盛が勘兵衛にきいた。
「いずこにおる？」
「旧主・中村式部少輔様家来、九庄五郎高定殿が、やしないくれおります」
「何歳になるか？」
「さて……？」
「我子の年齢もわきまえぬのか」
「おそれいりたてまつる」
「引きとってやれい」
「それは……」
「なぜ、いかぬ？」
「いまさらに……」
「それがいかぬ」
「は……？」
「そちは思い違いをしておるのじゃ。もはや、そちも、わたり奉公をする身ではない。増田が家の旗本ではないか。それともまた、そちは、このわしを捨てて、どこぞへ行くつもりか？」
「めっそうもないこと――」

「そち、何歳になったな？」
「三十歳になりましてござる」
「見よ。しわもふえたわ」
「まさかに――」
「そちがこれまで、わしにつかえてくれたのは、腰も落ちついたからであろう」
「居心地が、よろしゅうござって……」
「それでよい。もはや放浪の戦士に舞い戻ることもあるまい」
「は――」
「武人にはかぎらぬことだが……およそ人の世のあるかぎり、人は、男は家をかまえ、妻子をもうけて生くることにより、そのはたらきも至当のものとなるのじゃ。わかるか……わかったな？」
「わかり、かねまする」
「困ったやつ……」
増田長盛は苦笑をもらしたが、
「ともあれ、子を迎えよ。厳命である」
と、いった。
渡辺勘兵衛は、これにさからえなかった。
それほどに、勘兵衛は主人に手なずけられてしまっていたともいえよう。

豊臣秀吉へ忠実であるのと同時に、長盛は、わが家臣たちへも誠実であった。和気藹々たる家風が、長盛の人格によって、おのずとかもし出され、勘兵衛が古参の士を追いぬき加増をうけても、

「殿のあそばすことじゃ」

古参のものも、納得をしている。

秀吉の天下統一によって、国内に戦乱は絶えていた。

「わが槍先ひとつで――」

と勘兵衛が、このよい主人を捨てて反骨ぶりを見せる余地はどこにもない。

（殿の命じゃ。仕方があるまい）

勘兵衛は、駿河から長兵衛守を迎えた。

九庄五郎夫妻も手離しかねたようだが、実父のたのみとなれば断わるわけにも行かなかったし、そもそも勘兵衛があのような始末で中村家を飛び出しているものだから、長兵衛の将来についても、期待はかけられない。

「おぬしの行末を考えると、こりゃどうも、勘兵衛殿のもとへ帰った方がよさそうじゃ」

九庄五郎にさとされ、十一歳になった長兵衛が郡山へやって来た。

「大きくなったものだな」

六年ぶりに見る我子であるから、勘兵衛も目をみはった。

すると長兵衛は、まじまじと父親の顔をながめ、

「父上も、大人の顔になられました」
と、いい放ったものである。

四

やがて、勘兵衛は妻も迎えた。
これも主人の命によってである。
（おれも、ついに殿に飼い馴らされてしもうた……）
勘兵衛は不満顔であったが、男くさいわが屋敷に、若い妻を迎えて見ると、まんざらでもない気持になった。
妻の名を於寿免という。
同じ家中の金子閣蔵由望の三女で、十八歳であった。
金子閣蔵は、郡山の先の城主・豊臣秀保の家来で、秀保の死後、義理の伯父にあたる太閤秀吉のロききにより、増田家へつかえていたものだ。
金子は新参ながら高禄をはみ、諸大名へも顔がひろい。長盛も何かと便利にして愛寵しているし、だから家中での羽ぶりもよかった。
むすめを勘兵衛の嫁にするについては、
「不足じゃ」
金子閣蔵は、はじめ承知をしなかったようだが、

「まあよい。わしにまかせておけ」
主人の長盛に、そういわれては断わりもならない。
このことを勘兵衛がきいたら、
「願うてもないこと。こっちで断わる」
断然、結婚を承知しなかったろうが、長盛が老巧に事をはこんだので、すべてうまく行った。
於寿免は、とりたてていうほどの美女でもないし、平凡な新妻にすぎなかったが、
（ふむ……悪うはないな）
さすがに若やいだ女の肢体をそなえていたし、生れてはじめて、落ちついた新婚生活にひたった勘兵衛だけに、
（これで、おれも増田の家来で骨をうめることになったのだな……）
新妻の肉体が発散する果実のような芳香に夜な夜なおぼれこみつつも、何か物足らない気がしたことは、たしかである。
慶長三年八月――。
豊臣秀吉が伏見城に病歿をした。
再度にわたる朝鮮出兵は、莫大な戦費を消耗したまま、その始末もついていなかったが、
「……もはや、気にかかるのは秀頼の行末のみじゃ」
六十に近くなってからもうけた只ひとりの男子・秀頼の将来を案じつつ、秀吉は、見栄も

外聞もなく、

「秀頼をたのむ、たのむ……」

徳川家康・前田利家などの五大老へ、涙と共に遺言をしている。

独裁政治家であり、武力によって天下をとった秀吉の死は、当然、次の権力者の擡頭をうながすわけだし、秀吉はまた、誰よりも、このことをわきまえていたろう。

果して、秀吉の死後、二つに割れた勢力が天下を争って激突をした。

関ヶ原合戦である。

この戦いは、実力派の徳川家康が勝利をしめたのだが〔天下分目〕という枕言葉がしめすように、

「どちらが勝つか？」

諸大名たちは気が気ではなかった。

勝負がつかぬうちに勝つ方へ味方をしなくてはならないのだから、骨も折れる。

後年になってからは、いろいろと考察も出来ようが、これほどの大勝負になると、当事者たちは義理と打算に巻きこまれ、なかなか混迷を脱し得ないものなのだ。

まだ十歳にもならぬ豊臣秀頼を天下の象徴とし、石田三成を中心にあつまった西軍は大小名合せて四十余家、十二万余の兵力を動員したといわれる。

これに対し、徳川家康の東軍は七万とも八万ともいうが、実際にはわからない。

西軍から東軍へ寝返った大名もいるし、戦いは関ヶ原のみにとどまったのではないから

だ。

増田長盛は西軍に加わり、大坂留守居として四千余名をひきい大坂城を守ったので、関ヶ原には出ていない。

長盛も、いろいろと悩んだらしい。

故秀吉からうけた恩顧を考えると、彼が西軍へ入ったのも当然と見えようが、それならば、加藤清正や福島正則（まさのり）など秀吉子飼いの大名たちが西軍に冷たかったのは、なぜか……。

ここに石田三成と徳川家康の器量の相違が出てくるわけだが、長盛にしても、はじめは西軍が勝つと思い、そしてまた決定的な瞬間が近づくにつれ、

（三成では危ない……）

迷いもしたらしい。

〔善通寺文書〕や〔卜斎覚書（ぼくさいおぼえがき）〕などには、増田長盛が、ひそかに家康へ通じようとした気配も記されている。

渡辺勘兵衛は、このような主人の枢機（すうき）に無関係であった。

「勘兵衛、城をたのむ」

大坂へ向かう長盛にいわれて、

「お心おきなく――」

しっかりと、うけ合った。

かつての〔わたり奉公人〕としての彼の心魂は、増田家の臣として定着してしまっていた

ようだ。

勘兵衛は、三十五歳になっていたし、子の長兵衛も十六歳になっている。

郡山城の留守居は約三千ほどで、勘兵衛は主人の子・増田盛次をまもり、城の防備を、遺憾なくととのえた。

少年のころから何度も城攻めをしている勘兵衛だけに、

「郡山は大和の要衝でござれば、戦局のいかんによって、東軍の攻撃あるは必定」

あざやかに指揮をとり、籠城のそなえをかためてしまった。

「勘兵衛、見事じゃ」

十八歳になる若殿の盛次が、勘兵衛の水際だった指揮ぶりを見て、ほめてくれた。

「父上にかわり、ほめとらす」

「かたじけのうござる」

勘兵衛は、くすぐったいようでもあり、うれしくもあった。

この若殿は、前々から勘兵衛に槍をならっていた。

「それがしの槍は戦場にておぼえたるもの。役にたつことのみをおつたえいたす」

と、勘兵衛が馬と槍を組み合せた独自の鍛練を強要しても、

「烈しいな」

こぼしながらも、盛次は耐え、体の生疵が絶えないほどであった。

見かねて、老臣たちが増田長盛へ言上をしたことがある。

しかし長盛は取り合わなかった。
さて――。
関ヶ原合戦は、慶長五年九月十五日に決着がついた。
同月二十五日には、徳川家康が大坂へ入り、謹慎中の増田長盛は捕えられ、高野山へ押しこめられてしまった。
同時に、家康は、藤堂高虎・本多正純に命じ、郡山城を接収せしめんとした。
藤堂・本多の軍勢二万が、郡山城下を遠巻きにし、
「城をわたすように――」
何度も勧告をしたが、勘兵衛は、これに全く応じない。
藤堂高虎は、
「増田長盛は高野において刑死をした。ゆえに籠城の事は無駄であろう。いさぎよく城をわたし、徳川家につかえよ」
何度も使者を送ったが、
「よくやる手だわい」
勘兵衛は、びくともせず、
「主人からのいいつけなきうちは、城をわたせませぬ」
と、使者が来るたびに、はねつけた。
こうなると、郡山の城下は騒然となった。

城下を取締るべき増田家の武士は、家族と共に城へこもってしまい、いえば無警察の状態となったから、盗賊どもが入りこんで来て、城下の町家を荒らしまわった。

これを知るや、

「盗賊どもを残らず討ってとれ」

勘兵衛は手勢三百余をひきいて城門から打って出た。

城下を包囲していた藤堂軍が、

「今こそ勘兵衛を――」

ひしめいたが、藤堂高虎は、

「待て。この郡山は、つい五年前まで、われらが主につかえて住み暮していたところじゃ。勘兵衛のはたらきに、わしは手を合せておるところではないか」

叱りつけた。

増田長盛が入る前の郡山の城主が、豊臣秀保だったことはすでにのべておいたが、高虎は、渡辺勘兵衛の妻の父・金子閣蔵と同じに、秀保の家臣であった。

同じ家臣でも、高虎は、秀保の筆頭老職として三万石の大禄を食んでいたのである。

いまの高虎は、秀保の死後、ふたたび秀吉に召出され、八万五千石の大名となり、関ヶ原では、いささかもためらうことなく東軍に味方をしたものだ。

「勘兵衛の駆引き、見事である」

と、高虎は、勘兵衛の盗賊退治を望見して、ひざをたたいた。

一刻もたたぬうち、城下の盗賊どもは残らず討ちとられてしまった。
ともかく、郡山の守将としての渡辺勘兵衛は、まことに見事な進退をしめした。
城中の蔵にある金銭を分け合って逃げてしまおうといい出す家来も多勢いたが、勘兵衛の威圧の前には手も足も出なかった。
「血を流すな」
という家康の厳命でもあるし、仕方なく、藤堂高虎は、高野山の増田長盛に手紙を書かせ、これを勘兵衛にとどけると、
「うけたまわった」
これも、いさぎよかった。
勘兵衛は一夜のうちに城兵をまとめ、外廓の柳町に面した城門から、あくまでもしずやかに退去し、奈良の大安寺へ引きあげて行ったのである。
「あれほどの男とは思わなんだ。あの男なら、よいわえ」
と、藤堂高虎が何故かよろこばしげにいった。
高野に押しこめられた増田長盛も、このことをつたえきいて、
「ようも下知したり。これでわしも恥をさらさずにすんだ」
落涙したそうだ。
郡山を退去した増田の将兵は、奈良・大安寺で解散をした。
そのとき、金子閣蔵が娘聟の渡辺勘兵衛に向い、

「どうじゃな。わしと共に行かぬか？」
と、いった。
「どこへ？」
「わしは顔がひろい。共に主を見つけぬか」
「おことわりいたす」
「なぜに？」
「勘兵衛は幼少のころより、おのが槍先ひとつをもって主人をえらび、はたらいてまいった。これからも、そのつもりでござる」
「また、わたり奉公に逆戻りか？」
「いかにも――」
「これからは、あまり戦さもあるまい。なかなかにうまい口もあるまいぞよ」
「お気づかいなく――」
「そうか。では勝手にせよ」
金子閣蔵は十名ほどの家来をつれ、さっさと、どこかへ消えてしまった。
「どこへ行くつもりなのかな？」
勘兵衛が妻にきくと、
「父の落ちつくところは、どこにでもござりまする」
於寿免は、にやりと笑って答えた。

それは、何となく謎めいた笑いであった。

五

牢人となった渡辺勘兵衛は妻子と共に京都へ住んだ。

東山の山腹、八坂の塔の裏側の竹林の中に一庵をかまえ〔睡庵〕と号した。

「おりゃ、しばらく眠っておるぞ」

と、いうわけであった。

暮しには困らない。

金が無くなると、

「ちょいと行って参じまする」

於寿免が、長兵衛をつれて、どこかへ出かけて行き、金を算段して来る。

これは、父親の金子閣蔵のもとへ無心に出かけるのだ。

金子は、もう藤堂高虎の家来におさまっていた。もともと同じ主君につかえた間柄であるし、あやしむことはない。

藤堂高虎は、関ヶ原役後に、伊予・今治の城主となっていたが、伏見に控屋敷があって、ここに金子閣蔵はつめている。

だから、京に住むむすめの於寿免が父をたずねることは容易であった。

勘兵衛は、妻のはこぶ餌を食べて暮しつづけた。

男と女の子が、年子で二人出来た。

このころになると、しなやかな於寿免の肢体へ、みっしりと肉がみちてきて、

（悪うはないわい）

勘兵衛が豊艶な妻にかしずかれ、子にたわむれているうち、夢のように月日が流れて行った。

だからといって、勘兵衛は槍先の奉公を忘れていたわけではない。

金子閣蔵も、うるさく、

「わしが世話する」

といって来るのだが、どの口も勘兵衛の気に入らない。

（何とか、秀頼公におつかえしたい）

と、勘兵衛は熱望しているのだが、駄目であった。

豊臣秀吉、増田長盛の二人によって、勘兵衛の〔わたり奉公〕は終止符がうたれた。

この二人をしたう勘兵衛の心は、そのまま秀吉の遺子・秀頼へむすびついている。

だが、征夷大将軍となって名実ともに〔天下人〕となったと見てよい徳川家康は、大坂城にいる秀頼の戦力をふくらませるようなことをさせるものではなかった。

だから、岳父がもってくる口は、みな家康麾下の大名ばかりであったし、勘兵衛みずから伝手をたぐって豊臣方へロをかけてみても、よい返事を得ることが出来ない。

これが身分のひくいものならともかく、いまの勘兵衛の名は世にひろまっている。

だから、なおさら思うように行かないのである。
（ええ、もう勝手にせい）
水のように流れる歳月の中で、勘兵衛は妻にやしなわれ、わが子にかこまれ、半ば自棄気味になっていた。
慶長十三年になると、藤堂高虎が伊賀全国、及び伊勢・安濃津において二十万石に封ぜられ、伊予から戻って来た。
高虎は、先ず伊賀上野城へ入ったが、のちに安濃津の城を居城とさだめた。
すると、
「安濃津へまいりましょう」
於寿免が、勘兵衛にいった。
「もう、そろそろ御奉公なさってもよかろうと思います」
「どこへ奉公するのだ？」
「藤堂家へおつかえなされ」
「ばかな――」
「いやとは申せますまい」
「え……？」
胸を張って悠然と、押しつけるようにいい出した妻の顔を、あきれたように勘兵衛はながめた。

こんな妻を見るのは、はじめてであった。

於寿免は、きっぱりと、

「この八年の間、あなたさまは女房にやしなわれてきたのでござりまするぞ。なれば、女房の申すことをききわけるが道理――」

「こやつ――」

怒鳴りつけようとすると、長兵衛までが、

「母上にしたがわれたが、よろしゅうござる」

と、於寿免へ味方をするのだ。

もう、仕方がなかった。

「女房にやしなわれた」の一言で、勘兵衛は毒気をぬかれたのだが、

「行くことは行くがな……なれど一万石なればつかえてもよい。いささか欠けても承知はせぬ」

と、難題をふっかけた。

新入社員が月給二十万円ほどよこせ、というのと同じわけだし、いざとなれば妻子を捨てても、この意地はたて通そうと決意したとき、久しぶりに勘兵衛の血はおどった。

しかし、於寿免は平然たるもので、

「よろしゅうございます。父上に申しあげ、一万石いただきましょう」

と、いう。

「こりゃ、おい。おれは金子殿の家来になるのではないぞ」
「はい」
「はい……？」
「わたくしの父・藤堂和泉守さまに申しあげようというのでござりまする」
「何と――」
勘兵衛は愕然とした。
於寿免の顔にもからだにも、女ざかりの重味が、むしろふてぶてしくみなぎっていた。
藤堂高虎が下婢に生ませた於寿免を、金子閣蔵へあずけておいたのだときかされても、
（大名の家には、よくあることだが……まさか……）
勘兵衛は半信半疑であった。
「よし、行ってつかわす。ただし、一万石だぞ」
「心得ました」
まさか――と思いながら、勘兵衛が妻子と共に安濃津へ出かけて見ると、
「二万石とらせる」
勘兵衛に目通りをゆるした藤堂高虎が、いきなりいった。

慶長十九年十月から翌元和元年の五月にかけて、あの大坂戦争がおこなわれた。
大坂城にこもる豊臣秀頼を中心とする豊臣の残存勢力を一掃すべく、徳川家康は七十余歳

の老軀を燃やし、大坂城を取りかこんだ。

ここに豊臣家は滅亡する。

藤堂高虎は、もちろん徳川軍の主力として出陣をした。

渡辺勘兵衛は、五十歳になっていた。

（大坂の城へ入って闘ったら……）

愉快だろうな、と思いはしても、今や勘兵衛は二万石の重臣として藤堂家に根をおろし、息子の長兵衛も三千石を食み、妻も迎え、二人の子（勘兵衛の孫だ）をもうけた。

於寿免は三十七歳。体軀のみか風貌も堂々たるもので、家にあっては勘兵衛も頭が上らない。

旧主・増田長盛は、いま武蔵の高力家に押しこめられているが、子の盛次は成人して、一応は尾張家につかえていたのを敢然として脱出し、大坂城へ入ったときき、

（おれもなあ……）

血はおどっても、おどる血が勘兵衛の行動に作用することはなかった。

何しろ自分の家来だけでも千人からいるのである。

勘兵衛自身が、千人もの奉公人を抱えているのである。

「男は家をかまえ、妻子をもうけて生くることにより、そのはたらきも至当のものとなる」

かつてこう言った旧主の言葉を、このとき勘兵衛は思いおこしたかどうか……。

元和元年五月六日――。

藤堂軍の先鋒として、勘兵衛は八尾・道明寺方面へ進撃をした。
この日、大坂から出撃した豊臣軍は、木村重成・長曾我部盛親などで、目もくらむような激戦となった。
この戦闘に、皮肉にも渡辺勘兵衛は増田盛次の部隊と遭遇したものである。
そして、盛次は戦死をとげた。
別に勘兵衛が槍をつけたわけではないが、乱戦の中で一息入れているとき、この知らせをうけたとき、
「そうか……」
さすがに、勘兵衛も茫然となった。
そこへ、藤堂高虎からの使番が、引きあげを命じてきた。
「いま、ここを退けるものか!!」
勘兵衛は首をふらなかった。
使番は何度も来た。
そのたびに、勘兵衛は、これをはねつけた。
勘兵衛の胸の中で、容貌魁偉という形容そのもののような藤堂高虎の顔が、いつの間にか妻の於寿免のそれと重なって見えた。
勘兵衛は意固地に、主人の命をこばみつづけた。
戦後、さすがに高虎は激怒し、

「そちは勝っていたろうが、別の方では藤堂勢も危うかったのじゃ。これを助けよと命じ、そのために引きあげくれよとたのみしに、なぜきかぬ」

叱りつけたが、勘兵衛はあやまるどころか、口もひらかない。

高虎も耐えかねて、勘兵衛を放逐してしまった。

「のぞむところ――」

勘兵衛は、あるかぎりの金品を家来たちにあたえ、身一つになって伊賀・上野の城下を立ち去った。

今度は、於寿免もとめなかった。

長兵衛守は、むろん藤堂家に残ったし、彼女が生んだ二人の実子も、すくすくと成長しつつあった。

「五十になってもまだ、わたり奉公の気がおぬけなさらぬ」

と、於寿免がいえば、長兵衛も、

「育ちは争えませぬな」

平気であった。

この後、渡辺勘兵衛は京都へ行き、荒れ果てていたあの庵に戻り、またも〔睡庵〕と名乗った。そして二度と世には出なかった。

寛永四年の夏に、勘兵衛は六十二歳の生涯を終えた。

臨終には、近くの寺の僧が二人来て、いろいろと世話をしてくれたが、息の絶える直前、

勘兵衛は庵をかこむ木立に鳴きこめる蟬の声に、うっとりときき入りつつ、
「るい……もん……もんよ……るいよ……」
かすかに、女の名をよんだ。
これをきいた二人の僧は、
「睡庵どのも、この年をして別れがたい女子が二人もおったのじゃな」
と、ささやき合った。

（「小説新潮」昭和三十九年四月号）

霧の女

一

尾張・清洲の城主・福島正則は、その朝も、たまりかねたように城を飛び出した。

供も従えぬ只一騎である。

「えい、おう……」

鞭をふるい、馬腹を蹴り、正則は雄叫びをあげて清洲城下を疾駆しつつ、

「ええい、歯がゆいことじゃ……おのれ、まだるげな――」

と、誰にとも知れぬ相手に声をあびせかける。

春も闌けたあかつきの、人気もない薄明の中を、正則は馬上におめきつづけながら、城下を駈け抜けて行った。

慶長五年の今年で四十歳になる福島左衛門太夫正則だが、少年のころから戦塵を浴び、槍一筋にすべてをかけて生きぬいて来ただけに、体軀は強壮をきわめている。

背も低いし、鼻下にたくわえた物々しげな髭も何となく似合いかねるといったような童顔でもあるし、ふと見たところ、これが加藤清正と並んで太閤秀吉麾下にその猛勇をうたわれた荒大名とは思えぬ風貌であった。

だが、正則の裸体を見れば成程とうなずけよう。

厚くもりあがった逞しい正則の全身の皮膚は無数の切疵に刻まれている。

その切疵の痕が、
「とてもとても、この男の肉体の強さには太刀打ちが出来ぬ」
と、つぶやいているように見えた。
正則は、馬上に暁闇の空を仰ぎながら胸のうちで叫びつづけた。
（殿下、何故に死なれた!!）
殿下とは、一昨年秋に病歿をした豊臣秀吉のことである。
土民から成り上り、ついに天下人となった秀吉は、正則の従兄でもあった。正則の母が秀吉の伯母であるからだ。
秀吉が天下をつかむまでに通って来た道は、その戦歴は、すべて正則のものでもあった。
秀吉は、織田信長の家来で木下藤吉郎と名乗っていたころから、二十五も下の従弟に向い、口ぐせのように、
「市松よ、おりゃな、お前の槍先一つをたのみに思うておるのだぞよ」
と、いった。
こんなときの秀吉は、信長から〔はげ鼠〕と銘をうたれた顔が愛嬌にみちあふれるばかりになり、声には、こちらの魂が吹き飛ぶほどの愛情がこめられていたものだ。
天下をとり、日本の国を我物としてから、今度は朝鮮に目をつけ、いよいよ出兵ともなれば、
「市松よ。朝鮮国をな、おぬしの槍先へ団子のように突き刺して来い」

と、いった。

同じようなことを、秀吉は加藤清正にもいったし、他の大名や武将にもいったが、福島正則は特別に自分へのみにかけられた声だと思っている。

秀吉が死んだので、朝鮮出兵は中止となった。

足かけ七年にわたる出兵であったが、秀吉の強引な大陸制覇の夢は、莫大な犠牲の上に消え果てた。

六十三歳で死んだ秀吉の遺子・秀頼は、わずかに六歳であった。

朝鮮から帰った出征将士は、ただちに、新たなる天下統一を目ざす勢力の擡頭に巻き込まれずにはいられなくなった。

勢力は二つに割れた。

一は、長老・徳川家康の威望の下に結集し、一は、故秀吉の寵臣・石田三成が醸成しつつある勢力である。

「ええい、歯がゆい――おのれ、まだるげな」

という福島正則の叫びは、ここに向けられている。

戦場に出て行き、槍をふるって敵を突き殪すというのなら、正則にとってわけもないことなのだ。

それが槍や刀では解決がつかなくなった。

正則の目ざすところは、何よりも豊臣家の安泰にある。

父のように慕い、兄のように甘え、しかも限りない畏敬を捧げつくした秀吉の子・秀頼が成長して天下をおさめるまでの見通しが、

（ええい、歯がゆい）

なのである。

今までのように、秀吉の下にいて、安心のままに戦場を駈けまわっているだけでは事がすまなくなってきている。

正則自身が、二つの勢力のどちらかに立ち、豊臣家の存続をはからなければならぬ立場にあった。

しかも、天下の情勢は複雑微妙をきわめている。

軍人であると同時に、政治家の神経が要求されているのであった。

これは、もっとも正則が不得手とするものであり、素朴な感情とすぐれた武勇のみに安住してはいられなくなったということなのである。

それでいて朝鮮から帰って来てからの正則は、戦場へ向けられる筈の精力をもてあましていた。他の武将たちは、これを女色に発散する。謹直に見える加藤清正なぞも、あれで大変な好きものだし、遊女あがりの側妾もいるという。

正則も朝鮮にいたころは、昼は血なまぐさい戦場を駈けまわり、夜は心ゆくまで土民の女なぞを抱いたものだ。

なぜなら、奥方は朝鮮までついて来なかったからである。

福島正則夫人は〔於まさの方〕といい〔梅の丸どの〕ともよばれていて、彼女は織田信長の家来・津田長義の女だ。

美貌であった。

正則が秀吉に泣きついて頼んでもらい、ようやく手に入れた美女なのである。

妻にしたときから、頭が上らなかった。学問もある上に武術に達していて、正則も前に妻が薙刀をつかうのを見せてもらったとき、

（これは……）

その見事さに、一瞬顔色が変ったほどであった。

二人の間には男子一人の早世をのぞき、女三人、男一人が生まれている。

そしていま、於まさの方は懐妊中であった。

久しぶりに夫を迎えた彼女としては、当然のことであろう。

ふくらんだ腹を抱えつつ、於まさの方は正則にいった。

「ゆるしませんぞえ」

「何がじゃ？」

「この腹の子が無事に生まれるまで……」

他の女に手をふれることをゆるさぬ、と妻が夫に念を入れたのである。

この一言には金鉄の重味があった。

ゆるさぬ、といったら断じてゆるさぬのである。於まさの方は城中の老女や侍女たちの無

数の眼を正則に向けさせ、その行動を監視させているのだ。

「ええい、歯がゆい!!」

の叫びは、ここへも向けられている。

夜明けの一刻を野駈けに出て、福島正則は狂人のようにわめき、汗を流し、鬱積した精力をわずかに発散させ、城へ駈け戻って来ると、

「奥は、まだ目ざめてはおらぬな?」

怒ったように侍臣へ問うのである。

しかし、この日の朝は、思いもかけぬ幸運が、正則を待ちかまえていた。

二

清洲城下の西方一里のところに二寺という村落があり、福島正則は、ここに生まれた。そのころの清洲の城主は織田信長であり、正則の出生した前年には、この城から打って出て、今川義元の大軍を桶狭間に破り、信長は天下統一への第一歩を踏み出した。

いま正則は、故郷の領主となり、名誉ある清洲二十四万石の大名となった。

それだけに、二寺のあたりは何度見ても、なつかしい。野駈けのコースとしては先ず二寺を通らねば気がすまない。

森の中を、野を、畑の道を、正則は疾駆した。

村外れに江川という小さな川がある。

正則は、ここで速度をゆるめ、川辺りまで来て、

（や……？）

手綱を引きしぼって馬足を止め、息をのんだ。

向うの木立の中から、一人の女を担ぎあげた二人の男があらわれたからである。

女は手足を縛られ、猿轡をかまされ、男たちは黒布で顔を包んだ怪しげな風体をしている。只事ではなかった。

馬から飛びおり、正則は草に身を伏せるようにしてしばらく進み、機を見て猛然と、川をわたりかけている曲者たちへ走り寄った。

「何者じゃ!!」

戦塵にきたえぬかれたすばらしい一喝である。

斬り捨てるつもりで太刀を引抜いたのだが、曲者たちのうごきは瞠目すべき敏速さで、たちまちに女を川へ投げこむと、股のあたりまで沈む川の中を二筋の矢のように対岸へ走り逃げた。

（むう……）

正則は思わず、嘆声を発した。

速い。あまりにも速いのである。野兎のような速さだ。あっという間に、曲者たちは正則の視界から消えてしまった。

正則は、川の中にほとんど全身を沈めている女に気づき、あわてて岸辺の草の上へ引きあ

げた。
縄を解き、猿轡を外してやり、女の顔を見て、正則の双眸が光をおびた。
まさに、若女房である。
失神して、正則の腕に頭をもたせ、わずかにひらいている唇から白い歯がまぶしいほどに見えた。あさぐろい肌のあぶらが水を弾き返している。
川水にぬれた体に密着した寝衣が、女の胸や腰のふくらみを遺憾なく見せていた。
いかにも肥やかなふくらみであり、化粧もない健康な女体が正則の両腕に余るほどのゆたかさであった。
あたりを見まわした福島正則の喉が音をたてて生唾を呑みこんだ。
正則は女を抱きあげ、木立の中へ入って行った。
（おい、ゆるせよ……）
女の胸もとを引きひろげ、ふっくりとした乳房に頬を押しつけたとき、
「ま……殿さま……」
女の、ためいきのような声がした。
「わしを知っておったか……」
「あい……」
物怖じもしない大きな眸なのである。
「ゆるせ」

正則は、もう騎虎の勢いであった。
正則の荒々しい愛撫が止んだとき、女は恍惚と目を閉じていた。
「いずこのものじゃ。後で、つかわしものをするぞ」
女から離れ、正則が身づくろいをしながらいうと、女は仰向けになったまま、
「それよりも……」
「のぞみのものがあるか？」
「あい……」
「申せ。遠慮すな」
「殿さまが、ほしい」
「何……？」
「これからも抱いて下されませい」
「そち、女房であろうが――」
「後家にござりまする」
「ほう……」
「御城下に住む足袋師・才兵衛のむすめでござりまする」
「清洲へは、いつまいった？」
「二た月ほど前に……」
「よし、わかった」

「金銀は、ほしゅうありませぬ。殿さまがほしい」
町の女の領主に対する言葉ではない。放恣でいて色めいた様子の中に童女のような無邪気さがあった。
福島正則は何度も目をしばたたき、せかせかと髭をしごいてから、
「わしが気に入ったのか？」
「あい……」
「わしも、そちが気に入ったぞ」
「うれしゅうございます」
「なれど……城中へ連れまいるわけには行かぬ」
「奥方さまが、おそろしいのでございますな」
「何と申す」
正則は奮然と立ちあがり、
「わしを誰じゃと思う。奥なぞがおそろしゅうて戦陣がつとまろうか」
林の中を出て行きながら、正則は怒鳴った。
「明日の朝も、ここで待てい」
次の朝も、その次の朝も、二人は江川の林の中で忍び会った。
朝露にぬれた草の上で抱く女の体からは瓜の果汁のようなうす汗が匂い、
「愛いやつ、愛いやつ……」

正則を狂喜させた。

四度目の出合いのとき、

「明日の朝も……」

と、正則がいいかけるや、

「いやでござります。お城の中へ入れて下されぬのなら、もうまいりませぬ」

「左様に申すな」

「奥さまが……」

「おそろしゅうないわ」

「では、お入れ下されませい。下されぬなら、殿さまとのことを、すべて御城下へひろめまする」

「ば、ば、ばかを申すな」

仕方がなかった。

城へ戻り、正則は嗣子の正之を呼び寄せた。正之は実子でない。長子の正友が十七歳で病歿して以来、於まさの方は女子ばかりを生んだので、五年前に、別所主水重宗の七男を養子にしたものである。ちなみにいうと正之の実母は正則の妹にあたる。つまり甥を嗣子に迎えたわけだ。

ところが於まさの方は、二年前に久しぶりで男子を生んだ。これが正勝である。

（こりゃ困った……）

気のつよい妻だけに、当然、正勝を後つぎに、と騒ぎたてるであろうと正則も心配をしたが、いまのところ、その心配はない。

三十五歳になる於まさの方は、ただもう夫・正則の実際的な愛を我身一つに集めようとすることに熱中している。

女ながら、武術に鍛えられた妻の肉体は、きりりと引きしまっており、乳房も小さいし腰まわりもかたい。それでいて欲情は激しく、

「察してくれよ」

と、正則は養子の正之にだけは何も彼も打ちあけている。

正之は二十五歳であるが、まことに闊達な気性であるし、戦場に出れば、これほどたのもしい男はない。

「よい男を後つぎに迎えたな」

正則がいえば、於まさの方さえも、

「まことに――」

心から同意し、正之の男振りをみとめていて、この義理の母子は仲もよいようであった。

正之は、正則の相談をうけると、

「それは父上、よろしゅうございましたな」

にやりとして、

「したが、城中へ入れたにしても、夜な夜な父上のお伽がつとまりましょうか？」

「おぬしの屋敷にて召し使いくれい」
「それはよろしゅうござるが……何さま、この城の女どもは、みな母上の味方ゆえ……」
「おぬしの屋敷の女どももか？」
「まさかに――」
正之は笑った。
三の丸にある正之の屋敷には、去年の夏に新妻が迎えられた。この正之の妻は久松康元（やすもと）の女で、これを徳川家康が養女として福島家との縁組をととのえたのである。
秀吉が死ぬや、家康はこのような縁組を福島家のみか、伊達（だて）、蜂須賀（はちすか）などの大名とも結んでいる。
大名たちの婚姻は、そのまま勢力の結集ともなる。
秀吉は死ぬ前に、こうした政略結婚を勝手に行なってはならぬという制法を定め、五大老・五奉行の内閣を組織して豊臣の天下の温存をはかった。
だが、大老の筆頭ともいうべき徳川家康は、秀吉が死ぬや次々に制法を破り、平然とその勢力を伸張しつつある。
石田三成は他の閣僚にはかり、家康の専横を詰問（きつもん）したが、
「これは気づかなんだ。わしが悪かった」
家康は少しもさからわない。
東国一帯に君臨する大名として蓄積したみずからの威望に、家康は、はっきりと自信を持

ちはじめたようである。

福島正則が、家康の縁組を承知したのも、家康ならば、豊臣家の安泰がゆだねられると思ったからに他ならない。

さて――。

女が城中へ来た。

正之がはからって、自分の屋敷の侍女にしたのである。

だからといって、正則が我子の屋敷を妾宅にするわけにも行かない。正則は何百という家来や侍女の目に取巻かれて暮している二十四万石の殿さまなのである。

（これでは、却って味ないものではないか……）

朝の駈け へ出る気にもなれない。

三日ほど、正則はつまらなそうに部屋へこもったきり、出て来なかった。もっとも日に二度の、梅の丸に休養している妻を見舞うことだけは欠かすわけに行かない。

「殿――正之どのの屋敷へ新しき女が一人、入りましたそうな」

於まさの方にいわれ、正則は、

「そうかな……わしは知らぬが……」

知らぬ顔でこたえたが、動悸は烈しかった。

敵の大軍へ突入するときでも、正則はこれほどの胸さわぎをおぼえたことはない。

（奥の耳は、寝ていてもはたらく）

本丸の居館へ帰り、自棄気味に酒をあおり、寝所へ入った正則が眠ってからどれほどたったろう。

「誰じゃ？」

ものの気配に、はっと目ざめてはね起きると、

「叱っ……」

眠り灯台の、ほのぐらい光を背に、女がいた。

「どこから入った？」

「声を、おたてなされますな」

するりと、正則の横へすべり入って、

「しずかにお抱き下されませい」

女——小たまが甘くささやいてきた。

三

福島正則の甘美な夜がつづいた。

於まさの方が懐妊中なのだから、ひとり寝の寝所なのだ。さすがに、ここへは誰の目もとどかない。それにしても、本丸と二の丸の正之屋敷をへだてる濠と番所と、城内のきびしい警衛の中を、小たまはどのようにして抜けて来るのであろうか。

不審にたえず、正則が問いつめると、

「手筈がつきましたゆえ忍んでまいりまする。それだけでよろしいのではございませぬか」
「なれど、女の身で、ようも……」
「くわしく申しあげても詮ないこと——また、手筈のからくりを殿に洩らしましては、わたくしも二度と忍んではまいれませぬ」
「なるほど。そち、わしの家来共を手なずけたな」
「ま……」
「そうであろう」
「きかぬが花と申しまする。それよりも早うお抱きあそばせ。夜も白みまする」
正之は正之で、
「父上。却って御不自由になりましたろう。江川のほとりでの出合いが、もっともよろしいのではありませぬかな」
と、いう。何も知らぬらしい。
「まあよいわ。あの女も名ある大名の家につとむるが身のほまれと思うておるのじゃわ」
正則も、小たまから念を入れられた通りに、こたえておいた。
於まさの方の腹が膨脹の度を加えて来た。
すでに、初夏であった。
「間もなく……間もなくでございます」
見舞いに行くと、於まさの方が、正則を凝視し、

「早う、殿に添い臥しとうて……」
ねっとりと、いいかけるのである。
「おう、わしもよ」
こたえはするが、正則は、うんざりしていた。
妻が子を生んだとき、そのときこそ、小たまとの別れが来るのだ。
瓜の香のするしっとりとしめった小たまの四肢の、とろけるようなふくらみを抱くかわりに、骨太の、たくましい妻を抱かねばならない。
「奥に子が生まれたら、どうする？」
正則が小たまにきくと、
「そのときはそのときに、また手段もございます」
小たまは、自信ありげにこたえる。
「たのむぞよ」
「あい……」
もはや、その小たまの手段にたのむよりほかに道はなかったが、於まさの方が目出度く男子（正利）を生みおとすや、小たまの姿は忽然と清洲城内から消えた。
「足袋師・才兵衛と申す者も、すでに店をたたみ、何処ともなく立ち去ったと申します」
と、正之が養父に報告をした。
正則の落胆については、のべるまでもあるまい。

「ようも、御辛抱下されましたな」

産後の休養もすみ、於まさの方が本丸の寝所へ戻ったころ、天下の情勢は戦雲をはらんだ。奥州の上杉景勝が、何の理由もなしに戦備を急ぎはじめたのだ。

このことは、江戸に本城をかまえる徳川家康にとって黙視出来かねるものであった。

家康は傘下の諸大名に参戦の檄を飛ばし、伏見を発して江戸へ戻った。

福島正則にも、家康から、

「太閤殿下亡きのち、われら寄り合いて世に平和をもたらすべく力をつくしておるところへ、上杉の戦備は只事ならず。何度にも書をつかわし、その意を問うたにもかかわらず、かれは事を改めず。よって上杉を征討すべく、そこもとにも何分の御助力を得たい」

丁重な参戦依頼があった。

「父上。事は大変にござる」

と、正之がいった。

「わかっておる」

「内府（家康）が上杉討伐に発せられた後、大坂は、いかが相成りましょうか――」

大坂城には、八歳になった豊臣秀頼がいる。正之は、この幼い豊家の世つぎを擁して、佐和山城にいる石田三成を中心とする反徳川派の諸大名が、どのようにうごき出すかということであった。

「三成に何が出来る!!」

と、正則は憤怒をこめて叫んだ。

「あやつは茶坊主上りの小才をもって亡き太閤殿下に取入り、口先ひとつで大名に成り上ったやつじゃ。戦さの仕様もわきまえぬやつ。朝鮮出兵の折にも、あやつが要らぬことを太閤殿下の御耳へ入れたてまつり、そのため、異国の戦場で苦労したわしや加藤清正などのはたらきも正直には殿下の御耳へ入っておらなんだのじゃ。三成めは手柄をひとりじめにしてしもうた。何の、何の――いかに三成が、秀頼君を籠絡して天下を我物にしようとても、それはならぬ」

「では……？」

「おうよ。内府は、わしに誓うて下された。どこまでも豊家のために力をつくすとな」

秀頼は、秀吉の側妾・淀の方が生んだ子である。

正室の高台院は、秀吉歿後、大坂城を淀の方と秀頼にゆずりわたし、京都に隠棲している。

高台院は、弥々といって、秀吉糟糠の妻であり、若き日の福島正則や加藤清正は、彼女が手ずからにぎった握飯をほおばりながら出陣をしたものであった。

しかも徳川家康は、この高台院に対し懇切をきわめて面倒を見ている。

同時に、世つぎの秀頼の後見ともなって大坂の城を手中につかんだ淀の方は、石田三成と反徳川派に結びつき、福島正則なぞは眼中におかぬ。

「内府をたのみに思えばこそ、わしは、おぬしの縁組をも承知したのじゃ」

と正則は、

「内府をたすけ、上杉を討とう!!」
すぐさま陣ぶれを行ない、江戸城へ帰る徳川家康と前後して清洲の城を出発した。

四

小たまは、甲賀の女忍びであった。
甲賀二十一家といわれる豪族の一人である伴長信(ともながのぶ)が、小たまの頭領である。
長信の配下としてはたらく忍者たちは二十数名におよぶが、小たまは一種特別の座をしめている。それは長信が彼女の伯父にあたるためでもあろうけれど、小たま自身の活躍が目ざましいものであったからだ。
小たまの父は、伴太郎左衛門といい、永らく織田(おだ)信長につかえていた。
十九年前の天正十年夏、信長が明智光秀(あけちみつひで)の謀叛(むほん)にあい、本能寺に害せられたとき、伴太郎左衛門も共に戦死をとげた。
このとき、小たまは七歳であった。
母も死んだ十一歳の冬から、小たまは伯父・長信に引きとられ、忍者としての鍛錬をうけた、ということになる。
女忍びとしての特殊な修行はさておき、鼻先へはりつけられた一すじの糸を落とすことなく歩き、走りまわる整息の訓練から手をとって教えてくれたのは、伴家につかえる酒巻才兵衛であった。

爪先で進む歩行の術も、五十尺の高所から飛びおりる跳躍の術も、才兵衛が丹念に、噛んでふくめるように小たまへ仕込んだものだ。

「男にも劣りませぬ。女ながら、いまに頭領さまの片腕ともなられましょう」

という才兵衛に、

「忍びにならずとも、おとなしゅう女の道を歩めと申したのじゃが、小たまは、なかなかにきき入れぬ。女ながら父親の血をひいているものと見ゆるな」

伴長信も、まんざらではない顔つきになった。

小たまは、長信や才兵衛の期待を裏切らなかった。

彼女は十五歳のときに、早くも豊臣秀吉の小田原攻めへ参加し、才兵衛たちと共に諜報活動を行なった。

以来十余年、小たまの忍者としての経歴をのべていたのでは日も暮れよう。先を急ぐ。

清洲城下から甲賀へ帰った小たまと才兵衛の報告は、あますことなく、徳川家の重臣・本多佐渡守正信へとどけられ、正信から家康の耳へ入った。

報告は、次のようなものである。

一　福島家には、すぐれたる諜報網もなく、平時に於ける家中のありさまは大様安閑たり。

一　家中に争乱なく、家臣のすべては主・正則に忠勤をはげみ、戦場における猛勇は信ずるに足るべきこと。

一　福島正則の石田三成へ対する反感憎悪は、ゆるぎなきものであり、石田方からの連絡および双方の結びつきは皆無であること。

これらの項目は、いちいち、確実な例証によって裏づけられている。

豪勇の武将ではあっても、単純率直な正則の性格までが、これで、はっきりと家康につかめ、

「左衛門太夫は、むかしのままじゃな」

家康は本多正信へ微苦笑をもらし、

「これでよい」

と、いった。

江戸から奥州へ進軍中の徳川家康に、石田三成挙兵の報がとどいたのは、この年、慶長五年七月二十四日である。

家康は、野州・小山の本陣へ諸将をまねき、両軍蜂起に対する今後の方針をはかった。

「石田方へ与される方々は、遠慮なく引きあげられたい」

淡々という家康に、

「何を申さるる!!」

叫んだのは福島正則である。

「いまさら、われらは石田の下知をうけてはたらこうつもりはござらぬ。内府が秀頼公への

御疎意なき胸のうちは、八幡も照覧あれ。余人は知らず正則は、どこまでも内府に味方いたす」

この正則の声に、迷っていた大名たちも、

（左衛門太夫が、これほどまでに内府をたのまれているならば――）

肚がきまったという。

豊臣家へ対して熱烈な忠誠を誇示する正則の決断なのである。

戦力という点で、家康がもっともおそれ、何よりも先に味方にしたかったほどの福島正則なのである。

この夜、家康は正則一人を改めてまねき、

「清洲侍従の心入れ、かたじけなく思う」

手をとって押しいただいた。

「何の――」

正則は豪快に笑い、

「内府もわれらも、主の君のおんためにはたらくまでのことでござる」

つまり秀頼のために、奸臣・石田三成を討とうと、いったのである。

家康は正則の手を放さず、何度もうなずいて見せた。

以後、天下分目といわれた関ヶ原合戦が起り、家康は名実ともに天下人としての歩を印したわけだが、この戦争に勝利を得るまでの家康について、板坂卜斎（家康の侍医）が、こん

なことをいっている。

「このときまでは、内府公を主とは大名衆も存ぜられず、ただ天下の御家老として敬まっていたのである。天下の主は秀頼公と心得ていたのが、大名衆ばかりではなく諸人下々にいたるまでの常識であった」

だから陣中で、家康の家臣と正則の家臣が、つまらぬことで争いを起したときも、

「この始末は、どうなさる!!」

と申し入れてきた正則に対し、家康は、顔をしかめつつも、わが家来に腹を切らせ、その首を正則の陣所へとどけさせたほどであった。

関ヶ原における正則の果敢な突撃ぶりは有名なものであったが、ここで、甲賀の小たまについて語らねばなるまい。

東海道を進む家康とは別に、家康の嗣子・秀忠は四万の軍をひきい、中山道から西上した。これを信州・上田の城で食いとめたのが、西軍についた真田昌幸である。

この名だたる猛将は、わずか千余の手勢をもって秀忠の大軍を釘づけにしてしまい、このため、秀忠は関ヶ原での参戦に遅れ、父の家康は止むなく主力の八万をもって、西軍十二万余と戦うことになったわけだが……。

「急げ、急げ!!」

秀忠は押えの部隊を残し、あわてて中山道を西上した。

九月十七日の夜、強行軍をもって木曾の妻籠へ到着した秀忠が民家へ入って夜食を摂って

いると、
「御使者にござります」
家来が、家康からの密使を連れて来た。
密使は一人、しかも男装の女である。
一目で忍びの者であることを知った秀忠に、
「本多佐渡守さまより――」
と、小たまが密書を差し出した。
灰色がかった筒袖の上着に、同色の股引、脚絆、草鞋という身仕度で、小たまは脇差まで差していた。
秀忠は密書を一読し、顔面蒼白となった。
二日前の十五日に関ヶ原の戦闘は終っていたのだ。徳川家にとって命運を賭けた大戦に間に合わなかったことは、総大将の子として非常な恥をかいたことになる。
秀忠には、家康の怒気をこめた顔が、まざまざと見える気がした。
「父上は、わしに腹を切らせるつもりかも知れぬ」
と、秀忠が身ぶるいをして榊原康政にいったそうである。
「急げ!!」
夜ふけだが、すぐさま秀忠は出発しようとした。すると、小たまが、
「佐渡守さまよりの御伝言にござりまする」

「何か？」
「この上は、いたずらに人馬の疲れをひどくさせぬよう、とのことでござりまする」
「何と――」
「まだまだ、石田の城も落ちませぬし、大坂や伏見の形勢もわかりませぬ。力をたくわえた筈の新手が、疲れていてはなりますまい」
「いうな――」
「わたくしが申しあげておるのではござりませぬ。佐渡さまよりの……」
「む……よい、わかったわ」
「ごめん……」
小たまは、そこで引き下った。
その夜、秀忠は、まんじりともしなかった。
父の激怒は当然であろうが、本多正信が、うまくなだめていてくれよう、それだけが秀忠のたのみであった。
と……。
枕もとの灯が消えた。
「たれじゃ？」
半身を起し、太刀をつかんだ秀忠の耳もとへ、
「わたくしでござります」

「あ……」
「甲賀の忍びにて、小たまと申しまする」
「何用あって、来た」
外まわりをかこむ哨兵のきびしい警衛の中を、小たまは一陣の風のように通りぬけ、秀忠の前へ滲み出るようにあらわれたのだ。
闇の中で、女体から発散する香料の匂いが秀忠を包んだ。
「お心をしずめられませい」
「何と申す」
「わたくしをお抱きなされませ。何も彼も、ゆるやかになりましょう」
あっという間もなく、小たまが秀忠の手をとってみちびいた。
先程の男装ではない。
布一枚の下に、思いもかけぬふくらみが熱く息づいていたのである。

五

「たいくつじゃわいなあ」
と、足袋にするなめし革を裁断しつつ、小たまがいった。
店先で、せっせと足袋を縫っている才兵衛が白髪の頭を振り向け、声もなく笑う。
「才兵衛どの。たいくつじゃというているのに……」

「ほうほう。なれば、どこぞへ行き、若い男の肌でもなぶって来なされ」
「それにも飽いた」
「ほうほう」
「酒のもうかえ」
「もはや夕暮れでござる。御相手いたそうかの」
関ヶ原合戦から八年の歳月が経過していた。
いまの小たまは、才兵衛と共に、京の町でまたも〔足袋師〕の看板をかかげ親子になりすましていた。
店は、四条室町にある。
才兵衛は七十一歳。小たまは三十二歳になっていた。
すでに、徳川家康は征夷大将軍となっており、武家の頭領として地位を朝廷からもゆるされ、一昨年の四月には将軍位を秀忠にゆずり、みずからは大御所と称している。
大坂城の豊臣秀頼も十四歳になり、尚、亡父・秀吉の威光に守られてはいるが、もはや家康の実力は海内をおおいつくしているといってよい。
「福島の殿さまは、いまごろ、どうしていやることか……」
盃を口にふくみ、小たまがつぶやくと、
「あの荒大名が、それほど気に入りめされたかの？」
才兵衛が、さも可笑しげに、く、く、と笑った。

蒸し暑かった京の夏が、まるで夢のように思われる秋の宵なのである。

「そうよなあ……」

小たまは、うっとりと眼を細め、

「甲賀の女忍びとして、十六年もはたらきつづけているうち、この腕に抱いた男の肌は数知れぬが……」

さばさばと、まるで男女の間が倒逆したような口調で、

「私も、福島の殿とは一夜かぎりの間柄ではのうて、あの清洲の城での夜な夜な、荒大名とよばれた左衛門太夫どのの、どこやら間のぬけた、人のよい、そして……この私の正体も知らず、どこまでもひたむきに、まるで赤子が母親の乳房へ甘えつくような仕様で、あの髭づらを押しつけてきた……ほ、ほ、ほ……思い出せば出すほど可愛ゆげな……」

「もう、それほどにしておきなされ」

「あい……なれど、福島の殿も、このせつは面白うないことばかりであろ」

「それはもう……」

「気の毒になあ……」

福島正則は、関ヶ原参加の功績により、徳川家康から安芸一国と備後の内を合わせ四十九万八千石をあたえられ、いまは芸州・広島の城主になっている。

清洲のころとくらべ層倍の大身となったわけだが、

「大御所の仕様は、まことにけしからぬ」

憤懣はつのるばかりであった。

だからといって、かつては家来同士の喧嘩にまで乗り出し、家康に頭を下げさせたほどの威力は現在の正則にはなかった。

天下は、すでに徳川のものといってよい。

それでいて、まだまだ家康は油断をしていなかった。

大坂の豊臣秀頼を臣従させるため、家康は手を変え品を変えて策動を行ないもし、秀忠の女で自分には孫にあたる千姫を早くから秀頼の嫁にしておき、かたちは義理の祖父となったのだが、一向に秀頼は頭を下げてはこない。

一昨年も家康は、秀忠の将軍宣下にことよせ、

「秀頼公も右大臣の位にのぼられたのであるから、京へまいられるように――」

と、上洛の招請をしたが、これは秀忠の将軍宣下の儀式に参列せよということなのだ。

このとき、秀頼の母・淀どのが反対をするより先に、少年の秀頼が、

「余は上洛をせぬ」

きっぱりと決意を表明した。

家康の肚のうちは、秀頼にすら呑みこめるほど露骨なものであった。

福島正則をはじめ豊臣恩顧の大名たちが関ヶ原の折に徳川方へ味方したのは、家康の威光をもって豊臣家の安泰をはからうためである。

だが、家康は戦後の大名をたくみに諸国へ配置転換をさせ、同時にこれら外様大名たちの

戦力を消耗させるべく、次々に手を打ってきた。

先ず、諸大名の人質を江戸へ送らせ、江戸城の大修理、増築を開始。同じ年に西国の関門たる彦根城の新築を開始し、これらの工事の大半を外様大名の負担にさせた。

この後も、江戸や駿河の城を再三にわたり拡大、修築し、わが子（九男）の義直のために名古屋城の新築も行ない、息をつかせる間もなく外様大名に財政的負担を強いた。

名古屋のときなどは、さすがにたまりかねた福島正則が、

「江戸や駿府の城なればともかく、名古屋なぞは、世つぎでもない子のための城じゃ。その城を築くために、われらが搾りつくされることは、もう我慢がならぬ」

と、いい出した。

このとき居合わせた加藤清正が、

「市どのよ」

正則の前名を親しげによび、

「我慢ならぬなれば、ただちに帰国をして、徳川に叛旗をひるがえしたらどうじゃ」

「むむ……」

「返事がないのう。謀叛が出来ぬのなら、黙って工事に従うことじゃ」

清正と共に正則も哀しげに笑ったが、とても謀叛なぞ出来るわけがない現状であった。

そしてまた家康の決然とした行動には、ただの一人でも我に叛く色あれば、直ちに大軍を発してこれを掃滅せんとするほどの、すさまじいものが看取されたのである。

大名たちは、家康の顔の色をうかがうのみとなった。
こんな思いをするほどなら、
「いっそあのとき、石田方に与して大御所の首をはねてくれればようござったに――」
嗣子の正之も歯がみをして正則にいう。
正之のほうが言動は過激であり、彼はいま大坂屋敷につめているが、家康への遠慮なぞは更々になく、平然と堂々と、大坂城の秀頼へ機嫌うかがいに出て行くらしい。
（妙なことにならねばよいが……）
と、小たまも案じているのだ。
徳川家のためにはたらき、いまも京の町にいて諸方の動静を探りつづけている小たまの耳には何でも入って来る。
小たまの目から見れば、徳川の危機は関ヶ原にあったのであり、これを勝ちぬいてしまった現在、
（もはや磐石――）
なのである。
あとは、目ざわりな豊臣秀頼を、家康が、どのように料理するかであった。

六

その日――。

小たまは、四条河原の勧進相撲を見物していた。所用の帰途、何気なくのぞいて見たのであったが、

（おや……？）

見物の中に編笠をかぶった二人の立派な武家がいるのに気づき、

（正之どのじゃ）

たちまちに見破った。

ややあって、その武家たちが相撲場を出て行く後を、小たまはつけて行った。甲賀でも知られた忍びの小たまである。白昼といえども悟られることはない。

東山の山裾にある八坂の塔の裏側の竹林の中にある農家風の館の門前で、武家二人が笠をぬいだ。

一人は正之。もう一人の顔を見て、

（長曾我部どのじゃ）

小たまは緊張をした。

長曾我部盛親は土佐二十二万石の大名で、関ヶ原には西軍に加わり、敗れてのちは姿をくらましていたものである。

家康も、

「あやつは放っておけぬ」

きびしく探索を命じているが、いままで行方も知れなかった。小たまや才兵衛にも本多正

信から「一日も早く所在を知りたい」といってきている。
この長曾我部盛親と福島正之が二人きりでひそかに会っているだけでも、小たまの胸はとどろいたが、二人が入っていった館の主というものが、また大変な人物なのだ。
主は女性である。
名を、小野お通という。
お通は才色を世にうたわれ、女ながら宮中にも仕え百人扶持を賜わったこともあり、諸礼式、礼法にも通暁しているところから後には秀吉にも仕え、千姫が秀頼に嫁したときもその介添えをつとめ、大坂城中に暮したこともあって淀君からもいたく愛寵をうけたらしい。
宮中へも、大坂城へも出入りは自由だし、諸方の名士たちとの交際も派手やかなもので、いえば当代一流の才女なのである。
お通は、豊臣びいきとして知られていた。
彼女の経歴が、それを世に納得させている。
世に隠れ、再び豊臣の威光を取戻そうと願う牢人、名士たちとのひそかな会合も、しばしばのことであった。
そして、お通が得た情報は、そのまま徳川家康の耳へとどいてしまう。
つまり、お通は家康のために「豊臣びいき」をしているのだ。
小たまも、お通には何度も面識がある。
「そなたとなら心も通おう。力を合わせてはたらきくれよ」

と、本多正信が二人を引き合わせてくれたのだ。
日が暮れて、福島正之と長曾我部盛親が、お通の館を出て来て、何処かへ去った。
小たまは、物陰から二人を見送り、すぐに館へ入って行った。
小野お通は、すべてをきき、
「私も長曾我部どのに会うたは今日がはじめてじゃ」
「どのようなことなので？」
「小たまどの。きまっておるではないか。謀叛の相談じゃ」
「では、やはり……」
「今が今というのではない。秀頼公成長のあかつきを待ってということじゃが……なれど機あらば……」
「え……？」
「大御所の御首を、というわけじゃ。福島どのは伊賀の忍びなぞも手なずけておるらしい」
「そのことは、正則公も……？」
「いえいえ、広島の親父どのは全く知らぬこと。気の毒にのう。このことが私の口から大御所に知れたなら、福島四十九万石も只事ではすむまい」
お通は、流行の片身替りとよばれる派手やかな小袖に包まれた豊満な体をふるわせて笑い出した。
「何が可笑しゅうございます？」

「男たちの考えることが可笑しゅうてならぬ。大御所を討つのなら関ヶ原までであったのに――今となっては、もういかぬ……なれど、刺客はおそろしい。油断はなりませぬな」
「長曾我部どのの住居も、たしかめられましたな？」
「いかにも――北野天神近くの松梅院という寺にひそみおらるるげな」
間もなく、小たまはお通の館を出た。
お通の前では眉の毛一つうごかさなかった小たまであるが、
（ぐずぐずしてはおられぬ）
と、決意をした。
家に戻り、才兵衛だけには告げた。
才兵衛は沈思の後に、
「わしもこの年になりまいては、何事もお前さまの心一つに従うつもりでおじゃる」
と、いった。
「ありがとうよ、才兵衛どの」
「したが、手助けは……？」
「いらぬ。私ひとりでよい」
「うまく行けばよいが……」
「何の――」
翌日の夜になると、小たまは身仕度にかかった。黒の筒袖、股引に甲賀頭巾、忍び刀を帯

した忍び姿で、
「では、行ってまいる」
声までも凛々しくなった。
京から大坂まで十二里の道のりは、小たまにとって一跨ぎである。

七

大坂城・追手口の外濠に、福島屋敷があった。これは豊臣家に仕えるという意味をもっている。
同じように、江戸にも福島屋敷があり、ここには次男・正勝が入っている。本来ならば嗣子・正之が江戸屋敷につめるのが家康に対して当然なのだろう。
しかし、正之は断じてこれを承知しない。
父の正則が叱りつけても、
「父上は何故に、そのようなお心弱き武士になられた。われらは豊家の臣でござる」
一歩もゆずらなかった。
その夜ふけ、といっても丑の上刻をまわったころに、大坂屋敷の奥ふかい寝所で熟眠している福島正之の寝顔の真上の天井板が音もなく小さな穴をあけた。
その穴から、するすると一条の縄のように長い細竹の筒が降りて来て、正之の顔面一尺のところでぴたりと止まった。

竹筒の穴から赤茶けた粉末が吹き出し、正之の顔をおおった。
正之の寝息が変った。
喘ぐような寝息になったのである。
竹筒は、すぐに天井裏へ吸いこまれ、消えた。
ややあって、その天井板が大きく引き開けられ、黒衣の者が寝所へ飛び降りた。
小たまである。
忍び頭巾の中から、小たまの双眸が複雑な光をたたえ、しばらくは正之の寝顔を見入った。
正之は何をされても目ざめる筈がない。竹筒の中の眠り薬を吸いこんでしまったからだ。
（正之どの。ゆるされよ）
小たまは、胸のうちにわびた。
（何事も福島の御家のためと思われよ。あなたさまは天下の成行きを御承知ではなかったのじゃ。この上、生きてあっては父御さまにも、御家のためにもなるまい……）
正之の枕もとの刀掛けに大小がある。
その小刀を抜き払った小たまは、ためらうことなく正之の喉もとを刺しつらぬいた。
正之の激しい痙攣も一瞬のことであった。
すぐに、正之はうごかなくなった。
小たまは夜具をはねのけ、正之の両手に小刀の柄をつかませ、あらためて喉もとの傷口へ

刺しこみ、そのまま正之の上体を俯伏せにした。

これで自害の体となったわけだ。

次の間には宿直の侍臣も寝ていたが、この惨劇を少しも気づかない。小たまの進退は気配もなく行なわれた。

すべてがすむと、小たまは天井裏へ消え、何事もなかったように天井板が閉められた。

翌朝の福島屋敷の騒ぎがどのようなものであったか、のべるまでもあるまい。

自害に見えても、その理由がない。

奇怪な正之の死なのである。

悲報は、すぐさま広島へ達した。

福島正則は愕然とした。

「わ、わからぬ……わしには、わからぬ」

ともあれ、福島家の面目を失ってはならない。

――福島刑部大輔正之事、乱行のことあるにより切腹申しつけたり。

と、いうことになった。

この届出を、徳川家康は何とうけとったか……別に、福島家へは何の査問もなかった。

すべては、小たまの思う通りになった。

長曾我部盛親は、このことをきいて姿をくらました。

この後、福島正則もかなり苦悶したようである。

翌慶長十三年の夏のことであるが、正則は侍女の佐恵というものに手をつけた。
十七歳の美女であった。
妻の於まさの方の目をはばかるだけの余裕もないほど、正則の心も荒んでいたのであろうか。
このことは、たちまちに奥方が発見した。
「殿!!」
叫ぶや、奥方は薙刀をつかんだものである。
「何をする!!」
「殿を手にかけ、わらわも後を追いまする」
白眼を剝いて、飛びかかって来た。
「やめい!!　何をいたす」
正則はこのとき、奥御殿から玄関口まで懸命に逃げたという。
於まさの方は、止めにかかる家来たちを追いのけつつ、玄関口まで夫を追いかけて来たが、ここで、
「う……うう……」
薙刀を捨てて転倒した。
いまでいう狭心症のようなものであったのか……。
これで、於まさの方は四十三歳の生涯を終えた。

嫉妬ぶかい妻ではあっても六人の子をもうけた仲であった。
正則の悲嘆は重複した。
翌年の暮に、徳川家康の命をもって、正則は後妻を迎えることになった。
気もすすまなかったが、正則には家康のすすめを拒絶するだけの意力もなかった。
後添えは、上野大胡二万石の城主・牧野康成の女である。
この年の翌々年に、加藤清正が五十歳で病歿をした。
清正は正則より一つ年下であったが、互いに秀吉のもとで成長し、力を競って戦塵にまみれた間柄である。
単純豪放な正則と違い、加藤清正には肚の底が知れぬ無気味さがあった。
秀頼への忠誠は疑うべくもないのに、それでいて家康にも気に入られていたし、
「左衛門太夫の頭の中は、むかしの市松のころと同じままじゃ。困ったものよのう」
あからさまに正則へいっては、正則を怒らせたものだが、
「わしのするままにしていたがよいぞ。いまに……いまに、おぬしの胸もはれようときが来るやも知れぬ」
いつであったか、謎めいた一言をもらしたことがある。
（主計頭の、あの一言はどういう意味であったのか……）
正則は、清正の死後になって、その一言が、しきりに思い出された。

八

慶長十九年から元和元年にかけて、大坂戦争が起った。

七十余歳の老軀を燃やし、家康は徳川政権の永続のために、

「わしの息あるうちに、根を刈りとらねばならぬ」

猛然と、豊臣秀頼へいどみかかった。

冬の陣と夏の陣と、二度にわたって行なわれたこの戦争で、老獪をきわめた家康の駈引きに、若い秀頼も寄せ集めの豊臣軍も手玉にとられたものだ。

大坂落城と共に、秀頼も淀君も死に果て、ここに豊臣勢力のすべては潰滅した。

福島正則は、このとき江戸城留守居を家康から命ぜられ、わずかな家来と共に江戸屋敷へ入っていて、出陣はしなかった。

旧主を攻める戦いに加わるのは辛かろうというのが名目であったが、正則は体よくうごきを封じられたのだ。

どこまでも用心ぶかい家康の考えを、

（いまさら、わしが何するものか――）

正則は哀しく笑った。

（なれど、大御所は、いまだにわしの武勇をおそれておいでじゃ）

それが、わずかなぐさめでもあった。

（それにしても、このとき正之が生きてあったなら、かれはどうしたであろう……それよりも加藤清正が生きていたら……）

戦後、秀頼が死んだと見せかけ、ひそかに九州へ落ちのびているという風評が世に起ったのを耳にしたとき、

（もしや……？）

正則は、清正が「いまに、おぬしの胸もはれようときが来るやも知れぬ」といった言葉を思い起した。

（このときのことを清正は見透していたのやも知れぬ。こうなったとき、秀頼公を九州へ迎え、清正は、はれて大御所に楯つくつもりであったのか……）

清正が精魂をかたむけて築いたという熊本の城を正則は見ていない。

だが熊本城の、実戦用としてのすばらしい構築は、かつて清正からきいただけでもよくわかる。

そのような城を、よくも家康がゆるしたものだと、そのときは思った。

（やはり、清正はわしよりも上手じゃ）

それにしても、清正が生きていて、秀頼を九州へ連れて行き、自分も軍をひきい、熊本城へ入って徳川軍を迎え撃つことになっていたら、

（清正と共になら、たしかにやってのけられたろう……）

思うだに胸がさわぐ。

さわいでも駄目であった。すべては終ったのである。

大坂戦争の翌年に、家康は七十五歳で病歿し、老臣・本多正信も間もなく後を追った。

これで、いくらかは気もゆるやかになろうと思ったが、二代将軍・秀忠を中心にした徳川政権は、諸大名への監視の目を更にきびしくした。

正則は、広島の領国へ帰ることを、なかなかにゆるしてもらえなかった。

「大御所も亡くなられたことではあるし、少将のように老巧な大名が江戸にいて、にらみを利かせてもらわねば、われらが困ります」

と、本多正純（正信の子）や土井利勝、酒井忠世などの幕府閣僚たちが体よくいうのだが、これはいうまでもなく、正則を人質にとっていることなのだ。

広島の城は、まだ十八歳にすぎぬ備後守正勝（忠勝と改名）が老臣たちの補佐をうけて留守居をしている。

殿さまが二百里も先の江戸にいたのでは、落ちついて治政も出来ない。

正則も、虚脱したように老けこんで行った。

元和三年、広島が大洪水に見まわれ、三の丸まで水びたしとなり、城郭の破損がひどいとき、正則は将軍に乞うて、久しぶりに帰国をした。

なるほど、ひどい。

広島へ移ってから、正則も城の修理を何度も行なったが、完成したところで、

「取りこわすように――」

家康が命じて来たものだ。
西国大名の城普請について、家康は神経をとがらせつづけた。
（大名が城をととのえるのが何故わるい!!）
激怒しながらも、正則は折角出来上った城の修築部分を破壊せざるを得なかった。
しかし、今度は放り捨てておくわけに行かない。
江戸へ戻り、正則は修築願いを幕府に出した。
返事がない。
たちまちに一年がすぎた。
たまりかねて、執政・本多正純に問い質すと、
「かまわぬように思うが……」
と答えるのみで、一向に許可をあたえない。
（わしは今まで、徳川家のため、どこまでも事をゆずってきたのに、あまりにもひどい仕打ちじゃ）
正則は六十に近い年齢になっていたし、気の苛立つことばかりつづいていたので、たまりかねてしまい、
「かまわぬ。城を直せ」
と、広島へいってやった。
そして、この広島城修理が、正則の命とりとなった。

元和五年六月二日――。

幕府は、居城の無断修築を責め、福島家を改易に処した。

幕府のかけた罠に、やすやすと正則は落ちこんで行ったのである。

同時に、愛宕下の江戸屋敷は幕府の鉄砲隊によって厳重な包囲をうけ、この中で、正則は上使から罪？　をうけた。

広島では一戦も辞せぬという意気込みであったが、

「おだやかに城を明けわたせ」

正則は、あきらめきって命を下した。

「裏切りものの末路はあれよ」

と、世上のうわさも高い。

豊臣家にもっとも恩顧がふかい福島正則は、死ぬべき機会に何度も死にそこね、恥をさらしたというのである。

正則は領国のすべてを幕府に召し上げられ、奥州・津軽から転じて信州・川中島の内、四万五千石を改めてあたえられた。

広島城は紀州から移って来た浅野長晟におさめられた。

九

福島正則が、信州・高井の居館で発病したのは寛永元年正月である。

白根山の西麓にあたる高井村、堀之内に、城というにはあまりにもささやかな正則の最期の地があった。

ときに、正則は六十四歳。

はじめは全身の疼痛を訴え、食欲を失った。

夫人も息・正勝、正利もこの地へ移って来ていたが、

「もはや、何ものも食べとうはない」

夏に入ると、正則は食を拒み、寝た切りになった。

正則の病間は、小高い丘の上にあり、家来と侍女十名ほどが常時つめていた。

ある日の夕暮れに、薬湯をささげて入って来た侍女を、枕もとにいた老臣の津田四郎兵衛が、

「このものは、真田家中の井伏平太夫のむすめにて、三津と申しまする。先日より御殿にて召し使いおりましたるが、本日より、こなたへつめさせました」

と、正則に引き合わせた。

むすめといっても三十をこえて見える。

すらりとした姿の美しい、落ちついた物腰の女であった。

平伏する三津を見ても、別に正則は気にとめなかった。

「薬はいらぬと申してあるに――」

と、薬湯を下げさせた。

三津は一礼して去った。

この日の夜ふけに、正則は物の気配を感じて目ざめた。食を絶ったばかりなので熟睡し切れないのである。

「たれじゃ」

「わたくし……」

すり寄って来た女は、侍女の三津であった。

「何用じゃ？」

「お忘れになりましたるか……」

きりりと引きしまった細おもての三津の顔に、やわやわと微笑がひろがった。

灯下にこれをながめても、正則は、

「知らぬ」

首をふった。

「小たまでござりまする」

「何と――」

あらためて見すえて、

「おう……」

正則は感嘆の声を発した。

「そちか……」

「あれより二十五年になりまするなあ」
とすれば、小たまも四十九歳になっている筈だ。
「体も細うなり、あまりに若く見えたので……」
と、正則が呆れるのを見て、
「気ままにすごしておりましたれば――」
「ようも、ここへ来たの」
「手筈がつきましたので――真田家の者は仮親にござります」
「何で来た？」
「殿さま御病気ときいて――」
「左様か……」
「御薬湯をおのみなされませ。食を絶つはいけませぬ」
「余は、この世に何の未練もないわ」
「わたくしがまいりましてもか」
「おう……そちと会えたのじゃなあ」
「さまざまの物語をいたしましょう」
「うむ」
「御薬を……」
小たまが差出す薬湯を、正則は素直にのんだ。

翌日から、また正則は食を摂取するようになった。
それでも、約一と月ほど正則も生きながらえたが、七月十三日の早朝になって、小たまが薬湯をもってあらわれると、
「間もなく、死ぬるぞ」
と、正則がいった。
そして、どうしたわけか、
「髭を剃ってくれい」
という。
小たまが、半白の髭を落すと、
「たれも呼ぶな」
正則は仰向けに寝たまま、
「いま少しで、死ぬる」
しずかに、いった。
「はい」
小たまがうなずき、
「そのようにござりまするな」
「そち、ひとり居てくれればよい」
「奥方さまは？」

「呼ぶな。肌を合わせたこともない奥ゆえ……」
「はい」
「そちは、いったい何ものなのじゃ」
「何ものでも、よろしゅうございましょう。どちらにせよ、殿と同じく、戦さの絶え果てたこの世には無用の女でございます」
「ふうむ……」
「戦さを忘れた武家方は、これより何をなされますのか……思うただけでも可笑しゅうございますな」
「ふうむ……」
正則は窓外に啼く山鳩の声に耳をかたむけていたが、
「霧の中で、鳩が啼いておる」
そして、
「小たま、別れじゃ」
つぶやくや、たちまち昏睡状態に入った。
死の喘ぎをたかめつつ、福島正則の唇が、かすかにうごいた。
小たまは、その声をきいた。
「関ヶ原……」
と、正則の唇はいい、さらに、

「関ヶ原にて、大御所の首を……」
ここまでいいさして、息が絶えた。
高井村の霧の中に、小たまの姿が消えたのは、それから間もなくのことである。

（「別冊小説新潮」昭和三十九年秋季号）

夫婦の城

一

正子は、上州・箕輪の城主、長野業政の長女に生まれ、十七歳で嫁入った。

二十二歳の新郎は、同じ上州の国峰城主、小幡信定（憲重ともいう）である。

長野家も小幡家も、関東管領・上杉憲政の麾下にあり、この結婚も憲政の命によるものであった。

いわゆる群雄割拠する戦国の世の、武家の女の常として、正子も一種の政略結婚をしたわけで、

「めでたい。これで余も安堵をしたぞ」

と、上杉憲政は平井の居城から、国峰へ出て来てわざわざ両家の婚礼にも列席し、

「長野も小幡も、余が股肱の臣じゃ。若き信定が老巧の業政の聟となること、何よりもたのもしく、よろこばしい」

上機嫌であった。

いまの上杉家には、斜陽の影が濃い。

諸方の戦国大名の威圧にはさまれ、昔日の羽振りを失いつつある上杉家が、両家の婚姻を心強く思うのは当然のことであり、上杉憲政は、三日三夜にわたる祝宴がすむと、

「信定。これよりは、余とそちの生死は共にぞ」

熱情をこめた一語を残し、平井へ帰って行った。

小幡家の慣例により、新夫婦は、この夜はじめて寝所を共にしたが、翌朝、新郎の信定が老臣・入江内膳に、

「醜女の上に、どこもかしこも、細く小さく、何やら玩具を扱うているようで、味気もないわ」

と、もらした。

興ざめたような苦笑を浮かべている若い主を見て、

（無理もござらぬわい）

内膳は、胸の中で舌うちをした。

幼少のころから信定の面倒を見てきている入江内膳は、

「いずれ、この戦乱の世もおさまりましょう。そのときまで、若は小幡の家名を立て通さねばなりませぬ。そのためには油断なき心の目をやしない、猛き武勇の大将ともなって、大殿の後を継がれ、この国峰の城を守りぬかねばなりませぬ」

と、懸命に訓育をした。

信定もまた、この老臣の期待にこたえた。

少年のころから戦場に出て、少しも負けをとらなかったし、信定が十七歳になると、病身の父・顕高も、

「もはや、いつ死んでもよい」

愁眉をひらいた。

とりわけ、信定の武術は関東一帯の武将たちの間にもきこえ、特に騎射の妙技は瞠目すべきものがあった。

信定の、青年の特権そのもののような柔軟で強靭な体軀が馬上に躍動しつつ、矢籠から抜いた矢をつづけざまに弓へ番えて放つ速射の美技を見たものは、

「あれは、魔法の弓じゃ」

などと、いい合った。

加えて、小幡信定は美貌である。

居館で食事の給仕をする侍女たちが、信定のすずしげな目に見られて手もとが狂い、よく器物を落した。

信定は小幡家中の誇りであり、入江内膳の自矜であった。

「若には、天下一の美しい嫁御寮を……」

というのが、内膳の口癖になっていたものだが、それだけに、新婦の正子が国峰の城へ送りとどけられて来たのを見て、

（長野のむすめが、これほどにひどいとは思いもよらなんだわい）

内膳は顔をしかめた。

だが、これも上杉という大勢力の下にある小幡家にとっては、拒みきれぬ至上命令による結婚なのだ。

党閥に拠ることは、どうしようもない人間の生存本能である。
一城の主が一国を統治するためには、より強大な勢力の庇護を必要とする。
ことにそれが、予断をゆるさぬ武力と武力の争いを日常のものとして生きて行かねばならぬ時代にあっては、男も女も我身だけのことを考えていて事がすむわけのものではない。
（ひどい女を嫁にしたものだ）
と思いはしても、
（一日も早く、この女に、わしの子を生んでもらわねばならぬ）
信定は、うすい雀斑の浮いた正子の顔をながめ、肌の色のくろい小さな骨張った体を抱き、夜毎に愛撫を加えた。
武人の家にとって、男子の出生は欠くことの出来ぬ条件である。早いほどよい。
主は戦火の中に、いつ果てるか知れたものではなく、そうなれば子が後をつぎ、そしてまた子の子が後をつぐ。根を絶やしてはならない。そのことに一城の主は責任を負わねばならぬ。
なぜなら、城を、家来を、国を守らねばならないからだ。
それでも、たまさかには、
「肌につけよ」
信定が、高価な化粧品を京の都から取寄せてやったりすると、
「わたくしには似合いませぬ」

正子は、明国渡来の〔唐の土〕とよばれる白粉にも見向きもしなかった。
「つけよ」
「いやでございます」
「強情な女め」
「はい」
「つけてみよ。そなたのくろい肌も、いくらかは白くなろう」
「白うなければなりませぬか？」
「くろいよりは、白いほうがよいではないか」
「肌が白うなっても、このわたくしの顔だちが、殿にふさわしきものにはなりませぬ」
正子は、たしかに、おのれを知っていたようである。

二

翌年に、男子が生まれた。
これが上総介信真であり、二年後にもうけたのが弾正信重である。
そのころから、正子に変貌がきた。
小づくりな体に、みっしりと肉がみちて、腰まわりもゆたかになり、小さく低い鼻梁にさえも女の威厳がそなわってきた。
同時に、二子をもうけた正子の肉体が、女としての自信を強烈にうたいはじめた。

「そなた、美しゅうなったな」
寝所で妻の体をまさぐりつつ、信定が思わず声を発したこともある。
あるとき、並んで居館の廊下を歩いていて、信定がいった。
「そなた、背丈が伸びたのではないか……」
「まあ……」
正子は、さも可笑しげに笑ったが、ややあって、
「いかにも、心のうちには背も伸びた思いもいたしまする。それもこれも、かわらぬ殿のいつくしみがあればこそ――」
と、こたえた。
ふしぎなことに、このころから、正子は仕舞い忘れていた〔唐の土〕を取出し、肌につけはじめたものである。
ぬめやかな彼女の凝脂は、こだわりもなく白粉をうけいれ、
「お城の御寮人さまは、めっきりと美しゅうなられた」
領民たちまでが、噂するほどになった。
つづいて昌定が生まれ、昌高が生まれた。
入江内膳は間もなく歿したが、これを病床に見舞った信定に、
「殿。今になって思うに、御寮人は見つけものでござったな」
と、内膳がいった。

「爺も、そのように思うか」
「思いまする」
「わしも思う」
ともかく、夫婦仲は濃密の度を増すばかりで、信定も二男出生の後には、二人の側室を廃し、かたく身を持したという。
毎年のように、信定は上杉憲政の重臣として出陣をした。
戦っては国を守り、妻を愛し、子をもうける。
火花が散るような歳月の流れであった。
十年の経過は、わけもなかった。
戦場から城へ帰るたびに、小幡信定は、城門口へ迎えに出ている正子へ、
「また生きて戻ったぞ」
と、声を投げた。
信定と正子が夫婦になってから十二年目の天文二十年秋に、異変の前兆が見えた。
八十余年前――足利将軍・義政のころから日本全国に波及した守護大名や豪族たちの戦乱は、ようやく、いくつかの大勢力の拮抗にしぼられつつあった。
ちなみにいうと、豊臣秀吉による天下統一を見るためには、尚、三十余年を待たねばならなかった。
中国や九州の大名たちはさておき、小幡信定にとって問題なのは関東の形勢である。

武蔵・相模には、新興勢力の北条氏康が目ざましい擡頭を見せている。
甲斐には、もっとも強大な武田晴信（信玄）がいた。
越後には猛勇を誇る長尾輝虎が、関東制覇を狙っている。
足利将軍の力は衰弱しつくしてしまい、現に、上杉憲政が任じている〔関東管領〕の役目は、足利将軍の命によって関東一帯の政治を総管するというのだが、今は名のみのものとなり、憲政は、武田や北条の侵入を防ぎ切れないのが実情であった。
（こうなれば……）
上杉憲政は決意をした。
（長尾輝虎と手を結ぶより道はない）
と、いうのである。
こうなるまでには、さまざまの経過と確執があったわけだが、
（管領の職と名家・上杉の称号を長尾輝虎にあたえ、輝虎をして上杉家を守らしめよう）
憲政の決意が、ようやく定まったのは、重臣・長野業政の進言に負うところが多い。
業政は、早くから越後の長尾輝虎と通じていたらしい。
「輝虎公は希代の勇将じゃ。管領の殿をふくめ、われらもその旗の下へ入ることが、もっともよいことである」
長野業政は、聟の小幡信定へも諭しきかせたが、
「不承知でござる」

信定は、きっぱりといった。
「なぜじゃ？」
「輝虎には天下をとれますまい」
「いうな。輝虎公こそ天下人の器量をそなえた武人である」
「越後は地の利がございませぬ。天下をおさめるためには、先ず京へのぼり、京をおさめて帝の御心を安んじ奉らねばなりますまい」
雪ふかい越後から、大軍をひきい上洛するという不利な条件だけを見ても、長尾輝虎には天下がとれぬと、信定はいったのである。
「なればこそ、われらが関東の地を輝虎公へゆずりわたそうというのじゃ」
舅は何とか聟を説き伏せようとしたが、
「それがしは、不承知」
断固として、信定はゆずらない。
しかし信定も、主家の上杉が、いずれは天下を統一する筈の大勢力の中へふくみこまれなくてはならぬことを知っていた。
小幡信定は、
「甲斐の武田晴信公をたのむべし」
と、主張をした。
ここで、上杉傘下の武将たちが二つに割れた。

「これからは舅殿と争わねばならぬことになった。こらえてくれい」
信定が告げると、
「お心のままに――」
正子の顔色は微動もしなかった。
この年――。
信定は三十三歳。正子は二十八歳。
十一歳の長子・信真を頭に、夫婦は男ばかり四人の子持ちであった。

三

翌天文二十一年になると、小田原の北条氏康が大軍を発し、上州へ侵入して来た。
上杉方の武将たちも、それぞれに城を出て、総大将の上杉憲政をたすけ、諸方に転戦をした。
だが、形勢は悪くなるばかりである。
〔管領府〕とよばれ、上杉の居城がある平井は、現在の群馬県・藤岡市の西方一里余の地点にあった。
小幡信定の国峰城へは、約五里をへだてている。
その平井の城が守り切れぬときいて、
「管領の殿を、わが城へお迎え申せ」

そのとき、館林のあたりで北条軍と戦っていた小幡信定は、侍臣・猪子瀬兵衛に精鋭の一隊をつけて平井へ差向けると共に、

「こうなれば、殿を擁して国峰へ立てこもり、武田の援けを乞うのみだ」

決意すると、信定はたちまちに敵中を突破し、国峰へ引きあげて来た。

城を出るときは目もくらむほどの炎暑であったが、いま、鏑川に沿って進む敗軍が仰ぐ冷え冷えとした空の色は、すでに秋のものであった。

城は、雄川の流れを見下す山上にあった。

城門には、城を守っていた信定の従弟・小幡図書之介はじめ、例によって、子供たちにかこまれた正子が出迎えており、

「生きて戻ったが、これより籠城じゃ。忙しゅうなるぞ!!」

信定は、城門をくぐりつつ叫んだ。

帰城した小幡勢は、休む間もなく籠城の準備にかかった。

甲斐の武田家へ向けて、ただちに密使が出発をした。

夜に入ってから、信定は図書之介をよび、

「わしは、どこまでも武田をたのむつもりだが、箕輪の舅殿は、すでに長尾輝虎に通じていることと思われる。わしもおぬしも、共に長野家のむすめを妻にしておる身だが、これからは舅殿と戦わねばならぬ。わかっていような」

と、念を入れた。

図書之介は、三年前に、正子の妹・於富を妻に迎えている。
正子はともかく、年も若い於富は、実父の長野業政と争う夫を見て、哀しみもし狼狽もするであろう。よくよく気をつけ、いたわってやれと、信定は従弟にいった。
「案ずるには及びませぬ。於富は、あね上と共に女どもを指図し、いさましく立ちはたらいております」
小幡図書之介は、平然とこたえた。
そこへ、正子と於富が身仕度も凛々しく、薙刀をかいこみ、これも武装の侍女たちを従えてあらわれた。
「於富。これも戦国のならいだと思え」
信定が、なぐさめてやると、
「お気づかいなされますな。小幡の家のものとなった於富でござります。実家の父のことは忘れまいた」
於富は、しっかりとこたえた。
正子も、年若な末妹の顔をたのもしげに見やり、
「わたくしから、いいきかせるまでもありませなんだ」
と、信定にいった。
あとは、上杉憲政の来城を待つばかりとなったが、夜明けと共に、意外な知らせがとどいた。

憲政を迎えるべく館林を先発した猪子瀬兵衛が汗と埃にまみれて到着し、
「平井の城は空でござる。管領の殿は手勢をひきいて城を出られ、行方知れずとなりました」
「何――」
信定もおどろき、
「殿は、いざとなれば、わしに同意なされ、国峰へ籠城するとおおせられていたのだぞ」
「なれど、どこにもおわしませぬ。北条勢がひしひしとつめかけておりまするし、それがしも空の城を守るわけにも行かず、思いきって引きあげてまいりました。おそらく、明朝には、管領府も敵の手に――」
「む……」
信定は沈思した。
どこかが狂っている。
上杉憲政にも、その下に戦う武将たちにも何かが欠けている。
一丸となって戦う連携が全く行われていない。
何も知らず正直に戦いぬいていたのは、自分一人だけのように思えてきた。
このことは戦闘の最中にあって、何度も信定の胸裏をかすめた不安である。
（もしや……殿は、わしを見捨てて長尾輝虎の下へ走ったのではないか？）
その通りであった。

後にわかったことだが——あくまでも武田家をたのむ小幡信定の強固な主張をおそれた上杉憲政は、

「信定めが余の意に従うとは思われぬ」

と、かつては生死を共にと誓った重臣に、一語のことわりもなく、さっさと長尾輝虎のもとへ逃げこんでしまったのである。

四

二日後に、国峰城は包囲された。

北条軍にではない。越後から押し出して来た上杉軍の先鋒と長野業政の連合軍に囲まれたのである。

舅の長野業政は聟の小幡信定へ使者をよこした。

上杉憲政は、いま箕輪城に居り、管領職ならびに統下諸国を長尾輝虎へゆずりわたすことになった。輝虎も大軍をひきいて関東へ出向し、憲政を庇護することになったのだから、抵抗は無駄である。すぐに城を明けわたすがよかろう。と、業政はいってきたのだ。

「卑怯な——」

舅の陰謀が、こうまで迅速にはこばれていようとは、信定も気づかなかった。

舅・業政の肚のうちは、上杉家を長尾輝虎へ売ることにより、輝虎に取入って功名を得ようというのだ。

小幡図書之介が、従兄の信定にきいた。
「いかがなされます？」
「いうまでもない。わしは、どこまでも武田の援軍にたより、籠城の決心だ」
「武田が、果して手をのべてくれましょうか？」
「くれると思うから籠城するのだ」
「もしも……」
「疑いの心あって戦さが出来るか」
信定の決意が少しもゆるがぬのを見て、
「では、そのお言葉を舅殿へつたえまする」
「図書之介。おぬしは籠城が厭か。厭なれば城を出て敵に降ってもよいのだぞ」
「何をおおせられます。それがしも小幡一門でござる。どこまでも殿と共に――」
図書之介は、胸を張って信定に忠誠を誓ったものだ。
この夜更けに、夜襲があった。
「この城は、なかなかに落ちぬぞ」
信定は不敵に笑い、みずから手勢をひきい、
「門をひらけ」
奮然と逆襲に出て、敵を蹴散らしておき、
「おぼえたか」

颯爽と城内へ戻って来た。

ところが、大将を迎え入れた城門は、そのまま開かれ、門外の曲輪を守る兵も夜の闇にまぎれて、どこかへ散ってしまった。

裏切り者が出て、敵を迎え入れたのである。

裏切ったのは小幡図書之介であった。

雪崩こむ敵を見て、信定は、さすがに驚愕した。正子や子供達に別れを告げる暇もない急変なのである。

「瀬兵衛。わしは死ぬる。そちは正子と子たちを逃がしてくれい」

猪子瀬兵衛に命じ、信定は、二の曲輪内まで流れこんで来た敵を迎え撃った。

（せめて、図書之介の首を……）

叫喚と血の飛沫の渦巻く何とも名状しがたい惨劇の中に槍をふるいつつ、小幡信定は、

（わしも人がよすぎる。上杉の殿にも、長野業政にも図書之介にもあざむかれた……）

口惜しさに涙があふれてきた。

小幡軍の中にも、図書之介の手勢は敵に寝返り城中に火を放ったので、情況は、さらに悪くなった。

この夜のことを、信定は、よくおぼえていない。

何しろ敵味方の区別もわからぬ混戦であって、図書之介の妻の於富さえも乱闘に巻き込まれて死んでしまったほどだ。

自分が防いでいる間に妻子がうまく落ちのびてくれればよい。子たちが生きてくれれば、小幡の家名も世に残ろうという思い、信定は手兵を指揮し、渾身の力をふるって闘いに闘った。

気がつくと、夜が明けていた。

密林の中に、信定は七名ほどの侍臣にかこまれていた。

（ようも逃げられたものだ……）

血まみれの全身を草の上へ投げ出し、小幡信定は、

（これから、どうすべきか……？）

茫然と、たちこめている霧の幕を見つめた。

しかし、落ちて行く先は、甲斐の国の他にない。

きびしい探索の目を逃れ、信定が古府中（甲府）の城下へ到着すると、

「ようまいられた」

武田晴信は、こころよく信定を迎えてくれたが、半月後に、正子や子供たちが、猪子瀬兵衛ほか数名の士と共に古府中へやって来たのを見たときには、

「正子。そなたはもはや、この世のものではないと思うていたぞ」

信定は武田家の士が見ている前で、いきなり妻を抱き、あたりもかまわず落涙したという。

五

十二年後の永禄六年二月――。

武田信玄は関東へ出陣し、上州一帯を制圧した。

このとき、国峰城は小幡図書之介のものになっていたが、疾風のような武田軍の攻撃に合い、ひとたまりもなく城は落ちた。

図書之介は捕えられ、その場で腹を切らされ、その家来たちは武田軍に収容された。

このとき小幡信定は、武田信玄から信州・小日向に領地をもらい、西牧の城を守っていたが、

「ふたたび国峰へ戻ったがよかろう」

と信玄は、信定に国峰城をあたえてくれた。

信定夫婦は、十二年ぶりに国峰へ帰ったが、二十四歳に成長した長男の信真は、信玄の旗本として甲斐にとどまることになった。

信定四十五歳、正子は四十歳である。

次男の信重も二十二歳になっており、

「早いものだな。わしが信重と同じ年齢に、そなたを妻にした」

「いやいやながら、迎えて下されました」

「またそれを申す」

「色がくろいと申されて……」

「妙に、こだわるではないか」

「それが、女というものでございます」

正子は、妹・於富の墓を城中に建て、供養をおこたらない。

「思えば、図書之介もわが従弟ゆえ、あわれな末路であったが……於富も可哀相なことをした。それはさておき、於富は図書之介の裏切りを知っておったのかな？」

という信定の問いに、正子は悲しげにうなだれ、

「夫婦でございますもの。まして、妹は図書殿と仲よう暮しておりましたし……」

と、つぶやいた。

以来、信定は妻の傷心へふれぬことにした。

長尾輝虎は、上杉家を継ぎ、謙信と号し、武田家との宿命的な対決は、有名な三年前の川中島における決戦の後も尚つづいている。

武田信玄の勢力は伸張の度を加えており、信玄は、天下制覇の土台を着々と築きつつあった。

信定夫婦が国峰へ帰った翌永禄七年二月——。

古府中から使者が来て、武田信玄の親書を、小幡信定へもたらした。

一読して、信定は愕然とした。

信玄は、次のようにいってきている。

そこもとも国峰へ戻られ、こころよく新年を迎えられたことと思い、祝着至極である。

さて、このたび使者をつかわし自分の意をつたえるが、そこもとも乱世に生きる武将として、よくよく事をわきまえ、問い返したり、いいわけなぞをせず、きっぱりと自分の意に従ってもらいたい。

それは、そこもとの内室を離別してもらいたいのである。内室は、長野家から出た女子であるし、いまの長野家は、わが敵上杉の家臣となっている。このさい、敵方の女を妻にしておらるることは、自分に忠義をつくすべき身として如何なものか——。このことは、いうまでもなくおわかりのことと存ずる。

内室離別のあとに、自分が、そこもとへ似合いの女を妻あわせたい。

信玄のいうことは当然であった。

結婚が政略のためというなら、離別もまた同様なのである。

上杉憲政なぞとは比較にならぬほどの英雄である武田信玄につかえている一武将として、このことを断わるわけには行かない。

断われば、今度こそ小幡の家の滅亡である。

「承知つかまつる」

と、武田家の使者にこたえて、使者が古府中へ帰った日の夜、信定は居室に正子をまねき、先ず、信玄の親書を見せた。

読み終えて、正子がしずかにきいた。

「離別なされますのか？」
信定は苦しげに首をふり、
「むむ……」
うめいた。
「離別でございますな？」
「ゆ、ゆるせ……」
「わかりましてございます」
「何事も家のため、子のためじゃ」
「なれど……わたくしは承知いたしませぬ」
「何――」
「厭でござります」
「ききわけてくれぬか」
正子は、じろりと信定を見やり、
「わたくしと共に、この城へ火を放ち、ほろび死いたそうお心になっては下さいませぬか」
「わし一人のことではないのだぞ」
「かまいませぬ。信真も信重も、父母にうらみをかけることはありますまい」
小柄ではあるが肉づきのよい妻の、どっしりとした姿や声に、信定は圧迫された。
だが、信定は気を取直し、

「いうな。武門のならいじゃ」
きびしく叱りつけると、押しかぶせるように正子が、
「先ず、おききなされませい」
夫の信定を怒鳴りつけたものである。
正子は、その場に老臣の猪子瀬兵衛をよびよせ、
「瀬兵衛殿は、十三年前、この城が敵の手に落ちたるとき、わたくしと子たちにつきそい、共に落ちのびましたる生き証人でござります。ゆえに、これからわたくしの申しあげますことは、すべて瀬兵衛殿が承知のことゆえ嘘いつわりではございませぬ」
それから、正子が語るすべてをきいたとき、小幡信定の顔面は蒼白となり、次いで見る見るうちに充血をした。
あの落城の夜、攻め入って来た敵軍が図書之介の裏切りによるものと知ったとき、正子は薙刀の鞘をはらい、まっしぐらに二の曲輪内にある図書之介の居館へ駆けつけた。
「御寮人、危のうござる。引返されい」
叫びつつ、猪子瀬兵衛も後につづいた。
於富が図書之介の侍臣数名に守られて脱出して来たのは、このときである。
「於富。待ちやれ!!」
曲輪東の走長屋の前で、正子は妹をよびとめ、
「そなたは、図書殿の裏切りを知っていやったな」

声をかけると、於富は悪びれもせず、
「いかにも――」
と、こたえた。正子は薙刀をかまえ、
「この城は、小幡信定が城じゃ。ゆえにこそ、そなたもわが妹ながら裏切りものであるぞ」
「姉上も降ったがよろしい。わたくしが取りなし、命のみは助けて進ぜまする」
「いうな――殿への申しわけに、そなたの首を討たねばならぬ」
叫ぶや、正子は猛然と薙刀をふるって突進した。
これを阻もうとする図書之介の侍臣たちと、猪子瀬兵衛ほか数名が揉み合うようにして激突した。
数時間の後に、城外へ脱し四人の子供たちをはげましつつ、稲含山の山腹まで来た正子の左手には、しっかりと於富の生首がつかまれていた。

猪子瀬兵衛が、
「御寮人に、かたく口どめをされ、今まで申しあげませなんだが、これは一大事にござる」
といい出したとき、
「いうな、瀬兵衛」
信定は立ちあがり、

「すぐさま古府中へまいる。馬の仕度をせよ。なれど、このことは誰にも申すな。わし一人にてまいるのじゃ」

「わたくしも――」

正子は目をつりあげ、懐剣を引きぬくや、いきなり自分の髪の毛を束ねて切り落し、

「夫婦共に武田の御館さまへ申しあげましょう」

と、いった。

間もなく、小幡信定は男装の正子と共に騎乗で城門を出た。

猪子瀬兵衛一人が、これに従った。

軽井沢から上田へ出て、雪の和田峠を越え、信定夫婦は五日目に古府中へ着いた。

信定は、すべてを武田信玄に語り、

「わが妻の赤心を、まだお疑いめさるるなれば、この場において首討たれようとも心残りはござりませぬ」

といい、正子も、

「裏切りしたる妹ながら、妹もまた夫にまごころをつくしたまでのことにございまする。わたくしとても、妹を好んで手にかけたのではございませぬ。ただ武門の女として順逆をあやまらぬためにいたしましたること。それもこれも、わが夫の城に汚名をきせぬためでございました」

たまりかねたようにいいさし、火のような双眸で信玄を見、

「わたくしは、小幡信定の妻にございまする」
凛然といい放った。
武田信玄は、瞠目して正子をながめていたが、ややあって、青々と剃りあげた入道頭を左手に撫でながら、
「昌信」
傍にいた重臣・高坂昌信をかえり見て、
「どうじゃ」
にやりと笑い、
「これほどの女御をわが妻にしてあれば、男どもの苦労は絶えようにの」
と、いった。
翌日、小幡信定夫婦は、晴れ晴れと国峰の城へ帰って行った。

（「小説新潮」昭和三十九年十月号）

紅炎

一

毛利壱岐守吉成（勝信ともいう）は尾張出身の士で、若いころから豊臣秀吉にただならぬ目をかけられ、秀吉が歿したときには、豊前・小倉の城主となり六万石を領していた。

関ヶ原戦役がおこったとき、吉成は五十二歳であったが、西軍に与し、

「もはや、ひとり立ちも出来ようから、貴さまが行け。わしは小倉を守る」

といい、一子・勝永に五百余の部隊をつけて出陣せしめた。

勝永は二十三歳の若い武将だが、初陣は第二次征韓軍に加わった二十歳のときで、父と共に勇戦奮闘し、ことに加藤清正が籠城をした蔚山の救援戦には、豪傑の清正が勝永のはたらきぶりに瞠目してしまい、

「毛利のせがれを、おれの養子にしたい」

しきりに望んだというが、勝永も大切な後つぎであるし、この縁談はまとまらなかった。清正に男子が生まれたのは三年後のことだ。

さて、関ヶ原のことだが……。

毛利勝永は、東軍の大将・徳川家康の首をはねてくれようといわぬばかりの意気込みで出て行き、あの天下分目といわれた九月十五日の決戦には、南宮山の毛利秀元や吉川広家の軍に属し、待機をしていた。

ところが、毛利・吉川の西軍は東軍と単独講和をしてしまった。

吉川広家は毛利秀元の叔父にあたる毛利一族の長老だし、すべては広家一人が、ひそかに家康と通じ、事をはかったため、秀元でさえ決戦の最中になり、はじめて単独講和の事を知ったほどである。

だから、その麾下にあって部隊をひきいている若い毛利勝永などに機密が洩れよう筈もなく、

「な、何という怪しからぬ……」

すべてを知った勝永が激怒し、

「ええ、もう、こうなれば、おれ一人でも……」

山を下り、戦場へ駈け向おうとしたけれども、すでに勝敗決していたという手後れで、

「おりゃ、父上に合わす顔がない」

勝永は、ふかく恥じた。

父親の方は、これまた九州にいて降伏である。

九州には加藤清正や黒田孝高（如水）がいて、これが家康のためにはたらき、小倉城も黒田勢の攻撃を受けて降ったのである。

何にしても、関ヶ原戦は天下分目の戦さなのであろうが後味の悪いことおびただしい。

どの大名も、きょろきょろと右顧左眄のありさまで、家康が勝つか三成が勝つか、戦さも始まらぬうちに勝つ方へ味方しておこうというのだから、これはむずかしいことであった。

「勝敗は戦陣が終えてのみ、はじめてわかる！」

といい切るほどの毛利勝永から見れば、

「あれは、まことの戦さではない」

ということになる。

南宮山の吉川広家へ密使をやり、単独講和をすすめたばかりか、みずからも家康のために九州の鎮圧に当った黒田孝高などは、もっと戦さが永引けば中央へ乗出し、あわよくば家康をしりぞけて天下をつかむつもりでいたともいわれている。

とにかく、西軍は負けた。

毛利吉成父子も、家康のとがめを受け、所領は没収である。

吉成父子は、約三十名ほどの家来と共に、土佐へ流された。土佐は永らく長曾我部氏の君臨するところだったが、当主の盛親が関ヶ原では西軍に荷担し、ろくなはたらきもせずに恥をさらした上、これも領国没収となり、代りに、山内一豊が封ぜられたばかりであった。

「折あらば、毛利のせがれを取立ててやりたいと思う。大事にあつこうてやれよ」

と、徳川家康が、ひそかに山内一豊にいった。

家康は、毛利吉成に助けられたことが一度ある。

秀吉が伏見城を築いたとき、家康は普請奉行を命ぜられたが、木材不足で音をあげたことがあった。むろん、木材は家康が負担しなくてはならぬ。

このとき、毛利吉成が、ひそかに豊臣家の木材を融通し、家康の難を救った。

このことは家康も忘れず、吉成も忘れていない。
土佐の山内家で監視を受ける身となって、その待遇ぶりから推しはかり、
（家康公は、まだ御忘れでないと見ゆる）
すぐに吉成は感じた。
そう思えばこそ、いさぎよく小倉の城を捨てて降伏したのだ。
吉成は、まだ若い勝永の将来へ大きな期待をかけていたのである。
山内一豊は、土佐へ入国し、新領主として民政をととのえると共に、浦戸から土佐郡・大高坂山に居城し、ここに城下町をいとなんだ。すなわち現在の高知市だ。
高知城の本丸・二の丸の工事が落成したのは慶長八年だが、この年すでに、毛利勝永は吉十郎勝家という子をもうけている。
妻は於喜佐といい、山内家の臣・柏原長兵衛の女で、だから、勝永が山内家の厄介者になってからの結婚ということになる。
於喜佐は肌あさぐろく、眉はあくまでも濃く、小柄ながらひきしまって、いかにも健康そうな肢体のもちぬしなのはよいが、
「せがれの嫁にというお心はかたじけないが、選りに選って、あのような……」
毛利吉成が、山内一豊の好意を怨んだほどの醜婦であったという。
このことを耳にした一豊夫人が苦笑を洩らし、
「於喜佐は勝永づれに勿体ないほどの女ごじゃというてやれ」

と、いった。

於喜佐は、少女のころから、戦国の名婦として知られた夫人につかえていて、この縁談も、夫人がいい出したものである。

「いずれ、勝永どのは世に出よう。縁づいて間違いあるまい」

と、夫人は於喜佐にもいいふくめた。

勝永夫妻は吉十郎をもうけた後、女子一人を流産させてしまい、それからは子が出来なかった。

毛利父子は、浦戸に屋敷をもらい、形ばかりの監視を受けて暮していたが、高知城が完成した慶長十六年に、父の吉成が六十三歳で病歿した。

このときの、勝永の看護ぶりは非常なもので、死にのぞんだ吉成が、勝永ひとりに、

「貴さまの孝養には何と礼をいうてよいか、筆舌につくしがたく、只、ありがたく思いおる」

といい、

「貴さまの身については思い残すこともない。徳川からのまねきあらば、つつしんで受けよ」

と、おごそかにいった。

勝永は表情も変えず、

「承知つかまつる」

しっかりと答えた。
それから三年後に、大坂戦争が起った。
山内家では、すでに一豊が歿し、養嗣(ようし)・忠義の代となっていたが、むろん徳川家康に従い、大坂の豊臣軍を攻めることになった。

二

毛利勝永が土佐へ流されてから、大坂冬の陣の戦端がひらかれるまで十五年を経ている。
勝永は三十七歳になっていた。
この十五年の間、勝永は、もっとも理想的な子であり、夫であり、父であったといえよう。
関ヶ原までの勝永は、
「我子ながら、まれに見る武辺者じゃ」
と、父・吉成があきれたほどで、平時でも暇さえあれば、馬、槍(そう)、刀術に熱中し、勝永が十八歳のときに歿した母も、
「吉千代（勝永の幼名）には一日も早う、嫁を迎えて下され」
病床にあって、しきりに夫・吉成へたのんでいたそうだ。
それが、敗軍の将として土佐へ流され、於喜佐を妻にしてからは、人が違ったようになったものである。
父にも妻にも、子にも、家来たちにも、勝永は微笑を絶やしたことがなかった。

いつも機嫌がよかった。

いつも他人のために奉仕をした。

醜婦だといわれた於喜佐が、夫婦になって一年もすると、まぶしいばかりの女の幸福を全身に躍動させはじめ、吉十郎が生まれると、さらに彼女は、

「このごろの嫁を見ていると、醜女ともいわれなくなったわい。以前、あれに悪態を洩らしたは、まことにすまぬことであった」

と、吉成がいうほどになった。

於喜佐が、たまに御城へうかがい、一豊夫人に目通りをすると、

「そなたの顔を見ておるだけで、そなたの果報がようわかる。ほんになあ……」

夫人は、つくづくとためいきをもらし、

「女ごを美しゅうするものは、男のみじゃ」

と、いった。

何しろ、毛利勝永の愛妻家ぶりは、

「それほどまでにせずともよい。それでは嫁がつけ上ってしまうぞよ」

吉成が皺だらけの顔をしかめ、小倉から附いてきた侍臣の船津四郎兵衛にいったほどだ。

吉十郎を生んだ、その産前産後などは、勝永はもう於喜佐の傍へつき切りになり、女中たちの手も借りずに世話をし、

「遠慮するな」

朝夕は必ず、妻の躰の凝りをもみほぐしたという。

勝永の奉仕は妻のみに向けられていたのではない。

同様に、父へも仕え、家来たちへも仕える。

主人が家来に仕えるというのは変なものだが、小倉から従って来た家来は、小者たちに至るまで、まめやかな主の配慮に感動しないものはなかった。

いくら優遇されているとはいえ、毛利父子は武家社会から追放された罪人なのであるから、いささかの贅沢もゆるされない。

勝永は、衣食の計を主人家来の区別をなくさせ、許可を受けて、父が小倉から持参をしたいくばくかの金銀財宝も未練なく家計へつぎこみ、これを平等に分ちあたえた。

さらに、妻の実家へ対しても心をつかい、柏原長兵衛夫妻につかえること、実父・吉成同様であった。

こうなると、於喜佐も黙ってはいられない。

嫁として養父の吉成につかえる態度に、真剣さとよろこびがみなぎっており、

「わしは、まるで配所に死ぬ気がせぬわい」

死の床にあって、吉成は感涙をうかべ、

「勝永はしあわせものじゃ」

嫁の手をとって何度もいった。

先ず、こういうわけで、毛利屋敷の人々は、十五年の間、貧しくとも春の陽光に包まれつ

くしたような歳月を送り迎えた。
その原動力となったのは毛利勝永みずからがしめした言動であってみれば、老臣・筒井丹後が吉成の後を追うようにして歿するとき、
「これまで、ようも為されましたな」
勝永をほめたたえた。
「武辺者が押しこめに会うてすることもないので、家をととのえることにしたのだ。ほめてもらうほどのことではあるまい」
勝永がこたえると、丹後は、
「家は人が生まれ、人が育つところ、これ一個の国――」
にらみつけるようにいい、
「若……いや勝永さま。爺は、あの世から……」
何かいいかけるのへ、勝永が押しかぶせるように、
「いうな。いうては味ない」
とどめた。このとき傍にいて於喜佐も数名の家来たちも、二人の胸底にひそむものをくみとれなかったようである。

慶長十九年秋――。
山内忠義は、軍をひきいて高知を発し、大坂城攻めに向った。

家康の命によれば、土佐（山内家）は和泉の沿海に舟師を以て碇泊、待機せよ、ということであった。

忠義を乗せた軍船が浦戸湾を出て行ったその夜に、毛利勝永が、妻をまねき、

「申すことがある」

にこにこと笑いながら、

「申しては、そなたを苦しめようと思うが、申さいでは夫婦の情がすまぬゆえ、申すことがある」

と、いい出した。

「はい？」

「このたびの戦さについては承知であろうが、……おれも、この十五年の間、この機を待っていた」

「は……？」

「豊臣家のための戦さに加わり、家康公の御首をこの槍先にかけよう機を待ち、いざとなれば土佐を脱し、大坂へ駈け向う決死の覚悟で、そなたと夫婦になったこと、さだめし心外に思われよう。また見性院さま（一豊未亡人）もお見込み違いにて申しわけなく思うが……それはそれ、これはこれ。いつ死ぬる身やも知れぬと思い、おれも懸命、そなたにも、親たちにも家来どもにも我子にも、心をつくしてまいったつもりだ」

「では、あの……」

「わかってくれるか」
「あい……」
「このことは、おれ一人の思案ゆえ、一人にて土佐を離れるが、後に残るそなたも吉十郎も、きっと、おとがめを受けよう。それを思えば、おりゃ……」
絶句したかと思うと、いきなり妻を抱き寄せ、勝永が叫ぶようにいった。
「おりゃ、それを思うと足も翹げられぬ」
「翹げずには、すまされますまい」
「むむ……」
「お心弱いことを申されますな」
於喜佐は感動し、興奮しながらも、
「この十五年の果報は百年にもまさりまする」
と、いった。
「おれも、そう思う」
「ほんに？」
「まことじゃ」
そして勝永は、
「関ヶ原での不覚は、この、おれという男にとって一代の恥であった。われからわれにあたえた恥であるから、これは男としてそそがねばならぬ。もし生き永らえても、この恥そそが

ねば、おれも死ぬに死ねぬわ。亡き父上は、おれが徳川に召出され家名をたてることをのぞんでおられたが、おれも死の床にある父上には強いてさからわず、安堵させておいた。なれど、おれが心は少しも変らぬ」

「その思いきわめたお心が、この十五年の間の、わが家のしあわせに結びついておりまするな」

「ふむ……そうかな」

「ありがとうござりまする」

このとき、一人息子の吉十郎勝家は十三歳であったが、すぐによびよせ、すべてを告げると、この息子は、

「父上と共に大坂へまいりまする。土佐にいて母上の足手まといになるのは厭でござる」

と、いい切り、頑として曲げなかった。

三

毛利勝永と吉十郎の父子は、船津四郎兵衛以下二十名の家来と共に土佐を脱出した。

そのころ、四郎兵衛は山内家に召出され、馬廻衆に取立てられていたのだが、

「たのむ」

勝永がもちかけると一も二もなく、

「御供つかまつる」

といい、たくみに工作をして、或る夜、武装の勝永以下を堂々と浦戸の浜の関船へ乗り込ませ、先に出発した軍船の後を追って出発する一部隊に見せかけて水主や楫取たちを召集し、あっという間に海へすべり出してしまった。

このことが、山内忠義を通じて徳川家康の耳へ入ったとき、

「しもうたわ」

家康は苦笑し、

「土佐にいる豊前（勝永）がことを、すっかり忘れておった……」

つまり、勝永を迎え、家名をたててやることを忘れていたというのだ。

だが、そうなったとして、家康は尚も苦い汁を呑むことになろう。

土佐でも、この事件は非常な評判となったが、見性院は、

「仕方のない勝永じゃ」

舌うちをしつつ、

「こうなれば、何も彼も仕方あるまい。於喜佐をおよび」

と、監禁中の於喜佐を召出し、

「大坂へ行きたいか？」

「はい」

「悪い女め。うまく、しめし合せたの」

「申しわけござりませぬ。なれど私も十五年の間、いささかも気づかずに……」

「ふむ……それは、まことであるな？」
「喜佐は嘘を申しませぬ」
「ふむ、ふむ」
沈思の後に、見性院が、
「よし、行きやれ」
「え……？」
「大坂へ行きやれ」
見性院は、於喜佐に衣服と路銀をあたえ、自由の身にしてやった。
於喜佐の実家には、何のとがめもなかった。

大坂冬の陣は、豊臣秀頼を中心に大坂城へこもる西軍九万七千。これを攻囲する徳川家康の東軍十五万五千余といわれた。
毛利勝永は、城の西方の外郭、今橋を守って五百の手勢をひきい、遺憾なく勇猛ぶりを発揮した。
勝永が大坂へ入ったときき、諸方に牢人として散らばっていた小倉時代の家来たちが続々と駈けつけ、総数二百をこえた。
冬の陣は、十一月下旬から約一カ月の間であるが、いわゆる〔天下の名城〕を落すための出血は容易なものではないと見てとり、老獪な家康は、たちまち和戦工作をすすめた。

西軍の抵抗は頑強をきわめた。

たとえば、東軍の池田忠継の部隊が、何とか今橋を突破しようと数倍の兵力をもって打ちかかるのだが、

「無理じゃ、無理じゃ」

と、毛利勝永は銃隊と槍組をたくみにつかいこなし、みずから槍をふるって敵中へ躍り込み、目も当てられぬほど引き掻きまわしてしまう。

「今橋は手うすじゃ。ぜひにも打ち破れ」

というので、家康は鉄の楯数張を池田忠継にあたえ、これを今橋の橋頭にたてて銃戦をやらせたが、どうしても突破出来ない。

あるときなどは、銃火が絶えたころを見はからい、勝永ひとりが馬をあおって駈け出るや、敵味方注視の中を、

「やあ！」

だだっと橋を渡り切って、東軍の鉄楯を蹴散らし、鉄楯にしがみついている敵十余名を、ことごとく槍先にかけ、はね飛ばしてしまったこともある。

東西の和議が成ったのは十二月二十日であるが、休戦となるや、船場口に陣をかまえていた山内忠義のもとへ、ふらりと毛利勝永があらわれた。

無断脱走の罪をわびると共に、その後の寛大な処置への、

「御礼を申しあげたく――」

と、いうのであった。

忠義も顔をしかめながら、

「女房どのも大坂へまいったそうな。まことか？」

この問いに、勝永がこたえた。

「城中の女どもと共に、飯をたき汁を煮ております」

「ふむ。吉十郎は？」

「このたびの戦さにて、首三つをとりました」

「あの小せがれがか？」

「おそれいります」

「どうじゃ。勝永。戦さも休みとなったのであるし、一度、大御所へ目通りをして見ぬか？」

「これは……」

勝永は笑い出して、

「それが出来るほどなら、わざわざ殿にそむいて土佐からはるばると出てはまいりませぬ」

と、いった。

冬の陣の和議は、大坂方が、みすみす家康の術中におちいっただけのことで、あくまでも豊臣の息の根をとめる決意の徳川家康は、大坂城の外濠から二の丸へかけての濠の一部を埋めたててしまい、またも開戦の口火をつけ、翌元和元年五月、ふたたび大坂城へ攻め寄せた。いわゆる夏の陣である。

このときは西軍が五万四千に減っているに反し、東軍は冬の陣と同じ十五万余を動員している。濠を埋められ、裸となった城にこもって戦うのであるから、敗戦は必至であった。

毛利勝永は、真田幸村・長曾我部盛親と共に、実戦派の三武将として戦陣の主力となった。

「この上は、只一つ、家康の首を討つのみ」

勝永や幸村の狙いは、この一点にしぼられている。

開戦となるや、激烈に両軍は闘い、五月六日の道明寺・若江の戦闘を皮切りにして、早くも翌七日には決戦となった。

四

開戦に先立ち、山内忠義は密使を派して、再び毛利勝永をさそった。

「古き意地を捨てて、名誉ある家名の存続を考え、東軍に降ったらどうか。大御所もお心にかけられて心配されておられることでもあるし……」

というものであったが、勝永は、

「それがしの意地は古くして、しかも日に日に新しく、この意地は他に張り通すものではこれなく、われとわが身に立て通すものゆえ……」

と、はねつけ、さらに、

「人の墓も三代を経れば無縁となるが常道でござる。ましてわが名、わが家の名など世に残そうとは思いませぬ。なれど……土佐侍従への御厚恩にむくい奉ることかなわず、おゆるし

ありたい」
申しそえた。
五月七日の決戦となった。
毛利勝永は、十四歳になった吉十郎と共に天王寺口へ出陣した。
天王寺口は、東軍主力を迎え撃つべき主戦場で、ここには真田幸村を総帥にした約一万五千が押し出し数倍の敵と対峙した。
決戦の火ぶたは昼ごろに切られた。
勝永は手勢一千余をひきい、正面から本多忠朝・浅野長重等五千の部隊と激突をした。
戦史に、こうある。
「……毛利隊の逆襲を本多の兵、支うるあたわず、たちまちにして銃卒七十余人、ここに死す。毛利勝永は、その隊を二分し、本多隊の左右を攻撃し、その左隊は本多の隣隊、すなわち秋田、植村、松下等の諸部隊を撃退し、ついに越前兵の右隊へ突入し……」
この越前部隊のすぐうしろに、家康の本陣があったのだ。
勝永の勇戦に呼応した真田幸村隊が、家康本陣目がけて突進し、家康が身をもって逃れたのは、このときである。
夏の陣は前後三日の戦いで終ったが、東西両軍二十万余が必死の攻防を展開したもので、このような大戦は、かつて例を見ない。
天王寺口の激戦最中に、大坂城内にいた於喜佐は、たまりかねて城外へ飛び出した。

衣服の袖口と裾を切りつめ、脇差を腰に、髪をつめた頭へ陣笠をかぶり、殺戮と叫喚と血しぶきが渦巻く戦場へ、彼女は夢中で躍り出した。

（出来得れば、夫と子の傍で死にたい）

この一念であったが、このため、於喜佐は反って生き永らえる結果となった。

天王寺口がついにやぶれ、真田幸村も戦死し、西軍総くずれとなったとき、

「これまで――」

毛利勝永は血と埃にまみれた凄まじい姿で、大坂城内へ戻って来た。

むろん吉十郎とは戦場で別れ別れになっている。

（父も、すぐにまいる）

城内へ戻ったが、於喜佐の姿はない。

勝永の最期が近づいた。

八日の朝（ひるすぎともいう）――。

勝永は、豊臣秀頼、淀君と共に自決をした。

戦記に〔……秀頼乃ち自裁し、勝永これを刎ぬ〕とある。

〔勝永の敵首を獲ること幾十級なるを知らず〕と記した史書もあって、その武勇については、どれもこれも讃辞を呈しているのを見れば、彼の活躍がまさに本物であったことが知れる。

於喜佐は、ついに城へ戻れなかった。

戻ろうとしたとき、東軍はひたひたと城を包囲しつくしており、彼女は地獄のような戦場

から、どこかへ消え去った。

後年、於喜佐は、

「死にそこないの尼でござりますよ」

と、よく人に語ったが、最後に死を思いとどまったのは、決戦の前夜の夫の言葉を思い起したからでもあった。

「死ぬるもよいが、共に相抱いて、というわけにもまいるまい。それならば、そなたには生き残ってもろうた方が、おれも吉十郎も心安まる」

と、勝永はいい、於喜佐が不満を訴えようとするや、

「土佐侍従にも見性院さまにも、われら夫婦は大きな負目を背負うてしもうた。ここを考えよ」

「いやでござります」

「まあ、よい。こうなれば、そなたの思い通りにせよ」

勝永の意は、もし生きていたなら、お前が山内家への謝意を何かの形でしめしてもらいたい、というのである。

死にそこねた於喜佐は仏門へ入り〔正栄尼〕となった。

見性院は、このことをきき、彼女に一庵をもうけてやった。これが元和二年秋のことで、翌三年十二月四日、見性院は六十二歳の生涯を終えている。

於喜佐の……いや正栄尼の庵は、洛北・松ケ崎にあった。ここに、山内家代々の位牌と、

夫勝永をはじめ毛利家のそれをそなえ、正栄尼はしずかな日々を送った。

山内家からは一庵をまもるほどのものが届けられたときいているし、まるまると肥った老年になった正栄尼の、意外にあかるく茶気にみちた挿話もあるが、もう語るべき余裕がない。天寿百歳をこえたといわれる絵師・住吉雪峰が正栄尼の依頼によって描いた毛利勝永の肖像が、いまも近江に残っている。

この画で見る勝永は、黒の鎧に、白地へ青竹の模様を縫いとった陣羽織をつけ、左手に太刀の柄頭を、右手に采配をつかんだ色白の顔の細い眉といい、すらりとした鼻すじといい、まるで天女のような美男子に見える。

この肖像の片すみに、次の一首がつつましくそえられている。

ひたすらにのぼりきはめん妹背山
黄泉路の君と語り合ひつつ

現代から約三百五十年も前に生きていた或る夫婦のはなしである。

（「オール讀物」昭和四十年七月号）

黒

幕

一

山口新五郎直友が生まれたのは、天文十三年という。

そのころは戦乱の世が、まさに高潮しつつある時期で、それまでの守護大名のほかに、武田、上杉、北条などの戦国大名が諸国に擡頭し、局部の戦乱が全国におよび、足利将軍の衰弱ぶりは、決定的なものとなっていた。

しかし、織田信長などは、まだ十一歳になったばかりで、父の信秀がようやく銭四千貫を朝廷に献じたりして、美濃の斎藤や駿河の今川などという大勢力を相手に苦闘をつづけていた。

尾張の土民の子の豊臣秀吉は九歳で、鼻水をたらしながら、いつも腹を空かせていたのだろうし、徳川家康に至っては、三歳の幼児にすぎぬ。

さて、山口新五郎のことだが……。

彼は、丹波国・新郷にある赤井時家の城で生まれた。

赤井時家は、新五郎の祖父にあたる。

新五郎の父・勘兵衛直之は時家の四男であるから、新郷の城にいて父や兄をたすけ、諸方の豪族と戦いつつ、妻を迎え、子をもうけたのだ。

勘兵衛の子は、新五郎ひとりであった。

「只ひとりの男子が、こんなやつで……」
と、勘兵衛が嘆いた。
難産でもあったが、新五郎はすこぶる病弱で、天然痘をやったときも死にかけた。このため、母親ゆずりの美しかった彼の顔は痘痕の蹂躙するところとなり、
「わが夫にうとまれた上、このような面だちとなっては行末が思いやられる……」
母は悲嘆にくれた。
少年の新五郎は、
「こやつの頸など、ひとにぎりじゃ」
と、父がいったほどの細い体つきだったし、ひまさえあれば居眠りばかりしていた。
「病弱ゆえ、心身が人一倍に疲れるのであろ」
などと母親は同情してくれたが、それにしても異常である。病弱のくせに幼いころから泣きもせず、笑いもせぬ新五郎は、読書もせぬし、武術もやらず（やったら、たちまちに発熱したり嘔吐したり大変なさわぎになる）とにかく、ぼんやりと目を細め、ひざを抱いて居眠りをするばかりだし、
「こやつ、啞か」
にくにくしげに、父の勘兵衛が怒鳴っても、ほとんど反応をしめさない。母の庇護がなかったなら、新五郎は父にしめ殺されていたかも知れない。
後年、新五郎は幼少の自分を思い出したものか、われから、〔眠牛〕などと号したが、と

てもとても、そのころになると眠り牛どころではない男になっている。

ところで……。

母が、新五郎十五歳の春に病歿をした。母も丈夫な女ではなかったらしい。母が死ぬや、忽然として、新五郎は新郷の城から消えた。

いくら探しても見つからない。

「母御前さまが亡くなられたのでは、この城に新五郎さまの居場所もあるまい」

と、彼をあわれむ人びとは、うわさをし合った。

父の勘兵衛は、

「探し出さずともよいわ。あやつめがいては、このおれが恥をさらすばかりだ」

むしろ、ホッとしたようにいった。

兄たちの子の中には新五郎と同じ年ごろのものもいて、元気に槍をかつぎ初陣の戦場へのぞむ。それを見ているだけに、勘兵衛も肩身がせまかったのであろう。

新五郎の行方は、その後、何年を経ても知れなかった。

「あのひ弱な体で生きておられる筈がない」

と、だれもがいったし、勘兵衛もそのつもりらしく、それでも息子の肌着を亡妻の墓に入れ、墓には新五郎の名をきざみこませた。

しかるにである。

何と二十余年を経た天正八年の秋に、新五郎が飄然と父の前へあらわれた。

この二十年間の天下の動静を語るまでもあるまい。

いまや、織田信長が「天下人」の座への最短距離に立ち、威勢は海内にとどろきわたっている。

勘兵衛直之は、あれから赤井の本家をはなれて独立し、越後・山口を領して山口勘兵衛を名乗っていた。

越後・山口は糸魚川の南三里、姫川の東岸にあり、根知の谷間の辺鄙なところだ。あまりに辺鄙すぎて攻めかかって来る敵もいない。

ここへ、新五郎があらわれたのである。ときに三十七歳であった。

「い、生きておったのか……」

まげもむすべぬほどの禿頭になった勘兵衛は、茫然と、成長した息子を見つめた。

新五郎は牢人の旅姿ながら小ざっぱりとした衣服を身につけていたし、

「か、変ったのう……」

勘兵衛が驚嘆したように、小柄ながら下腹の張った立派な体格であり、鼻や唇の肉も厚く〔あばた〕だけはどうしようもなかったけれども……いかにも風雪にさらしぬかれた逞しさが看取された。

変らぬのは、眠たげな細い両眼のみであった。

「今まで、どこにおった?」

という父の問いに対し、新五郎は、

「諸方に――」
と、こたえたのみで、くわしくは語らず、
「ときに、その後、父上はおひとりで？」
「いや。去年、二度目の妻が亡くなってのう」
「後つぎのお子は？」
「それが、女ばかり四人もじゃ」
「ならば、私めが戻りまいて、家をつぎましょう。よろしゅうござるな」
「おお……よ、よいとも」
目を白黒させつつ、この老いた武将は、
（こ、これが、あの新五郎なのか……？）
まだ、夢を見ている思いであった。
この日から新五郎直友は、二十年前の自分が、そのまま父のもとで暮しつづけて来たような自然さで、根知谷の居館に住みつき、間もなく家督をついだ。

二

山口新五郎が父と再会したころには、すでに武田信玄も死んでいたし、父・勘兵衛が従っていた上杉謙信も歿している。そのほか毛利元就、斎藤道三、今川義元、松永久秀、などという大名、武将たちも次々に死んでしまい、新五郎が生まれたころに変りつつあった時代の

様相が、また一つ新しく変ってきていた。

信玄亡き後の甲斐の武田と中国の毛利、この二つの大勢力が織田信長によってほろびたとき、天下は信長のものとなるであろうことは、だれの目にもあきらかに映じはじめた。

そして、武田はほろびた。

さらに毛利を、というところで、あの本能寺の変があった。

この明智光秀の反逆による信長の急死は、にわかに豊臣秀吉の擡頭をよぶことになる。

山口新五郎が徳川家康に召し出されたのは天正十三年の正月だというから、彼は四十二歳になっていた。

父のもとへ帰ってから六年の間、彼は何をしていたのか……。

一年のうち数度にわたり、新五郎は、

「ちょと出てまいります」

根知谷の居館を出て、数ヵ月を、長いときは半年一年を旅で暮した。

「いったい、どこへ出かけるのじゃ」

いくら勘兵衛がきいても、「別に……」とか「うむ……」とか、うめき声のような声を出すのみで、まったく反応がない。この点、子供のころのままの新五郎なのである。

（たよりないやつめ……）

勘兵衛は、じりじりしながらも、今となっては新五郎をたよるよりほかに道はない。ふしぎなことに、異母妹もよくなつくし、家来たちも新五郎の言動を信頼しきっている様子が見

える。

むかし、戦場でうけた古傷が六十をこえた勘兵衛の起居を不自由にしていた。

中央では、大きな戦さの流れが大勢を決しようとしているのに、この山の中の居館は平和そのものであった。軍事的にも政治的にも、まったく用をなさぬ僻地なのだし、五十名そこそこの家来たちを抱えている山口勘兵衛の存在などは問題にされないのだ。

（戦さがないのをよいことに、せがれめ、どこへ羽根をのばしに行くのか……？）

老いた自分にはあきらめきっている勘兵衛も、せっかくに後をついだ息子が、これから先、こんな山の中にいてどうするつもりなのだろう……と考え、ためいきが出た。

新五郎は旅から帰るたびに、数人の新しい家来を従えて来た。この家来どもは、入れかわり立ちかわり、根知谷を出て行く。そしてまた帰って来る。これらの家来たちが新造した新五郎の居館にいて、主と共に、しずかに暮しているのだ。

天正十二年の秋……。

「父上。そろそろ、山の中から出てもよいかと存じます」

と、新五郎がいった。

「何……」

「明年正月、浜松において家康公へ目通りをいたしまする」

「お前がか？」

「はい」

「ふうむ……ようも手づるがあったな」
「相応のはたらきをいたしましたゆえ――」
「え……徳川のために、はたらいたと申すのか？」
「いかにも――」
勘兵衛には、よくのみこめなかった。
どこから連れて来たものか、得体の知れぬ十数名の家来どもと一緒に、新五郎はよく旅をするが、そんなことで徳川家康ともあろう大名の気に入られるようなはたらきをしたとは、とても思えない。
「たのしみに、お待ちあれ」
いくらきいても、その〔活躍〕の内容は洩らしてくれず、せがれは侍臣八名を従えたのみで、また根知谷を出て行った。
せがれが帰って来たのは翌十三年の春である。
「父上。家康公につかえることになりました」
と、新五郎がいった。
家康は去年、日の出の勢いの秀吉と長久手に戦い、痛撃をあたえている。だが、何といっても秀吉が天下を制することは判然たるものがあって、それは山の中でちぢこまっている山口勘兵衛の耳へも入って来る。
「では、徳川の手につき、豊臣と戦うつもりか。危ういぞよ」

たしなめると、新五郎は、
「何、両家はいずれ手をむすびましょう。安心してござれ」
こともなげにいい、すぐさま旅立ちの仕度にかかった。
「み、みんな出て行くのか？」
「左様」
「どこへ行く？」
「家康公の命にて駿河・興国寺の城を守ることになり申した」
「何じゃと――」
勘兵衛はおどろいた。
興国寺城は、かの北条早雲の旧城で、以来今川、武田、北条などの大名が、交互に戦線の拠点とした要衝である。
いまは、徳川家康の重要な出城の一つであって、小田原の北条氏に対しての前衛基地でもあるだけに、家康は、この城を守らせる家臣の選択には入念をきわめたといわれている。
そのように大切な城へ、新参の山口新五郎がえらばれて入るというのだ。もっとも興国寺城には、松平清宗という家康の一族がおり、新五郎は、この下へつくことになるのだが、それにしても、破格の抜擢というべきであろう。
根知谷を発した山口家の行列は、主従、侍女たちもふくめて五十三名。もう馬にも乗れぬ老体を輿の上でふるわせながら、山口勘兵衛は、

「もはや、どうにでもなれ」
と、つぶやいた。
すぐ目の前の、馬にゆられている新五郎の、むっくりと前こごみになった背中は依然として沈黙している。
（ほんとうなのであろうか、せがれが家康公に目通りをしたというのは……？）
山峡の道は、ふき出したみどりの鮮烈な色彩に包まれていた。
中天から落ちかかる陽ざしをいっぱいにうけた新五郎の背中が、ゆらりとなった。
（や……？）
勘兵衛は目をみはった。
（せがれめ、馬上で居眠りをしておる……）
たよりなくもあり、不安でもあった。

山口勘兵衛直之は、この翌年に興国寺城で歿した。勘兵衛が、もし数年生きていたら、地味ではあるが着実な息子の昇進ぶりをたしかめ得たことだろう。勘兵衛が死ぬころまでの息子は、松平清宗の下にいて相変らず何をしているのか知れたものではない存在にしか見えなかったのだ。家来たちも新参の主人の下にいて何事にも不自由な目にあっていたし、
（根知谷におれば、一城の主でいられたものを……）
と、勘兵衛は悔いた。

勘兵衛殁して四年目の天正十八年。すでに四国・九州を平定した豊臣秀吉は小田原の北条氏政父子を囲んだ。

北条氏を殪せば、天下は名実共に秀吉のものとなる。

新五郎が予言したように、家康は六年前に秀吉と手をむすんでいたし、この小田原攻めにも、むろん一役を買った。

この年の春から秋にかけての小田原攻めは、まったく秀吉のペースによって勝利をおさめたが、秀吉は無駄な戦闘をあくまで避け、得意の謀略作戦によって小田原城を落した。

山口新五郎が、この謀略戦において、どのようなはたらきをしたか、それをのべると一冊の本になってしまう。

とにかく——戦後の新五郎が、一躍、下総・千葉郡のうち三百石を家康からもらったことによって、その活躍ぶりが察しられよう。それまでは家来ともども、家康から月給をうけていたのである。

六年後、新五郎は家康の近習に列し、上総・周准郡のうち二百三十石を加えられて合せて五百三十石となった。

三

これは、まだ山口新五郎が駿河守に叙任する前のことであるが……。

豊臣秀吉が、王城の地・京都をも制す〔天下人〕の居城として築いた伏見城の工事には、

諸大名も大いにはたらいたものだ。

このとき、徳川家康は普請奉行を命ぜられたのだが、工事の進行につれ、木材不足で音をあげたことがある。木材は家康の負担であるから、それが間に合わぬなどという失態を演じては天下の笑いものになるし、また秀吉に対しても面目を失することになるわけであった。

このとき、家康が重臣の本多正信と額を寄せ合い、顔をしかめて、

「間に合わぬか……」

「何せ太閤殿下の思うままに工事がひろがりますので、どうしても不足いたします」

「困ったの」

しきりに談合をしているのを聞いた山口新五郎が、

「おまかせ下されますよう」

と、いい出した。

「そち……」

家康は、やや、あきれ顔で、

「木材が、そちの頭の中からもひねり出せるのか？」

「はい」

「どうする？」

こんなときでも、新五郎は多くを語らぬ。主人に対しても亡父に対するときと同じような不得要領さで、

「おまかせ下されますなら、都合いたしましょう」
と、いう。
本多正信は、にやりとした。正信は徳川家きっての謀略家であり、彼が支配する諜報網の完全さは無類のものがある。その方面では、山口新五郎の直属長官ともいうべき正信だけに、
「新五郎、たのむ」
とだけいった。
いままでも、この「新五郎、たのむ」の一言で、山口新五郎が不可能きわまるスパイ活動を何度も敢行し、成功していることを本多正信は知っていた。
新五郎が受け合って去った後、家康が、
「あやつ、ふしぎなやつじゃ」
「まことに――身状はたしかなるものなれど、することは得体が知れませぬ」
「飼っておいて大丈夫かの？」
すると、本多正信は自信にみちたうす笑いを浮かべて、こたえた。
「私の目がねに狂いはございませぬ」
徳川家へ対する新五郎の忠誠には、うたがうべきものは何一つない、ということである。
このとき、山口新五郎は一夜のうちに膨大な不足木材を手に入れて来た。
何と新五郎は、秀吉の家臣で小倉六万石の城主・毛利吉成の大坂屋敷を訪問し、ひそかに豊臣家の木材を融通してもらうことを取りきめて来たのである。

報告をきいた家康は、
「新五郎。大事ないのか……もし殿下の御耳へ入ったなら、わしの立つ瀬がのうなるぞよ」
「おまかせ下されたし」
「なれど、ようも……」
あきれ顔になって、家康が、
「ようも、毛利吉成が承知をしたものじゃ」
というと、新五郎は只一言、
「古い知り合いでございましたゆえ――」
と、こたえ、さらに言葉をあらため、
「このたびの毛利家の心入れを、上様にもお忘れなきよう、願いあげたてまつります」
恩を着ておいてくれ、と、念を押したのである。
このとき、本多正信は居なかったが、家康はふかくうなずき、
「いうまでもないこと」
受け合ってくれた。
豊臣秀吉が病歿したのは五年後であるが、この翌年――慶長四年には、またも山口新五郎が手柄をたてた。
それは、こういうことだ。
薩摩の島津家の一族で、大隅と日向を領している島津家久の家老・伊集院忠真というのが、

主人の家久に反逆し、日向の庄内城へ立てこもった。

この主従の争いを調停し、うまく始末をつけたのが山口新五郎である。

これは、本多正信が、

「駿河守をつかわしましては――」

と、家康にすすめたのだ。

新五郎は、九州の地に知己が多いらしい。

先の毛利吉成ばかりでなく、島津家にも、肥前の大村などにも知り合いがいるらしいのだ。

秀吉が死んで、家康が大老の一人として天下の政務を見るようになってから、九州各地の大名の動静は、山口新五郎が組織した諜報網によって、つぶさに家康の耳へ入り、これが、関ヶ原合戦における重要な参考資料になったとさえいわれている。

山口新五郎は……というより、彼も、もはや徳川家の重要なポストについたのであるから山口駿河守とよぶことにしよう。

このころになると、山口駿河守は、伏見城下・京町の一角、現在の桃陵中学校のあたりに大きな屋敷をもらって住んでいたが、

「城内へうつれ」

と、家康から声がかかった。

秀吉亡きのちの家康の威望は、ゆるぎもないものだし、伏見城は家康のものといってよかった。

山口駿河守は城内三の丸に屋敷をかまえ、同時に〔伏見奉行〕に任ぜられた。

いまでいうと、伏見の市長のような役目をあたえられたわけである。

家康につかえてより十五年。駿河守の、黙々として目立たぬところではたらきつづけて来た実績が、ここに至り、ようやく花をひらいた感がある。

「得体が知れぬやつ」

などといいながらも、いささかも功をのぞまず、ひたすらに困難でいて地道な役目をつとめて来た駿河守を、家康も信頼せずにはいられなかった。

ときに、山口駿河守は五十六歳になっていた。

通常ならば、子や孫が何人もいてよい年齢なのだが、駿河守はまだ独身であった。

「そろそろ奥方さまを……」

むかし根知谷へ彼が連れて来た家来のうちの一人で、西野弥兵衛というものがすすめると、

「まだ、早い」

駿河守は、落ちつきはらっていう。

髪はまだくろぐろとしており、顔も体もふくよかに肉づいていて、あの、みにくかった〔あばた〕さえも、何となく福々しくなった顔貌を傷つけないほどの山口駿河守になっていたのである。

この二十年間に、彼は一度も病気をしたことがなかった。

四

やがて、あの関ヶ原戦争が起った。

このとき、西軍の総帥・石田三成の嫡子・重家は一種の人質として大坂城に残されたが、西軍の大敗をきくや、侍臣・津山甚内父娘にまもられ、京の花園妙心寺の塔頭〔寿聖院〕へ逃げ込んだ。

「捕えよ。三成ともども引廻しにかけ、処刑せよ」

と、大坂城へ入った徳川家康が命じた。

重家が石田の後つぎだけに、これは敗軍の大将父子が受ける当然の処置であった。

本多正信にも否やはなかった。

すると、

「お待ち下されたし」

山口駿河守が、家康の居間へ入って来、

「重家どのは、いまだ十二歳にすぎぬ年少にござります。命のみは助けまいらせ下されたし」

と、いい出した。

「ならぬ。そちにしては、やくたいもないことを申すではないか」

「実は、伯蒲和尚より助命嘆願がまいっておりまする」

伯蒲和尚が寿聖院の院主であることは、家康も知っている。だからといって重家を助けるわけにも行かぬ。これほどのことは伯蒲も駿河守も、じゅうぶんわきまえている筈ではないか……と、家康も正信も、にがにがしげに駿河守を見やり、

「おぬしからの命乞いなど、いささか、頭にのぼせておるのではないか」

今度は本多正信が、きびしく、たしなめると、駿河守は顔色も変えず、

「伯蒲和尚が、このたびの合戦において、どれほどのはたらきをいたしくれましたか、御存知でござりましょうや」

「何……」

「申しあげまする」

ここで、はじめて——石田三成の深い信頼をうけ、石田の居城・佐和山へも自由に出入りがゆるされていたほどの寿聖院の和尚が、徳川家のため、適確な情報を山口駿河守へ送ってくれたことを、仔細にのべたものである。

家康も正信も、駿河守も、京・大坂を留守にして会津の上杉征伐に向ったその留守に、石田三成は旗を上げた。一時は大坂城も伏見城も西軍のものとなった。

むろん、このことにそなえ、山口駿河守は配下の密偵を残しておき、上方の西軍のうごきの一つ一つを探知させたわけだが、このときの伯蒲和尚が提供した情報は、その後、家康の作戦や謀略に欠かせぬ資料となった筈だ。

「そもそも……」

と、駿河守は胸を張って、

「私めが伯蒲和尚と心をゆるし合い、和尚に石田家へ近づいてもらい、治少殿（三成）がたのみに思うほどの関係をむすばせたのは、もはや十年も前からのことにござります。和尚が、なぜに、このような忍びばたらきをいたしくれたものか、上様には御存知でござりましょうや？」

いつもは、細く眠たげに瞼の下へかくされている駿河守の眼球が、ぎらりと光って、

「私めも、また和尚も、天下をしずめまいらすものは上様をおいてほかになし、と、思うたからでござる」

怒鳴りつけるように、いった。

家康も正信も、こんな駿河守を一度も見たことはないだけに、一瞬、顔を見合せたまま、声も出なかった。

「和尚が、治少殿を裏切りし心も、すべては天下静謐をのぞめばこそにござる。いまここに、治少殿の遺子の命乞いをするも、この駿河守が十年前に、和尚へ受け合うたことにござる」

短刀を抜き放ち、いきなり自分の腹へ当てがって、駿河守は、

「いかが、いかが！」

と、絶叫をした。

すさまじい迫力である。

家康、ついに負けた。

石田重家は処刑をゆるされ、父・三成が捕えられて京の六条河原で首を切られたその日、仏門へ入って、のちに寿聖院三世、宗享和尚となった。

関ヶ原戦後も、引きつづいて山口駿河守は伏見奉行をつとめている。

そして、戦後の処理において、彼はまた功績をたてた。

またも、九州を相手にしての活動であった。

例の島津家は、関ヶ原の折、西軍に加わって、決戦の日には戦史に残るほどの猛烈果敢な退却作戦をやってのけ、九州へ引きあげた。

この島津家へ、同じ西軍の将・宇喜多秀家が逃げこんだのである。

秀家と共に、島津にも罰をあたえなくてはならぬが、何しろ九州・薩摩は本州最南端の国であり、これを領する島津家は豪勇無双をうたわれた荒大名であった。一族の結束もかたい。出来得るなら戦火をまじえることなく、島津を屈服せしめたい。

「またぞろ、たのむ」

と、本多正信にいわれ、山口駿河守が九州へ向った。

この交渉は、困難をきわめた。

薩、隅、日向を合せ七十万石の大守になっている島津義弘は少しもゆずらず、駿河守も、だいぶ苦労をしたらしい。

だが、ついに成功をした。

義弘の兄で国父となっている島津義久を説きふせ、先ず、義久を〔抗戦謝罪〕のため、上

京させることを得た。

この間、家康と島津家の間に入って交渉をまとめた山口駿河守の苦心は、なみなみのものではなかったらしい。

ついに、あれだけ頑強に家康へ抵抗をしめした島津家は、その領土を完全に確保することを得た。関ヶ原での敗軍大名の中にあって、これは島津のみが得た〔奇跡〕である。

いかに、薩摩という国、島津という大名の存在が特殊なものであったか知れようし、駿河守の該博な知識が、家康の硬化をふせいだことは事実だ。

山と海にかこまれた天険の国と、これを守る強兵——そこへ、はるばると攻めて行くような馬鹿なまねは、さすがに家康もしなかった。

そのかわり、宇喜多秀家が島津の手によって伏見へ護送されて来た。秀家は八丈島へ流され、五十年後、八十余歳をもって流人のまま死んだことを付記しておこう。

天下は、しずまった。

大坂城には、豊臣秀吉の遺子・秀頼がいるが、もはや天下は家康のものである。

家康が従一位に叙せられ、征夷大将軍となった慶長八年の暮のことだが、

「さて……わしはもう、はたらかぬぞよ」

と、山口駿河守が老臣の西野弥兵衛にいった。

「はたらかぬ、と、おおせられますと……？」

「戦さ仕事をせぬということよ。また上様おわすかぎり、当分は、戦さもあるまい、少なく

とも、わしがこの世を去るまではな」
「いかさま……」
「そこでじゃよ、弥兵衛」
「はあ……？」
「これからは、わしがいのちをたのしむ。いよいよ妻を迎えようと思う」
「それは、まことにもって……」
西野弥兵衛は狂喜した。
六十歳になったこのときまで、駿河守は養子をも迎えようとはしなかったので、弥兵衛にして見れば主人の結婚によって後つぎが生まれ、主家の存続についての不安が一掃されようというわけだ。
（なれど……お子が生まれようかな？）
また、不安になってきた。
弥兵衛が駿河守の家来となって三十年に近いが、この間、主人は一人の女をも近づけなかったことを知っている。
むろん、何度もすすめた。結婚がいやなら侍妾（じしょう）をえらんではどうか、と……。
すると、駿河守は、
「女もほしいが……女とまじわっては、わしの命が危ない。わしがな、いままで生きてあるのは、ひとえに酒と女を絶っておるからじゃぞ。まことに、われながら、味気なき一生では

あるが、これもな、味おうたことがなければ、それほどほしいものでもない。お前は、わしの体の仕組みを知らぬ。わしはもう、子供のころに死んでいた身なのじゃ。それが、こうして生きている。他人にはいいたくはないが、子供のときに父のもとをはなれ、二十余年もの間、諸国を放浪したそのとき……」

いいさして、そのときの駿河守の面へ暗い苦渋の色が濃く浮かんだことを、西野弥兵衛はおぼえている。

「わしはな、弥兵衛。おのれの体を、どうやら人なみにはたらけるものに仕たてあげるのに二十年もかかったのじゃ」

それが、いま、六十になってから、いよいよ女と酒に親しみたいといい出したのだ。

徳川家康が、これをきいて、

「余にまかせよ」

たちまちに乗り出したが、駿河守は、

「若き女性でなくば、いやでございます」

と、念を入れたものだ。

婚儀は、間もなく、ととのった。

伏見奉行として、家康にはなくてはならぬ陰の力として、山口駿河守の威勢は暗黙の中で大きい。諸方から届けられる贈物も、なまなかなものではないし、財力もすばらしいものであった。

慶長九年春――山口駿河守は結婚をした。

新婦は、家康の侍臣・石川内記の三女で於佐以といい、芳紀まさに十八歳。

六十歳の童貞聟と、十八歳の処女妻の結婚であった。

初夜があけ、寝間からあらわれた山口駿河守の顔は歓喜にかがやき、西野弥兵衛をよぶや、その耳へ口をつけるようにして、ささやいた。

「弥兵衛。女とは、あのようなものかよ」

「ど、どのような……？」

「まるで……」

と、主人がつばをのみこみ、

「まるで……春の夜の闇に咲く、桃の花に、埋もれたるごとき心地がいたしたぞよ」

と、いった。

桃の花は、たちまちに実をむすんだ。

長男の九郎三郎直堅が生まれたのは、翌年の二月七日である。

五

山口駿河守と九州との関係は非常にふかい。

こんな説もある。

彼が母の死をかなしみ、茫然と放浪の旅へ出て、餓死をしかけたとき、これを救ったのが

薩摩の某僧であって、彼は、その僧にともなわれて九州へおもむいた。のちに、九州を出て諸国をめぐりあるいたとき、駿河守は僧籍にあったともいう。

そういえば、伏見の山口屋敷を訪れる名も知れぬ托鉢僧が多かった。

駿河守は、これらの僧を手厚くもてなし、来てはまた去る僧たちに必ず喜捨の金をあたえたという。それも、なまなかなものではなかったらしい。

これらの旅僧がもたらす報告が、どのようなものであったか知らぬが、伏見にいるだけで、山口駿河守は諸国の動静をことごとく知悉していた。

いまや、彼は大和国・山辺郡へ采地をうつされ、丹波の郡代も兼ねて三千石の知行取りとなっている。

夫婦仲よく、女子の昌子が生まれ、ついで忠三郎直治が出生した。

「戦さは、もはやあるまい。じゃから何人の子が生まれてもよい」

と、駿河守は家庭人としての生活へ没頭した。

それにしても、伏見における彼の仕事は絶えることがない。

「金はいくらでもあるのじゃし、もう、わしも隠居してしまい、何もしたくはない」

孫のような妻に、駿河守は、よく洩らした。

「なれど、九郎三郎も、まだ幼のうございますゆえ……」

と、妻がいうと、

「何、西野弥兵衛を後見にしておけば大事ないことじゃわ」

事実、何度も家康へ隠居願いを出したようだが、ききとどけられなかった。

「駿河には、まだしてもらわねばならぬことが、いくらもある」

と、家康はいった。

伏見や大坂では、まだ故太閤の威光が消えずにいる。

大坂城の遺子・豊臣秀頼も元気に成長しつつあって、家康は孫娘の千姫を秀頼に嫁さしめ、表向きは交誼をむすんでいるが、一日も早く、豊臣の残照を消してしまいたいのが本心である。

だから、太閤の威光が、城や町に沁みついている伏見城下の姿を、先ず変貌せしめることに腐心をした。

町民たちの大坂への移住が相次いで、おこなわれ、山口駿河守の腕のふるいどころでもあった。

家康が駿府（静岡）へ城を築きはじめたのも、このころである。かつて、故秀吉が伏見城を築いたときと同じように、諸大名は家康の命をうけて駿府城の工事に従った。

大坂の豊臣秀頼へ対する家康の示威は、露骨になった。

大坂では、秀頼の母の淀君が、何事につけても家康へ反抗の気勢をしめす。

「これは、只事ではすまぬような気がしてきた」

と、駿河守が、或る夜、西野弥兵衛にいった。

「大坂との戦さが、……？」

「うむ。戦さになっても勝敗はあきらかじゃが、豊臣の遺臣たちも、このごろは諸方でさわぎ出したゆえな」

「なるほど」

「このごろの上様は、いささか、あせり気味じゃな」

いって、駿河守は顔をしかめた。

どう持ちかけても徳川家へ頭を下げようとはせぬ秀頼母子に対し、家康は、自分の目のくろいうちに、一日も早く片をつけてしまいたい、そして徳川の世の礎石を磐石のものとしておこうと決意をかためつつあるらしい。

「赤子の手をねじるようなまねをしては、上様がいままでしてこられた一切のことに汚れがつく」

駿河守が、つぶやいているうちに、駿府城の工事は、おどろくべき財力と労力を諸大名から提供させ、瞠目すべき早さで進行しつつあった。

故秀吉が、伏見城にのこしたおびただしい財宝の一切が、伏見から駿府へ運ばれたのも、このころである。

（これはいかぬ。あの財宝は秀頼公のものではないか……）

駿河守が舌うちをしているうちに、今度は、金塊二万二千貫、銀塊三千二百貫が、白昼堂々と駿府へ向けて運び出された。

この金銀も、秀吉の遺産であること、いうをまたない。

（上様は、ついに盗賊のしわざをはじめられた……）

そこには、天下を、世上の目をはばかる何物もなかった。

駿河守の目から見れば、家康は豊臣の遺産を強奪したのである。

これらの金銀財宝を、秀頼の手にわたせば、それが豊臣の大きな戦力ともなろうことは駿河守にもわかるが、

（もしも大坂と戦さ騒ぎになったとて、わたすべきものはわたし、いさぎよう戦ったらよいではないか）

さらに、

（このようなふるまいをして、豊臣方の怒りを買い、それを幸い、戦さをしかけようという上様の肚のうちもあろうが……それにしては、曲もないことじゃ）

あまりに露骨すぎて、うすぎたない、と駿河守は見たのである。

一年ほど前から、家康は、以前のように〔密談〕の席へ駿河守をよばぬようになっている。目通りする機会も少ないし、家康と本多正信が何を考え、何をたくらみつつあるか、いまの駿河守には全く知らされていない。

もっとも、しきりに隠居を願う彼の心をくんでのことなら、むしろ家康の好意をよろこぶべきであったろう。

（よし）

山口駿河守は、ひそかに期することがあった。

駿府城の完成を前に、駿河守が一世一代の隠密活動が開始された……といっても、彼は相変らず妻や子とむつまじげに暮しており、例によって居眠りの合間に、伏見の民政をおだやかに取りおこなっている。

駿河守の指令を受けた老僧が一人、この年の夏ごろに伏見から出て行ったのだが、山口邸に入れかわり立ちかわりする旅僧の出入りは何年も前からのことだし、だれも、これをあやしむものはなかった。

駿府城は完成した。

そして、完成して間もない十二月二十二日の夜、怪火を発し、全焼してしまったのである。

家康は駿河にいて、大いにあわてた。

出火の原因は、どうしらべて見てもわからなかった。

〔徳川実記〕には——其かみ、豊臣太閤より進ぜられた白雲の茶壺、正宗の御脇差、獅子の笛等も焼けぬ——とあって、伏見から運びこんだばかりの財宝にはふれていないが、これらのものも一切焼けつくした。

駿府城全焼の報が伏見へとどいたとき、山口駿河守は西野弥兵衛のみをまねき、

「うまく行ったようじゃな」

「いかさま——」

「上様もな、まさかに、このわしが火つけの張本人じゃとは気がつかれまい。ふ、ふふ……山口駿河守は、むかしより忍びばたらきをして徳川につかえて来た男なれど、おのれの主人

が盗みをするのを、だまって見てはおらぬ男よ」

いうや、にやりとして、

「さて、駿府へ、上様の御見舞いに出かけようかの」

と、立ち上った。

駿河守が騎馬で駿府へ駆けつけるや、

「老体、ようも馳せ参じた」

家康は大いによろこび、駿河守をねぎらったという。

翌慶長十三年二月——。

駿河守の妻・於佐以が急死をした。

かるい風邪をこじらせたのだ。

六

それから七年後の大坂戦争で、豊臣氏は完全にほろびた。

ときに、徳川家康は七十四歳。山口駿河守は七十二歳になっていた。

大坂の役にも、駿河守は出陣をしたが、かつての関ヶ原のときのような活躍をしたわけではない。

「遊んでおれば、よいのじゃ」

陣営で居眠りばかりしていた。

豊臣滅亡を見とどけるや、家康も本多正信も相次いで病歿してしまったが、

「また、嫁をもらいたくなったわい」

駿河守がいい出した。

元和三年三月十五日に、後妻を迎えたが、この女性は戸田左門一西のむすめで名を栄といい、年は十九歳。新郎は七十四歳。

「やるのう」

と、大名たちの間でも評判であった。

これまた、すこぶる仲がよく、一年も経つと異常な事態がおこった。

そのころ、駿河守は頭をまるめ〔眠牛〕とも〔恵倫〕とも号しており、尚、伏見城の定番に任じ、町奉行をも兼任していた。

その伏見屋敷の寝間に近い一隅に異変がおこったのである。

駿河守は、ここへ夫婦用の厠を新築したのだ。

なるほど便利ではあろうし、そのことだけなら別に異常というべきことではあるまいが……厠の内部がすごかった。

事実であるから、書く。

内部のひろさは約六畳。清らかな青畳をしきつめ、床には住吉雪峰えがくところの桃花の軸がかけられ、ふくいくたる香のにおいがたちこめている。

この真中に、つまりその、用を足すべき便器が二つ、仲よげにならんでいるのであった。

つまり、厠へ入るときも夫婦は離れたくない、と、いうのである。

これには、六十五歳になる老臣・西野弥兵衛も閉口し、

「いかになんでも」

と、いさめた。

「なんでも、どうしたというのじゃ？」

「家中のものどもへの手前もお考えあそばさぬと……」

「よいではないか。家来ども、そしてお前も、わしを見習え」

駿河守は平然たるもので、

「わしの一生は……わが身の病弱と、この、あばた面によって端を発し、それあるがゆえに出来上ったものじゃ。六十をこえて、はじめて女体に接し、酒の香をかいだわしは、わしのいのちが命ずるままにしておるだけのことよ」

ほがらかに哄笑した。

家康亡きのち、二代将軍・秀忠を中心とした徳川幕府は非常な意気ごみをもって諸大名統治のための政策を押し出しはじめた。

めまぐるしいほどに、大名たちの移封や取りつぶしがおこなわれ、徳川将軍の威望をたかめるためならば、どのような陰謀も暗殺も幕府はいとわなかった。

こうした情報が流れてくるたびに、山口駿河守は顔をしかめていたが、ついに、

「以後は、もう、わしの耳へ入るるな」

きびしく、西野弥兵衛へ命じた。

元和八年九月二十四日の未明であったが……。

いびきなどかいたことのない夫が、すさまじいばかりの鼾声をあげて眠っているのに気づいた妻の栄が、

「もし……もし……」

ゆりおこしたが、目ざめぬ。

異常であった。

すぐに侍医がよばれたが、首をかしげるばかりである。

三日間、こんこんと眠りつづけていたが、二十七日の夕刻、ぽっかりと目をひらき、つきそっていた栄を見あげ、駿河守は、にっこりと笑った。

栄が、うなずいて、夫の手をにぎりしめてやると、駿河守の唇が、かすかにうごき、

「世は……男と女……」

といい、また微笑を浮かべたまま目をとじ、そして、もう二度とひらかなかった。

（「小説新潮」昭和四十年十二月号）

槍（やり）の大蔵

一

人の一生には、思いもかけぬことが待ちうけているものだが、十九歳の雨宮大蔵を待ちうけていた宿命は、若い大蔵にとって、何ともむごいものであった。

その事件が起ったのは、慶長三年秋のことである。

太閤・豊臣秀吉が、伏見城に病歿したのは、この年の八月だ。

そのため、再度の朝鮮出兵の第二軍として、肥前・名護屋へ集結していた諸大名の部隊は次々に陣所を引きはらい、領国へ帰って行った。

秀吉の死後、長老である徳川家康や前田利家などの議決により、ただちに朝鮮再征のことが取りやめとなったからである。

雨宮大蔵は、真田家につかえるものであった。

真田家では、当主の昌幸・信幸の父子が、千余の部隊をひきつれ、名護屋に駐屯していた。

「いよいよ、取りやめとなったか」

真田昌幸は、早くも先年の第一次・朝鮮戦の失敗に気づいていたし、

「太閤殿下が亡くなられたとあれば、ふたたび天下は麻のごとく乱れるやも知れぬ。早う国もとへ帰り、われらも、いざというときの仕度をせねばなるまい」

部隊をまとめ、九州の地から疾風のように伏見へ引き返してきた。

秀吉亡きあとの伏見城で、もっとも重きを加え、すべてを取りしきっていたのは、徳川家康である。

「たぬきめが、のさばりはじめたわえ」

もともと家康が大きらいな真田昌幸であったから、諸大名がひしめき合いつつ、今後の政局に動揺しているのを尻目にかけ「わしは引きあげる。おぬしは、京へ帰り、わしの代りをつとめてくれい」と、上州沼田領主の長男・信幸に命じ、部隊を従え、信州・上田の領国へ帰ってしまった。

真田家では、伏見にも屋敷をもうけてあったが、京都にもある。

京の地に、秀吉が豪華壮麗な〔聚楽第〕をいとなみ、豊臣の天下をほこり、諸国大名いずれも、その威風のもとに屈したころ、真田家でも、京都室町へ屋敷をかまえてあった。

聚楽第は三年前に取りくずされて、その一部を伏見の城内に移したが、真田家では、その後も、屋敷を引きはらっていない。

真田信幸は、七十余名の家来と共に京都屋敷に滞在し、天下の形勢をうかがうこととなった。

信幸の近習をつとめる雨宮大蔵が、京都屋敷にとどまったことはいうまでもない。

「大蔵。朝鮮まで戦さをしに行かずにすみ、よかったな」

信幸は、いたずらっぽい微笑を大蔵に投げかけて、そう言ったものだ。

大蔵は、軀中が恥かしさで燃えるようになった。自分の心のうちにひそんでいた恐怖を、

ずばりと主人に指摘されたからであった。

父の助七郎が死んで、大蔵が召し出されてから三年になる。そのときにはすでに、豊臣の天下となっていたから、大蔵は戦場での経験が、まったく無いのだ。

だから、真田の家来たちは、大蔵を特別な臆病者（おくびょうもの）だとは思っていない。主の信幸だけが、するどく、大蔵の胸のうちを見ぬいていたのである。けれども、信幸は、

「大蔵は役にたつ男じゃ」

家老たちにも、そう言っていた。

小姓から近習に進ませ身近くつかうのも、大蔵の気働きが、すぐれているからだ。書もうまいし、文章もよくする。囲碁の好きな信幸が手ほどきをしてやると、結構、夜の閑暇の相手がつとまるようにもなる。大蔵の黙々と働く誠実一方の人柄（ひとがら）を、信幸は愛していたのである。

（武勇のみが奉公ではない。大蔵はあれで、いまにきっと大事な役目を果してくれるようになろう）と、信幸はそう考えていた。

そろそろ、大蔵の宿命について語らねばなるまい。

その日――。

雨宮大蔵は、はじめて遊女を買いに出かけたのだ。

京の柳町の遊里は、天正年間に豊臣秀吉がつくらせたもので、万里小路（までのこうじ）通、二条押小路の南北三丁の間を上中下の三町に分けてある。

諸国から、京や伏見へのぼってくる大名たちの家来が、暇をぬすんで都の遊女へ入れあげるのも無理はないところで、

「はるばると国もとを出て、戦さもせずに戻ったのでは何の益するところもないが、京へ残れたのが幸いじゃ」

「国の女どもとは、肌ざわりが違うわい」

「匂いも違う!!」

「声も違う!!」

勇猛をうたわれる真田の武士たちも、なかなかうるさい。

（おれも、行って、見たいな……）

大蔵は、十九歳の今まで、一度も女体に接したことがなかった。当時の男としては「おくて」の方だと言えよう。

刀槍をとっての働きを考えただけでも気が滅入る大蔵なのだから、未知の女体にも、一種のおそろしさをおぼえていたものか……。

だが、このみちだけは大蔵も何時かは踏み入れねばならぬものであり、彼の若い健康な肉体につきあげてくる本能的な渇望に、うちかてよう筈はない。

編笠に顔を隠し、ひょろ長い体をかがめるようにして、ついに大蔵は、柳町下の町の娼家の軒をくぐった。

「あれまあ、何とよい男わいの」

紅殻塗りの格子内から大蔵が入って来るのを、すばやく見つけた遊女の一人が、有無も言わず、大蔵にからみついてきた。

秋の陽は、まだ高かった。

奥まった小部屋へ引きこまれた大蔵に、相手の女をえらぶ余裕はない。

ただもう、目がくらむような思いで、にたにたと笑いかける遊女の、壁のように塗った白粉の顔が、ぼんやりと見えるばかりだ。

「まあ、何を、きょときょと、しておるのじゃ。さ、早う……」

大蔵の軀は、ぶるぶると震えつづけていた。

閉めきった真昼の部屋の中には、女の脂粉の香と、大蔵の汗ばんだ軀から発散する若者特有の強烈な体臭とが、むんむんとたちこめている。

「まあ――」

遊女が、おどろきと感動にみちた叫び声をあげた。

「こなたは、女を抱くが、初めてかえ」

「む……」と、大蔵は、うつ向いた。

「まあ。まあ、まあ、まあ……」

遊女たちが童貞をよろこぶのは、古今を通じて変りがなかったものらしい。

このときから、その露野とよばれる遊女のもてなしが、がらりと変った。

露野という、しおらしげな名とは違い、その遊女は、たくましい顔と軀を所有していた。

眼と唇だけは、やさしく細い感じなのだが、そのあとの彼女を形成するすべてが、力にみちた肥やかさなのである。

露野の肉塊をつつむ肌が、意外になめらかなのに大蔵が気づいたのは、ずっと後になってからであった。

（こ、こんなものなのか、女とは……）

はじめは、露野に抱きすくめられ、むしろ、みじめな気持で〔男〕になった大蔵だが、

「こうなれば、売りもの買いものを離れてつとめるわいな」

露野は、もう夢中となった様子で、秘術をつくし、大蔵にいどみかかるのだ。

そうなると、さすがに大蔵の十九歳という年齢は、露野の挑発にも立派に対応出来て、

「まあ、まあ、可愛ゆいこと、可愛ゆいこと……」

露野の歓喜と同時に、大蔵も（こんなものか……）が、（な、何という愉楽であろうか……）に変じた。

そこで、異変が起ったのである。

秋の陽が、かたむくのも知らず、大蔵は、全力をつくし、露野の愛撫にこたえていたのだが、そのうち、露野は感きわまったのであろうか……。

「大さま、大さまあ！」

おぼえたばかりの大蔵の名を連呼しつつ、大蔵の口中へ舌をさし入れてきたかと思うと、興奮のあまり、

「う、う、う……」

大蔵の舌に嚙みついてしまったのだ。

大蔵は、血泡の吹きこぼれる口から悲鳴とも呻きともつかぬ異様な声を発して、ころげまわった。

大蔵の舌先は、完全に嚙み切られていた。

二

舌を嚙み切って死ぬ、と、よく言われる。

これは出血多量のために死ぬのであって、手当が早ければ、一命を取りとめることも出来る。

雨宮大蔵の場合は、手当が早かったのと、嚙み切られた箇所が舌の長さの半分に達してはいなかったのが幸いで、命拾いをした。

命は拾ったが、大蔵は言葉を捨てなくてはならなかった。

つまり唖になってしまったのである。

口を閉じて、上下の歯のうしろ側に舌先がとどかないと、言語不能となるのだが、しかし「あわ、わ、わ――」とか「ぎ、ぎぎ。ぐう、ぐ、ぐ……」とか、得体の知れぬ発声を行うことは出来た。出来たが、これならしない方がよい。

そのときは、大蔵も気絶をしてしまい、露野も蒼白となって、手当に駈けつけた人びとが、

「さむらいのくせに、舌を噛み切って死ぬつもりやったのかいな」
「刀があるのやから、腹切ればよいに――」
「何ぞ、死なねばならんようなことでもあったのかいな？　どうじゃ露野」
こう訊かれると、彼女は、もう声も絶え絶えに、
「そんなふうには、み、見えませぬように、思うたが……」
その夜更けとなり、大蔵の命が助かると知ってから、露野は、柳町の遊里を脱走した。
番所からも人が出て、すぐに手配をしたが、ついに、露野は行方不明ということになってしまったのだ。
雨宮大蔵の身もとも、間もなく知れた。
真田家でも大蔵が帰邸しないので、捜査をはじめたからだ。
「言語道断なやつだな、大蔵めは――」
「事もあろうに、遊女の部屋において、舌、舌をなあ」
「真田家の恥さらしじゃわい」
「なれども、なぜ、自害をはかったのかのう？」
「それよ、そのことよ。おれにもわからぬ」
真田屋敷では、大蔵の噂で、もちきりであった。
屋敷内に連れ戻された大蔵は、口中いっぱいに、ねばねばと塗りつけられた膏薬もようやくとれ、やや元気を取りもどしてから、主・信幸の直き直きの調べを受けた。

「何故、そちは自害をはかったぞ？」

さすがの信幸も、まさか女に舌を噛み切られたとは思わなかった。けれども、あの事件のあった夜、女が逃げていることによって、大蔵の自害は、きっと、その女に関係があることだ、つまり痴情の成行から……と、こう人びとは見ていたのである。

それも、大蔵が何ひとつとして申したてず、調べの答えについては、傍に料紙と筆をおいてやり、それに書いてしめせと言うのだが、頑として自白をしない。

ひょろ長い体軀は痩せおとろえ、少々顎が長くても、まず美男のうちに入ろうという大蔵の顔貌は、どす黒く憔悴し、何となく鬼気のようなものが、ただよっていた。

「よし。人払いをしてつかわす。よって、何も彼も、わしには話せい」

真田信幸は、まだ三十を越えたばかりであったが、後年は真田の賢君とうたわれただけに、領民や家臣へかけている愛情には只ならぬものがある。

人払いをした上で、尚も信幸は問いつめてみたが、

「ふうむ……そち、何時から、そのように強情ものとなったのだ」

信幸は呆れた。

ほとんど表情のない両眼をうつろに見はったまま、雨宮大蔵は、かすかに唇のあたりを震わせるのみで、一語も口に……いや、傍の筆を手にとろうともしないのだ。

信幸も匙を投げた。

ともあれ、武士たるものとしての大蔵の失態を見逃すわけには行かない。

翌慶長四年の春に、真田信幸は自分の城がある上州・沼田へ引きあげたが、同時に、大蔵も近習役目を解かれた。

その後の雨宮大蔵が、真田家中の笑いものになったのは言うまでもない。

そして大蔵は、長柄足軽に落されたのである。騎士から歩卒へ左遷されたわけであった。

「お前は、まあ、何ということを仕出かしたものじゃ」

母のおふくは、大いに嘆き哀しんだ。母一人、子一人なのだ。

大蔵の家は、真田の居城がある上田から約十余里、千曲川に沿って北上し、善光寺平の南西にある妻女山麓、雨宮村から出たもので、かつて武田信玄に仕え、雨宮七十騎とよばれた豪族の分れであった。

大蔵の父・雨宮助七郎は生来の病身でもあり、真田昌幸に仕えてからも目立つほどの手柄も働きも無かった。それだけに、一人息子の大蔵へかける期待も大きかったらしく、

「おぬしの働きにて雨宮の家を再興してくれよ。たのむぞ、よいか。たのむぞよ」

死ぬ前にも、大蔵の手を握りしめ、くどくどと言いのこしたものだ。大蔵と名づけたのも、一人息子への期待があったからだ。

大蔵は、閉口しきっていた。

刀槍のひらめきや血しぶきの中に馳せまわり、敵の首を討ちとるなどということは、考えただけでも、ぞっとした。

「お前が甘く育てたからじゃ」

父親は、学問好きで温和な少年となった息子を見て、母のおふくにも当り散らした。

幸いに、父親が死んだとき、信幸が「助七郎のせがれがおった筈じゃ。呼び出せい」と思い出してくれ、その才智を買って近習役にまで引き立ててくれたのを、おふくは、どんなによろこんだことだろう。

（敵の首などとらぬでもよい。殿さまのお傍にあって、どうか無事にその日その日をすごしてくれますように――）

おふくの願いは、これ一つであった。

それだけに、唖となった息子を見ての、おふくの悲嘆は言うべくもない。そればかりか、おふくは城下の道を歩むのにも体をすくめ、罪人のようにうつ向いて行かねばならぬ。大蔵への嘲笑は、しつっこく消えなかったのだ。

「なぜ、そのような、おろかな真似をしたのじゃ？　母にだけは言うてたも。たのむ、たのむぞや」

しきりに問いつめたが、依然として、大蔵は沈黙の殻の中に閉じこもったままである。

家中のものの手前、大蔵を手放した真田信幸は、

「あやつがおらぬと困る」と、こぼしていた。

好学の信幸にとって、書籍の写本をさせるために、大蔵は無くてはならぬ存在であったらしい。

親類筋にあたる京の公卿・菊亭大納言家から借りた珍しい書物も、大方は大蔵の見事な筆

蹟によって写しとらせてきたものだ。

慶長四年は、いよいよ風雲をはらむ年となった。

石田三成を中心とする豊臣の遺臣と、天下の人望を着々と集め、将軍位をねらう徳川家康との間には権謀術数が錯綜し、しかも、同じ豊臣の遺臣でありながら石田三成を憎む加藤清正や福島正則など武断派の諸将たちの動きは、微妙をきわめてきている。

このころから、雨宮大蔵の姿が、ときおり、沼田城下から見えなくなることがあった。

大蔵は御組屋敷内に、母と二人で住んでいたのだが、非番の日には必ずと言ってよいほど、城下を出て姿を隠した。

「ふむ……何を思いたったものか……」

真田信幸は沈思してみたが、わからなかった。

思いきって、父の昌幸に大蔵のことを話してみると、

「人間というものはの、わからぬことだらけじゃ。ま、よいわえ。放っておけい」

そんなことよりも、昌幸老人は来るべき天下分目の戦雲をのぞみ、雄心勃々たるものがあったのだ。

「太閤殿下なら下に従うてもよいつもりじゃったが、徳川のたぬきめの下になびくのは厭じゃ」

長男の信幸は、故秀吉の仲介によって徳川家康の養女（実は本多忠勝の娘）を妻に迎えているくせに、

「あのときは、わしとたぬきめを仲直りさせようとの太閤殿下の取りなしを、断わり切れなかったからじゃよ」

おくめんもなく言って、信幸を苦笑させている。

慶長五年七月――徳川家康は会津の上杉氏を征討するために軍を発し、江戸城を出た。

真田家も、家康の勢力が要請する出陣を無下にはねつけるわけにも行かず、

「まあ、仕方がないわえ」

昌幸は、信幸・幸村の二子と共に部隊をひきいて奥州へ向った。

このとき、沼田城を発する部隊の中に、雨宮大蔵を発見した真田信幸は、目をみはった。

いや信幸ばかりではなく、家中の武士たちも、一様に大蔵を注目しないわけには行かなかったのである。

陣笠をかぶり、皮胴をつけ、小田籠手をつけた腕に抱えている大蔵の槍が、先ず人びとの目をうばった。

その槍は二間半の長柄のもので、槍の身は鍵槍となっているのだが、問題は、その柄であった。

柄の太さは、尋常の槍の二倍に近いもので、しかも石突きから水返しを越えた二尺ほどへ、びっしりと筋鉄がはめ込まれてあるのだ。

まるで槍と鉄棒とを一緒にしたようなものだから、このような重い武器を、軽々とひっさげている大蔵を見て、

「む、む……」

信幸が唸ったのも無理はない。

思いなしか、ひょろ長い大蔵の体軀にも筋骨の張りが出てきたように見える。

陣笠の蔭にある顔は、馬上の信幸からよく見えなかったが、一文字に引きむすんだ大蔵の唇には猛然たる闘志があらわれていた。

先発する長柄足軽の一隊の中の雨宮大蔵を見送りつつ、

「変れば変るものだが……」

真田信幸は、尚も首をかしげていた。

三

七月二十四日——。

会津へ進む徳川軍本営に、江戸城から急使が飛来した。

石田三成挙兵の知らせであった。

ここに、あの関ヶ原合戦の幕は切って落とされたわけだ。

「さあ、来たぞよ、来たぞよ!!」

会津征討の一軍として、野州・犬伏に陣を張っていた真田昌幸のもとへも、石田三成からの密使が潜行して来たのである。

「来たわえ、来たわえ。こうなれば、もう徳川の狸にくっついておらずともよい。ただちに

引返し、西軍に加わり、狸めに一泡ふかせてくりょうず」

昌幸は勇躍した。この老人は、猛虎とうたわれた武将だが、武田信玄・豊臣秀吉という二大戦国大名を心から尊敬し、愛情をかたむけてきた。したがって、真田家の戦国の世における推移は、この二大勢力の興亡と共にあったと言ってよい。

そのかわり、武将というよりも政治家としての大きさをそなえてきつつある徳川家康に対しては、

「何をするか知れたものではないわ。腹のくろいやつよ。武人は武人らしゅう、からりと槍をとって戦いぬく気魂を忘れ、たぬきめの腹の中は、もう謀略だけで一杯になっとる」

ともすれば——というより、今はほとんど天下をつかみかけていると自他ともに許しているかのような徳川家康に対し、亡き秀吉の寵臣・石田三成を中心に集った豊臣恩顧の大名が十余万の軍勢を集めたと、三成からの密書は知らせて来ていた。

「おそらく、徳川軍は十万に足るまい。やはり太閤殿下の遺徳、思い見るべきじゃ」と、昌幸は叫んだ。

次男の幸村は、むろん父・昌幸に従うつもりであったが、信幸だけは、

「父上。石田方は烏合の集りでござる。軍勢の大小によらず、徳川は譜代の方々が、しっかりと家をかため、全力つくして事に当りまする。父上も、わが真田の家を守らんと思召すなら、間違うても西軍に走るべきではございませぬ」

はっきりと言い切った。

「黙れ！　おぬしは徳川からもらった女房に鼻毛をぬかれたのか！」

ここに、真田家は二つに割れた。

昌幸・幸村は、千余の部隊をひきい、その夜のうちに上田へ引きあげてしまった。

信幸は父と弟に別れ、八百の部隊と共に小山の徳川本営へ駈けつけ、すべてを家康に語った。

「よい、よい。わかっておる」

家康は、かねてから深く信幸の人柄を信頼していたから一片の疑惑も抱かなかったが、

「なれど野放しには出来ぬ。あの老人、何を仕出かすか知れたものではないゆえな」

「は――」

家康は、軍をまとめて江戸へ引返し、みずから西軍と天下分目の一戦を行うべく西上すると共に、嫡男・秀忠をもって第二軍（四万）を指揮させ、真田父子が立てこもる上田城を攻めさせた。

真田信幸は、この第二軍に加わり、父と弟と昨日までは我物同様だった父の軍勢と戦うことになったが、

「真田は後詰めにせよ」

徳川秀忠は、同族相喰むところ、その内側には真田父子のどのような陰謀があるかも知れぬと万一を考え、信幸の部隊には戦闘をさせなかったばかりか、

「半数は東海道を上り、すぐさま第一軍へ加わるよう」と、命じた。

信幸の家老木村土佐が、部隊の約半数三百余をひきいて家康の第一軍を追ったが、この中に、雨宮大蔵も加わっていたのである。

上田城の真田昌幸は、千余の軍勢をもって、四万の徳川軍を釘づけにし、ついに第二軍は、九月十五日の関ヶ原合戦に間に合わなかった。

関ヶ原で、三百の真田部隊は、井伊直政の先鋒部隊に合し、開戦早々西軍との激突を余儀なくされた。

山峡にこめる霧がはれあがった辰ノ刻（午前八時）すぎ、東軍の井伊・松平の部隊と西軍・宇喜多秀家の部隊の戦闘が、先ず火ぶたを切った。これから未ノ刻（午後二時）まで、両軍の血みどろな激戦がつづき、ついに東軍の大勝利となったのだが、

「ありゃ、何者じゃ？」

桃配山の本陣にあって戦況をながめている徳川家康が、これをみとめて思わず感嘆の叫びを発したほど、雨宮大蔵の働きぶりは見事であった。

見事というよりも凄烈であった。

大蔵は、おのれの槍を二つにつかいわけた。

槍と鉄棒とにである。

「ぐわ。が、が、がッ――」

喉の奥からしぼりあげてくるような得体の知れぬ声を発しつつ、大蔵は槍の穂先をもって敵兵を突くかと思うと、柄を返して鉄をはめこんだ部分で撲りつける。

撲っては突く、突いては撲る。
常に井伊隊の先頭にたって暴れまわった。
血だるまのようになった大蔵の体軀は、赤い怪獣とも見え、殺戮の魔神とも見えた。
「見よ！　大蔵を――」
「初陣に、これほどの働きをしようとはなあ」
「これからは啞の大蔵とも呼べなくなるわい」
井伊隊に参加した真田家の武士たちは、呆気にとられて、大蔵の血闘を見守るばかりである。
そこには戦場の駆け引きも何もない、がむしゃらな突進と、人力を絶した猛闘が見られたのだ。
この一大決戦での勝利は、天下統一が徳川のものとなる重要な基盤をつくることになったのは周知のことである。
徳川軍に加わった諸大名への恩賞も大きかった。
しかし、真田家は、昌幸・幸村の父子が西軍に荷担したとあって、信幸には何の恩賞もなかった。
したがって、井伊隊に属した真田勢の軍功も、表沙汰にはされなかった。
けれども、家康は、戦後の始末が完了してのち、信幸に、沼田と合せて、昌幸のものだった上田領をあたえた。

昌幸・幸村の父子は、信幸の必死の嘆願によって死罰をまぬがれ、紀州・九度山へ押しこめられた。

上田城へ入ってから、信幸は勲功のあった諸士に、しかるべく恩賞をあたえた。

雨宮大蔵は、長柄足軽の一員から、足軽大将に抜きあげられたのである。

「関ヶ原での働きを耳にしたが、ようも働いたものだな、戦さぎらいの筈であったそちが、これはまた、どうしたことか？」

信幸は、親しく大蔵をよび、訊いた。

このとき、大蔵は始めて料紙と筆をもとめ、何か書きしるして、信幸にしめした。

その紙面には、こう書いてあった。

唖となぶらるるが、口惜しゅうございましたゆえ。

「ふむ……」

万感をこめ、信幸は大蔵を見つめ「そちに、それだけの力があったのか。知らなんだわ……」と、つぶやいた。

四

なぶりものにされぬために発憤したというだけではなかった。

大蔵は、心魂に徹し、あの女――露野という遊女を憎悪していたのだ。

（よくも、このような不具の身に、おれをしてくれた!!）

あの当時、大蔵は五体を切り裂かれるような劣等感に、苦しみぬいたものであった。

劣等感というものは、さまざまな形で、さまざまな人間に存在しているものだが、これが、その人びとに、どう作用するかは、これもまた千差万別である。

劣等感に押しつぶされて、弱い人間になることもあれば、反ってこれを撥ね返し思いもかけぬ強い人間になる場合もある。

雨宮大蔵が後者であったことは言うまでもない。

（こうなれば、あの女から受けた傷を……そして、おれの身にふりかかった侮辱を、何としても、この腕一つで払い退けてくれよう!!）

暇を見ては、沼田城外の山野に出て駆けまわり、鉄棒をふるい、力をたくわえたのも、この決意からであった。

そして、大蔵は、思ってもみなかった自分の腕力を発見した。

（おれに、こ、こんな力があったのか……）

子持山の山林で、太ぶとしい松の木を双腕の力で押し倒すことが出来たとき、大蔵は、眼を白黒させたものだ。

腕力は鍛錬にもよるが、天性にもよる。

反撥の凄じい気力が、大蔵の天性をひき出したとも言えよう。

大蔵は、雨宮家へ伝わる槍の穂先に、おのれの力量にふさわしい柄をはめ替えたのだ。

関ヶ原で受けた傷は、五体に四ヵ所。顔には耳から頬にかけてと唇の右にと二ヵ所で、それがまた大蔵の武勇を如実に物語った。

二十三歳となった大蔵の、ひょろ長い体軀には、みっしりと肉がつき精悍そのものの風貌をそなえてきたのである。

大蔵への軽侮は畏敬に変った。

槍の大蔵――と、真田家のものばかりか、領民たちの間にまで、この〔呼び名〕はひろまって行った。

歳月が流れた。

関ヶ原戦の以後、十四年の間、戦火は絶えていた。

慶長十九年十月――徳川と豊臣は手切れとなり、徳川家康は、大坂城にこもる豊臣の残存勢力を一掃し、天下を治める徳川政権の土台を万全のものとするべく、七十三歳の老軀をひっさげ、大軍をひきいて大坂へ向った。

同時に、九度山の配所をひそかに脱け出した真田幸村は、大坂城へ入り、豊臣軍の軍師（参謀総長）として、この決戦の采配をふるうことになったのである。

すでに、昌幸老人は、九度山に病歿していたが、今度は兄と弟が敵味方に分れることとなったのだ。

信幸も、むろん、徳川軍へ加わり出陣することになったが、大坂の戦場へは、信吉・信政

の二子を参加させ、自分は江戸城の留守居を家康から命じられた。
雨宮大蔵は、自慢の大槍をかつぎ、戦闘部隊と共に沼田を発った。
「大蔵よ。ぶ、無事で帰っておくれ。よいかえ、よいかえ……」
母のおふくが、あまり調子にのって働きすぎ、戦死でもされてはと不安になったらしく、しきりに大蔵へ念を押すと、大蔵は筆をとって紙に書きしるし、母に見せた。

われは、手柄をたてむとのみ

大坂の戦いは開始された。
真田幸村は、大坂城三の丸・平野口に出城をかまえ、機智縦横の活躍をはじめ、大いに徳川軍をなやませた。
家康自身、この冬の陣では、幸村の奇襲によって危うく命を落しかかったことが、二度もある。
そして、家康は、かねての計画通り、無用の出血をさけて、いったんは講和をむすび、大坂城の濠を二の丸まで埋めつくしてしまった。
この、冬の陣の講和が成立した直後のことである。
大坂城の東面、平野川に沿った中浜の真田陣所へ、酒や餅を売る商人たちがやって来た。
数日後には大坂を引きあげることでもあるし、真田の士卒はこれを取りかこみ、酒も餅も、

飛ぶように売れる。

雨宮大蔵は、そのざわめきの中を黙念と歩を運び、平野川の岸まで来て、枯草の日だまりに寝ころんだ。

温かい冬の陽ざしに、とろとろと眠ったように思ったが、

「これ――これ、雨宮殿……」

ハッと目ざめると、すぐ横にしゃがみ込んだ酒売りの男が、笠のうちから、

「おぼえてござるか、永井重六じゃ」と、言った。

「おお……」

永井重六は、真田幸村の侍臣だった男である。

「しばらくだな、雨宮殿」

（何をしに来たのか……？）

「何事もなきよう、そのまま、寝そべってお聞きなされ」

永井は、酒を売るような様子を見せつつ、語りはじめた。

「雨宮殿。この和睦を何と見らるるな――おそらく、敵も味方も、このまま戦さが絶えるとは思うてはおるまい。ことに、わが殿、幸村公は、この和睦には、あくまで反対でござったのじゃが……」

（永井は、何を言いたいのか……？）

「おそらく、来年には、また戦さが始まろう。そのときにこそ、幸村公は、大御所（家康）

の御首を、必ず討ってとる御決心でござるよ」

幸村なら、やりかねないと、大蔵は思った。

徳川家康も、この戦いが始まる前に、何度も九度山に密使を送って、幸村を味方につけようと計ったものだが、幸村はこの招きをはぐらかし、亡父ゆずりの家康ぎらいを立て通し、秀吉遺子・秀頼の招きに応じた。

「大御所の首さえとれば、勝ちじゃ」

軍勢の大小にかかわらず、敵の総大将が討たれれば、戦いは負けも同然。ことに家康ほどの大物ならば、尚更にである。

そこにまた、当時の合戦のおもしろさもあったのであろうし、不利な戦さにのぞむ幸村の自信もあったのである。

腕におぼえの浪人たちが続々と大坂城へ集まったのも、これがあるがためである。

「弟幸村こそ、このたびの戦さに何をするや知れたものではない」

真田信幸も、侍臣の鈴木忠重へ、そうもらしたということを、大蔵も耳にしていた。

「雨宮殿、よろしいか……」

酒売りに化けた永井重六は、ぴたりと大蔵の耳に口をよせ、

「来るべき戦いに、幸村公を助け、貴公の、その武勇を思うさま発揮して頂きたいのだ。大坂城へ入り、幸村公に力をそえてもらいたい。これは、幸村公、じきじきのおたのみにより、それがしが、こうして忍んでまいった――よろしいか。貴公の猛勇あれば、きっと大御所奇

襲の戦術は成しとげられるであろうと、これも幸村公の御言葉でござる。な、いかが？――いかが……」

大蔵の双眸が、ぎらぎらと光りはじめた。

「大御所の首討てば、大坂方の勝利は判然。幸村公は五十万石の大身となれる筈――さすれば、貴公も、――よろしいか。おそらくは数万石の……」

やがて、永井重六は他の商人と共に、夕暮れの平野川をわたって去った。

数日して、一先ず京へ引きあげた真田部隊の中から、忽然と、雨宮大蔵の姿が消えた。

五

翌元和元年五月――。

大坂夏の陣の戦端はひらかれた。

ふたたび大坂城を包囲する徳川軍は約十六万。大坂方は約六万であった。

今度は城の濠を家康の計略によって埋めたてられてしまった豊臣勢の苦戦は言うべくもなかったし、その上、作戦のすべてが齟齬をよび、ついに、五月五日から七日にかけて、徳川軍は一挙に大坂城の総攻撃を開始した。

七日の最後の戦いに、真田幸村は全軍の指揮をとり、天王寺口の陣へ徳川軍の主力をひきつけ、わざと、船場方面にまわした別働隊をもって家康の本陣を奇襲せしめようとした。

だが、この作戦もうまく連絡がとれず、ついに幸村は、

「もはや、これまで!!」

みずから手勢をひきいて、乱軍の中に打って出た。

この幸村の襲撃こそ後世にうたわれたもので、一時は、家康の本陣も、真田部隊の殺到に乱れたち、家康自身も危うく、身をもって逃れたほどであった。

その魔物の群のような真田隊の襲撃の先頭に立ち、馬上の雨宮大蔵が、どのような暴れ方をしたか……。

ここに、くどくどとのべるまでもあるまい。

そして、ついに真田幸村は、安居天神の境内において、見事な討死をとげた。

そこから程近い、茶臼山の家康本陣のすぐ下にある一心寺という寺の西側の竹藪の中に、雨宮大蔵の死体があった。

自慢の槍の穂先は、血と、徳川勢の肉片がべとべとに付着して異様なかたちとなり、柄にも血あぶらが、こびりついていた。

大蔵の軀には、刀槍の痕が一つもなかった。

そのかわり、彼の顔面は、数発の銃丸によって、ぐしゃぐしゃにつぶされ、まるでかたちをとどめてはいなかったという。

戦いが終り、江戸にあって、このことを聞いた真田信幸は、

「大蔵めは、おのれの武勇への自信が慢心に変っていたことに気づかなんだのであろう。武士たるものは、おのれの武功に対し、絶えず反省を怠ってはならぬのじゃ。それでこそ、お

のれの力に、まことの自信をもつことが出来よう。まこと——まことに、自信と慢心の差は、紙ひとえのものよ。大蔵は——大蔵めは、あの関ヶ原での武勇を、そのまま、おのれの驕りたかぶりとしてしもうたらしい。おのれの槍先ひとつで、大御所の御首を突きあぐるつもりであったのであろう」

憮然として、鈴木忠重に言った。

大蔵亡きのち、一人残された母のおふくは、上田城下を去って、故郷の雨宮村へ帰った。

村外れの茅屋に、さびしく暮すおふくのもとに、いつのころからか、たくましい軀つきの中年の農婦が同居するようになった。

その女は、心をこめ、身をもって、おふくにつかえ、日中は小さな田地で泥まみれとなり働きぬいた。

「わたしは、そなたのおかげにて、かように、安楽に暮させてもろうておる。一人息子を死なせた悲しさが、そなたによって、日、一日とぬぐわれて行くような気もする。まるで——まるで、新しい娘を得たような……」

元和六年に、六十歳をもって病歿するまで、おふくはその女に感謝しつづけていた。

おふくは、その女が、はじめて自分の家にあらわれて「行きとどきませぬが、お世話を申しあげたく——」と申し出たとき、そのわけを問うたが、そのとき、その女は重々しい口をひらいて、祈りをこめるような声で言った。

「わたくしは、もと京にあったころ、亡き大蔵さまに限りなき御恩をこうむったものでござ

ります。その御恩返しと申すには、あまりにもぶしつけなれど……どうか、お世話をさせて下されませ」

女は、たまのと名のった。

おふくが死ぬと、何時の間にか、牛のように大きな、重々しい軀つきの、まっくろに陽やけした「たまの」の姿も、何処かに去ってしまった。

そのたまのの姿と共に、おふくの家にあった雨宮大蔵の位牌も消えていた。

（「文芸朝日」昭和三十七年十月号）

命の城

一

「沼田の城をな、北条へゆずりわたしたときには、ほんにほんに、さすがのわしも泣き暮したものじゃよ。おぬしたちには涙も見せなんだが、夜、臥床へ入って独りきりになると、くやしゅうて情けのうて、わしは臆面もなく、ほろほろと泣いたものじゃぞよ」

と、後年になってからだが、真田昌幸は信幸・幸村らの二子へ、一度だけしみじみと洩らしたことがある。

沼田城は、赤城山の北ふもとにある。

北面にひろがる盆地の村々を穀倉とするこの城は、利根、薄根、片品の三川が合流するあたりの丘陵にそびえていた。

このあたりは関東と越後をむすぶ関地であるばかりでなく、東北や信州へも複雑な関係を持ち、まさに要衝のところであった。

「おりゃ、せがれどもを皆殺しにしても沼田を奪るぞよ」

叫んで真田昌幸が、越後の上杉や関東の北条などという大勢力の圧迫をはね返しつつ、この城を戦乱の中につかみ取ったのは、天正十年も暮れようとするころで、この城取りのために真田家が投入した戦士の血と犠牲は非常なものであった。

同じ年の春には、武田氏がほろびている。

徳川家康の協力を得た織田信長が信玄以来のライヴァルだった武田を討滅し、いよいよこれで天下統一を成しとげるかと見えたけれども、とたんに夏が来ると明智光秀の謀叛によって急死をするというさわぎで、この天正十年という年は近世日本へつながる歴史の流れを急激に、大きく変えた年であった。

歴史の転機があった以上、戦国武将としての真田氏にもそれがなくてはならぬ筈だ。

真田家は昌幸の父・幸隆の代から武田信玄につかえ、昌幸は婚姻の関係から亡き信玄の義理の甥ということになる。

こうしたわけで、真田昌幸は武田氏がほろびるまで、これに従属していたわけだが、

「武田がほろびては、もはや、おのれ一人の力をたのむより道はない」

たちまちにうごき出し、信州・砥石を本拠にして上州一帯の地がためにとりかかった。上州を制圧しなければ本拠が危ないからである。

これには、何としても沼田をつかまねばならぬ。

すでに先年から少しずつ沼田衆を手なずけたり周辺の城を落したりして準備もおこたらなかった昌幸だけに、それまでは武田氏に命ぜられて守っていた沼田城をわがものにするため、執拗に攻めかかる北条軍を撃退し、七年の間、この城を守りぬいた。

同時に昌幸は信州の要衝・上田へ進出し、城をきずいている。

武将として、あぶらの乗り切った時期でもあったし、このころの真田昌幸の活躍はすさまじいもので、邪魔になる敵の大将をあざむいて何人も暗殺したり、文字通り千変万化の謀略

をおこなうかと見れば、日の出の勢いの徳川家康と喧嘩をはじめ、その大軍を上田城に迎え撃ち、

「徳川のたぬきめも、いささか、わしの戦さぶりを学ぶとよいわ」

豪胆に戦って、みごとに追い散らしたりした。

この上田の戦争が真田昌幸の実力を天下にひろめることになり、

「ほほう、真田は、ちょとおもしろい男じゃな」

故信長に替って天下をつかみかけている豊臣秀吉が、

「たのもしげなやつではある」

と、いった。

そして秀吉は、徳川・北条対真田の争いへ、

「わしが仲へ入ろう」

調停に乗り出した。

こういうことになると、秀吉は信長や家康よりも天才的な器量を発揮する。

先ず人なつかしげな親書を何度も真田昌幸へ送って来て、

「武田ほろびてのち、そこもとへ目をかけなんだことは秀吉が不明であった。ゆるされよ。これからは何なりと遠慮なく相談をしてもらいたいし、力にもなってさしあげよう」

とか、

「京に聚楽第という館をきずいたので、一度、遊びがてら京へ出ては来られぬか」

とか、ねんごろに、よしみを通じてくる。
この手紙の文字の行間には豊臣秀吉の大らかな、のびのびとした微笑がただよっており、
（これじゃ!!）
真田昌幸は、たちまちに惚れこんでしまい、ちょうどそのころ、上方から上田へ来ていた猿楽師の春松太夫という男を通じ、秀吉麾下に参じたいむねを申し入れた。
春松太夫は秀吉の側近・富田信宏に可愛がられていた芸能人であったから、おそらく彼の口から富田へ、そして富田から秀吉の耳へ意思を通じたのであろう。
すると、
「よいとも、よいとも」
はね返って来るように秀吉の手紙が昌幸へとどけられた。
そこもと、わが旗もとに参ぜられ、大よろこび、大よろこび……。
いきなり、こう書き出してある。
まるで恋女にでもあたえるような手紙であったから、表には出さぬが、人一倍、感情も激しい真田昌幸は、
「おりゃ、秀吉公のために死ぬるぞ」
感動して思わず声にしたほどだ。

つづいて秀吉は、徳川家康との和解をすすめた。
すなわち、家康の養女（本多忠勝のむすめ）を昌幸の長男・信幸に取りもとうというのである。
家康がきらいな昌幸であったが、
「徳川と手をむすぶは、わるいことではありませぬ」
と、これはせがれの方が積極的になったので拒むわけにもゆかぬ。
一方、小田原の北条氏政・氏直の父子は相変らず沼田城をほしがって蠢動をつづけており、九州を平定して、ほとんど天下を我物にしている豊臣秀吉が、
「上洛せよ」
と命じても、これに応じようとせぬほど気が強い。
上洛することは秀吉に従うことなのだが、難攻不落とよばれた小田原城に在って、長らく関東に号令してきた北条氏だけに虚勢も慢心も激しい。
あまり秀吉がさいそくをするので、
「もしも沼田城を真田から取りあげ、自分にわたしてくれるなら上洛してもよろしい」
と、北条氏直がいい出した。
「おのれの腕一つで真田を追い払えぬくせにの」
秀吉はせせら笑ったが、この人はむかしから血を流して相手を屈服させるのがきらいであったし、出来得れば自分の顔と口ひとつで天下をおさめようというつもりであるから、

「すまぬが、ちょと来てくれぬか」
真田昌幸を京都へよびよせ、丁重にもてなした上で、
「どうじゃ。悪しゅうはせぬゆえ、一応、沼田を北条へゆずってやってもらえまいかな」
切り出した。
惚れこんだ相手だけに昌幸は、ことわりきれなかったらしい。
承知をし、上田へ帰って来て、夜の臥床でひとり泣いたというのはこのときのことで、いかに沼田城の存在が彼らにとって大きなものだったかが、よく知れる。
ただし、城は渡しても沼田領の一部は依然として真田の物であったし、北条氏直へゆずった沼田領のかわりに、信州・伊那郡の内一万二千石を新たに秀吉が昌幸へくれた。
昌幸は、いさぎよく城をあけわたした。
すると北条方では、武州・猪俣城主だった猪股能登守という勇猛な武将を沼田城代として派遣し、まるで戦争直前のような軍備をととのえはじめたものである。
もっとも沼田城の北西一里半をへだてたところには利根川をはさんで名胡桃城があり、この城は真田のもので、鈴木主水という武将が守っているから猪股も油断は出来ぬと思ったのであろうか。
鈴木主水は、もと沼田衆の出なのだが、真田昌幸に心服して麾下に加わった誠実な人物であった。
ところで……。

「さ、沼田をわたしたのだから上洛されたい」

豊臣秀吉が、いくらさいそくをしても、北条氏直はのらりくらりと返事をしぶって、いうことをきかない。

以前には武田信玄や織田信長でさえ一目おいたほどの北条家が「いまさら、あの成りあがりものに頭が下げられようか」というわけであった。

二

「では、やるかの」

豊臣秀吉は、しびれを切らしたらしい。

大坂城内の宏大な殿館の奥ふかい一室であった。

それは天正十七年十月十七日の夜のことで、この日、信州・上田では、徳川家康の養女・小松が真田信幸と華燭の中で夫婦の盃ごとをおこなっている。

「のう、山城。やるからには早いがよい」

と、秀吉に声をかけられた男は山中山城守長俊といって表向きは秀吉の右筆なのだが、裏へまわると大変な役をつとめているのだ。

山中長俊は豊臣秀吉の間諜網を一手にあやつっている。

彼は近江・甲賀の出身で、はじめ柴田勝家につかえ、勝家ほろびた後、丹羽長秀を経て、秀吉の家来になった。

長俊の「またいとこ」に山中俊房がいる。この俊房は甲賀二十七家とよばれる豪族の一人で、むかしから忍者の頭領として活躍して来ており、彼が縁類の山中俊房を通じて秀吉のためにはたらくようになったのは、七年ほど前からであった。

いま、この部屋には秀吉と長俊の二人のみである。

天井・障壁が金銀に彩られ、華麗な襖絵にかこまれたひろい部屋の、あかるい灯の光をあびながら、二人は北条氏政の息の根をとめるべく謀略を凝らしはじめた。

つまり、秀吉は開戦にふみ切ろうとしているのだが、織田信長亡きのち柴田勝家に戦さを仕かけたときのような強引さではなく、だれの目が見ても（もっともだ）といわれるような開戦の理由がほしい。

「手筈は、ととのえてござります」

と、山中長俊がいった。

眼球が瞼の中へ押しこまれてしまったようなこの男の顔貌から眼の表情を読みとることが困難であった。

秀吉は、かげへまわると長俊のことを、

「あの盲は……」

と、いったものである。

この年、山中長俊は四十七歳だが、やせこけた小さな体軀や、すっかり禿げあがった頭や、しわがれた低い音声などから、彼をよく知らぬものは七十に近い老人に見た。

密談は短かったようだ。

間もなく、山中長俊は秀吉の前をさがり、馬出曲輪外の自邸へ戻った。

夜がふけた。

長俊は寝所へ入り、眠った。

間もなく空が白みかけようという時刻に、どこから入ったものか水面へ墨がにじみ出すほどのひそやかさで、一個の人影が長俊のまくらもとへあらわれた。

「来たか……」

長俊がくびもあげずに、

「小田原へ……」

とのみ、いった。

「では……？」

「うむ。かねて申しきかせあるように、はかろうてくれい」

「心得まいた」

「このごろは毎夜、苦労であったな」

と、長俊がいったのは、この影は毎夜毎夜、かならずこの寝間へ忍び入って来、長俊の指令を待っていたものらしい。

この影、甲賀忍びの一人で柏木吉兵衛という。中年だが老熟の忍びで、山中長俊の手足になり諸方に散っている部下の忍びたちを操作している。

「いよいよ殿下もしびれを切らせたらしい。早目に手くばりをしておいてよかった……」
「はい」
「入用の書状、これにしたためてあるぞ」
と、山中長俊が夜具の中から文箱を取り出し、柏木吉兵衛へわたした。
この文箱はどこで手に入れたものか、又は偽造したものか……北条家の定紋をうった品なのである。
吉兵衛は消えた。
朝の陽がのぼるころ、彼は風を切って京の町を駆けぬけていた。
京から東海道・小田原までは約百里だが、これを吉兵衛は一睡もせずに、まる二日で走破し、小田原城下の法城院へ入った。
この寺は甲賀忍びの基地でもあり、和尚の心山は小田原へ来てから二十年にもなるし、城へ出入りもゆるされ北条父子とも親しい。
それでいて心山和尚は吉兵衛と同じ甲賀・柏木の出身だし、若いころに仏門へ入ったのも、いうまでもなく甲賀の指令によるものであった。
いま、甲賀の忍びたちも、それぞれの頭領に従い、諸方の大名にやとわれたりして、その結束もみだれがちだが、心山は若いころから山中長俊のために暗躍をつづけてきている。
柏木吉兵衛は法城院の奥に二夜をすごし、それまでのむさくるしい旅商人の姿から、さっぱりとした百姓の旅姿に変って、今度は正面から小田原城へ出向いて行った。

加賀国・鹿島郡黒崎村の肝煎（庄屋）後藤助右衛門方の奉公人で、
「宅五郎と申しまするが、こなたにおいでなさる絵師の住吉慶春さまへ急の用事あって、お目にかかりとうございます」
と、吉兵衛は申し入れた。
住吉慶春は、城主・北条氏直の御伽衆のひとりである。
御伽衆というのは、殿さまの側にはべり話相手をつとめたもので、武士もいれば学者、芸能師、僧、絵師、歌人など、さまざまの一芸に達した者がこれをつとめ、よくいえば主君の見聞をひろめる役にも立つし、わるい場合には遊び相手、つまり幇間のごときものにもなりかねぬところもあった。
しかし、いずれも主が気に入りの者たちばかりだから、時には隠然たる勢力をかねそなえていることもある。
山中長俊も右筆の役目につく前は、秀吉の御伽衆をつとめていたものであった。
さて、住吉慶春だが……。
この中年の男は肖像画にたくみな技倆をもっていた。当時、写真のない時代であるから、慶春のような絵師が旅まわりをして諸方の大名や武将の肖像を描くことが流行しており、技倆がすぐれていれば非常によい職業だったといえよう。
住吉慶春が小田原へ来て、北条氏直の肖像を描いたのは三年前のことだが、
「おもしろき絵師じゃ。しばし城中へとどめおけい」

大そう氏直が気に入り、滞在するうちに御伽衆の一人へ加えられたのである。
氏直の父で、いまは隠居をしている氏政にも愛寵をうけているだけに、慶春の羽ぶりはなかなかのものだ。
加賀の百姓・宅五郎に化けた柏木吉兵衛は、すぐに城内三ノ丸にある住吉慶春の屋敷へ案内をされた。
「おお、宅五郎ではないか。何ぞ故郷に変事でもあったのか」
玄関にあらわれた慶春が問うと、すかさず柏木吉兵衛が、
「御隠居さまのおいのちが、今日明日にも……」
顔面蒼白となって泣声をあげたのを、慶春邸の小者や、吉兵衛を案内して来た北条家の足軽も、はっきりと見た。
「何、母上が急病じゃと……」
慶春も愕然となった。
加賀・黒崎の肝煎・助右衛門は慶春の兄ということになっている。
すぐに慶春は北条氏直へ目通りを願い、
「兄よりの手紙にござりまする」
と、これも山中長俊がしたためておいた書状を差し出し、
「大恩うけし老母への看病を一日にてもいたしたく、しばらくおいとまを……」
平伏した。

「気の毒にの。よろし、すぐに発つがよい」

若い城主の氏直は、世事にもうとく単純で甘い性格だし、父の氏政だって戦乱統一の最後のゴールへ突き進むだけの器量をそなえてはいない。莫大な見舞金まであたえ、住吉慶春を出発させてやった。

「母をみとりましたならば、すぐに戻ってまいりまする」

倉皇として慶春は宅五郎をともない、小田原を出て行った。

その日の午後、小田原から四里はなれた大磯の海辺で、慶春は甲賀忍びの酒巻才兵衛にもどり、宅五郎は柏木吉兵衛となって、

「では、たのむ。すべては才兵衛どの一人のはたらきにかかっておるのだぞ」

「心得た」

すばやく打ち合せをすまし、吉兵衛は大坂へ、才兵衛の住吉慶春は、加賀へ行くどころか、まっすぐに上州・沼田へ向かって別れ別れに走り出した。

夕暮れ――。

慶春は相模野を突切っていた。

晩秋の曠野が落日を呑みかけている。

風が鳴っていた。

地誌に、

「……東西一里半、南北五里余。過半草莽に属し、小松など生ぜしところもあり……相模国

中第一の曠原なり」

とある、その曠野の芒の群れの中から、急に、住吉慶春の前へあらわれた人影があった。

旅商人らしく千駄櫃を背負った若者なのだが、ひと目で慶春は、

（忍びだな）

と、感じた。

向うも、はっとなったらしく「忍び走り」の速度をゆるめつつ近寄って来、何気なく笠をかたむけて慶春とすれ違った。

「おう……」

思わず慶春が声をあげると、相手もおどろいて、

「や、叔父ごどの……」

「平野の小助か。久しぶりだな」

この若者は、慶春と同じ甲賀の忍び・平野伝蔵という手練の者の息子で、小助という。

そして慶春の姉は小助の実母であった。

同じ甲賀でも、慶春は山中長俊の指揮下にある忍びだが、平野父子は伴長信という豪族に従っていた。

山中も伴も、むかしは互いにつながりをもち、同じ目的のために忍びばたらきをしていたものだが、近年は戦乱の様相が、にわかに複雑な政治的ふくみをそなえて来たので、忍びたちの頭領の神経も、むかしのように大らかなものではなくなってきて、それぞれ分散し、互

いに思うところの大名について活動をするようになった。
「おぬしとは七年も会わなんだな」
と、住吉慶春が甥の小助にいった。
「叔父ごは、いま？」
「きくな。いうてもはじまるまい」
「いかにも」
「おぬしの父、伝蔵殿が亡くなられてから、もはや十二年になる。早いものだ。姉ごは……いや母ごには変りないか？」
「私も三年ほど甲賀へは戻りませぬが、達者のようでござる」
「おぬし、だいぶんに修行をつんだと見えるな」
「叔父ごから見れば、まだ赤子同様でござろう」
「いま、どこにおる？……あ、これはきかぬでもよいことを——つい気にかかったものでな」
「かまいませぬ。叔父ごなれば同じ甲賀の忍び同士。ことにいまの私は、忍びばたらきをしてはおりますが、金銀によってうごいてはおりませぬし、ある大名の家来に取立てられました」
「さむらい奉公をしたか。それはよい、それはよい」
「申しあげます。私の主は真田昌幸公にござる」

きいて、住吉慶春の柔和な顔貌に一瞬のことだが緊張が疾った。平野小助はこれを見のがさなかった。

「叔父ご。どうなされた？」

「む……待て」

夕闇の中で、住吉慶春の沈思が、しばらくつづいた。

ややあって、慶春が決意の後のこだわりもない口調になり、こういった。

「おぬしが真田公の家来に取立てられたときいては、このまま別れることもなるまい。というのはな、むかし、甲賀の山中、伴両家の忍びたちが力を合せて武田家のためにはたらいた折、わしはおぬしの父・伝蔵殿に三度も急場を救われたことがある。この命のみならず、女に迷うて忍びの義理を忘れかけたときも、心をこめて救いあげ、はげましてくれた。この恩にむくいるためというのではない。よいか小助。おぬしは、わしにとって可愛い甥じゃ。わが姉の血を通じて、わしの血も、おぬしの体内に流れこんでいる」

「はい……」

「みやげにもなるまいが、わしが、これから語りきかせることは真田公にとって一大事のことじゃ。わしはな、この命令がどこから下ったものか、それは知らぬ。わしは只、わが頭領・山中長俊様の命をうけてうごいておるのじゃからな」

「はあ……」

「只、わしの名を出してくれるな。このことをおぬしに打ちあけた以上、わしは頭領様を裏

切ったことになる」
「それでは……」
「よいわ。わしもこれほどのことはおぬしにしてやりたい。これからはもう機会もあるまいゆえな」
平野小助も興奮を押えかねた。
その耳へ、住吉慶春はささやきはじめた。
冷えた闇が、相模野を包みはじめている。

三

翌々日の昼ごろ、相模野から約六十里を走破した平野小助が信州・上田へ戻って来た。
京都の真田屋敷へ出て行ったばかりの小助を迎え、
「何事じゃ」
真田昌幸は上田城内・殿館の居室で長男の信幸を相手に碁をうっていたが、
「おそれ入りたてまつりますが、お人ばらいを……」
「信幸は、わしのせがれじゃぞ」
「なれど……」
信幸が苦笑をし、
「よいとも。さ、これへ来い。おりゃ下がる」

「申しわけもございませぬ」
「何の……」
若いが老熟の風格をそなえている信幸だけに、こだわりもなく出て行った。
「ぎょうぎょうしきやつめ。何事か、早う申せ」
「殿。名ぐるみの城が危のうございます」
「何と……」
「申しあげます前に、このことを、どこから私めがさぐり出したか、それをお問いかけ下さりませぬよう願いあげまする」
「よし。忍びには忍びの義理もあろうゆえな」
さすがに昌幸はわかりがよい。
だが、小助の報告を聞き終えたときの昌幸のおもてには名状しがたい苦渋の色が浮いた。
そのまま、碁盤へ目を落したきり、うごこうともしないのである。
「殿。名ぐるみの城が危ういのでございますぞ。すぐに忍びを走らせて急を告げ、援軍をお出しなされば、きっと間に合いまする。早う、早う……」
「わかった、よう知らせてくれた。このことを聞く聞かぬでは大変なことになるところであった」
「では早う……」
「ま、わしにまかせておけい。そちはすぐに上方へ発て」

「は……」
「行け。いずれ恩賞をとらす」
「なれど……」
「このこと、他言無用ぞ。他へもれてはならぬ。そちが信幸を去らせたのは賢明であった。ほめてとらす」
平野小助が上田を出て行ってからも、昌幸は碁盤の前からうごこうともしなかった。
夜に入ってもうごかず、食事さえもろくにとらず、早目に寝所へ入り床へもぐりこんでしまった。
その夜おそくなって、上州・沼田城へ住吉慶春が入った。わざと小助より遅れた到着をしたものらしい。
城代・猪股能登守は、
「これは慶春殿。ようおわせられた」
と、主君が愛寵する御伽衆だけに、あつかいも丁重である。しかも慶春が北条父子の密使として派遣されたことを知り、能登守は緊張をした。
慶春が差し出した密書は、まさに能登守が見なれた北条氏直の筆跡であった。
氏直は、
「二日以内に名ぐるみの城を奪い取れ」
と、指令をしてきたのだ。

能登守は勇みたった。

「豊臣にも徳川にも、こなたの意は通じてあるゆえ、思いきって急襲せよ」

と、氏直が書いてよこした。さらに謀略のために使用する真田昌幸の偽筆の手紙までそえてある。

たれが書いたものか、昌幸の筆跡によく似ているその手紙は、いうまでもなく名ぐるみ城を守る鈴木主水へあてたもので、

「このたび、信州・伊那、箕輪に城をきずくことになった。ついては縄張りその他の件について相談したいことがあるから、城は中山九兵衛にまかせ、早々に上田へ来るように……」

というものである。

この中山九兵衛というのは鈴木主水と同じ沼田衆の出で、真田家へ従ってはいるが、同時に北条方へも意を通じ、いえば、どちらへころんでも自分だけが利を得ればよいという男だ。

その夜から翌日にかけて、沼田城の目と鼻の先にある名ぐるみ城へ、猪股能登守の謀略工作が開始された。

中山九兵衛と連絡をとるのはわけもないことなので、真田昌幸の偽手紙はたくみに鈴木主水のもとへとどけられた。

一読して主水は、

「伊那への築城のことなぞ、耳にしたこともないが……」

不審げであったが、筆跡は昌幸のものと信じているので、

「ともあれ、岩櫃の城へ寄り、殿のこの御手紙をお見せした後、そのまま上田へまわる」
いいおいて、中山九兵衛に、
「後をたのむぞ」
家来十七名を引きつれ、夕暮れ前に名ぐるみを発した。
岩櫃城には、真田昌幸の叔父・矢沢頼綱がいる。
名ぐるみから山越えに岩櫃へ寄り、それから上田へ出るのは順路でもあるし、鈴木主水にとっては通いなれた道である。あかあかと松明をつらね、主水の一行は夜道をかけて急ぎ、翌日の昼前には岩櫃城へ到着をした。
矢沢頼綱は、主水が差し出した手紙を見るや、
「これは昌幸殿の筆跡ではないぞよ」
断定を下したものである。
鈴木主水は驚愕した。
（では、沼田の猪股能登守にはかられたのか……？）
壮年の主水だけに疲れも見せず、すぐさま名ぐるみへ引返そうとするのへ、
「よし、すぐにわしも出張るぞよ」
矢沢頼綱がいった。
主水が城を出て行った後、半刻ほどのうちに矢沢の兵も武装をととのえ、頼綱は密使を上田へ走らせると共に、

「つづけ!!」
みずから二百の兵をひきい城門を出ようとするところへ、上田から密使が飛びこんで来た。
この密使、奥村仁兵衛といって真田昌幸がもっとも信頼する忍びの者である。
仁兵衛は昌幸の父・幸隆の代から真田家につかえる伊那忍者であった。
仁兵衛の差し出した昌幸の密書は、まさに真物である。
一読して、
「むゥ……」
矢沢頼綱が悲痛のうなり声をあげた。
「間に合いましてござりますか？」
と、仁兵衛がいうのへ、頼綱が泣き出しそうな顔つきになり、
「ま、間に合うた、と、昌幸殿へつたえよ」
と、いった。
そして、兵の武装を解かせ、
「わしは、もうねむるぞよ」
寝所へ入ったきり、数日の間、顔も見せなかった。
その夜、名ぐるみ城へ駆け戻った鈴木主水の前に、城門は堅く閉ざされていた。
城には松明がつらなり、北条の旗印が闇にひるがえっている。
城は完全に猪股能登守によって占領されていた。

このとき名ぐるみ城にいた鈴木主水の兵は約三百とも五百ともいわれているが、そのうちの一部は中山九兵衛の裏切りに加担し、城の内と外から攻撃をうけたのだから戦闘は呆気なく終った。

追い出されて逃げた士卒も、かなりいたし、そのまま降伏して北条方へ従ったものも、かなり多い。

（武将として恥ずべきことだ）

と、鈴木主水は矢沢頼綱の援軍に合せる顔もないと思いきわめ、城中にいた妻や九歳の長男・右近の安否を気づかうこともあきらめ、すぐに近くの正覚寺へ入って自殺をした。

昌幸へあてて自分の不明をわびる手紙を家来にわたし、

「わしが首と共に、上田の殿へ差し出せ」

と命じて腹を切ったのである。

鈴木主水の首と手紙を受け取った真田昌幸は、このとき四十三歳であったが、後年に息・信幸が、

「あのときの父上は、まるで百歳の翁にも見えた」

と述懐しているように、ひどく憔悴していたようだ。

信幸も幸村も、むろん驚き、すぐに出兵の準備にかかろうとするのを、

「待て。この上は関白殿下（秀吉）のおさばきがあろう。それを見とどけてからでも遅うはない」

とどめ押えた。

合戦の鬼とまでよばれた父の、いつになく萎靡した態度を見て、信幸も幸村も意外に思った。

「このことを早う大坂表と駿府（家康）へ知らせよ。そして名ぐるみの城に残りいた筈の鈴木主水の妻子の安否をたしかめよ。いかに北条とて、女子供に手出しはしておるまい」

四

この「名ぐるみ城事件」は、秀吉の小田原攻めの恰好な開戦理由となった。

「わしの仲裁によって、すべてがおだやかにおさまり、真田も忍びがたきを忍んで引き下がったものを、北条氏政はわれからこれを破り、みだりに事をかまえて天下の泰平を乱したことは実にゆるせぬ」

と、いうのである。

小田原の北条父子にとっては、まったくおぼえのないことだけに、沼田の猪股能登守が、

「おおせのごとく、みごとに名ぐるみを奪いとりましてござる」

と報告をして来たときには目を白黒させたものだが、間もなく、すべては住吉慶春の所業だと知れた。

そのときすでに、慶春は沼田からも消えていた。

豊臣秀吉の激怒に対し、北条父子もしきりに陳弁をしたが、北条方が名ぐるみを侵した事

実を消すわけにはゆかぬ。

秀吉は、たちまちに諸大名へ号令を下し、翌天正十八年三月に京都を発し、四月三日には箱根を抜いて小田原城を包囲した。

有名な小田原攻囲戦について、くわしくのべるにもおよぶまい。

箱根の要害と海内一をとなえる小田原城とをたのみに立ちあがった北条軍は、秀吉のあやつる謀略と作戦の前にろくな戦闘もせずに降伏してしまった。

小田原城主・北条氏直が命を助けられ高野山へ放逐されたのは、彼が家康の聟であることを考慮したもので、そのかわり父の氏政、弟・氏照は切腹させられた。

ここに秀吉は関東と奥羽を平定し、名実ともに天下人となったわけだが、

「何も彼もうまくはこんだわけじゃが……真田には気の毒なことをしたの」

大坂へ帰ってから、秀吉が山中長俊にいった。

長俊の眠りこけたような顔貌には何の感情もうごかなかったが、

「それにしても……真田はようも、おとなしゅう手を束ねておりましたな」

「名ぐるみが落ちた後となっては、みだりにうごかず、すべてをわしにまかせようという気になったのであろう」

「はい」

「それにしても、さすがは古今の筆法に通じたそちが念を入れてしたためた北条氏直の偽手紙を、沼田城代の猪股能登守は見破ることが出来なんだわ。ほめとらすぞよ」

「おそれ入りたてまつる」
「なれど、真田昌幸の偽筆を見破れなかった名ぐるみ城代の、ほれ、何と申したかな？」
「鈴木主水にござります」
「む。あの男には気の毒をしたわえ」
「いかにも……」
「ともあれ、このように小田原攻めがうまくはこんだのも、そちのはたらきが大きい。また、そちの手足となってはたらきくれた者どもへは、ぬかりなく恩賞をとらせるように」
「ありがたき仕合せ」
「さて……」
と、ここで秀吉はにんまりと笑い、
「これで沼田の城は天下晴れて真田へ返してやれることになったの」
満足げにつぶやいたが、さらに、
「さすがの真田昌幸も、わしとそちの謀略が名ぐるみの城にまで伸びていたとは思いもおよぶまい。あれほどの男なれど、この太閤の手にかかってはのう」
つけ加えずにはいられぬほどの得意さがあったようだ。
この年の秋、沼田城は完全に真田家へ返され、昌幸は長男・信幸を城主にした。
次男・幸村が秀吉のとりもちによって大谷吉継のむすめと結婚したのも同じころである。
「めでたい、めでたい!!」

宿望の沼田城をわがものとし、これへ我子を入らしめ、本拠の信州と上州をつなぐ〔真田の国〕を得た昌幸の歓喜は、

「わしはもう、このよろこびのうちに死んでしまいたい」

とまで、いわしめたという。

名ぐるみ城に監禁されていた故鈴木主水の妻も子の右近忠重も救い出され、以後、右近は真田信幸の臣となって重用されることになる。

だが、真田昌幸の幸福も十年とはつづかなかった。

朝鮮出兵の失敗以後、秀吉が急激におとろえ、慶長三年に病死をした翌々年に、あの関ヶ原戦争がおこった。

昌幸も、こうした事態にそなえるための覚悟は出来ており、そのための沼田と上田の連繋を熱望してきたわけなのだが……。

肝心の沼田をまかせた長男が義父・徳川家康（東軍）へ忠誠を誓ったため、

「仕様もないことだわえ」

仕方なく次男・幸村と共に上田城へこもり、関ヶ原へ向かう徳川秀忠の大軍を喰いとめ、この第二軍の参戦を阻んだ。

こうした昌幸のはたらきもむなしく、石田三成を主将とする豊臣派の西軍が大敗し、次いで昌幸と幸村は徳川家康の処罰をうけ、上田の本拠もあけわたし、紀州・九度山へ押しこめられることになってしまった。

「沼田の信幸が、わしに心を合せてくれたなら、上田と沼田と……家康めの気が狂うほどのはたらきを見せてやれたのにの」

五十を越えて、昌幸も愚痴をもらすようになったが、まだ最後の期待が、この老将の胸底にめらめらと燃え立っていたのだ。

この期待とは――。

豊臣の残存勢力と徳川家康との最後の決戦である。

この決戦は、あの大坂冬夏の陣となって具現されたわけだが、その五年前の慶長十六年六月四日に、真田昌幸は九度山の配所で六十五歳の生涯を終えた。

昌幸の遺志をついだ真田幸村が大坂戦争へ出陣したときの活躍はさておき、昌幸は死ぬ三日ほど前に、幸村を枕頭へまねき、

「いまはもう秀吉公もこの世におわさぬし、わしにも最後の期が来たゆえ、茶のみばなしに物語ろうと思う」

と、前おきをし、二十三年前のあの日、平野小助が名ぐるみ城の危急を告げに来たことを語りはじめた。

「……あのとき、平野小助がどこからか嗅ぎ出して来た知らせにより、わしが手を打って名ぐるみと鈴木主水を救うことは容易であったが、なれど亡き殿下の謀略を成さしめれば、一挙に北条父子をほろぼすことになり、その上できっと、殿下は沼田の城をわしが手へ戻してくれようと信じてうたがわなんだ。それが、もっともよい。なぜならば殿下は天下をとり、

わしは沼田を得た上、二度とふたたび北条方と争うこともなくなるのでな……」

そのときのことは幸村もおぼえている。あのとき、なぜ父が腰を上げようとしなかったのか、兄の信幸ともしばしば話題にのぼせて、

（きっと何かあったのだ）

いい合いもし、それとなく父から理由を引き出そうともしたが、頑として昌幸は口を割らなかったものだ。

病間の、開け放った縁先の向うに、めくるめくような夏の陽光がみなぎっている。

鳴きこめる蝉の声に押しつぶされそうな昌幸のつぶやきに、幸村は耳をすました。

「あの、沼田の城を我物にするため、わしは数え切れぬほど家来たちの血を流してきたものじゃが……なれど、あの正直な鈴木主水を殺したことほど、いまになって、痛む……胸が痛むことは……」

「父上。おやすみなされたがよろしゅうござる」

「沼田……あの城の石垣の底には、数え切れぬほどの……わが家来たちの血が……」

「父上……」

○

大坂の陣以後、徳川政権の威光のもとに二百数十年もの間、日本に戦乱は絶えた。

真田信幸は亡父の本城・上田を徳川家康から戻され、沼田を長男・信吉にあたえ分家とし

た。

家康の死後、真田本家は信州・松代へうつされたが、六十年後の天和元年、ときの沼田城主・真田伊賀守信利の失政が幕府にとがめられ、沼田三万石は没収された。

こうして沼田の真田分家はほろび、やがてこの城は新しい主・本多正永を迎えることになるのであるが……。

城という城は、すでに戦略の意義を失い、燃えたぎる戦士のものではなく、巨大な幕府専制政治があやつる道具にすぎなくなっていた。

むろん、沼田城の血も冷え切っていたのである。

（「小説新潮」昭和四十一年九月号）

獅子の眠り

一

老中酒井雅楽頭忠清の焦躁は募るばかりである。

「下馬将軍」とよばれるほどの権勢を、顔にもかたちにも厳然と誇示している表向きの日常にかわりはないのだが、忠清の心裏は惑乱しつづけていた。

（真田の隠居に奪いとられた、あの密書だけは何としても奪い返さなくては……）

と、このことだけを忠清は思いつめ、たまらなく口惜しく、たまらなく不安であった。

こんなことなら、真田の騒動に介入すべきではなかったとさえ、ひそかに悔んでもいる忠清なのだ。

今年の一月に、信州松代藩主、真田信政が急死したときいたとき、忠清の頭に浮んだのは、妹婿の真田信利のことだ。信利は、松代十万石の分家に当る沼田（三万石）藩主である。

自分の力で、信利を分家から本家へ移してやれば忠清が得るものも少くはない。

将軍の愛寵もふかく、幕政を自由にあやつっている酒井忠清の一挙一動に、諸大名は警戒と阿諛と媚情を向けているが、その裏面には憎悪と妬みが潜在していることを、忠清は知っている。

彼等を押え、最高の権勢を維持するためには、有力な味方が多いほどよい。

真田信利はその一人となってくれるだろうし、三十余万両という莫大な財産を隠しもって

いる真田本家が義弟のものとなれば、忠清の狙いは尚もふくれ上ろうというものであった。

忠清が使嗾するまでもなく、義弟は眼の色を変えて駈けつけて来、忠清の助力を仰いだ。

「何事も将軍家の命ひとつ、その命令は、老中のわしが左右する。まず安心しておれ」

本家の領土と財産に胸をおどらせている信利に、こう言い放った忠清の自信はゆるぎないものだったのである。

本家では故信政の遺子で当年二歳の右衛門佐に家督をと願い出ていたが、――年少にして藩政を行うは不当ゆえ、分家より真田信利を迎え家督させよ――と、将軍の名をもって命ずれば、ひとたまりもなく本家もあきらめようと、忠清は、むしろ高をくくっていた。

ところが、真田家にあって稀代の名君とうたわれた伊豆守信之は、老い果てた隠居の身だから何も口出しはすまいと考えていた酒井忠清の予想を覆し、起ち上った。

真田の隠居は、たちまちに家臣一同を結束させ、あくまでも右衛門佐を押したて、分家の信利を拒んできた。

隠居にとっては、信利も右衛門佐も同じ孫だ。しかし隠居は、虚飾享楽に溺れやすい信利の性格を見抜いていたものらしい。

忠清は尚も圧力をかけた。

隠居も真田家も、いざとなれば城中に腹を切っても酒井の権力に屈すべからずという決意は牢固たるものがあった。

春から夏にかけて、両派の暗闘はつづいた。

酒井忠清は、騒動が起るとすぐに、家臣の矢島九太夫を公式の目付として、つまり幕府からの監視役として松代へ派遣したが、これは表向きの名目で、裏側の九太夫は松代城下に蠢動する隠密の指揮に当り、絶えず情報を忠清のもとへ送ってきていた。

この最中に、九太夫から忠清へ当てた一通と、忠清自筆の九太夫へ向けた一通と計二通の密書が、九太夫配下の隠密、駒井市兵衛の手から真田の隠居の手へわたってしまったのである。

市兵衛は、忠清の父の代から幕府隠密として働き、忠清と九太夫の信頼は絶大なものがあった。

飼犬に手を噛まれたなどという生易しいものではない。忠清や九太夫よりも、真田の隠居の方が一枚上だったということになる。

つまり真田の隠居は、何十年もの間、自分の家来である駒井市兵衛を、そっと、こちら側へ潜入させておいたのだ。

忠清が屈辱と怒りに我を忘れたのも、このことであった。

その密書二通を読めば、時の老中酒井忠清が、真田家に容喙しようとする心底に潜む陰謀は、誰の目にも明瞭である。

――この密書の処置は、そちら（忠清）の出方ひとつで決まること……と、真田の隠居は、わざわざ忠清へ書簡をよせてきていた。

これを思うと、忠清の腸は煮えたぎってくる。

汚濁にみちた密書を天下に公表されてしまえば、政治家としての酒井忠清の名声は地に落ちる。

忠清は、隠居の望み通りに、右衛門佐が真田本家の主となるべく手配せざるを得なかった。しかも密書は、隠居が現在その手に持っているのだ。

まさか返せとも言えないではないか……。

矢島九太夫は激昂のあまり切腹しかけたが、家来に止められた。

昂奮がさめると、九太夫は死ぬのが恐くなった。

忠清は赫怒したが、永年にわたり隠密の行動を掌握し、手腕を見せてきた九太夫を死なせては、密書奪回の工作に不便となる。

「今度仕損じたなら、そちの腹切るを、わしは止めぬ。わかっておろうな」

忠清に責めたてられ、狡智をほこる矢島九太夫もいまや逆上気味であった。

「はッ——必ず、必ず奪い返して、ごらんにいれまする」

「真田の隠居は騒動落着以来、重病だというではないか」

「はッ」

「死ぬ前に取返せ。隠居め、死ぬときには、あの密書を無駄に遺してはおくまい。だが——だが、今は——今のうちは、わしに黙約したごとく、隠居自身が秘蔵しておるに違いない。これ、九太夫!!」

「はッ。ははッ……」

「あの密書が、真田家に残り継がれてみよ!!　わしは、この忠清は生涯、真田に頭が上らなくなるのだぞ」
「こ、心得おりまする」
「手配は、どうじゃ？」
「すでに二度ほど、隠居の寝所を探らせておりまするが……未だに……」
「手ぬるい!!」
「はッ」
「もしも隠居に死なれては、万事終る。おのれが息絶える前に、あの密書を、隠居が、どう料理するか――それを思うと、わしは……隠居は、恐ろしい奴じゃ」
矢島九太夫に向い合っているとき、権力家が持つ冷酷な沈着をも忘れ、酒井忠清は蒼白な面に癇をたかぶらせ「早く奪いとれ、早く!!　早く……」と、執拗に九太夫を責めつづけた。

二

夜具に埋れた九十三歳の老軀は衰残の極にあったが、真田信之の聴覚は鋭く、次の間に潜み蠢いているものの微かな呼吸をとらえていた。
寝所の次の間は信之の書斎になっている。その部屋の中を何者かの手が這いまわっている。
夜更に忍んで来るものの気配を、今までに信之は二度も感受している。今夜は三度目であった。

はじめは寝首を掻きにでも来たかと思っていた信之も、今は曲者の目的を知った。今夜も黙って見すごしてやるつもりでいたのだが、信之を恐れながら緊張と昂奮とを懸命に押えつつ働くものが哀れにも思え、ふと興味にも駆られ、思わず信之は、いたずらっぽく声をかけてしまった。

「探しものは、見つかったか？」

次の間の沈黙が凝固した。

（この隠居所におるものかな？……誰であろうか……？）

だが信之は、もう面倒くさくなり、襖一つをへだてた相手に、

「わしも眠る。そちも帰って眠れ」と言ってやった。

曲者は息を詰め、動かない。

苦笑して、信之は寝返りをうった。寝返るだけでも、衰えた信之の肉体は呻いた。

松代の城下から北に一里を離れ、鳥打峠の山腹を背後に構えられたこの隠居所は、侍臣の長屋をふくめ建坪六百坪ほどの簡素なものだが、屋敷を囲む山麓の樹林は、ひろく、深い。

黒い夜の底で、樹林は風に唸っていた。

わずかに枝へ残った樹葉も、ほとんど吹き払われてしまうことだろう。

やがて……次の間を出て行く隠微な衣ずれの音を聞いたように思ったが、信之は、すぐに眠りの中へ落ちこんでいった。

藩の横目付、守屋甚太夫殺害の報を、信之が受けたのは、この夜から二日目の朝であった。床の中で、信之は眼を瞠った。

家中千余人。士卒下人をふくめて四千人に近い家来のうち、三分の一は分家の沼田から移したものだが、守屋甚太夫も、その沼田衆の一人である。

信之は、隠退に当り、それまでは分家沼田の主であった故信政を呼び寄せ、本家松代を譲った。そして信政が去った後の分家を、それまで捨扶持をやっていた孫の信利に与えたわけだ。故信政に従って松代へ移った沼田衆と、生えぬきの本家の侍達とは馴染みも薄いためか、どうもしっくりと溶け合わず、反目が絶えなかった。

あの騒動の最中に、沼田衆の中には早くも沼田の信利へ通じ、信利が乗込んで来たら出世の蔓を抜目なく摑もうとして、本家の情報を沼田へ持込むものもいたのである。

この沼田衆のうちにあって守屋甚太夫は、本家分家の区別なく、藩士を監察する横目の役を誠実につとめ、その態度には一点の不正も見えず、沼田衆に対しても、かなり厳しい取締りを行ってきていた。

その甚太夫が、昨夜半、人の気配に眼をさますと、枕頭に男が一人立ち、甚太夫を見下している。

「や!!　伊木彦六殿……」と、おそらく甚太夫は叫んだことと思われる。何故なら伊木彦六

は顔も姿も隠そうとはしなかった。

あわてて身を起しかけた甚太夫を、彦六は抜討ちに斬殺し、その足で、すぐに奉行所へ自首して出たというのであった。

「彦六が、何故に甚太夫を……」

さすがの信之も、これにはおどろいた。

伊木彦六尚正は、隠居所付の侍臣として信之が撰んだ近習三十人の中に入っている。

二十四歳の彦六は、子供の頃に小姓として城へ上ったときから、鈍重な性格であった。

信之の衣服に、のろのろと茶をこぼしたり、言いつけたことを忘れたり……鈍重なものが持つ粗忽さを発揮した小さな失敗は数えきれない。

彦六は小柄だが、ふっくりとした顔形で、額の真中に大きな黒子が一つある。

あまりに気が利かなく、家中でも評判となるし、彦六の亡父三郎右衛門が、

「お側近くにおいては恐れ多し……」と、退身を願い出たことも何度かあった。

信之は笑って取合わなかった。

彦六には特異の才能が一つだけある。

描画の才があるのだ。

今も尚、彦六が描いた見事な仏画が信州に残存している。彫刻の技にも長じ、模刻した三尺の阿弥陀仏金像なども松代に残っていたそうだが、これは明治年間に焼失してしまったという。

「丑よ」

と、信之は彦六の幼名を呼んでは、

「今夜は不二の山にのぼる鼠の群を描いてみよ」とか「鍾馗が弓をひいて馬上にある姿を描けるかな」などと、いきなり難題をもちかけてみると、少年彦六は、にっこりとうなずき、たちまちに筆をとって一気に描き終えてしまう。

絵筆をふるうとき、この鈍重な少年の眼は精気をはらんで輝いてくる。

小刻みに首をふりふり、ひたむきな視線を画紙に射つけ、もう楽しくて楽しくてたまらないといったような彦六の弾みきった心身の動きが、信之の微笑をさそうのであった。

これは現在でも、信之と彦六の間に流れている親愛の時間なのである。

「で、彦六は、何と申しているのじゃ？」

信之は腹這いになって、禿げ上った坊主頭が隠れるまで夜具をかぶり、鼻下の白い髭を右の小指で掻きながら、侍臣の師岡治助に訊いた。

「つまらぬ意趣遺恨があってのこと。存分に処刑を……と、かように申すのみにて、くわしいことは何としても口を割らぬのだそうで……」

「ふむ……おそらく、わしが問い訊してもロは割るまい。言わぬと決めたら言わぬやつじゃ。なれど、何故……わからぬ。これには、わしも思い当ることが毛頭ないわい」

侍女の波留が、朝の薬湯を運んで寝所へあらわれた。

師岡は波留を見ない。波留は甚太夫の娘だからだ。

師岡に助けられ、半身を起した信之に、薬湯の椀を差出す、むっちりと若いあぶらの浮いた波留の両手が、わなわなと震えている。
「波留。大変なことになったの」
信之は茶椀を受けてから、やさしく言ってやった。
ぎくりと波留が顔を上げ、すぐに伏せた。
「よい。退ってよい」
波留が退ったあとで、信之は彼女を親もとへすぐ帰すように命じた。
師岡は、すぐに戻って来て、
「気丈な女にて、涙ひとつ零しませなんだ。眼を見張り、口をわずかに開け、まじまじと私を見詰めるのみにて……」
「無理もない、動顚しておるのじゃ」
庭で、しきりに、鵙が小石を打ち合せるような声で鳴いている。
信之は沈思した。
信之にわかっていることは、伊木彦六と波留との間に、恋情が芽生え育っていたことだ。これを看取したのは信之のみだろう。
病床の信之をなぐさめる為に絵筆をとる彦六の傍で、波留が墨をすり、絵具を溶く手伝いをする。そのとき波留が彦六の横顔へ走らせる視線には、女の情念が煌いている。
彦六は女を見ない。しかし仄かに上気している。

（丑め。これで存外……）

自分が死ぬまでには何とかしてやろうと思っていたことだし、それに波留との恋を父親の甚太夫が撥ねつけでもして、それを恨みに彦六が……とも思えない。

信之が観察したところでは、この恋、まだ二人だけのものだ。

信之は迷った。

（この期に及んでも、まだ、わしに心配をかけるやつが出て来るのか……）

嘆息しつつ薬湯を飲む信之の体は、ここ一月ほどの間に一尺も縮まったように見える。

諸大名のうちでも正に偉観なりとうたわれ、六尺豊かに筋骨たくましかった信之の急激な衰え方は、師岡治助が見ても明白なものであった。

今度の騒動で、酒井老中の謀略と闘い、わが老軀の内へ温存しておいた微少の精根をも騒動解決のために投入してしまった信之なのである。

その精根は、九十を越えて、ようやく自分に許された閑暇とやらいうものを楽しむ筈のものであったのに……。

三

伊木彦六は死罪切腹と決まった。

自首後五日目の、万治元年旧暦十月十五日のことである。

無分別の喧嘩沙汰にて家中の侍を殺害した罪を逃れよう心は毛頭なし——とのみ応え、彦

六は、取調べに当った金井弥平兵衛が懸命に、すべてを自白させようとかかっても、くわしい事情を語ろうとしない。

金井弥平兵衛は、沼田派を代表する只一人の家老であった。

「不逞きわまる奴!!　本家のものは、それほどまでに沼田を継子扱いにするのか。一切を白状せぬところを見ると、これはまさに、守屋甚太夫を殺したのは、われら沼田のものへの面当と見える!!」

眼を閉じて端坐のまま、憎らしいまでに沈黙を守りつづける伊木彦六を睨みつけ、金井家老は居並ぶ本家派の侍達へ聞えよがしに大呼した。

あの騒動の折には、大殿の信之みずから陣頭に立ったため、沼田派も本家派も一応は力を合せて難関を切抜けたのだが、信之の病気快癒が困難となった現在では、またも両派の反目が再燃してきている。

隠居ながら、真田信之の声望は天下に鳴り響いていた。

天下の覇権が、まだ誰のものになるとも知れなかった戦国の世には槍をふるって真田一門の先頭に立ち、大御所家康の信頼も厚く、日本が徳川の統治により平和となった後も、幕府が一目置いている信之であった。

しかし家康が死んでからは、幕府の眼が信之の財力と武力を恐れはじめ、事あるたびに、その力を削殺しようという態度に変ってきている。

信之という巨木が倒れれば、真田の土壌は掘り返され、分家信利を擁した酒井忠清の腕が

再び差し伸ばされることは必至だと、家中のものは考えていた。

一月ほど前に、いくらか気分がよかったので信之は床を出て、侍臣と共に千曲川畔を乗馬したことがあった。好きな乗馬もこれが最後のつもりで、無理にも外へ出てみたのだが——。

大殿が、快癒された!!

愕然として、それまでは沼田の信利へ秋波を送っていた重臣が三人、早速に隠居所へ御機嫌伺いにやって来、汗を流しつつ世辞をふりまいていったものである。

間もなく信之の病気が重くなると、この連中は見舞いにもあらわれない。

信之の再起が不可能となれば、見舞いなどして、もしも信利に睨まれでもしたら大いに困るというわけなのだろう。

こんな情勢を見ては本家派のものも黙ってはいない。口論や対立が日毎に露骨なものとなっていたところだ。

それにしても、いくら分家派だからといって、温厚誠実な守屋甚太夫を斬ったことは伊木彦六にとって不利であった。

分家派は挙って怒りの叫びをあげる。

本家派にしても、寡黙で人づき合いも下手な彦六を庇ってやろうという感情が、もう一つ盛り上ってはこないのだ。隠居所でも友人がなく偏屈者で通っていて、何時も独りぽつねんとしている彦六なのだ。

(それが、あやつ、女を得てから、とみに顔つきが明るうなってきておったのに……)

信之は、哀しげに首を振って、
「何より彦六が、おのれの罪をじゃ、みとめおる以上、こりゃ、どうにもならぬ」
金井家老の裁決により、彦六の切腹は、早くも翌十六日と決定した。
藩主が幼児なので、祖父信之が後見となっている為、その裁可を得に、金井弥平兵衛が隠居所へ伺候した。
信之は金井に会わず、師岡治助をもって許可をあたえた。
その日は朝から肌寒い曇天であったが、午後になって雨が降り出した。
その雨の中を、老臣の鈴木右近忠重が隠居所へやって来た。老臣といっても、右近はすでに家督を一子治部左衛門に譲り、信之同様隠居の身である。
鈴木右近が伺候とあれば、信之も会わぬわけにはいかない。
主従というよりも友人——いや、もっと奥深い人間と人間との関係。つまり信之自身の人生が、歴史が、そのまま鈴木右近であると言ってもよい二人であった。
右近は、信之より八つ下の八十五歳。信之の苦楽も秘密も、信之と同じ肉体となって知覚している、と言ってよい。
信之の傍へ来て、右近は重い声で言った。
「彦六が死罪と決まりましたようで……」
鈴木右近は、まだ矍鑠としている。体の肉もあまり落ちてはいない。
柚子の皮のように毛穴がひらいた太い鼻の頭を、若いときからの癖で、左の中指を曲げて

撫でながら、右近はもう一度信之に、
「大殿。彦六が切腹を……」
「わかっておる」
床の中から、信之は、やや苛立って答え、頭から夜具をかぶってしまった。
右近は、付添っている師岡治助に言った。
「ちょと外してくれい」
「は……」
師岡が退るや否や、右近は、いきなり夜具を引きめくった。
「何をする、忠重……」
「まずお聞きなされませい」
「何……？」
「右近。彦六の命乞いにまいってござる」
「馬鹿な……」
「御不審とは思われませぬか？」
「むむ……自首をしたくせに殺害の理由ものべず、ひたすらに死罪を望むほどならば、何故、甚太夫を斬って後、すくさま自決せぬのじゃ、彦六は……」
「そこでござる」
「彦六にしては可笑しいことをする。あやつは鈍なやつじゃが、性根は坐っておる筈じゃ」

「そこでござる」
「殺害の原因は明かしたくはない。なれど、おのれが他愛もない喧嘩沙汰で死んだのではないことを、彦六め、わしにだけは知って貰いたかったのであろう」
「いかにも……」
「……それ以上のことは、わしにも、わからぬ。そちには、わかるか？」
「わかりませぬ」
「わしにも不明、そちにも無明……しかも彦六はおのれの罪をみとめておる。これでは、どうしようもないわ」
「そこを押して、助命を……」
「忠重。そち、どうかしておるのではないか。七十年も、わしと共に暮してきて……今となって、わしというものがわからなくなったのか？」
「彦六が、哀れに思し召されませぬか」
「言うな……すでに、わしは裁可を与えた」
「そこを曲げて……」
「くどいやつ。そち、老いぼれたのか」
「大殿――」
右近は両手を突き、白髪頭を信之の顔前につと寄せてきた。
右近の団栗のような眼が、チカリと光った。

「……？」
「伊木彦六は、大殿のお子でござる」
「何!!」
沈着無類の信之も、このときは慌てた。
皺に刻まれた信之の面上へ、緊迫と昂奮とが青黝く浮いた。
「お静かに、お静かに……今更もってお心を騒がせ、申しわけありませぬ」
「まことか？」
「はい」
「誰に生ませた子じゃ？」
「おわかりになりませぬか？」
「おぼえ、ない……」
「おぼえなきお子が、まだ一人や二人はござりますぞ」
「この、真田の家にか？」
「御家には、彦六のみにござる」
信之は唸った。
右近に、そう言われれば、納得が行かぬともいえない。
信之の正妻小松は、三十八年前の元和六年に没している。
当時五十五歳であった信之は、以後も再婚はせず、何人もの侍女に手をつけてきていた。

子を生んだ女もあり、生まなかった女もいる。

生んだ子の行先を信之が知っているものもあり、知らぬものもある。いや、あったとしても不思議はない。

大名の家の妾腹の子の運命は、無惨なものであった。

ただ真田家には、信之の意を暗黙のうちに了解する鈴木右近のような重臣がいて、閨怨の政治へ介入することを防ぎ、これを捌き、しかも侍妾や庶子の行手に幸福をもたらすべき処置を遺憾なく行ってきている。このことについて絶対の秘密が保たれていることは勿論である。

信之が気づかぬうちに城中から消えた侍妾も確かにいた。伊木三郎右衛門の妻が彦六を生んだという嘘を真実にしてしまうことなどは、右近にとって易々たる工作だったろう。

戦乱の時代に、信之を助けて右近が行った謀略は凄じいものであった。

「彦六の出生は、たしか寛永……十二年の、夏であった……すれば、彦六を生んだ女は……雪か？　波津であったか……」

ややあって、信之は茫然と言った。

「それを確めてどうなりまする。昔のことにて……私めも、忘れまいた」

淡々と右近は答える。

「……わしの子をあれまでに育ててくれた伊木三郎右衛門に、こうと知ったら礼を言うておくのであった。三郎右衛が死ぬ前に……」

「今となっては」
「手遅れじゃな」
うつろな淋しい笑いが、信之の唇に洩れた。
「あの床の間の置物のような彦六を、はじめて見たときから、わしは、異様なまでの愛着を、あやつにおぼえた。あやつが、絵筆の動きに没入している態を見ることは、わしが何よりの楽しみであった。その……そのわけが、今わかった……」
「恐れ入ってござる」
「あやつ、わしに少しも似ておらぬ」
「母親似かも知れませぬ」
「ふむ……」
「彦六の顔から母親の顔が思い浮びませぬかな」
「浮ばぬ。わしも老いぼれたの。その女は、一体誰であったのじゃろ……ときに忠重。このことは、むろん彦六は知っておるまいな？」
「はい」
「そうじゃ、知ってはおらぬ。あやつが知っておれば、わしにも何かが感じとれた筈じゃ」
けれども伊木彦六は、何故あのようなことを仕出かしたのだ、殺されたものと殺したものの間には、いささかも不和反目の匂いはなかったではないか……。
信之は嘆息を吐きつづけるばかりであった。

冷雨の音が強くなってきた。

侍臣が灯を捧げて来、雨戸をくる音が静かにおこった。

信之は右近の為に酒を命じてやり、侍女が差出す薬湯を飲んだ。

病気というよりも癈身だと言うべき信之なのである。薬湯によって恢復するものではないことを承知しているが、薬湯は信之の感覚を、心想の動きをさわやかに保持する役目をしてくれるようだ。

（わずかに、このときに至って、はじめて得た閑暇なのだ。わしは大切にせねばならぬ）

信濃の秋にも感覚を澄まして別れを告げ、次第に深む冬の気配を迎えつつ、信之は一椀の茶、一椀の粥にも、よくよくの訣別がしたいのである。

陽の光り、草のそよぎ、風の声――すべての事象や生活の片々が、このように心界を領してきたのは、信之にとって、むしろ意外であった。

何を見ても聞いても、すべては限りなく美しく思われ、（わしは幸福な男じゃ……）と、安楽に身を横たえ、この明け暮れのうちに沈潜して来るべきものを待ち、自分の病状の起伏に騒ぐ人びとのすべてを捨て去り、夢のような日を送っていたのに、伊木彦六事件は、意外な衝撃を信之にもたらしてしまったのだ。

「忠重。そちも、ひどい男じゃ」

薬湯の椀を持った侍女が退ってから、信之は右近になげいた。

「なればこそ、こうして恐れ入っておるので……」

「よい……もう、よいのだ」
「では、彦六助命の儀は……」
「わしが定めた法を、わしが曲げるわけにはゆかぬ」

四

翌十六日の朝を迎えた信之のもとへ、まだ隠居所に戻ってはいない波留の書簡がとどけられた。
波留自身が、城下に住む信之の侍医、横田則庵の家へ来て、朝の御診察の折にお手渡し頂きたいと頼みに来たのだという。
その書簡を一読した信之は、則庵が仰天するほどの勢いで床の上に跳ね起きた。
「左門！　ただちに守屋甚太夫邸へ行き、波留を引立ててまいれ。早くせよ」
侍臣の玉川左門が急ぎ出て行くのを見送り、信之は、
「おそらく間に合うまい」
こう呟やいたが、すぐに、もう一人の近習へ、
「切腹の時刻には、まだ間があろうと思うが、ともかくも伊木彦六の処刑を待つよう、手配せよ」と、力のこもった声で命じた。
そして信之は、横田則庵の制止もきかずに起き上り、居間へ出て来た。
信之の好みで田舎風にしつらえてある炉の炎が、久しぶりに主人を迎え潑溂と燃えはじめ

た。

雨は降りしきっていた。

柴村の隠居所と城下町を結ぶ道を、騎乗の藩士が泥濘の飛沫をあげて慌だしく行き交った。

急遽、金井弥平兵衛と大熊正左衛門が隠居所へ駈けつける。

隠居所へ戻って来た玉川左門の顔を一眼見ると、信之は、すぐに言った。

「間に合わなんだようじゃな」

「は――見事、自害を……」

則庵邸から戻った波留は、亡父甚太夫の帯刀の下緒で膝をくくり、一突きに急所を抉って死んだ。

波留の母は数年前に病歿している。

沼田の分家で、信利の近習をつとめている兄の太十郎も、父の死を聞き松代へ駈けつける道中にあることだし、家来小者は、主の急死につづく変事に驚愕して目も当てられぬ有様だという。

邸内に波留の遺書は無かった。

死にのぞみ、彼女が書きのこしたものは、先刻届けられたばかりの信之宛の書簡一通があるのみだ。

「大殿!!」

「これは、何といたして……？」

居合せた大熊も金井も顔色を変えた。
信之は人払いを命じた後に、この本家分家両派の二人の家老の前へ、波留の遺書を放ってやった。
「まず、読んでみよ」
二人の家老は、これを読み終えて言葉も出ない。
ことに金井家老は生色もなく信之の前に頭をたれてしまった。
「金井。そち、自分を責むるなよ」
「恐れ、入りたてまつる……」
「あの場合、彦六に対し死罪を申しつけたことは正当じゃ。わしが裁いても、そうなったであろう」
「恐れ入り……」
「よい、よい。なれど金井。こうなれば彦六の罪も……どうなろうかな？」
「申すまでもなく無罪にございます」
「手配を頼む。ついでに、伊木彦六を此処へよこしてくれい」
「心得ましてござります」
金井弥平兵衛は倉皇と退出して行った。
信之は、もう一度、波留の筆跡を辿ってみた。
——ひたすらに、大殿さまの御憐憫にすがりたてまつり、書き遺しおくことの……と、手

紙は始まっている。

波留の父、守屋甚太夫は、分家の秘命を受けた隠密であったのだ。

沼田派のものを疑えば切りがないというのが現状なのだが、しかし甚太夫が分家を通じて公儀の、酒井老中の命を受けて働いていたとは、信之も気づいていなかったことであった。

波留と彦六とは、身を許し合っていた。

酒井から出た秘命を受けた父に強要された波留が、あの密書を探索しはじめたときには、すでに彼女は彦六にすべてを与えた後であったらしい。

故信政の松代入封に従い、父と共に沼田から移ってすぐ、波留は隠居所付の侍女となった。

娘の修行の為、ぜひとも御高徳のほまれ高き大殿のお傍に仕えさせたく——と甚太夫は真情を披瀝して、大熊家老に願い出たのである。

信之は、すぐに許可をあたえた。

何故父親が自分を信之の傍に仕えさせたかという本来の意味を、まだ知ってはいなかった波留の、忠実な奉仕と感情の動きの強い、明るい性格は、老いた信之をよろこばせた。

「大殿さま。今日は御庭の花をいけてみたく存じまするが、どの花がよろしゅうございましょう？」

朝の茶を運んで来て、こんなことを甘えるように言ってのける。

他の侍女達の中には、あまりにも馴れ馴れしいと眉をひそめるものもいたが、信之はこだわらなかった。

今度来た守屋の娘は、掘出しものじゃ――と、鈴木右近にも洩らしたことがある。

やがて、波留は彦六との恋に酔うようになった。

父から命を受けたとき、波留は驚くとともに、きっぱりと拒絶をした。

そして彦六との恋を打明け、父の翻意をうながしさえもしたのだ。

甚太夫は、逆に、娘のこの恋を利用したようである。

父の意に従わなければ、この場を去らせずにお前を討果すまでと、甚太夫は波留を威した。

……わが命に従わずば、彦六さまのお命も刺客の手により必ず絶たれる、とまで申されて、よんどころなく……と、波留は記している。

（さぞ思い悩み、苦しんだことであろう。哀れなやつめ……）

哀れとも馬鹿馬鹿しいとも、信之は呆れ返っている。

三度目に潜入して信之に声をかけられ、とっさに逃げることも適わず竦み上ったあの夜――波留は伊木彦六に捕えられた。

彦六は当夜の宿直番であった。

別棟になっている信之の居室から、ようやく逃れ出ると、大廊下へかかる納戸傍の小廊下で、待ち受けていた彦六の腕が波留を摑んだ。

そのまま宿直の部屋へ連れ込まれ、ついに波留は、白状してしまったものらしい。

父に威されては主人と恋人を裏切り、恋人に詰問されては父を裏切り、その両方に於て自分自身をも裏切りつづける――寝所へ忍んで来たときには、かなり心得ありと見てとった信

之なのだが、波留は、どこまでも若い女であった。
無垢な女の感情のままに、おろおろと迷い、強く耐え、耐え切れぬままに弱く、脆く……。
（わずか十八の娘に……なれど波留のような女が、訓練を経、甲羅を経たときには……）
煮ても焼いても食えぬ根性を身につけてしまうだろうことも考えられる。
感情の強い女は、逆に感情を殺し切れる女になるものだ。
けれども現在の波留に隠密の任務がつとまるものではない。こんな小娘を、わしの相手にさせようとは、酒井も下落したものだと、信之は憫笑した。
それだけに、密書奪還を目ざす酒井忠清の執念は急迫しているのだろう。その焦りが、忠清らしからぬ幼稚な手段となって現われ、やすやすと失敗を露呈してしまったのだ。
権勢が世にうたわれているだけに、陰謀の一点をも証拠として他人に握られることが、老中酒井忠清にとっては計り知れない苦痛となる。
（謀略に溺れるものの、弱さじゃ）
昔からそうであったが、信之は、わが領国へ入り込む幕府隠密などは歯牙にもかけていない。
真田の政治は、経済は、こういうものだぞと、隠密が探るままにしてやったつもりである。
真田の百姓は日本一の幸福者だと領民すべてが、自負しているほどに、信之は、わが領国の育成に政治家としての情熱を注いできた。
領国が富めば富むほど幕府の眼は光る。

大名達の富力が増すことは、幕府にとって脅威以外の何物でもない。だから大名の取潰しや改易は絶えず行われている。

信之の苦心は止むことがなかったが、

（わしは九十年余も、ただもう忙しく頭を働かせ、体を動かしつづけてきたので、わが身の不安や恐怖を感ずる暇がなかった……）

と、こう述懐している。

信之の領国は富み、人心は明朗であった。

それだからこそ、酒井忠清のふところに三十余年もの間忍ばせておいた隠密の働きが物を言うのである。領国の為に我慾を押え捨てた政治であればこそ、その為の謀略であればこそ、成果をもたらすのだ。

幕府や酒井は、他人が獲得したものを奪いとろうとする。

信之は、苦労して築き上げ、領民家来と共に獲得する。

この二つの違いであった。

こうして何十年もの間、真田家は幕府に隙を見せず、安泰であった。

だが信之の隠退するや、たちまちに暗雲は頭上に殺到した。最後の力をふりしぼり、二人の孫の争いを解決した信之だが、これから先のことは、わかったものではないのである。

信之は、大熊正左衛門に向って、

「わしは、大坂御陣の折、父と弟を敵にまわしてまでも、大御所に従った。わしの眼には豊

臣方の負けは明らかであった。なればこそ、大御所に味方したのじゃ。大御所のみが乱世を統一出来る唯一人の御方だと、わしは信じておった。わしが父も弟の幸村も、血の気が多すぎての。弱きを助くる義俠のものたちであった……なれど、わしは、義俠の血よりも、何千という家来、何万という領民の方が大切であっただけのことよ」

大熊正左衛門は、涙ぐんでいた。

「大御所亡き後の公儀は、わしを信じてはくれなかった。わしを恐ろしがり、それが癖になってしもうた……は、は、は……真田の家ほどに隠密が入込んだところは、他の大名にも、余りあるまい」

「そ、それゆえにこそ……」

「駄目じゃよ、大熊――わしは、もう役に立たぬ」

「なれど……」

「そちも恐いのか？　わが亡き後に、やってくるものが……」

「……」

「よし。大いに恐れを嚙みしめよ。恐れなき勇気はない。恐れなき愛もないのじゃ。勇気をふるいおこせ、正左衛門。わしは今まで、真田の家の土には懸命に水をあたえ、肥料もまいてきておる。これが後になって物を言うてくれねば、それまでのことではないか。な、そうであろう」

「は……」

「わしが死ねば、大御所の頃よりの戦国大名は、ほとんどこの世に居なくなる。そうなれば、公儀の警戒も解けるやも知れぬし、この後には良き将軍、良き老中が生れ来て、公儀の政事も、垢ぬけてこようときが来るやも知れぬしな」

「は……」

「先のことは、すべてわからぬ。右衛門佐は何とか物になりそうに思える。いや、ひとかどのものに育て上ぐるが、そち達の役目じゃ」

「はッ」

「頼むぞ。わしは、もう知らぬよ」

昼すぎになって、伊木彦六が隠居所へ来た。

信之は、寝床へもぐり込んでいた。

「近う寄れ」

彦六が寝所へ入るのを待ち、信之は夜具にすっぽりと顔も頭も隠したまま、彦六の顔を見ずに、もそもそと言った。

「波留の遺書を読ませてもろうたか？」

「は……先程、大熊様より……」

彦六の声が、うるんでいる。

飛び起きて抱いてやりたいと思ったが、信之はやめた。
「何故、甚太夫を殺した？　うむ……？」
「鈍根にて御役にもたたぬ私……せめて、御家の為になることならばと……」
「馬鹿者。甚太夫一人を殺したところで何になる」
「他の、怪しげなるものの心が、引締まろうかとも存じまして……」
「波留を何処で抱いたのじゃ」
「は……」
「言え」
「は……」
「この隠居所でか？——宿直の夜にか？」
「はい」
「不作法な——怪しからぬやつ」
「申しわけ、ござりませぬ」
「そちには、そういうところもあったのか」
「……」
「うむ？　どうじゃ？　言え」
「た、たまりかねて……」
「不埒者め」

「お許し下さいましょう」
彦六の顔は、おそらく涙でぐしょぐしょになっているだろうと思いながら、信之は、
「甘え者めが……波留が隠密に不向きなのと同様に、そちも、武士には向かぬ男じゃ。刀を抜く前に、何故、わしに打明けなんだ？」
「甚太夫の娘と、不義をいたしおりました私ゆえ……」
「ばかもの」
「はい」
「女を助くる為、隠密と心中するつもりでおったのか」
「……」
「おろかものめが……なれど女は死に、そちは生き戻った。これから、どうする？」
「お暇を、頂戴いたしたく……」
「それもよかろう。で、何をするつもりか？」
「絵を描いて生くるつもりにございます」
「絵を売ってか？」
「売れるようなものは、とうてい、私には描けませぬ」
「では乞食でもするか？……そちには算盤もはじけまいからの」
「はい」
このとき、信之の声が、わずかな震えをおびてきた。

「ともあれ、そちにはまだ、愛をかたむけるものが一つ残っていたのじゃ。そのことを幸せと思え、ただ必死に、そのものへしがみついて行け」

彦六の号泣が、どッとおこった。その泣声が納まるのを待ち、信之が言った。

「我家へは戻ったのか？」

「いえ。金井様締り所より、ただちに、これへ……」

「よし。早く帰れ。帰って、母を、よろこばせてやれ」

母ひとり子ひとりの伊木彦六であった。

その母を養母とも知らず、信之を実父とも悟らぬ伊木彦六が退出する気配に耳を澄ましつつ、信之は夜具の中に、ひっそりと身を縮めた。

五

翌十七日の朝になると、信之は床を払い、入浴を行った。侍医も侍臣も懸命に制止したが、聞き入れない。

信之の体は、すっかり肉が落ち、窪んだ眼窩の上の広く出張った額が鉛いろになっていて、しっかりと引結んだ唇には、微かな震えが間断なく起っていた。

けれども信之の声や足どりには、毅然たる生気がみなぎっている。浴室へもひとりで入った。

「気分がよいのじゃ」

元気よくこう言い、信之は家来達の不安を追い払ってやった。

――これは、不思議でござる。大殿は、もしやすると、このまま御快方の道へ……と、横田則庵が侍臣に囁いた言葉を裏書するかのように、信之は衣服に身を正し、炉端に坐り、悠々と一椀の粥を喫した。

居間の障子を払わせ、侍臣も遠ざけてただ独り、黙念と炉の前を動かない。

雨は昨夜のうちに上っていた。

広縁の向うにひろがる庭園は、雨を吸って重く密集した朽葉に埋まり、山腹の樹林に抱かれて、信之の視線を迎えた。

裸になった樹林の上の空は冷んやりと澄み、わずかな巻雲を浮かせている。

居間に流れ込む大気は、もはや凜冽とした信濃の冬のものであった。

ようやく、陽が樹林の切れ目から射し込む頃になって、鈴木右近が訪れて来た。

酒が運ばれる。

「今日は、また、いかが遊ばされました？」

「床を払った」

「それは……？」

「まあ、飲め」

酌をしてやる信之の顔を、右近は凝視した。

「忠重」

「はあ……」
「わしは、今日、死ぬるぞ」
「……左様で……」
「たぶん、死ぬると思う。今朝眼ざめて、そう感じ、今もまだ、感じておる……」
「左様で……」
「そちは、わしの後を、追うつもりなのであろうが、それは……」
「それは、私めの勝手でござる」
「殉死など、古臭いわ」
右近は笑った。
「何が可笑しい？」
「私めは、生きすぎました。大殿の体が消滅すれば、この後、生きてあるは無意味と相成ります。私が、これ以上、生きておるなどということこそ、古臭いので……」
「わしは、今朝に至るまで、薬湯を飲んでおる」
「それは、大殿が、今朝に至るまで生きてあらねばならなかったからでござる。つまり、今の今まで、お忙しくあられたからで……私めは、すでに生きてあるが退屈となり、もはや……」
「ともかく、ならぬ」
「ま、よろしゅうござる、そのことについては……」と、右近は盃を差出し、

「御返盃を……」

信之は盃をほし、苦笑した。

鈴木右近忠重は、早くから父を失い、九歳の幼童時代から信之股肱の臣となった。

信之の歩んで来た道が、そのまま自分の人生であったからには、信之の死も、また自分の死であると、右近は何十年も前から自然に考えていた。すでに切腹の立会人として、家老職では年若だが遠縁に当る木村渡右衛門に立会を頼み、藩士羽田某に介錯を依頼してある。

そこまでは信之も知らぬことだが、一応釘をさしてみて、とても納得する右近でないことは、すぐにわかった。

「死ぬな」と止めてみても、止める自分が先に行くのだから止めようがない。

信之は、放念することにした。

「彦六が許されましたそうで……」

「波留の手紙を、そちにだけは見せるよう、正左衛門に言うておいた。見たか？」

「はい。まるで気違いじみたことでござる」

「狂うておるのは、酒井忠清じゃ。あれほどの権謀家にして、この始末だ。思慮も分別も忘れ、他愛もない隠密工作に溺れるまでに、逆上しておる……陰謀の皮一枚をへだてて虚栄がある。権勢の底には絶えざる不安がある」

「不安があればこそ、威張ろうとする……」

「若い頃のわしにも、それはあった」

「私めにも……」
ここで主従は眼と眼を見合い、微笑をかわした。
「それで、大殿。例の密書は、まだお手許に？」
信之は、首を振った。
「え？……では、何処にござるので？」
「尻をふいて、厠へ捨ててしもうた。まだ、わしが寝こむ前のことよ」
「何とおおせられる」
「なまじ後へ残しては悪い。証拠というやつはな、握ったものをも、握られたものをも狂暴にするものじゃから……ああしたものを使いこなすには年期がかかるわ」
「御意」
「じゃがな、忠重。酒井は、おそらく、あの密書を狙い、わし亡き後も、蠢動しつづけるであろう。ところが、いっかな見つからぬというわけじゃ」
真田家に、わが汚点の一つを握られていると思い込んだままに、何時かは酒井忠清も死を迎えることであろう。それでよいのだ。
それが一番、あの密書を有効に役立てることになるのだと、信之は思っている。
あたりに、昼近い陽の光が温くみなぎり、今日も、しきりに鶺鴒が鳴いている。
師岡治助が居間へ現われた。
「領内四郡の百姓総代として五十二名。只今、御門前へまいり、蔬菜を献上し、尚も去らず、

大殿の御本復を祈りおりまする」
「また、来てくれたのか……」
今夏、信之が倒れてからというもの、門前にひれ伏して祈念をする領民が絶えない。
この日――隠居所の門前に祈念を捧げる百姓達は、開き放たれた門の彼方から、侍臣に護られ姿をあらわした信之を見ると、一瞬声を呑み、ついで抑制しきれぬ歓呼をあげた。
信之は、玄関から五間のところで立止り、両手をかかげ、領民達に応えた。
そばへ行ってやりたかったが、信之は、憔悴しきった自分を見せて、彼等を哀しませたくはなかった。
すぐにまた居室へ戻った。
信之は、激しく喘いでいた。
薬湯が運ばれ、侍臣達は信之を寝所へ戻らせようとした。
「構うな!!」
と、鈴木右近が叱った。
「大殿の思召しのままにいたせ!!　みなは、退っておれ」
異様なものが室内にたちこめていて、侍臣達は狼狽を如何に押えたらよいものか、戸惑うばかりだ。
「退れ。よいから、退れ」
右近は起って両手を激しく振り、一同を遠ざけてしまった。

「忠重。そちも帰れ」
「はい」
右近は手を仕え、白髪頭を低く、低くたれ、しばらくは動かなかったが……。
「では、これにて……」
「おう……」
後も振向かず、鈴木右近は退出したが、廊下へ出たとたんに、ぐらりと一度よろめいたようであった。
信之は、赤々と燃える炉の前に、ゆったりと胡坐を組み、積み重ねた布団に背をもたせていた。
陽は、いよいよ明るく室内に充ちてきて、信之は今まで煙のように体内にとどまっていた最後の力が、すべて、その陽の温みのうちに吸いとられ溶かされて行くような気がした。
このとき、信之の耳は百姓達の唄声をとらえた。
右近が命じたものか、百姓達が我から唄い出したものか——それは松代の田植歌なのである。

碁の目田に
通りをよく植えろ
しゃり田に

戸隠山で、鳩が鳴く
何となく
つきこよ、つきこよと言うて鳴く

信之が田植歌を好むことを、百姓達は知っていた。
多忙な時をぬすみ、まっ青に晴れわたる初夏の空の下、蹄の音も軽く、田植に励む百姓達に会釈しつつ、領内を廻り歩くことが……。
（わしの、大きな愉楽であった……）
夢のように、ただ田植歌の唄声のみが信之の感官をとらえていた。
思念は全く消え、徐々に、最後の眠りが信之を浸しはじめた。

真田信之の葬儀は、約一ヵ月後の万治元年十一月十三日に行われた。
この日――松代には珍しい烈風が吹きつけ、戸隠・飯縄の山々から風に乗ってきた雪が乱れ飛び、葬列を包んだ。
長い葬列の中央にある信之の棺は、十六名の近習によって両側から護られている。
その近習の中に伊木彦六も特に許されて加わっていた。
彦六は、托鉢の僧衣をまとっていた。

棺のすぐ後ろには、大納戸、坊主頭、御茶道などを両側に率いて鈴木右近が従っている。伊木彦六は、信之死去の後に城下の願行寺へ入り、剃髪して、信西と名を改めた。僧侶となり、画業に励むという生き方が、これからの彦六をどういう人間に育て上げて行くことか、それは鈴木右近にも計りかねる。

昨夜、伊木邸を訪問した右近は、彦六の母に、

「こうなってみると、大殿が御実父であったことを、彦六殿に知らせてやりたいような気になり、毎日毎夜、心がたかぶって困るのでなあ」

母の貞は、このとき眼を輝かせ、自信と愛情が溢れる声で、はっきりと答えた。

「彦六は、わたくしの子でございまする」

「むむ……」

「今の彦六に、大殿様が御実父であられたことなどを聞かせて何の意味がありましょう……大殿様は大殿様のまま、あの子の胸に在るが、まことにござります」

鈴木様にも似合ぬことを——とたしなめられた。

右近は、急に涙もろくなっている自分に気づいて狼狽したものだ。

（こりゃ、いかぬわい。早く大殿の傍へ行かぬことには、どんな恥をさらすやも知れぬ）

明後日の朝に、城外西条村、法泉寺の境内を借りて殉死することに決めた鈴木右近である。

彦六の母も、間もなく息子の後に従い、剃髪することになっているという。

真田家の菩提所、長国寺へ向う葬列は、沿道にくろぐろと伏し、声もなくうずくまる領民

達の中を割って静謐（せいひつ）に進んだ。

雪は飛び、風は鳴った。

風の中に聞えるものは、伊木信西が烈（はげ）しく唱える念仏の声のみであった。

（「オール讀物」昭和三十六年三月号）

開化散髪どころ

一

西郷隆盛の〔ふところ刀〕なぞといわれた日本初代の陸軍少将・桐野利秋――若いころは〔人斬り〕と異名をとった薩摩藩士で、前名を中村半次郎という。

あの勝海舟をして、

「ああいうのを豪傑というのだねえ」

と、いわしめた男である。

維新前の、勤王佐幕入り乱れて闘った血なまぐさい暗黒時代に、この男の剣の冴えと、俊敏無類の間諜活動は、天下にとどろきわたった……と、まあ少し大げさにいっておこう。

ついに幕府倒れて、官軍が江戸へ進駐し、江戸無血開城成ったのは、慶応四年四月十一日で、この日の早朝、最後の将軍・徳川慶喜は江戸を去り、水戸へ謹慎をした。

旧幕府恩顧の士が結成した彰義隊は、それでも尚、上野山内へたてこもり、官軍と対峙していたが、五月十五日に官軍の総攻撃をうけ、たった半日のうちに討滅されてしまった。

むろん、上野周辺では大変な騒ぎであったのだが、離れたところでは江戸の市民たちもあまり平常と変るところなく、湯屋も客を入れていたという。

その日の夕暮れになって、

「汗と血を流さにゃ、どうもならん」

中村半次郎は、神田・三河町にある元本多豊前守屋敷を接収した官軍屯営へ戻って来ると、近くの「さくら湯」という湯屋へ出かけて行った。この湯屋は江戸進駐以来、彼のなじみになっていたものだ。

同行したものは同じ薩摩藩士・河野四郎左衛門一人である。

二人が入って行くと、入浴中の客が、みんな出て行ってしまい、中村は苦笑しつつ、悠々と血と汗を洗い流してから、

「おい、すまんな。少いが取っておいてくやい」

小判一枚を、番台にふるえている主人へわたし、

「河野どん、先へ出もすよ」

フランネルのシャツと下帯一つの上から陣羽織を羽織り、汚れつくした軍服と大刀を抱えた中村が、ふらりと通りへ出た。

おりからの雨も小やみになっている。

もう、あたりは暗く、人影もなかった。

「戦さな、大勝利。風呂はよか加減。ああ極楽じゃ」

声に出して歩き出したとたんに、そこらの町家の羽目板にでもくっついていたらしい黒い影が三つ、突風のように襲いかかって来た。

「だれか！」

大喝するや、中村半次郎は手に抱えたものを投げ出し、刀の鞘も投げ出すのと同時に早く

も抜身を構えて飛び退りつつ、迎え撃った。

〔西南記伝〕中に、こうある。

――利秋（中村半次郎）咄嗟に刀を抜きて其一人に応じ、奪闘数合、敵、少しく退かんとし、誤まりて石に躓き倒る。利秋乃ちこれに乗じ、之を斬る。されど敵もさるもの、斬られながら横ざまに利秋の胴を薙がんとせしかば、利秋身を転じまぬがれしも、終に其一指を失えり――。

斬った敵が横に払った一刀を中村が身をよじるようにして避けたとき、それまで二人の決闘を見守っていた刺客のうちの一人が、

「えい！」

横合いから猛然と斬って出た。

中村の左中指は、このときに切り落された、これが正しい。

「こいつら――」

と、そのとき河野四郎左衛門が湯屋から飛び出して来て、二対二の斬合いとなったが、こうなってはとても勝目はない。

二名の刺客は、たちまちに斬りたてられ、ついに逃走してしまった。

「こげな強せ奴も賊軍にいたのか……」

中村は、倒れている侍を見おろし、荒い呼吸をしずめながら、

「強せ奴ごわしたよ、河野どん」
何度もいった。
この〔強い奴〕は、幕臣ではない。上総・姉ヶ崎出身の剣客で、鈴木隼人といい、浅草・鳥越に道場をかまえ、門人たちの大半が幕臣だということもあり、隼人は門弟数名と共に彰義隊へ加わっていたものである。
このとき、鈴木隼人に従い中村を襲った刺客二人も幕臣だし、隼人の門人であった。中村の指を切ったほうが小野助三郎。もう一人が芝山佐平といって、共に、もとは徒士組に属し七十俵五人扶持という、幕臣のうちでも身分はかるい侍たちである。
上野が落ちてから、この二人は師匠の鈴木隼人と一緒に逃げた。
逃げながら師匠が、
「こうなったら万事終った。おれは死ぬ前に一人だけ、やっつけたい奴があるから、おぬしたちは逃げろ」
という。
「だれをやっつけるので？」
「薩摩の人斬り半次郎よ。あいつを斬って見たい。どれだけ出来るのか、ひとつためして見たい」
鈴木隼人は中年だが腕には自信もあるし、二人の弟子も血気さかんな年ごろで、
「よろしい、先生。お供しましょう」

ということになった。

敗軍の士が、どこをどうして敵中へ潜入したものか……。

後になって小野助三郎が、こういっている。

「思い出せねえね。もう無我夢中で、雨の中をあっちこっちとうろつきまわり、三河町の官軍屯所の近くまでたどりついたんだが、後で考えてみてぞっとしたね。だがさ、先生の死体を見捨てて逃げたのは、どうも寝ざめが悪かった。そのときはその、せめて奴の、あの中村半次郎の髪の毛一すじでも斬れていたらなあ、と、こう思ったっけが……何にしても大変な野郎でね、あのサツマッポは……」

小野助三郎、中村の指を自分が切り落したことに少しも気づいてはいなかったようだ。

二

三河町から夢中で逃げるうち小野助三郎は、いつの間にか芝山佐平を見失っていた。

市中には官軍が充満しており、警戒もきびしいし、旧幕兵の探索も峻烈をきわめている。

（いけねえかな、もう……）

京・大坂から今度の上野戦争まで、助三郎も徳川の戦士として、ずいぶん危い目にも会ったし、戦場にも出て来ていたが、

（負け犬になってみると、おそろしいものだな、躰中の力という力が、みんな抜け落ちてしまやアがった……）

江戸市中に、自分と共に闘うべき一人の味方もいないと、あらためて知ったとき、「それまではその、サツマの人斬りをやっつけるのだと張りつめていた気が、いっぺんにガクリと来て、いやもう、暗い雨の中を逃げまわりながら、ガタガタふるえ通しだったもんだ」

と、これが助三郎の述懐である。

闇の中で、彼は素っ裸になった。

むろん、大小も捨ててしまい、小柄でもって髷を切り、その髪の毛も短かくそぎ落し、この上から手ぬぐいをかぶった。

裸になると、二十七歳の引きしまった肌白の体軀で、背中から左右の二の腕にかけて牡丹の刺青が抱きすくめている。

この刺青は、助三郎が二十のころにいたずらをしたもので、そのときはまだ父の平蔵も存命であり、ずいぶん父母を困らせたものである。長兄の八十吉は早世し、家は次兄・精之介がつぐことになっていたし、

「何、どなたさまにも迷惑をかけてはおりません。どうか放り捨てておいて下さい」

と、父母に宣告をして、助三郎も道楽は一通りも二通りもやりつくした。

御徒町の家へは十日に一度も帰ればいい方で、あとはもう飲む打つ買うの三拍子に踊り狂い、そうかと思うと鳥越の鈴木道場へ出かけては泊りがけで剣術の稽古をやる。

家をつぐ責任もないし、悪友は多いし、十八から二十四までの小野助三郎は、

「厭だと思うことは何一つしたことはねえ」

のだそうである。

助三郎のようなエピキュリアンは、幕末のころの江戸のさむらいの一典型であって、彼はまだ剣術を好むだけましな方で、例の鳥羽伏見の戦争では、官軍に向って指揮をとる幕軍の隊長が馬にも乗れなかったという話がある。

とにかく、裸になると小野助三郎は、堂々と街路を歩きはじめた。

巡回している官軍の兵士には何度も出合ったが、そのたびに、助三郎はこっちから近づいて行き、

「へい、どうも御苦労さまでございます」

ぺこぺこと頭を下げて見せる。

こういうとき、何といっても背中の見事な刺青が物をいった。

薩摩や長州、土佐などから出て来ている官兵たちには、こういうのがさむらいだとは、とうてい思えない。

「夜道をうろうろするな。さっさと行け」

などと怒鳴りつけられるのが関の山で、

「馬鹿野郎め。そんなことで役目がつとまるのか。おめえら、どこに目をつけてやがるんだ」

官兵をやりすごすたびに、助三郎はせせら笑い、そのたびに愉快になってきた。

いまの助三郎は親もなければ妻子もない。

家をついだ次兄が病死をしたのが慶応元年の春で、助三郎が仕方なく家へ戻ったとたんに、ときの将軍・家茂の上洛があり、助三郎は散兵の一員として京へのぼることになった。

このときは、勤王運動の根拠地であり帝都でもある京へのぼり、徳川将軍の威風を天下に誇示せしめんとする大行列であったが、それから四年の間に、とうとうこの始末になってしまった。

父はすでに亡くなっていたし、母のむつも、助三郎が上洛中に歿している。上野の山へ入るとき、下男や女中にも暇をやってあるし、こうなれば一人きりの助三郎だけに、むしろ気は軽かった。

その夜ふけになって……。

「おい、おれだ。開けてくんねえ」

助三郎は、深川・亀久橋北詰に住む漁師の伊助というものの、小さな家の戸を叩いていた。

この伊助は五十をこえた大男なのだが、まだ独身で、大変な博打好きだ。助三郎がこやつと知り合ったのは鉄砲洲にある松平遠江守屋敷の仲間部屋でひらかれていた賭場なのだが、以来、妙に気が合い、よく伊助の舟で助三郎は網をうちに出かけたものである。

「おい、とっつぁん。あけろよ」

いくら叩いても返事がない。手をかけると、苦もなく戸が開いた。伊助は不在であった。戸じまりもせずに平気で家をあける男なのである。

（まあ、いい）

戸をあけて、助三郎が中へ入りかけたときである。

どこかで、

「きゃあっ……」

女の悲鳴がしたと思ったら、ひどい水音がきこえた。

しばらく耳をすましたが、深閑としている。

また、雨がしとしとと降り出してきた。

（放ってもおけねえなあ……）

とにかく、近くの川へ女が落ちたことだけは確からしい。

闇の中を泳ぐようにして、小野助三郎は駆け出した。

三

女は、亀久橋と要橋の間の、松平大膳太夫屋敷裏手の川に沈みかけていた。

助三郎は、うまく、これを救いあげ、水を吐かせた後、伊助の家に担ぎこんだ。

今度は火をおこしたり、裸にした女を摩擦したり……痩せぎすの、なよなよとした躰つきなのに乳房と腰まわりはびっくりするほど豊満なもので、助三郎、女の何から何まで遺憾なく見とどけてしまった。

むろん生娘ではない。子を生んだこともある乳房だし、くずれた髪のかたちからも女房

……というよりも、これは武家の妻女と見てよい。
「う、う……むウ……」
女が息を吹返した。
三十がらみの年増(としま)だが、なかなかの美女である。
「おい、大丈夫か……」
声をかけると、
「あれっ……」
女は、裸の身をすくめて恐怖の表情である。
「おい、間違っちゃアいけねえぜ。お前さんが川へ飛びこんだのを、おれが助けてやったんだ。どうだ、思い出したか……」
「あ……」
「これを引っかけていなさい」
そこらにぬぎすててあった伊助の浴衣(ゆかた)を放ってやり、
「不了見を起すものじゃアねえよ」
いい捨てて、助三郎はなるべく女から離れていることにした。
実はもう十日も女の肌身を抱いていない。一度は、むらむらとしたのだが、相手は他人のもちものである。これに手を出したら泥棒(どろぼう)であるから、虫をこらえたのだ。
何しろ、もう腹が空いて目まいがしてくるので、家の中を探しまわると、米、味噌(みそ)はある。

さっそく飯たきにかかった。
　すると女が泣き出した。
　しばらくは泣くにまかせておいたが、
「おい、おい。あんまり声を出しては困る。川へ飛びこむほどの苦労があるのはわかっているよ。明日……」
　いいかける助三郎へ、
「飛びこんだのではございませぬ」
　女が押しかぶせるようにいった。
「何だとえ？」
「突き落されたのでございますッ」
　見ると、切長の目をつりあげ、女は、すさまじい形相になって空間をにらんでいるではないか。
「ほう……そりゃ、いったいどうしたのだ？」
　助三郎も興味をそそられ、
「話してごらんなさい」
　女は、黙っている。
「何とか力になろうも知れぬから、いってごらんなさい」
　答えない。

それからは、いくら問いつめても、女はうつ伏せになって低く泣くばかりで口をひらこうとはしなかった。

（勝手にしやがれ）

たいた飯をつめこみ、もう面倒くさくなって、小野助三郎は火鉢ひとつない一間きりの破れ畳の端へころがると、疲れがどっと出た。

あとは、もうわからなかった。

「旦那、旦那……」

ゆりおこされて目ざめると、漁師の伊助が帰って来ており、助三郎の目の前にあぐらをかき、冷酒をなめていた。

「おう……留守中に上りこんで、すまねえ」

「いやア、とんでもねえや。それよりも旦那。よく生き残ったねえ」

「うむ……まあな」

「それよりも旦那――」

と、伊助はあごをしゃくった。

見ると、女も眠りこけている。

「ありゃ、どうしたわけなんで？」

「実はな……」

知っているかぎりのことを語ってきかせると、

「へへえ……」

伊助は目をまるくして、

「とんでもねえ女だ」

吐き捨てるようにいう。

「お前、知っているのかえ？」

「知ってるだんじゃねえ。あの女はね、ほれ、鉄砲洲の松平さまのところの家来で西沢何とかいうのの女房だ。男の子と女の子が一人ずついるのに、あの女、尻が軽くて身がおさまらねえ。もっとも賭場できいたうわさなんだが……いまはその、旦那は近ごろ松平の賭場へも見えなさらねえから御存知あるめえが、ついこの間まで入りびたっていた浪人で鼠の左近とかいう野郎に引っかかってね？」

「あの女がか？」

「へい、わっしも、一、二度、左近とその女が八幡さまの茶屋から出て来るのを見かけたことがある。あの女、男をこしらえたのも二度目だとか三度目だとかで、だからもう今度は黙ってはおけねえというので、追い出されたそうだ。今夜も賭場で、そのうわさが……」

「何だと――上野で戦争があったというに、今夜もやってやがったか」

「何、戦争が済んでからだよ、旦那――それにしても呆気ねえ。ばかにあっさり片がついたものじゃねえか」

「それをいうな。では何か――あの女、その鼠の左近という奴に突き落されたんだな」

「左近の野郎は、もう飽いちまったんでさア」
そこで、じろりと女の腰のあたりへ目を射つけて、
「飽きるにゃア、まだ早えと思うがね」
と、伊助がいった。
朝になった。
伊助は、すぐに飛出して行き、どこかの古着屋で男女の単衣ものを買いこんで来た。
女は、これを着込み、黙々として飯も平げ、いっかな出て行く気配もない。
「よかったら、わっしがついて行ってあげますぜ、松平さまのお屋敷へ――」
伊助が、ずばりというと、さすがに女は驚いた。
だが、煮え切らない。
「よし。まあ任せておきなせえ。お前さんに、いつまでもいられちゃア、こっちが困る。何といっても二人の子供が可哀相だ」
なぞと、伊助にしては神妙なことをいって、昼すぎから、
「旦那。内から戸締りをして外へ出るのじゃありやせんぜ」
さっさと出て行った。
夕暮れに、伊助が帰るまで、戸障子をしめ切った蒸し暑い家の中で、一言も口をきかず、二人は向い合っていた。
女の体臭がいちめんにこもり、むせ返るばかりである。

ふっと気づくと、女が、こう妙にうるんだ目を助三郎に向けているのだ。
（こいつ、生来の淫婦なのか……）
どうも落ちつかなくなってきた。
そこへ、伊助が帰ってきた。
「いやもう、ひでえ目にあったよ、旦那」
ついでに、酒も魚も買いこんで来た伊助が、
「まあ、めしにしよう。それから話す」
女にいうと、
「きかぬでもわかっています」
という。
女の名は、お浜といい、お浜の良人は松平家の長屋に住む五十石三人扶持頂戴の西沢伊織という。
西沢は三十八歳だが、
「いやもう味噌の少ねえ味噌汁みてなお人でね、さんざんに怒鳴りつけられたぜ」
と、伊助はこぼした。
「川へ突き落されたのなら、そのままにしておけばよい、余計なことをする奴だと、こうだ。もっとも無理はねえ、御新造さんがみんないけねえのだからなあ」
お浜は、またも沈黙の中にとじこもってしまった。

「どうするよ、御新造さん。いつまで此処にいても始まらねえやな。旦那は、もう帰って来ても入れねえと、こういってなさるんですぜ」
お浜、答えない。
なかなか、強情なところがある。
夜になって、三人ならんで寝た。
伊助の大いびきをききながら、助三郎が、そっと、お浜に、
「まだ、起きていなさるか？」
「……あい」
「ちょいとうかがうが……」
「は……」
「お前さんの御亭主は、いったい、どんなお人なのだえ」
ややあって、暗闇の中から、うめくようなお浜の声が返って来た。
「あのお人は……子種を移す機械のようなお人でございますよ」
この夜から三日後——。
その夜更けに、小野助三郎はお浜を連れて深川を発った。
伊助が漕ぐ網舟の底に莚をかぶって潜んだ二人に、
「送れるところまでは送るが、後は知らねえ。それにしても御新造さん。官軍とやらに見つかれば首が飛ぶような小野さんの旦那にくっついて行くよりも、わっしと一緒に暮したほう

が気が楽ですぜ。何、五十の坂を越えてはいてもさ、わっしは御新造さんを困らせるようなことはねえつもりなのだがなあ」

残り惜しそうな伊助の声に、助三郎がくすりと笑い、

「とっつぁん。そう不貞腐るな」

と、いった。

四

これから、小野助三郎とお浜は夫婦になり、上州から信州にかけてうろつき廻ったそうな。助三郎が板前になって、宿場宿場の旅籠や料理屋ではたらいたというが、どうせいいかげんなものをこしらえて客に出していたのであろう。

一年、二年……。目まぐるしく世は変った。

明治新政府は、おそるべきエネルギイと速度をもって、近代国家への道を突き進んでいる。

明治三年春になると、新政府は前将軍をはじめ最後まで反抗をした諸大名、および旧幕臣の罪をゆるす、との布告を発し、これで小野助三郎も青天白日の身となったわけだ。

そのとき、助三郎はお浜に、こういった。

「喧嘩の後始末がやっとついたな」

このとき、助三郎は二十九歳。お浜は三十一歳。

「こうなったら旅をまわっていることもねえ。江戸へ……いや、東京という名前になっちま

ったんだっけなあ、江戸は――とにかく帰ろう」

という助三郎は、三年にわたる流浪にもかかわらず、顔も躰も、ふっくらとしていて、敗残者の暗いかげりはいささかも無い。

お浜も、そのしなやかだった肢体がみっしりと肉づき、女の幸福が匂いたっているかのようであった。

そのころのことを、助三郎は、

「いやもう、年中そりゃア貧乏のし通しで逃げまわっていたのだから、苦労といえば苦労だったんだが……まあ、何といっても江戸の者は、たとえ野末にうらぶれていても、その日暮しをたのしむ術を心得ているからねえ。ひどい苦労も茶化してしまい、おれもお浜も軽口をたたきながら結構おもしろおかしくやっていたものさ」

と、こういっている。

それでも約一年を旅に暮した後、東京へ帰ると、助三郎は何を思ったものか、

「お浜。三月がほど留守にするぜ。何とかたのむ」

「どこへ行きなさるの？」

「世の中がおさまったのだから、おれたちは一生の仕事を見つけなくちゃアなるまい。まさか、このお江戸で庖丁をにぎるほど、おれもあつかましくはねえからな」

「でも、あなた。この三年の間に何とかかたちがついたようじゃありませんか」

「田舎まわりで、ごまかしていたのさ」

「で、どこへ？」
「横浜だよ」
「何をしに――」
「ま、帰って来るのをたのしみにしていろ」
助三郎が去ったあと、お浜は、赤坂田町にある「八百勘」という大きな料亭の女中をしながら待っていた。
この間、熟しきった果実のようなお浜も、ずいぶん男から声をかけられたものだが、只の一度も浮気をやらなかった。
前夫の西沢伊織が、このことをきいたら、
「変れば変るものだ」
と、瞠目したことであろう。
きっちり三月目に、助三郎が帰って来た。
「さあ、始まるぜ」
「何がですよ？」
「まあ、見ていねえ。ところで、お前の持ち金を洗いざらい出してくれろ、おれも出す」
「あい」
田舎まわりで、お浜がためこんだ金と合せて、
「さあ、いくらあったか忘れたが、とにかく、それでもって店を出したものだ」

何の店を出したかというと、これが昔でいえば髪結い、つまり床屋なのだ。
神田・今川橋北詰西側の元乗物町の角に、助三郎は、
〔開化散髪処〕
というペンキ塗りの看板を出したのである。
これには、先ずお浜がおどろいた。
「だ、大丈夫ですかえ？」
「横浜の異人の頭をあつかう店で、この三カ月みっちり修行をしたのさ。この看板も横浜仕込みだ。何、わけはねえ。見ていろ、何とか食うにゃア困らねえから――」
ときに明治四年十二月であった。
この年の八月、政府は、断髪、廃刀の令を発していたが、まだまだ全国的に見れば国民の一割程度が髷を切っているにすぎない。
けれども、帽子をかぶり、洋服を着、靴をはくという風俗的な変化が見る見るうちに蔓延して行くことは必至であり、そうなれば、もう絶対にチョンマゲは邪魔になって来るのである。
ちなみにいうと……。
助三郎は、彰義隊敗戦の夜、みずから髷を切って以来、もう髪をのばしてはいなかった。
「めんどうくせえ」
むしろ、つるつるに剃りあげてしまい、入道頭のまま暮してきている。
彼が床屋を始めようと思いたった動機については、

「東京へ帰って何をしようかと考えたとき……ふっと、その、あの晩、髷を切ったときのことが思い浮び、こいつが一番、手っとり早いと決心をした」

のだそうだ。

政府の断髪令が発布されたことも、助三郎の決意を層倍のものとした。

いわゆる「ジャンギリ頭をたたいて見れば、文明開化の音がする」と、俗謡にうたわれた通り、断髪の便利さと、これによって国民の頭容を一新し、明治新政府のもと文明開化の人たらしめたいというのが政府の意向であったのだろう。

助三郎の店ばかりではなく、横浜仕込みの床屋が、銀座から日本橋界隈にかけて数軒あった。開店して見ると、結構客も来る。

官員、軍人、洋学者など日常に洋服をつけるものは首都になった東京へ密集している。地方ではまだまだ成り立つ商売ではなかったが、

「腕が痛え、痛え……」

と翌明治五年の春ごろまでは、助三郎も悲鳴をあげたものだ。

生来、器用でもあるし、のみこみも早い。

坊主頭で愛嬌があって、しかも律気。さばさばとあかるい助三郎の気質が客にも気に入られ、

「うまく当ったな」

「でも、大小差していなすったあなたが髪ゆいをしなさると思うと、お気の毒で……」

「間違っちゃアいけねえ。髪をゆうのではなく、切るのだ」

「ほんに、そうでしたねえ」
夫婦仲も、よかった。
やがて下剃りの若い者も二人ほどつかって、商売いよいよ繁昌である。
八月になると〔廃藩置県〕という大改革をやってのけた政府は、十一月に至って郡県の制定を決め、日本全国を三府七二県に定めた。
電信がひかれる、ハンケチが流行する、牛鍋屋が繁昌する、官制が改革される、西洋から曲馬団がやって来る。
小学校教科書が出来る、女性が外国へ留学をする。府県の学校を文部省に属せしめ教育の徹底をはかる。
共同便所が設置される……いやはや、一年か二年の間に大変なさわぎであった。
「世間もあわただしいが、何、人間のしてることに変りはねえのさ。食べて寝て、可愛い女を抱いて……そんなことが、だれに気がねもなく、のびのびやれるようになれれば、世の中はそれでいいのだ。そうするのが政府の役目さ」
助三郎も、お浜と夫婦になってからは道楽一つしない。
「する気がなくなったよ」
という。
「お前と一緒にはたらいて、一緒にめしを食う、寝る、起きる。こんなことをしているだけで、もう手いっぱいさ」

それでいて、助三郎はお浜には内密で、人をさがしていた。
お浜の前夫・西沢伊織の行方をである。
西沢に用があるのではない。お浜が西沢との間にもうけた二人の子がどうなっているかを知りたいのである。
お浜は一言も口に出さぬが、子を思う心のうちが、助三郎には、よく看取された。
元松平遠江守家中をたずねて見ようとしても、下級藩士なぞは散り散りになってしまって、かいもくわからなかった。
仲はよかったが、助三郎とお浜の間には、ふしぎに子が生まれなかった。

五

明治六年五月の或朝――。
助三郎の店へ馬を乗りつけた陸軍将官があった。従卒を外に待たせ、
「おい、手早くたのむぞ」
こういって入って来たその将官を見て、小野助三郎は、にやりとしたものだ。
「何じゃ、何がおかしい？」
髭をしごきながら見返して、
「おう、あのときの――」
将官――すなわち陸軍少将・桐野利秋も、おぼえていたらしい。

中村半次郎あらため桐野利秋は、このとき三十六歳。この春に熊本鎮台司令長官から〔陸軍裁判所長〕に転じ、東京へ戻ってきたばかりである。

「さア、おかけ下さい」

助三郎が鏡の前の椅子をすすめると、

「たのみもす」

にこにこして、桐野は髪を刈られつつ、

「おぼえちょりもすか？」

左の手をあげ、切断された中指の痕を見せた。

「はあ。その指は、やっとのことで私の師匠が……」

「師匠、ちゅと、おいどんが斬った……？」

「はい」

「違う。違げもすよ。この指な切ったのは、おはんごわす」

「まさか――」

すると、桐野は意地悪く、

「動転していなはったな」

にやりと助三郎を鏡の中から見やった。

「それでは……」

思わず、鋏の手をとめ、

「私がやったので？」
「間違いごわはん。天下ひろしといえど、この桐野の躰の一部を切り落したのは、おはん一人でごわす。いやもう強せお人じゃ」
何のこだわりもなく、桐野は快笑した。
助三郎が、不審そうに、
「お怒りのことと思いますが？」
きくと、桐野の方がふしぎな顔つきになり、
「何ゆうちょる。戊辰の戦争な、喧嘩じゃごわはんか」
「ケンカ……あなたも、そう思われますか？」
「日本人同士の争いごわす。じゃから喧嘩じゃ。喧嘩の喧の字はやかましいと読む。嘩の字は口へんに華やか……な、そうごわしょう。やかましく華ばなしくやり合って、後はさっぱりと恨みな残しちゃいかん。これが日本人の喧嘩ごわすよ。あは、は、は――」
助三郎は黙っていた。
自分の胸底にあるものを相手が、あまりにも的確にいいつくしてくれたからだろう。
うっとりと、助三郎の剃刀に顔をまかせながら、桐野がいった。
「だが、なかなかうまく行きもはんで――どうしても争い事は尾をひく、恨みを残す。まして、これから、ひろい世界、諸外国を相手に日本もやって行かにゃなりもはん。むずかしいことごわすよ」

以来、桐野利秋と小野助三郎の友情の密度は濃くなるばかりとなった。

この年の十月に、あの征韓論に破れた西郷隆盛が政府を去って故郷・鹿児島へ隠棲するや、西郷を慕う薩摩軍人の大半は、政府に訣別して帰国した。

桐野利秋は東京を去るにあたり、お浜には西洋香水を、助三郎には薩摩絣の反物を送ったという。

交遊わずか半歳にみたなかったが、その後の助三郎は桐野のことを、

「心の友というのは、まさにあの人だ。おれも三十を越して、あんな知己にめぐり合おうとは思わなかった。いまごろ、何をしているかなあ」

お浜を相手にいい暮した。

明治十年、西南戦争が起った。

政府軍に破れた薩摩軍が城山にこもり、最後の戦闘と共に討滅されたのは九月二十四日である。

西郷も死に、桐野利秋も四十歳の生涯を終った。

戦争が始まるや、助三郎は新聞に、世上のうわさに、桐野を案ずることしきりで、十七貫もあった体重が五貫も減ったそうな。

桐野の戦死をつたえる新聞の記事に——。

（創所）左大腿部内面銃創・左脛骨刀創・左中指断切痕……。

などと政府軍の〔屍体検査書〕がのせられてあるのを、助三郎は、まじまじと見入った。

「左中指断切の痕か……」

つぶやいたと見る間に、助三郎が剃刀をつかみ、お浜が「あっ」と叫ぶ間もなく、左の中指をみずから切り落した。

「何をするんですッ」

しがみつくお浜に、助三郎がいった。

「さわぐな。何となく、こうしなくては、おれの気が静まらなかったのだよ」

後年、小野助三郎夫婦は、元堀田家の藩士の息で、いまは飾り職人になっている笹田教三というものを養子にした。

この養子は、非常に実直温厚な人物で、明治三十八年一月二十日に、助三郎が六十四歳をもって病歿した後も、養母お浜によくつかえた。

教三の嫁もおはまといい、男二人、女一人をもうけ、助三郎は、この孫たちを可愛がること、一通りではなく、ことに女の子を鈴と名づけ、

「この子は孫じゃねえ。おれの子にしてくれろ」

といってきかなかった。

助三郎が死んだ翌年の夏のことだが、どこできいたものか、お浜が前夫との間に生んだ男子の一之助が、そのころ浅草永住町にあった教三の家を訪ねて来た。

一之助は、もうでっぷりとした中年男になり、いまは赤坂溜池の近くに「柏や」という蕎

麦屋の主人になっていた。

「こんなふしだらな母親でございますが、よろしくお願い申します。まったくもって、あなたさまには何と申してお礼を……いえもう亡くなられた、その小野さまにも何といっておわびを申しあげたらよいのか。こんなふしだらな、二人の子を捨てて逃げた母親を、よくまあ拾いあげて下されました」

と、一之助はしきりにいう。

お浜はもう色を失い、げっそりとうつむいたまま一語も発しなかったが、教三は愛想よく一之助をもてなして帰した後、

「おっかさん。おっかさんのことは、亡くなったおとっつぁんからよくきいていますよ。何、あんまり気にしなさんな」

と、なぐさめた。

お浜は、昭和二年七月三日に八十八歳の長寿を保って歿した。

助三郎の切断された中指はどこへ行ったのか、それは不明である。

しかし、小野助三郎がかかげた「開化散髪処」の看板は孫の鈴の代まで、浅草・馬道の、鈴の嫁ぎ先に保管されていたが、第二次大戦の空襲による戦災で灰となった。

鈴は、まだ生きている。

（「小説現代」昭和四十年五月号）

解説

八尋舜右

きょう五月三日、池波さんの一周忌法要からもどってきて、この稿をかいている。

朝から風はつよかったが、美しい五月晴れの一日。豊子夫人と親戚縁者、あわせて二十人ほどが、池波さんの生家に近い西浅草の浄土真宗・西光寺に集い、法要のあと、晩年の著者がこよなく愛した神田駿河台にある山の上ホテルにうつって、精進おとしの食事をし、コーヒーを喫しながら亡き作家を偲んだ。ささやかだが、いい一周忌だった。広く関係者に声をかければ、もっと盛大な一周忌になったであろうが、参列を申しでた方たちだけで、というのが、夫人のおかんがえだった。亡夫の遺志をくんでのことにちがいない。

池波さんが亡くなられる前日の夕、入院中の三井記念病院にお見舞いにうかがうと、豊子夫人に廊下の隅によばれた。

「池波が」と夫人はいった。

「いざというときには相談しろといっておりましたので……」今後の葬儀いっさいを、わたしにたのみたい、とのお話であった。

日ごろからものしずかで、口数の少ない夫人は、つづけて、

「通夜も葬儀も、自宅近くの葬儀場でといっておりますの」と、だけおっしゃった。

夫人の背後から、〔ひとさまに厄介をかけないように、できるだけ質素にやってくれ〕という、池波さんの声がきこえるような気がした。

愚直のかたまりのようなわたしなら、その意志を忠実に実行してくれるにちがいない、と池波さんはおもわれたのだろう。

「ただ……」とわたしはいった。

「それでは池波先生の葬儀にふさわしくないとの意見が、かならずでるでしょうね」

しかし、連日の看病で疲労の極にある夫人にたいして、それ以上くだくだしいことをいう気持ちにはなれなかった。

奥さんのおっしゃるとおりにしよう、とわたしはおもった。あいにくそのころ、わたし自身も、甚だしく体調をくずしており、お見舞いにうかがっても、長くベッドのそばについているのが、心身ともにかなわなくなっていた。

日ごろから、しばしば死のことを口にしていた池波さんは、昭和六十三年十月三十一日付朝日新聞夕刊にも、こう書いている。

「いずれにせよ、六十をこえれば、最期のときがせまっている。むろんのことに、これだけは体験したことがないわけだから、大いに不安であり、恐怖を感じるが、自分が、どんな最期をとげるか、それを、いよいよ見とどけるという興味と好奇心がないでもない」

その作家がいま現実に病床で、その未体験の死と向かい合っているすがたには、必死とか、

壮烈とかいう、ありきたりの第三者的表現をゆるさない厳粛なものがあった。

わたしは、ただ「奇跡」を祈るしかなかった。夫人からきかされている急性白血症という病名は絶望的なものだったが、個体の生命力は、医学の常識を超えることもありうるのだ。

ともかく、著者はまだ生きていた。わたしは「まだ葬儀の手配などしたくない」という、きわけのないこどものような気持ちにつよくとらえられた。それでも、なんとか気をとりなおして病院の外にでると、その、かつて池波さんが、ひっそりとご母堂の葬儀をいとなんだ場所でもある葬儀場に電話をいれた。ところが、あいにくの五月の連休である。葬儀場は休みであった。

池波さんの〔手近なところで簡素に〕とのお気持ちをかなえるためには、なんとしても連休をのりこえていただかねばならない。わたしは、ひたすら念じた。が、翌日の午前三時、作家はついに不帰の人となってしまった。六十七歳、まだまだかきたい長編がいくつものこっていた作家にとって、なんとも早すぎる死であった。しかし、これが現実というものだ。よろめきながら、わたしは喪服をつけた。

けっきょく、各出版社の代表者と相談のうえ、通夜、告別式とも千日谷会堂でということになったが、〔万事ひかえめに〕という著者の遺志だけは生かされた葬儀だったとおもう。

新潮文庫の池波作品の解説をかくのは、これで数回になる。昨年春にも『谷中・首ふり坂』の解説をかくため山の上ホテルに池波さんを訪ねたとき、著者はたしかに憔悴し、ステッキにすがって「いやあ、もうだめだよ」と弱音をはいたが、それは、この数年来きかされ

てきた著者の口癖でもあった。それだけに、わたしは、それほど著者のことばを深刻にはうけとめなかった。

うかつだった。

まこと、この不可思議な人生というやつは、「いつ、なにがおこるか、はかりしれない」のである。

この文庫には、十一編の作品が収録されている。池波さんが『錯乱』で直木賞を受賞した翌年の昭和三十六年から四十一年まで、三十八歳から四十三歳にかけての六年間に発表された作品である。それまでは、師匠である長谷川伸主催の「大衆文芸」ほか、いわゆるクラブ雑誌が主な発表の場だったが、受賞を機に、大手の出版社からでている小説雑誌、各新聞、週刊誌から注文がくるようになった。ここに収録されている作品は、当時、いわゆる中間小説雑誌の御三家といわれた「小説新潮」「オール讀物」「小説現代」、それに、新聞社の文芸雑誌「文芸朝日」に発表されたものだ。

収録された十一編のうち、四編が著者のもっとも得意とした真田家に関連した作品である。『猛婦』『槍の大蔵』『命の城』『獅子の眠り』がそれで、いずれも、充分に読みごたえのある力作ぞろいなのがうれしい。

さて、収録の順にみていくと、まず、『雲州英雄記』だが、この作品は尼子氏再興につくした山中鹿之助を主人公に、「剛勇と浪漫的な素質が同時に内蔵されていた」男の言動をと

おして、戦国の英雄の実像を描き、織田信長と豊臣秀吉との資質、思想のちがいなども巧みに描きわけている。

『猛婦』は、池波作品の特色が色濃くでた傑作。夫を討たれたお津那という女が、復讐の一念に燃えて敵に挑むが、わざと自分の左腕をお津那に打ちおとさせ、それで気がはれるのなら、さらに「残った右腕を差し上げてもよい」とまでいう敵の男の心の深さにうたれ、その妻となり、子までもうけて、その子に亡き夫の名をつける。「姦婦」討つべし、と制裁にあらわれた義父、義弟にむかって、お津那は「戦乱の世であればこそ、なおさら女は男をいとおしみ、子を生まねばなりませぬ」と毅然といってのけ、かつての敵の男がしたとおなじように、みずから相手の刃の下にわが左腕をさらすのである。

時代や社会の桎梏にとらわれることなく、まことの「男との愛」を貫いた、たくましい戦国の女性像が生き生きと描かれ、感動的である。

『勘兵衛奉公記』は、世間的な名利に背をむけ、槍一筋の功名で戦国を生きぬこうとした、わたり奉公人・渡辺勘兵衛の、自由闊達な生き方がすこぶる魅力的だ。ただし、いかに自由に生きようとしても、この世は思いのままにはならず、父の教訓にそむいて女も子もつくれば、主どりをして足手まといの家来までもつ身になってしまう。それでも、最後は、やはり、わたり奉公人の本意に立ちかえり、主の命令をこばみ、妻子の意志にもそむいて、京の庵でただひとり、二人の妹の名をよびながら死んでいく。それを思い女の名と付き添い僧に誤解されるという、おかしみにみちた生の終りを自在に描く著者の筆は冴えかえっている。

『霧の女』は、こわもての猪大名として知られる福島正則の、意外な恐妻物語である。その「浮気」の顛末を、一流の軽妙なタッチで描いて、読者の微苦笑をさそう。

ところで、作中、正則が愛した女忍びの小たまは「肥やかなふくらみ」をもった「化粧もない健康な女体」で「両腕に余るほどのゆたかさ」であった、と形容されている。

池波さんが好んで描いた女性は、つねにここにあるように、大柄で肉置きのゆたかな肉体の持ち主であることが多い。大衆時代小説によくでてくる、美女の典型としての「小股の切れあがった細身のいい女」といったタイプは、江戸を舞台にした作品にもほとんど登場しない。

池波作品に共通する女人像は、この『霧の女』にもあるように、男にたいしてたくましい胸をひらき、まるで赤児をあやしでもするように、ゆったりと乳をふくませる、といった趣をもっている。ここにあるのは、ことに動じることなく、どっしりとかまえた、大地のようにゆるぎない母性のイメージだ。

あるいは、池波作品の女性像の原形には、女手ひとつで健気にこどもを育てあげた池波さんの実母のすがたが投影されているのかもしれない。

「世の中は白か黒かだけではない、中間の色だってある」という池波さんの現実認識は、女の描きかたにも反映されている。

女も、生来の美女と醜女だけで仕切られるわけがないのである。しかも、

「男という生きものは女しだいでどうにでも変わり、女という生きものも、また、男しだい

でどうにでも変わる」（『男の系譜』）。

たとえば、『夫婦の城』では、「醜女の上に、細く小さく、味気ない」女であった長野業政の娘正子が、夫小幡信定の夜毎の愛撫によって、その「小づくりな体に、みっしりと肉がみちて、腰まわりもゆたかになり、小さく低い鼻梁にさえも女の威厳がそなわってき」、よく夫を守りたてて、みごとな賢婦ぶりを発揮する様子が描かれるし、『紅炎』でも、「肌あさぐろく、眉はあくまでも濃く、小柄ながらひきしまって、いかにも健康そうな肢体のもちぬし」なのはよいが、「選りに選って、あのような……」と婿の舅を歎かせたほどの醜婦であった於喜佐が、愛妻家毛利勝永と一年ほど暮らすうちに「まぶしいばかりの女の幸福を全身に躍動させはじめ」るさまが、愛情こめて描かれる。

男女の性別にかかわりなく、生来の美醜をはじめ、性格、能力などという人間の価値は、いずれも、人生のさまざまな経緯のなかで、いかようにも変容する。可変のものだ、と著者はいっているようにおもわれる。

そこに、人間愛に裏うちされた庶民派・池波文学の真面目があり、その作品に、いいようのない温もりと救いをもたらしている、といってよいだろう。

表題作の『黒幕』は、幼いとき、病弱で、つかみどころがなく、父にさえうとんじられた山口新五郎が、長じてからは、徳川家康のもとで隠密活動に従事して、いくたびも徳川家の危急を救い、ときには、家康の非道をただすまでになる。ひたすら影の存在として生きた新五郎が、六十歳にしてはじめて十八歳の女と結婚、さらには、七十四歳で十九歳の娘と再婚

し、

「世は……男と女」とつぶやきつつ大往生をとげるという粋なエピソードが、この小説にえもいえぬ風韻をそえている。著者は、さらに『黒幕』というタイトルに、単に新五郎が家康の陰にあって、さまざまの補佐をしたという以上の意味をもたせているようにもおもわれる。「人の一生には、思いもかけぬことが待ちうけているものだが」という書き出しにはじまる『槍の大蔵』では、若いころ悪所におもむいて、感きわまった遊女に舌を噛み切られ、ことばを失った雨宮大蔵が、唖の大蔵と嘲笑されるコンプレックスをバネにして、二間半の長柄の大槍をふるう大剛の者となり、関ヶ原で大活躍、さらには大坂夏の陣において真田幸村のもとで、壮烈な討ち死にをするまでが描かれる。その死後、ひとり侘び住まいする、大蔵の母おふくのもとに、大蔵の舌を噛み切った遊女があらわれ、その死まで、おふくの身のまわりの世話をしたという筋立てが心憎いばかりの効果をそえている。

『命の城』は、著者のライフワーク『真田太平記』の前驅をなす作品であり、『獅子の眠り』とともに、忍びの者の縦横の活躍が魅力的に展開され、池波時代小説の特質がくっきりとあらわれている力作である。

巻末の『開化散髪どころ』は、この文庫中、唯一、開化期に材をとった作品で、他の戦国ものとは一味ちがった趣がある。一読、この作家の底知れぬ力倆の深さに圧倒される。

もし、世にいう天の配剤というものがあるのなら、この作家に、もうしばらく、その才能に見合った命の猶予をあたえ、その魅力にあふれた作品を、もっともっと書かせてほしかっ

た、とおもうのは、わたし一人ではないであろう。

それにしても、池波正太郎逝って一年、

「間もなく、死ぬるぞ、いま少しで死ぬる、別れじゃ」（『霧の女』）

「わしは、今日、死ぬるぞ、たぶん、死ぬると思う。今朝眼ざめて、そう感じ、今もまだ、感じておる」（『獅子の眠り』）

こういう池波小説の独壇場ともいうべき――おのれの死期を従容として受容する、みごとというほかない臨終場面の表現にあらためて接するとき、ただただ絶句するしかない。

それは、もはやことばも定かにはききとれなくなった病床の池波さんと黙して対面しながら、はらってもはらっても、わたしの耳奥で谺のようにひびかってやまなかったフレーズであったから。

（平成三年五月三日、作家）

「猛婦」は毎日新聞社刊『仇討ち』（昭和四十三年十月）に収録され、のちに立風書房刊『池波正太郎短編小説全集下巻』（昭和五十八年三月）に、「勘兵衛奉公記」と「開化散髪どころ」は東京文芸社刊『錯乱・賊将』（昭和五十四年四月）に、「霧の女」は青樹社刊『鬼火』（昭和四十三年四月）に収録され、のちに立風書房刊『池波正太郎短編小説全集上巻』（昭和五十八年一月）に、「紅炎」は東京文芸社刊『黒幕』（昭和四十八年一月）に、「黒幕」は同『黒幕』に収録され、のちに立風書房刊『池波正太郎短編小説全集下巻』に、「槍の大蔵」は桃源社刊『槍の大蔵』（昭和四十五年十二月）に、それぞれ収められた。その他の作品は本書初収録である。

池波正太郎著

谷中・首ふり坂

初めて連れていかれた茶屋の女に魅せられて武士の身分を捨てる男を描く表題作など、本書初収録の3編を含む文庫オリジナル短編集。

池波正太郎著

あばれ狼

不幸な生い立ちゆえに敵・味方をこえて結ばれる渡世人たちの男と男の友情を描く連作3編と、『真田太平記』の脇役たちを描いた4編。

池波正太郎著

おせん

あくまでも男が中心の江戸の街。その陰にあって欲望に翻弄される女たちの哀歓を見事にとらえた短編全13編を収める。

池波正太郎著

あほうがらす

人間のふしぎさ、運命のおそろしさ……市井もの、剣豪もの、武士道ものなど、著者の多彩な小説世界の粋を精選した11編収録。

池波正太郎著

真田騒動

―恩田木工―

信州松代藩の財政改革に尽力した恩田木工の生き方を描く表題作など、大河小説『真田太平記』の先駆を成す〝真田もの〟5編。

池波正太郎著

上意討ち

殿様の尻拭いのため敵討ちを命じられ、何度も相手に出会いながら斬ることができない武士の姿を描いた表題作など、十一人の人生。

新潮文庫最新刊

赤川次郎著

幽霊屋敷の電話番

一家心中があった屋敷で、壊れた電話が鳴り出した。受話器をとると女の声が！　電話が引き起こす不思議な事件を描いた作品集。

住井すゑ著

橋のない川（七）

水平社結成から二年、小森の人々の意識は根底から変わりつつあった――第六部完結から20年をへて再び高らかに謳われる人間讃歌！

大江健三郎著

人生の親戚

伊藤整文学賞受賞

悲しみ、それは人生の親戚。人はいかにその悲しみから脱け出すか。大きな悲哀を背負った女性の生涯に、魂の救いを探る長編小説。

三浦哲郎著

雪の音　雪の香り

―自作への旅―

自作の中から故郷の八戸市周辺を舞台にした作品23篇を選んで、創作にまつわる秘話を著者自らが披露する。最良の三浦文学案内書。

山田洋次著

真二つ

「寅さん」の笑いのルーツは落語にあった。少年の頃から落語に熱中していた監督が創作した落語5編と、エッセイ・対談を収める。

松本清張著

名札のない荷物

《荷物一個。死体》トルストイの遺体に付された荷札をめぐる随想からエイズへの洞察までイメージ喚起力に溢れる清張最晩年の記録。

新潮文庫最新刊

連城三紀彦著　**一瞬の虹**

一瞬の出会い、一瞬の感動がドラマを産む。肉親から動物にいたるまでを主人公に、18の場面を虹色に彩る待望のドラマエッセイ集。

東野圭吾著　**鳥人計画**

ジャンプ界のホープが殺された。ほどなく犯人は逮捕、一件落着かに思えたが、その事件の背後には驚くべき計画が隠されていた……。

黒川博行著　**切断**

指が、耳が、切り取られ、次の犠牲者の体内に残される。狂気の連続殺人を追う刑事の前に容疑者が現れるが……。サイコ・サスペンス。

角田房子著　**わが祖国**
—禹博士の運命の種—

"閔妃暗殺"に関わって日本に亡命した朝鮮の軍人と日本人女性との間に生まれた禹長春博士。その生涯を通じて迫る日韓関係の真実。

手嶋龍一著　**ニッポンFSXを撃て**
—たそがれゆく日米同盟—

FSX—自衛隊の次期支援戦闘機の開発を巡ってかわされた日米交渉を通じ、冷戦後の暗転する日米同盟を描くノンフィクション大作。

北杜夫著　**マンボウ氏の暴言とたわごと**

時に憤怒の発作に襲われるマンボウ氏。ウヌッ、許せない！　世界の動きから身辺のあれこれまで、ホンネとユーモアで綴るエッセイ。

新潮文庫最新刊

藤門弘著
牧場物語　土の唄、風の夢

必要なものは自分たちで作るのだ——北海道の大地に両足踏ん張って、理想を高く掲げる牧場主が描くカントリー・ライフの極致。

J・グリシャム
白石朗訳
法律事務所（上・下）

新人弁護士のミッチが就職した法律事務所は仕事は苛酷だが、破格の待遇。人生バラ色と思っていたら……。手に汗握るサスペンス。

M・A・コリンズ
田村義進訳
マーヴェリック

凄腕のギャンブラー、マーヴェリック。美女には弱いが、ポーカーには滅法強い。賞金50万ドルを目指し、虚々実々の冒険劇が始まった。

D・スティール
白石朗訳
運命のコンチェルト

女優志望のクリスタルと青年弁護士スペンサー。愛し合いながらも運命に翻弄され、すれ違う二人の幸せの行方を描く長編ロマンス。

B・ラングレー
酒井昭伸訳
灼熱の死闘

南ア白人政権の極秘計画「ブラッド・リバー」をめぐり、燃えさかる森林地帯に展開される追撃戦。巧みなプロットが光る本格冒険小説。

J・ケラーマン
北澤和彦訳
プライヴェート・アイ（上・下）

重度の広場恐怖症のため、二十年間屋敷から一歩も外へ出られなかった女性が失踪した!?　LAの小児臨床心理医アレックス・シリーズ。

黒幕

新潮文庫　い-16-60



平成三年六月二十五日　発行
平成六年八月十五日　十二刷

著者　池波正太郎
発行者　佐藤亮一
発行所　株式会社　新潮社

郵便番号　一六二
東京都新宿区矢来町七一
電話　営業部(〇三)三二六六—五一一一
　　編集部(〇三)三二六六—五四四〇
振替　東京四—八〇八番

価格はカバーに表示してあります。

乱丁・落丁本は、ご面倒ですが小社読者係宛ご送付ください。送料小社負担にてお取替えいたします。

印刷・三晃印刷株式会社　製本・株式会社大進堂
© Toyoko Ikenami 1991　Printed in Japan

ISBN4-10-115660-3 C0193





定価560円（本体544円）

徳川家康のめぐらす謀りごとを実現すべく働き抜いた山口新五郎は、江戸開府後、六十歳を過ぎて初めて女体に接した。そして二度も十代の嫁を娶ることになる、この男の生涯を描いた「黒幕」。夫の仇と襲った相手が従容として、己れの左腕を斬り落とさせる姿に心を打たれ、その男の妻となる戦国の女を描いた「猛婦」。他に「勘兵衛奉公記」「槍の大蔵」など、初収録4編を含む11編を収録。

ISBN4-10-115660-3

C0193 P560E